Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

# 集落のコミュニティ機能の維持に向けた新たな環境づくりに関する調査研究

令和２年３月

山形県　小国町
一般財団法人　地方自治研究機構

# 集落のコミュニティ機能の維持に向けた
# 新たな環境づくりに関する調査研究

令和２年３月

山形県　小国町
一般財団法人　地方自治研究機構

# あいさつ

小国町は、全国に誇れる地域資源を数多く有し、白い森の国としての未来を切り拓いていくことのできる素晴らしい可能性を秘めています。「令和新時代」を迎え、これら町の魅力を一層引き出すために、地域資源をブランド化し、開花させることが地域間競争に勝つことであると確信しています。

しかし、我が国全体が人口減少、超高齢社会に直面しており、本町もその道標の中での歩みを余儀なくされています。このため、これまで地域社会を支えてきた基礎集落の小規模化、高齢化による集落のコミュニティ機能の低下や、維持困難な集落が出現することも危惧されるようになりました。

そこで、人々が引き続き地域に安心して暮らせるようにするためには、拠点となる集落の設定と、周辺集落のネットワーク化を図る「仕組みづくり」と「人財づくり」が急務であると承知しています。

この度、一般財団法人地方自治研究機構の多大なご支援とご指導を受け、『集落のコミュニティ機能の維持に向けた新たな環境づくりに関する調査研究』に取り組むことができました。

ここ、白い森の国には、生きるための知恵と技を持つマルチな人々が活動しています。彼らには、天候のこと、季節の変化のこと、山のこと、土のこと、水のこと、草木のこと、生きもののこと、農作業のこと、農閑期のこと、地域のしきたりのことが染みついており、このことが、今日の白い森の国を導かれたとも言えます。

一方、近年の農山村への「田園回帰」の潮流は、農山村が新しいライフスタイルを通じて、自己実現ができる場として評価されています。このことは、農山村に暮らす人々の生き方への共感ともいえる、新たな価値の発見を意味するものと捉えています。

したがって、今回の調査報告をベースにしながら、地域住民の「やる気づくり」を醸成し、高齢者と若者、農山村と都市部が、それぞれ連携する共生社会を構築することにより、「農村価値」が創生され、新たな集落のコミュニティ機能の活性化に結びつくものと考えています。

最後に、今回の調査研究事業を通し、「くらしの視点」と「関わりの視点」についてご指導賜りました委員長の岡﨑昌之先生を始め、委員の先生方に感謝を申し上げます。そして、共同研究をリードしてくださいました一般財団法人地方自治研究機構並びに、基礎調査機関としてご協力をいただきました株式会社シンクタンクみらいの皆様方に御礼を申し上げ、あいさつといたします。

令和２年３月　　小国町長　仁科　洋一

# はじめに

少子高齢化の進行に伴う本格的な人口減少社会の到来や、厳しい財政状況が続くなど、地方を取り巻く環境が一層厳しさを増す中で、地方公共団体は、住民ニーズを的確に捉え、地域経済循環を意識した地場産業の育成、都市機能の立地適正化の推進、地域の特性を活かしながらインバウンド需要を背景とした観光を通じた地域の活性化等、複雑多様化する諸課題の解決に自らの判断と責任において取り組まなければなりません。

また、最近ではＩＣＴやＡＩ等を活用した業務改革の推進、公共施設等に係る老朽化対策等の適正管理、上下水道の広域化等の公営企業経営改革など、地方公共団体の行政経営基盤の強化も求められています。

このため、当機構では、地方公共団体が直面している諸課題を多角的･総合的に解決するため、個々の団体が抱える課題を取り上げ、当該団体と共同して、全国的な視点と地域の実情に即した視点の双方から問題を分析し、その解決方策の研究を実施しています。

本年度は 3 つのテーマを具体的に設定しており、本報告書は、そのうちの一つの成果を取りまとめたものです。

少子高齢化やライフスタイルの多様化等により、中山間地域、農村地域を中心に過疎化が進展し、地域を維持するための機能が脆弱化し、近い将来存続が危ぶまれる集落が増加しています。

本共同調査研究の対象地域である小国町において、平成 18 年度にも「農山村地域におけるムラ機能の維持・保全に関する研究」を共同で行いましたが、その後も過疎化は止まることなく進展し、集落のコミュニティ機能の維持が難しくなってきているところもあります。13 年前と比べた現在の集落や住民意識の変化の状況や要因等をとらえながら、集落の住民が誇りを持ち安心して暮らし続けられるよう、コミュニティの維持に向けた新たな環境づくりについて検討いたしました。

本研究の企画及び実施に当たりましては、研究委員会の委員長及び委員を始め、関係者の皆様から多くの御指導と御協力をいただきました。

また、本研究は、公益財団法人日本財団の助成金を受けて、小国町と当機構とが共同で行ったものであり、ここに謝意を表する次第です。

本報告書が広く地方公共団体の施策展開の一助となれば大変幸いです。

令和２年３月

一般財団法人　地方自治研究機構
理 事 長　　井　上　源　三

# 目　次

序章　調査の概要 ..... 1

１　調査の目的 ..... 3

２　施策における本調査の位置付け ..... 4

３　定義 ..... 4

４　調査の方法 ..... 4

５　調査の項目 ..... 5

６　調査研究体制 ..... 5

第１章　小国町及び集落の現況 ..... 7

１　小国町の概要 ..... 9

２　小国町内の集落の状況 ..... 20

第２章　集落のコミュニティ機能の維持・保全状況と住民意識の実態 ..... 27

１　町民アンケート調査について ..... 29

２　各種ヒアリング調査について ..... 87

第３章　集落のコミュニティ機能の維持に向けた新たな環境づくり ..... 123

１　集落の実態調査から浮かび上がる課題 ..... 125

２　集落のコミュニティ機能の維持に向けた新たな環境づくり ..... 133

小国町の新しいまちづくりへ向けて・委員長提言 ..... 147

委員・事務局名簿 ..... 153

# 序章　調査の概要

# 序章　調査の概要

## １　調査の目的

小国町の人口は、昭和 30 年の 18,366 人をピークに年々減少し、平成 27 年はピーク時の半分以下となった。世帯数も減少しているが、減少率は昭和 40 年ピーク時の 20%程度である。人口ほどの急激な減少でないのは、町の中心部への別居を図った世帯分離等の背景もあるからである。

小国町は、昭和 40 年に山村振興法に基づく振興山村の指定、昭和 45 年に旧過疎地域対策緊急措置法に基づく過疎地域の指定を受け、これらの法制度を活用した各種山村対策や過疎対策を実施し、豊かな町民生活の実現に向け着実な環境整備を行ってきたが、人口減少に歯止めをかけることはできなかった。

そのため、小国町が古より育んできた集落コミュニティについて、人口減少がもたらす影響が懸念されるようになり、平成 18 年度に、小国町と一般財団法人地方自治研究機構が共同で「農山村地域におけるムラ機能の維持・保全に関する研究」を実施し、町民意識等の調査分析を行った。

しかし、その後も急速な人口減少と少子高齢化が進み、集落のコミュニティ機能が大きく衰退しており、平成 18 年に明らかにされた当時の町の実態から現在の実態は大きく変容している。特に、小中学校の統廃合が大きく影響し、地区におけるコミュニティ機能が衰退、あるいは消滅している。

各集落では、伝統行事や共同作業の継続が困難となっていることを始め、災害時の対応、農地や山林の管理、除雪など様々な分野で課題が生じており、更には住民同士の相互扶助機能も発揮できなくなっている。

一方で、近年、若者を中心とした「田園回帰」の動きや、「関係人口」による地域づくりが推進される中、小国町でも定住人口のみならず、関係人口の確保にも積極的に取り組んでいる。また、５ＧやＩＣＴの活用による生活改善の実証実験も各地で実施されている。

このような状況の中、少子高齢化の進展と急激な人口減少、散見される集落存亡の危機に対し、住民・地域組織・行政・外部人材等が、新たな機能を集落や地区で取り入れながらコミュニティ機能の維持に向けた新たな環境づくりの方向性やその手法を探り、それを町内全域で展開していく必要がある。

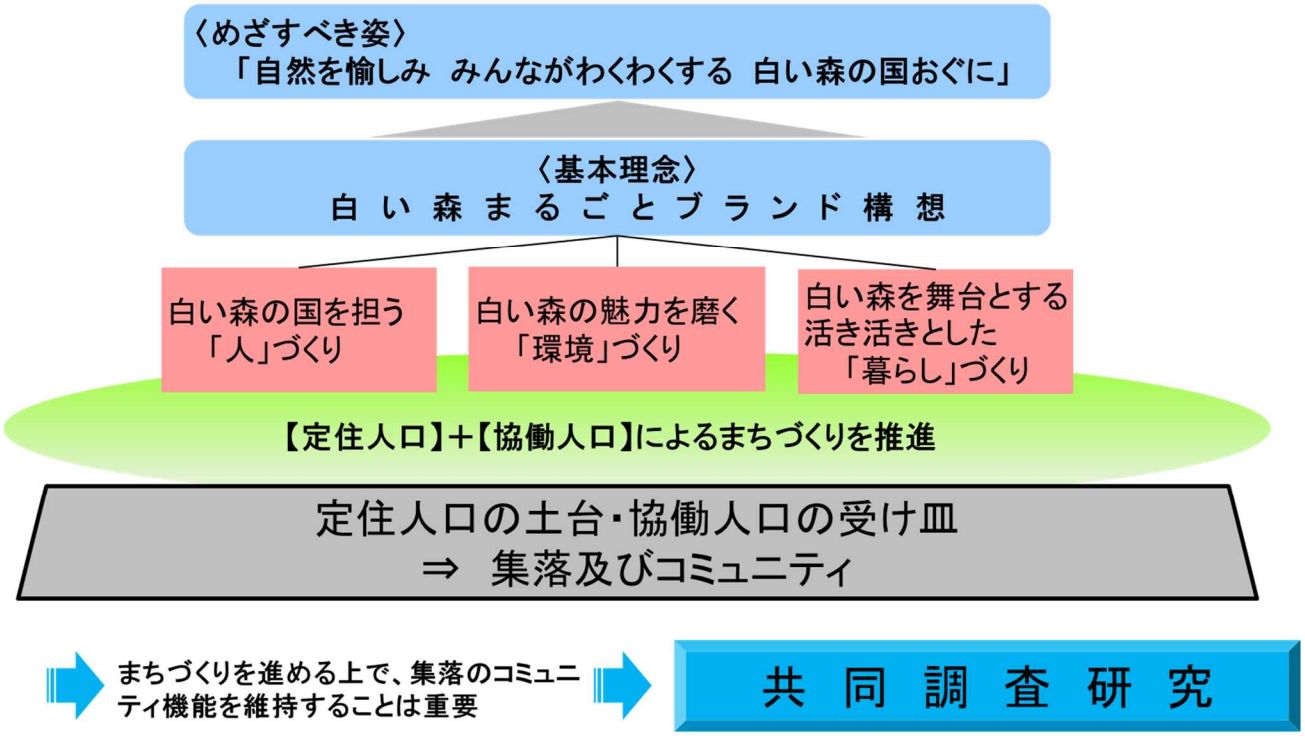
集落コミュニティの課題等に対処するため、本調査では以下の３点を調査の目的とした。

- 集落のコミュニティ機能の実態や住民の意識の調査、分析
- 浮かび上がってくる集落課題の明確化
- コミュニティ機能の維持に向けた、新たな環境づくりの方向性とその手法

## 2　施策における本調査の位置付け

本調査の位置づけは、以下のとおりである。

図表序－１　本調査の位置付け




## 3　定義

本調査研究では、「集落」は、住民の暮らしにとって最も基礎となるもので、「駐在区」は近隣集落が複数集まった行政の区割りであり、更に旧小学校区を単位としたまとまりを「コミュニティ」と定義している。

「集落のコミュニティ機能」については、生産、消費、労働、祭り、芸能など、住民同士の交流を含めた「集落活動」という観点からとらえている。

## 4　調査の方法

調査分析は、町域を「北部」、「沖庭」、「南部」、「東部」、「白沼」、「中央」の６つの地区に分けアンケート及びヒアリング調査を実施した。

アンケート調査は、全世帯を対象とし、ヒアリング調査は、原則「中央」を除いた各地区の役員など 10～20 名程度による地区別座談会及び町民への各種サービスを提供する団体、移住者、地域おこし協力隊、若手住民など座談会では参加の対象とならなかった住民や団体等に対し個別にヒアリングを実施した。

## 5　調査の項目

### (1) 集落の実態と分析

平成 18 年度に実施した「農山村地域におけるムラ機能の維持・保全に関する研究」から 10 年以上が経過していることから、町の人口や世帯数とその構成や、各集落のコミュニティ機能、住民意識がどう変化してきたのか、その実態を調査した。

### (2) 集落の実態調査から浮かび上がる課題の抽出

少子高齢化・人口減少により集落のコミュニティ機能が衰退し、それがもたらす生活上の問題点を、集落ごとに浮き彫りにし、必要とされる機能ごとに整理した。

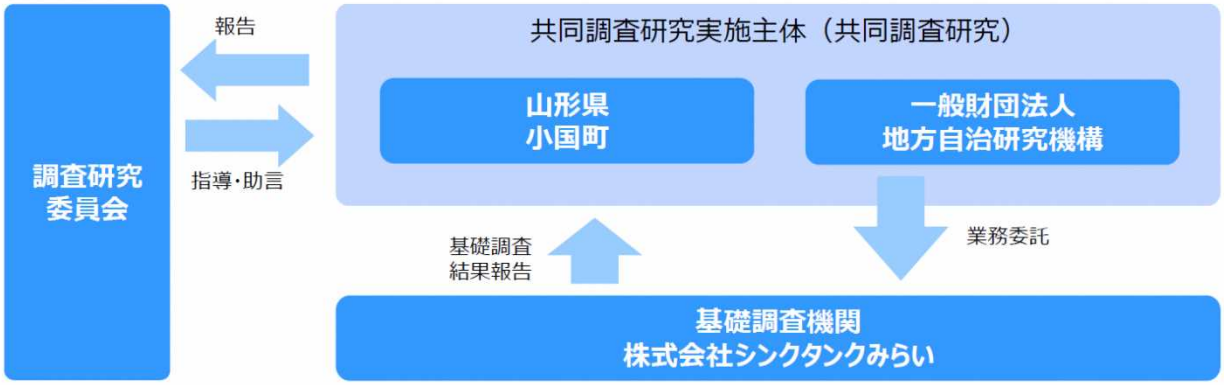
### (3) 集落のコミュニティ機能の維持に向けた新たな環境づくりの方向性とその手法

以上の調査結果を踏まえ、今後の小国町において、コミュニティ機能の維持に向けた新たな環境をつくっていくため、その維持方策や、行政としての支援体制、集落への目配りの在り方等について提言を行った。

## 6　調査研究体制

調査研究の体制は、以下のとおりである。

図表序－２　調査研究体制




### (1) 調査研究委員会の設置

本調査研究を遂行する上で、具体的かつ実践的な知見を得るため、学識経験者等からなる委員会を設置した。

### (2) 事務局の体制

本調査は、小国町総合政策課及び一般財団法人地方自治研究機構が事務局を担当し、調査の一部を株式会社シンクタンクみらいに委託した。

図表序－３　作業体制と主な役割

| 作業体制 | 主たる担当者 | 主な役割 |
|---|---|---|
| 調査研究業務及び<br>調査研究運営管理支援 | 一般財団法人<br>地方自治研究機構 | ・共同調査研究運営全体（方針・計画・推進）に関する管理業務<br>・調査作業及び基礎調査機関実行状況確認業務<br>・委員会運営等（開催案内出状、準備）<br>・調査研究報告書（所掌部分）作成 |
| 調査研究業務 | 山形県小国町総合政策課 | ・調査業務<br>・委員会運営等（会場確保、進行）<br>・調査研究報告書（所掌部分）作成 |
| 基礎調査業務 | 株式会社<br>シンクタンクみらい | ・アンケート集計、人口動態等分析業務<br>・分析結果検討、委員会報告及び検討支援業務<br>・調査研究報告書（所掌部分）作成支援 |

# 第１章　小国町及び集落の現況

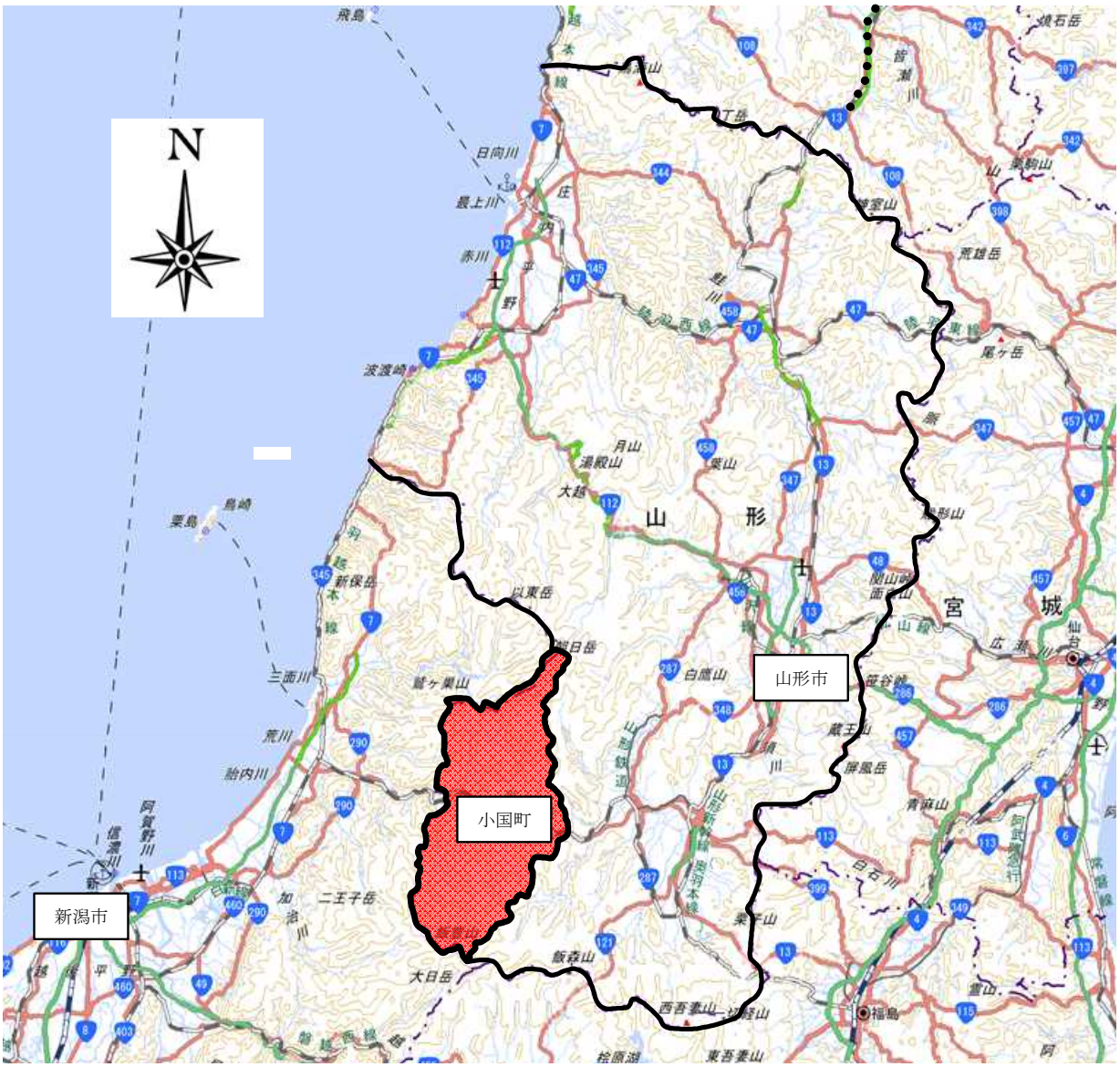
# 第１章　小国町及び集落の現況

## １　小国町の概要

### （1）位置

小国町は、山形県の西南端、新潟県境に位置し、両県の県庁所在地である山形市と新潟市のほぼ中間地点（それぞれ約 80ｋｍ）に位置する。

図表１－１　小国町の位置図



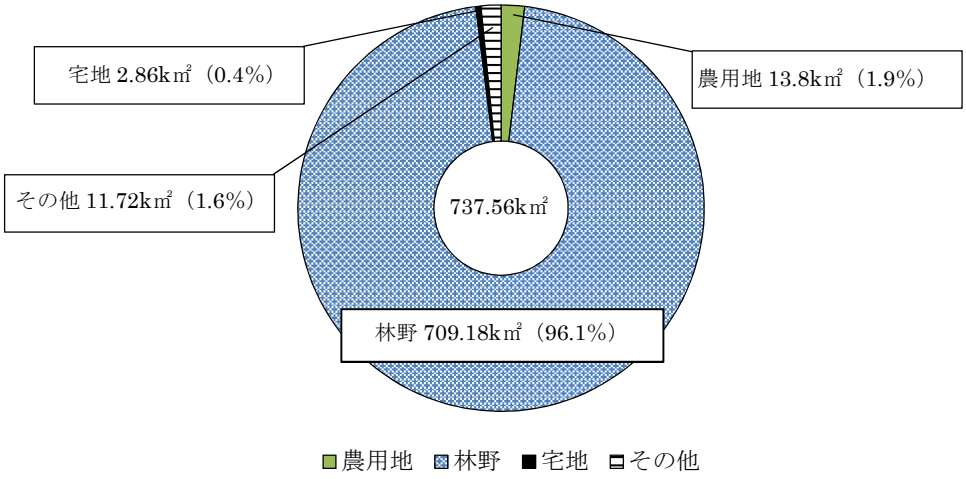
## (2) 自然的条件

### ア　地形、面積及び土地利用

小国町は、磐梯朝日国立公園に属する、朝日連峰、飯豊連峰に囲まれており、原始景観を残すブナの森を始め、町全体を覆い尽くすように落葉広葉樹林が広がっている。

面積は、東京 23 区（621 ㎢）より広大な 737.56 ㎢で、山形県総面積の 7.9%を占める。土地利用の状況は、森林が 96.1%を占めているのに対して、農用地は 1.9%、住宅地・その他を合わせ 2.0%となっており、国内有数の森林資源を有している。

**図表１－２　小国町の土地利用の状況**

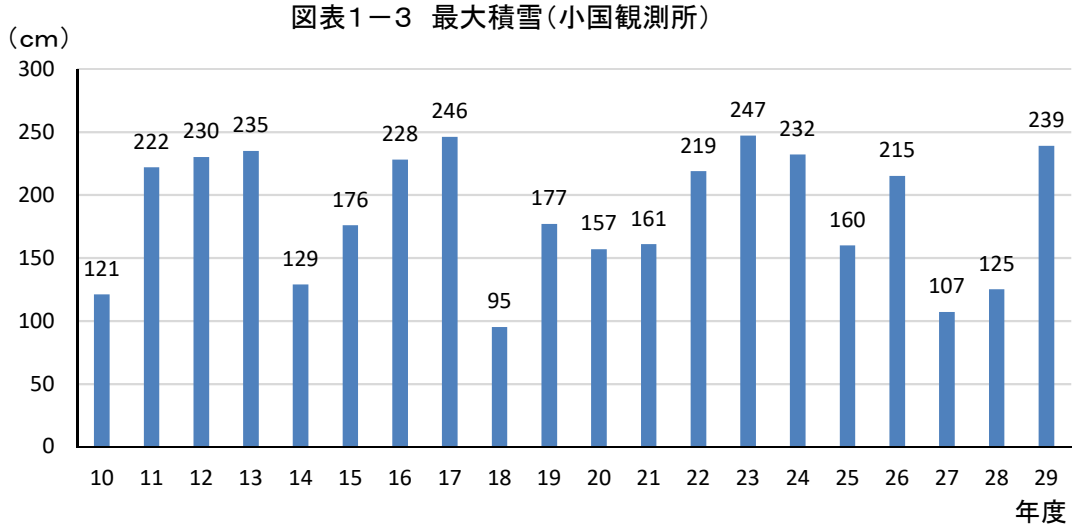



資料：平成 29 年度　土地に関する概要調書報告書

### イ　自然条件

日本海側気候に属し、四方を山地丘陵に囲まれているため、盆地特有の気候の面も見せている。また、日照時間の少ない天候が多く、冬季には全国屈指の豪雪をもたらし、積雪は町中心部で２ｍを超える年も珍しくない。

**図表１－３　最大積雪（小国観測所）**



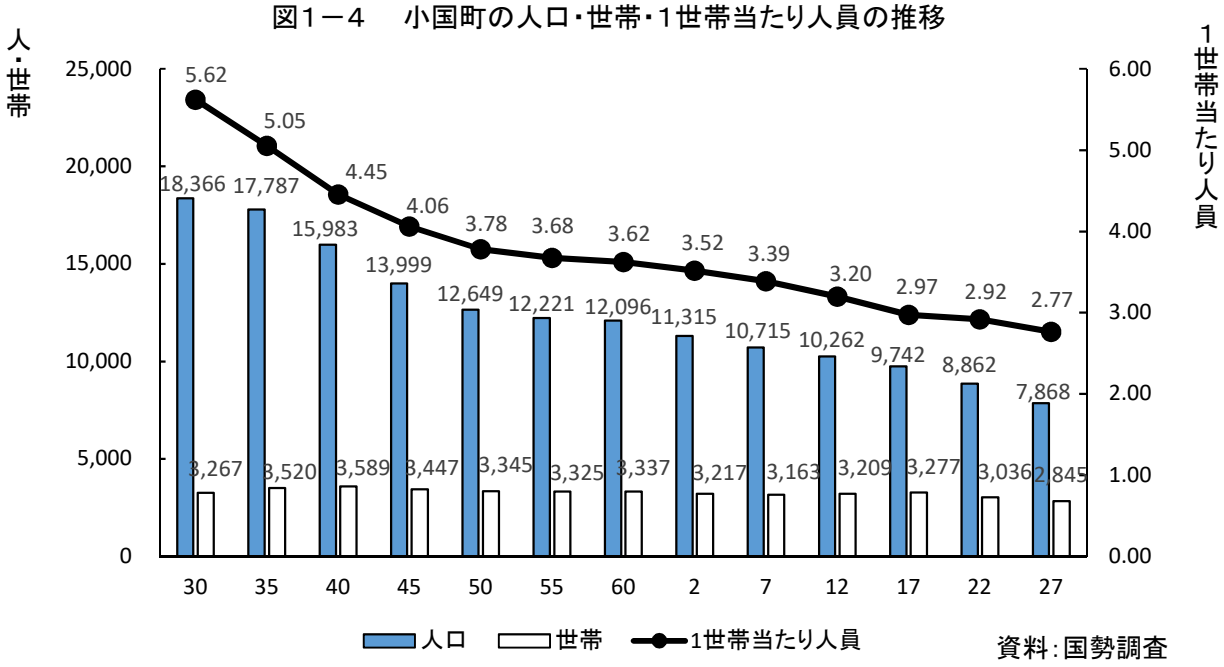

資料：山形地方気象台（小国観測所）気象データ

## (3) 人口・世帯

### ア　人口・世帯の推移

平成 27 年の国勢調査では、人口は 7,868 人、世帯数は 2,845 世帯となっており、1 世帯当たりの人員は 2.77 人となっている。人口は、昭和 30 年をピークに減少が続いているが、世帯数は核家族化の進行等によりほぼ横ばいの状態となっている。

図1－4　小国町の人口・世帯・1世帯当たり人員の推移




資料：国勢調査

図表1－5　小国町・山形県・置賜の人口・世帯・1世帯当たりの人員の比較

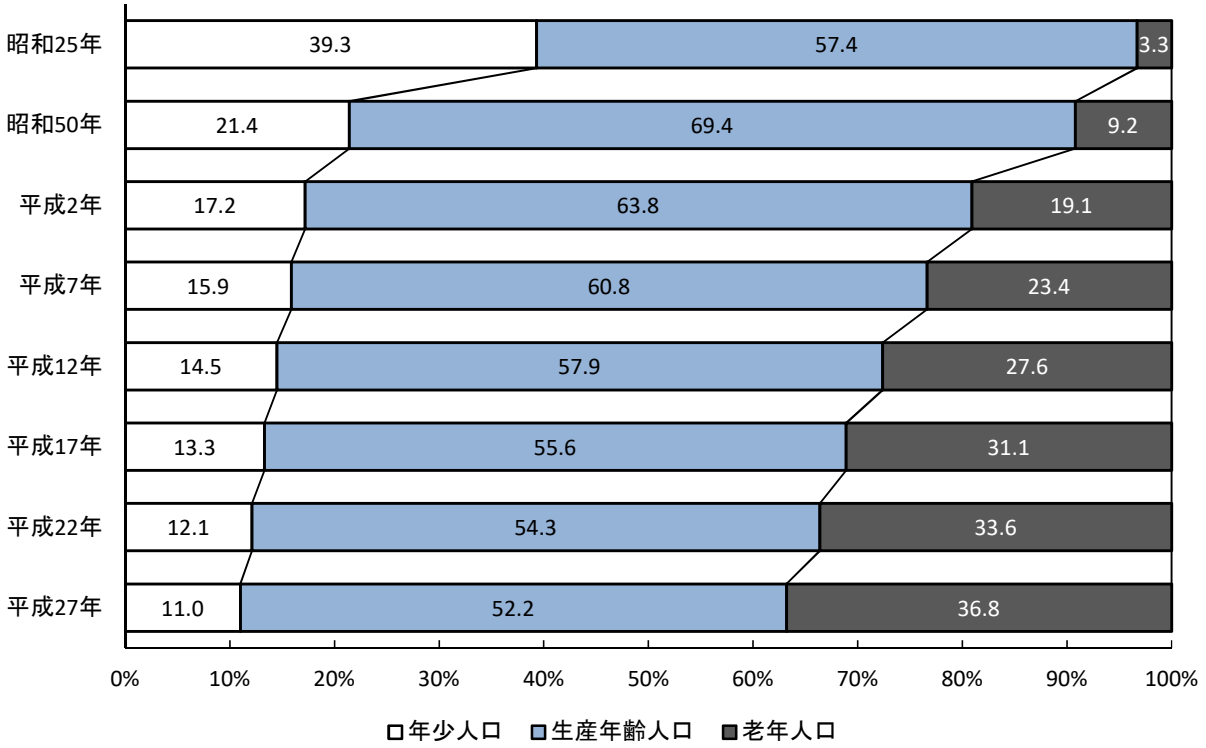
| 年度 | 区分 | 人口 | 男 | 女 | 世帯 | 1世帯当たり人員 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| H17 | 小国町 | 9,742 | 4,801 | 4,941 | 3,277 | 2.97 |
| | 山形県 | 1,216,116 | 584,946 | 631,170 | 386,840 | 3.14 |
| | 置賜地域 | 238,781 | 116,406 | 122,375 | 75,452 | 3.16 |
| H27 | 小国町 | 7,868 | 3,863 | 4,005 | 2,845 | 2.77 |
| | *(H17比較)* | *△ 1,874* | *△ 938* | *△ 936* | *△ 432* | *△ 0.21* |
| | 山形県 | 1,123,891 | 540,226 | 583,665 | 393,396 | 2.86 |
| | *(H17比較)* | *△ 92,225* | *△ 44,720* | *△ 47,505* | *6,556* | *△ 0.29* |
| | 置賜地域 | 214,975 | 104,391 | 110,584 | 74,030 | 2.90 |
| | *(H17比較)* | *△ 23,806* | *△ 12,015* | *△ 11,791* | *△ 1,422* | *△ 0.26* |

資料：「平成27年国勢調査　人口等基本集計結果報告書」

### イ　人口構造

過疎化及び少子高齢化の進行により、年少人口及び生産年齢人口の減少と、老年人口の増加が著しく進んでおり、平成 27 年の高齢化率 36.8%は、県内で 4 番目に高い水準となっている。

図表１－６　小国町の人口構造

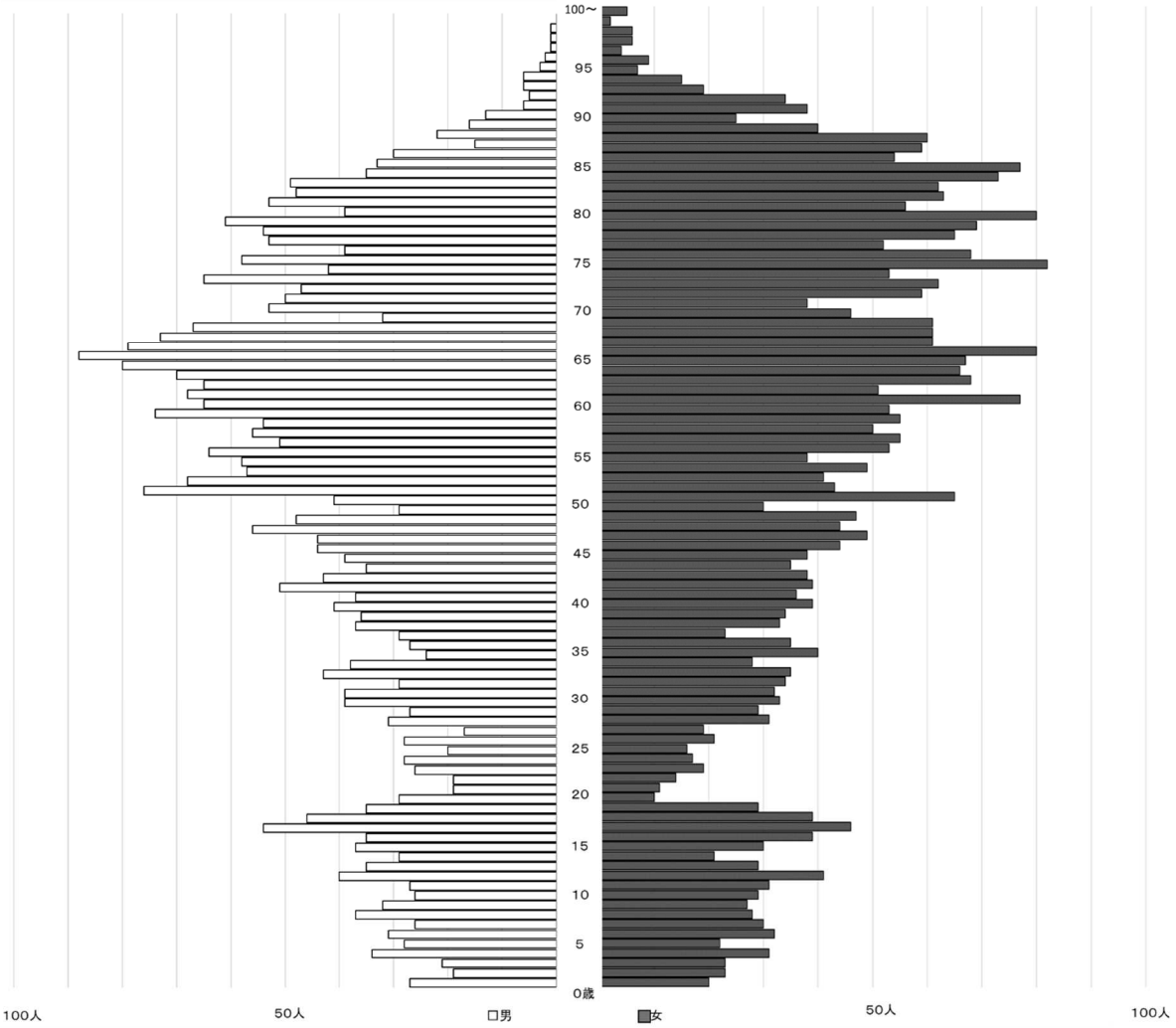



資料：平成27年国勢調査

### ウ　年齢別人口（人口ピラミッド）

平成 27 年の国勢調査における年齢別人口を見ると、団塊の世代を中心とする 60 代の人口の割合が高く、20～30 代の人口の割合が極めて低い状態となっている。東部地区にある基督教独立学園高等学校の生徒数が影響し 15～18 歳の人口の割合が高くなっているが、全体として、少子高齢化の傾向が著しい。生産年齢人口は全体の 52.2%を占めているが（図表１－６参照）、その大半は 55～65 歳が占めている。

図表１－７　　小国町の人口ピラミッド（平成２７年１０月１日現在）

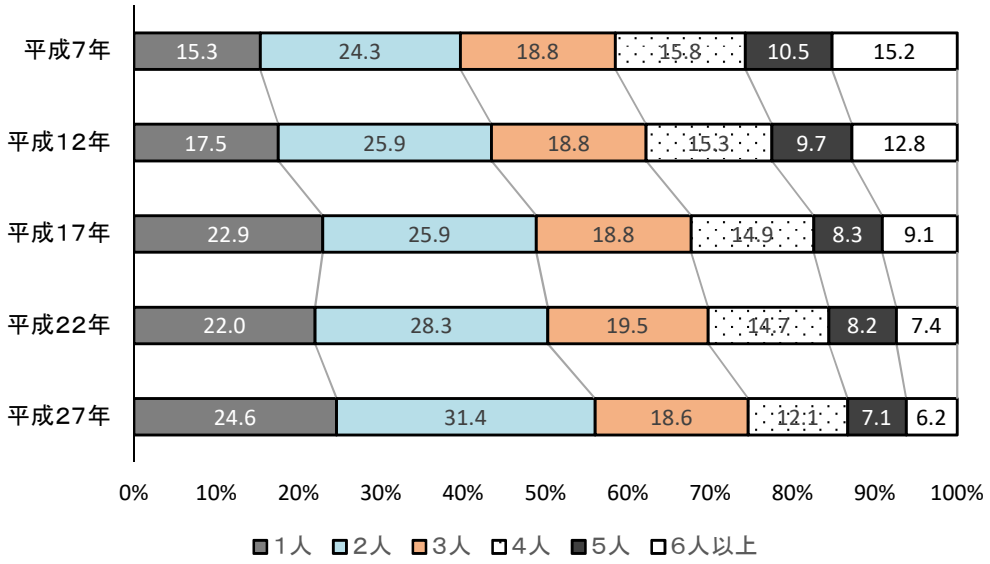



資料:平成27年国勢調査

### エ　世帯構造

本町の世帯構造を見ると、核家族化の進行、単身世帯の増加などによって、世帯人員の小規模化が進行しており、平成 27 年の国勢調査では、1～2 人の世帯の割合は全世帯の 56%を占めている。

図表１－８　小国町の世帯構造の推移



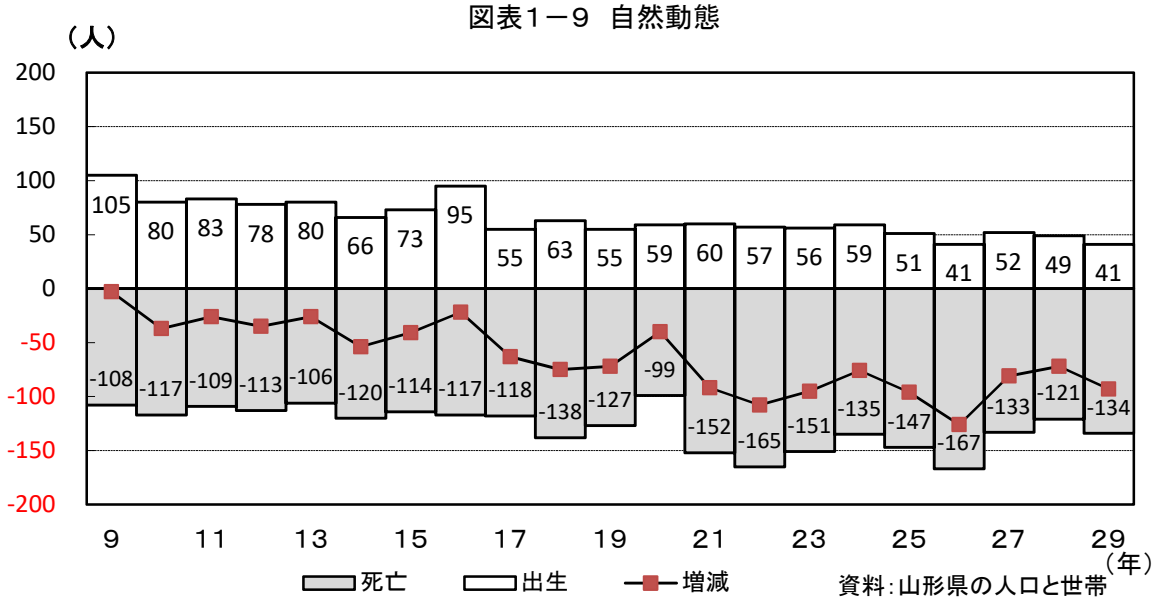

資料：国勢調査

## (4) 人口動態

### ア　人口動態

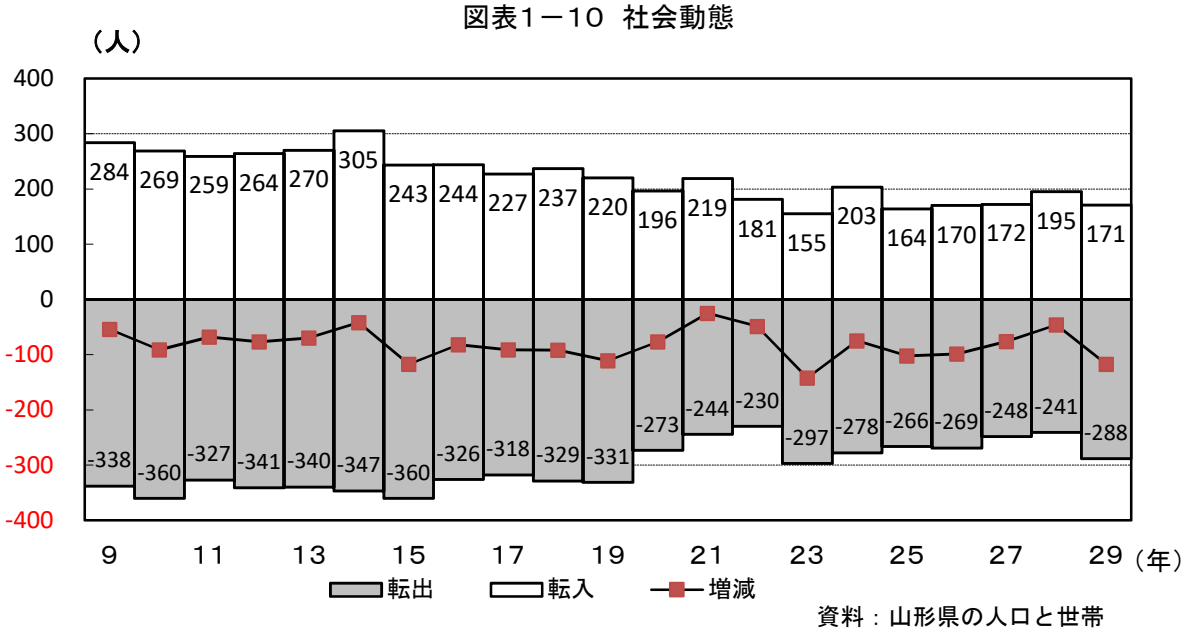
自然動態を見ると、死亡者数が出生数を上回る自然減の状態が続いている。特に出生数は近年 40～50 人台で推移し、この 20 年間で半減している。

図表1－9　自然動態



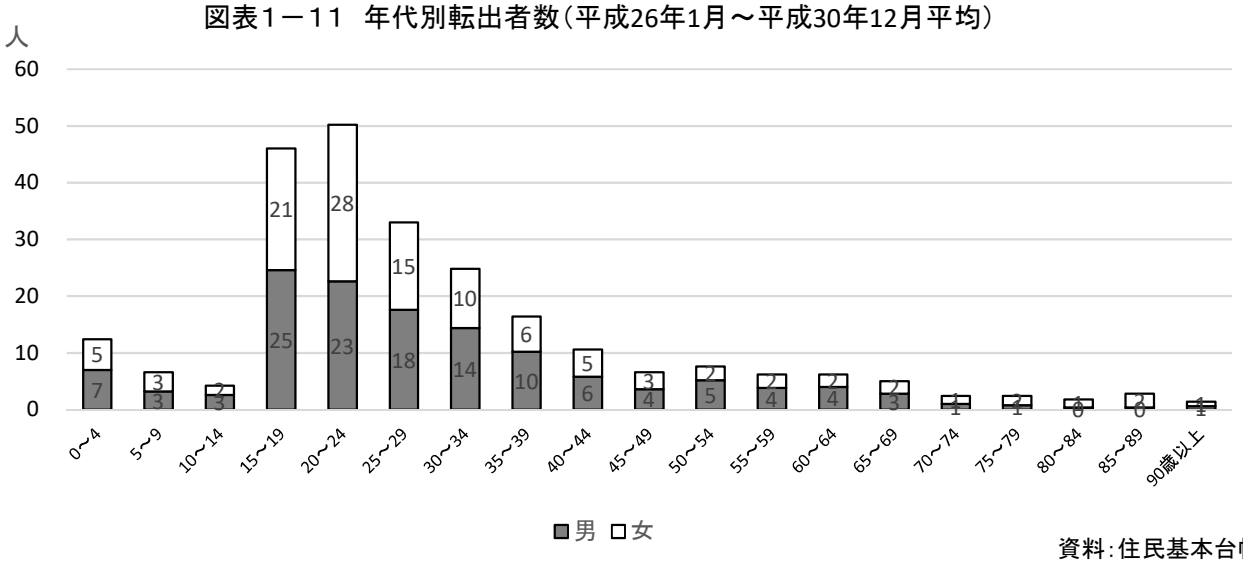

社会動態を見ると、転出者が転入者を上回る社会減の状態が続いている。町内企業の転勤等が大きく影響するが、それ以外に、進学や就職等で転出するケースも多く、出生数の減少と併せて、人口減少の大きな要因となっている。

図表1－10　社会動態



また、平成 26 年から平成 30 年までの 5 年間における転出者の平均数を年代別で見ると、15 歳から 34 歳までの年代の転出者が突出して多くなっている。就学や就職によるものと思われるが、出生数の減少や地域コミュニティの担い手不足の大きな要因となっている。

図表１－１１　年代別転出者数（平成26年1月～平成30年12月平均）

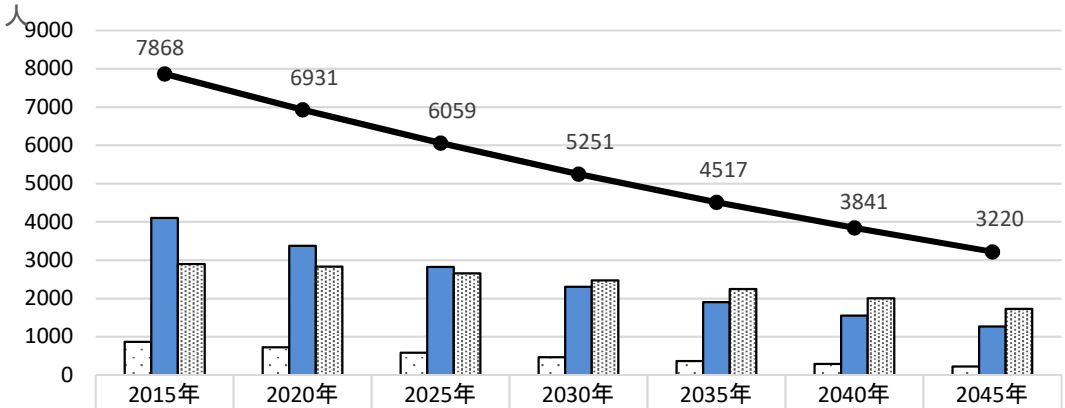



資料:住民基本台帳

### (5) 人口予測

国立社会保障・人口問題研究所が平成 30 年に公表した人口推計では、2045 年の小国町の人口は 3,220 人とされ、今後も人口減少が加速していくものとされた。また、2030 年からは、老年人口が生産年齢人口を上回り、高齢化率も 47.2%と、町民のおよそ 2 人に 1 人が 65 歳以上という状況が予想されている。

図表1－12　人口推計（総数・世代別）




| | 2015年 | 2020年 | 2025年 | 2030年 | 2035年 | 2040年 | 2045年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年少人口 | 866 | 723 | 582 | 465 | 369 | 288 | 222 |
| 生産年齢人口 | 4106 | 3374 | 2821 | 2309 | 1901 | 1551 | 1271 |
| 老年人口 | 2896 | 2834 | 2656 | 2477 | 2247 | 2002 | 1727 |
| 総数 | 7868 | 6931 | 6059 | 5251 | 4517 | 3841 | 3220 |

年少人口　生産年齢人口　老年人口　総数

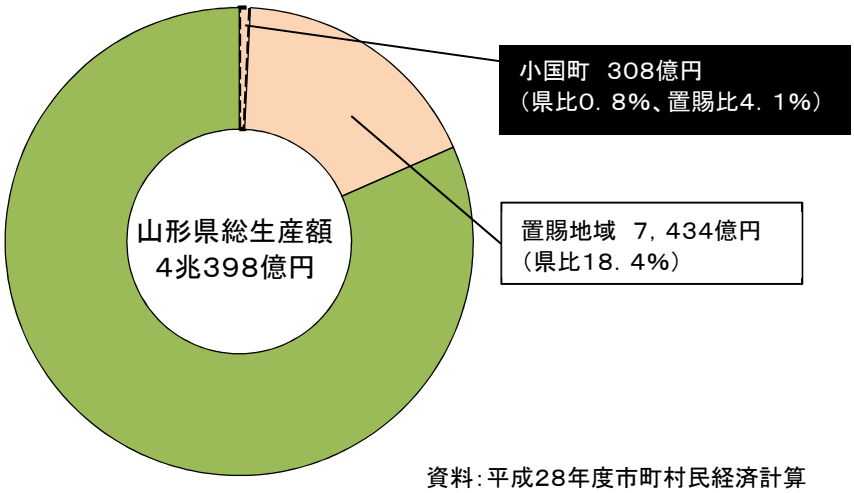
資料:『日本の地域別将来推計人口』（平成 30（2018）年推計）

## (6) 経済

### ア　総生産額及び一人当たり町民所得

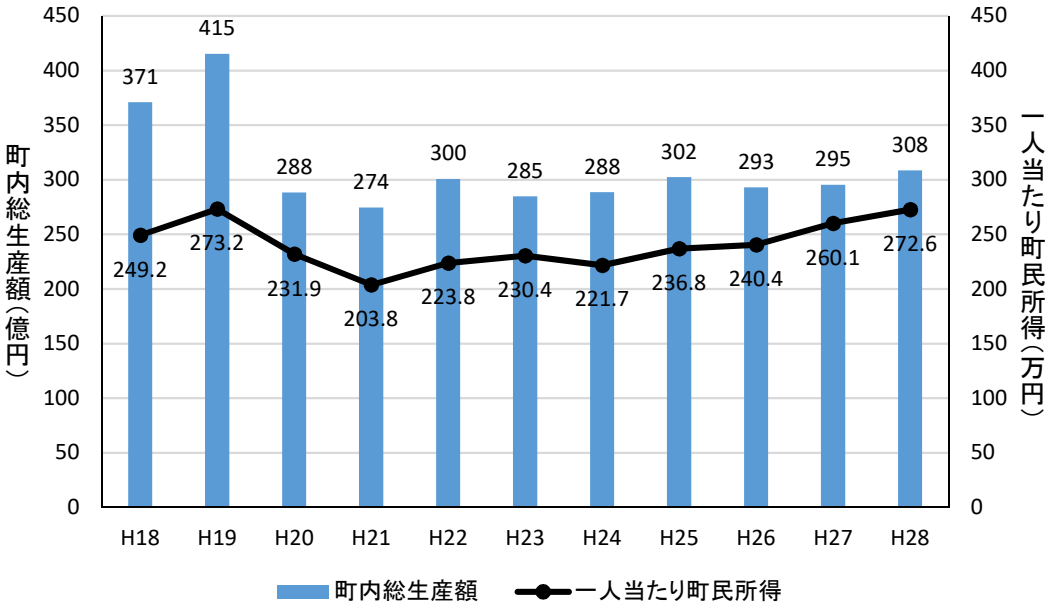
平成 28 年度の山形県の県内総生産額（市町村民所得統計）は 4 兆 398 億円で、このうち置賜地域は 7,434 億円で山形県全体の 18.4%を占めている。小国町の総生産額は 308 億円で、県内総生産の 0.8%を占める。また、平成 28 年度の小国町の一人当たりの町民所得は 272.6 万円となっており、県内では 8 番目（町村部では 2 番目）、置賜地域では米沢市に次いで 2 番目に高い水準にある。

図表１－１３　山形県・置賜地域・小国町の総生産額の状況




資料：平成28年度市町村民経済計算

図表１－１４　町内総生産及び一人当たり町民所得の推移

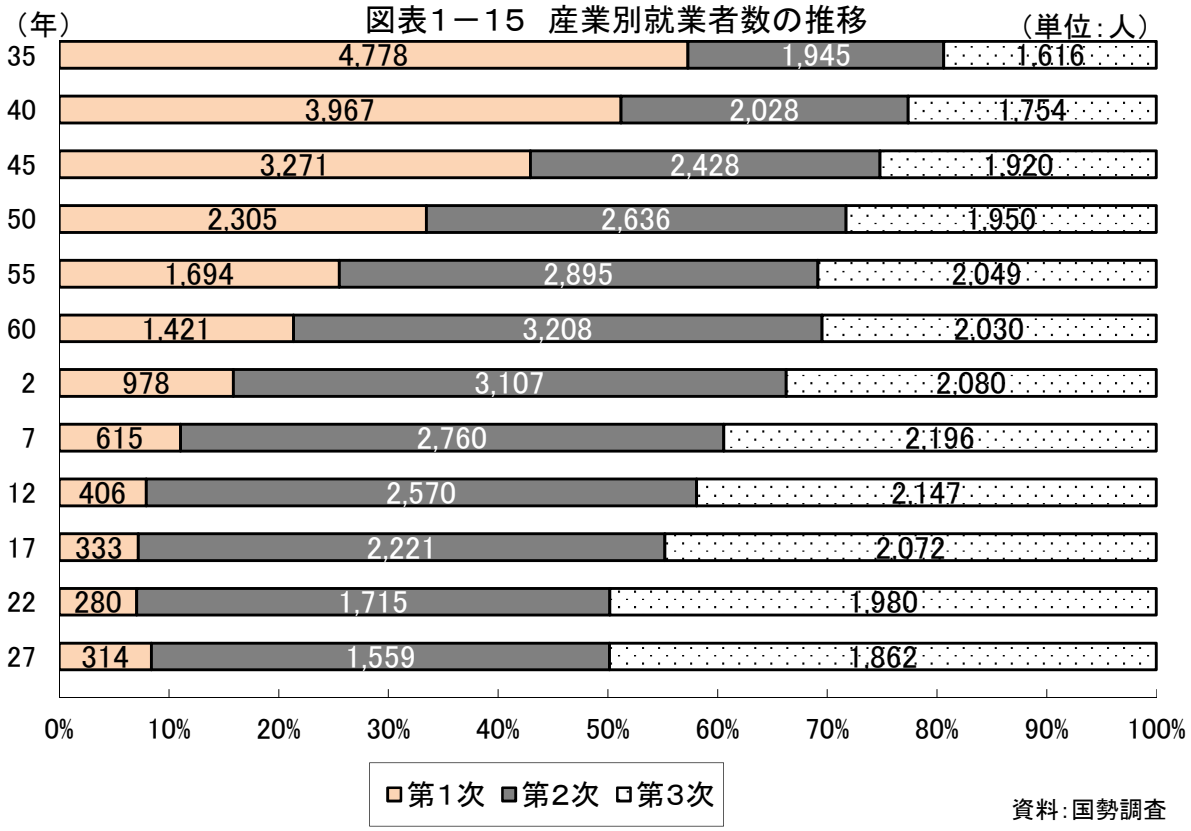



資料：平成28年度市町村民経済計算

### イ　就業人口

平成 27 年の国勢調査では、小国町の就業人口は 3,735 人で、第１次産業が 314 人（8.4%）、第２次産業が 1,559 人（41.7%）、第３次産業が 1,862 人（49.9%）となっており、第２次産業と第３次産業の従事者で９割以上を占めている。特に第２次産業が主産業となっており、山村にはまれな就業構造となっている。

図表１－１５　産業別就業者数の推移




資料：国勢調査

## ２　小国町内の集落の状況

### (1) 小国町の変遷

#### ア　町の成り立ち

明治 22 年の市町村制施行により、それまで小国郷を構成していた 59 ヶ村（自然村）が４つの行政村に再編され、小国本村、北小国村、南小国村、津川村となった。

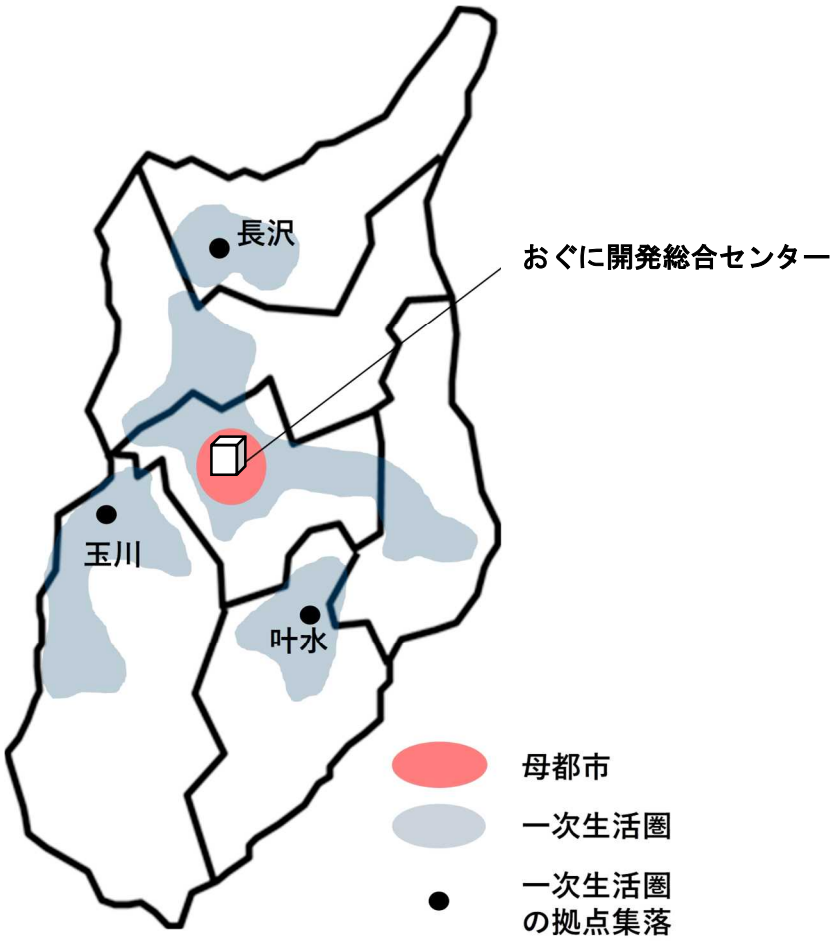
昭和 17 年に小国本村が町制を施行し、昭和 29 年に小国町、北小国村、南小国村が合体合併、昭和 35 年には津川村が編入合併され、現在の小国町となった。

図表１－１６　旧町村の位置

### イ　集落再編

小国町では昭和 40 年に、町中心部を母都市とし、旧町村エリアに一次生活圏を形成し町中心部とのネットワーク化を図る「生活圏整備構想」を樹立した。また、昭和 43 年には町中心部に、まちづくりの拠点施設として、おぐに開発総合センターを建設した。これにより、一次生活圏の拠点集落である長沢（北部）、玉川（南部）、叶水（東部）において、総合センターの分館機能を持つ基幹集落センターを始め、駐在所、診療所等の公共施設が集積されるなど、総合的な整備が進められた。

図表１－１７　生活圏整備構想のイメージ



### ウ　集落移転

昭和 42 年 8 月に発生した羽越水害は小国町に甚大な被害をもたらしたが、これを契機に越戸集落の全戸が町中心部に移転した。他の集落住民からも移転を望む声が出るようになり、町は「小国町農村計画研究会」を設置し、町内の全 117 集落を対象に集落の実態調査を実施した。この研究会では、積雪量、集落規模、町中心部までの距離など 7 つの基準を定め、要件に該当する集落を「居住限界集落」と位置付けた。調査の結果、25 集落が居住限界集落と診断され、当該集落においては、住民の意思決定があれば、行政が支援する形で集落再編整備を行った。

これらの結果、昭和 43 年から昭和 52 年の 10 年間で、10 集落、70 戸が集団移転を行った。

**図表1－18　集落移転の実績**

| 移転年 | 集落名 | 旧町村名 | 集落（移転）戸数 |
|---|---|---|---|
| 昭和 43 年 | 越戸 | 旧小国町 | 5 戸 |
| 昭和 45 年 | 綱木 | 旧小国町 | 9 戸 |
| | 上滝 | 旧津川村 | 16 戸 |
| | 下滝 | 旧津川村 | 20 戸 |
| 昭和 46 年 | 豆納 | 旧津川村 | 2 戸 |
| | 赤沢 | 旧津川村 | 4 戸 |
| | 高野 | 旧津川村 | 3 戸 |
| 昭和 48 年 | 綱川 | 旧津川村 | 3 戸 |
| | 屋敷 | 旧津川村 | 5 戸 |
| 昭和 52 年 | 森残 | 旧津川村 | 3 戸 |
| | 計 10 集落 | | 70 戸 |

資料：農山村地域におけるムラ機能の維持・保全に関する研究

## (2) 現在の集落の状況

### ア　様々な区域設定と基礎集落の関係

小国町では、町を構成する原単位である集落のほか、行政区、駐在区、農業振興組合、公民館、体育協会、消防団など、それぞれの役割や機能によって複層的に区割りされていることに加え、中心主体が地区ごとに異なっている。

なお、本調査研究において、集落とは下記図表の「大字」を、コミュニティとは「旧小学校区」を概ね示している。

**図表１－１９　基礎集落と各区分構成**

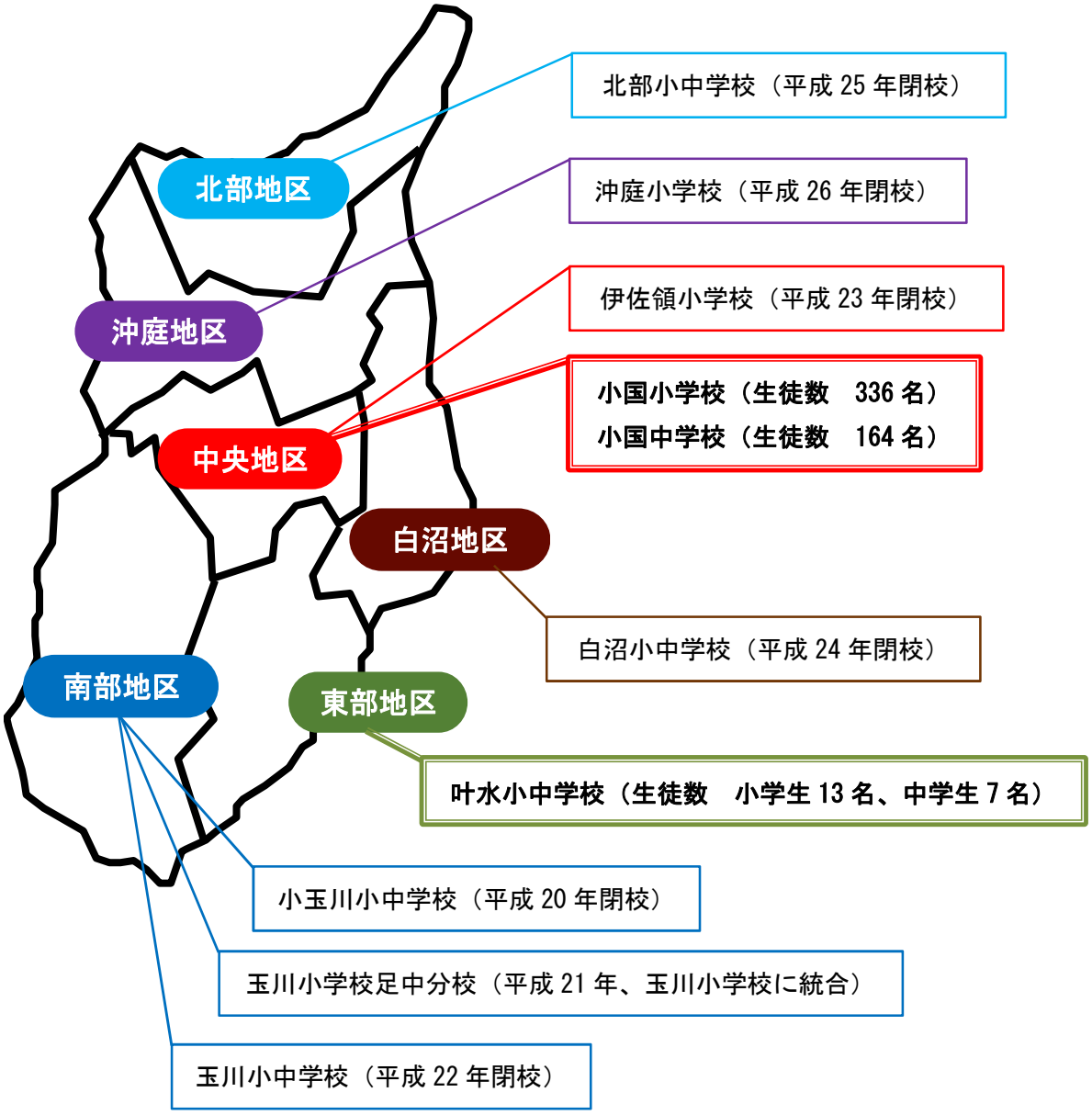
| 旧町村 | 大字 | 区域名 | 平成２７年国勢調査 世帯数 | 平成２７年国勢調査 人口 | 農業振興組合 | 行政区 | 駐在区 | 公民館 | 旧小学校区 | 体育協会 | 消防団 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 北小国村 | 五味沢 | 徳網 | 13 | 35 | 朝日 | 樋倉徳網 | 五味沢 | － | 北部小 | 北部 | 第６分団 第２部 |
| | | 樋倉 | | | | | | － | | | |
| | | 五味沢 | 22 | 63 | 五味沢 | 五味沢 | | 五味沢 | | | |
| | | 出戸 | 13 | 48 | 出戸 | | | － | | | |
| | 石滝 | 石滝 | 19 | 50 | 石滝 | 石滝 | 石滝 | 石滝 | | | |
| | | 中野 | | | | | | | | | |
| | 小股 | 小股 | 12 | 45 | 三ヶ字 | 三ヶ字 | 三ヶ字 | 小股 | | | |
| | 太鼓沢 | 太鼓沢 | 10 | 25 | | | | － | | | |
| | 驚 | 驚 | 3 | 12 | | | | － | | | |
| | 焼山 | 焼山 | 6 | 19 | 四ヶ字 | 六ヶ字 | 六ヶ字 | 六ヶ字 | | | 第６分団 第１部 |
| | 荒沢 | 荒沢 | 13 | 34 | | | | | | | |
| | 樋の沢 | 樋の沢 | 3 | 10 | | | | | | | |
| | 中島 | 中島 | 10 | 29 | | | | | | | |
| | 折戸 | 折戸 | 7 | 19 | 折戸 | | | | | | |
| | 入折戸 | 入折戸 | 1 | 2 | | | | | | | |
| | 長沢 | 長沢 | 21 | 74 | 長沢 | 越長 | 越長 | 長沢 | | | |
| | 越中里 | 越中里 | 24 | 86 | 越中里 | | | 越中里 | | | |
| | 栃倉 | 栃倉 | 10 | 20 | 今市 | 今市 | 今市 | － | 沖庭小 | 沖庭 | 第５分団 第２部 |
| | 今市 | 今市 | 14 | 42 | | | | 今市 | | | |
| | 松崎 | 松崎 | 1 | 8 | | | | | | | |
| | 尻無沢 | 尻無沢 | 21 | 69 | 尻無沢 | 尻無沢 | 尻無沢 | 尻無沢 | | | |
| | 網代瀬 | 網代瀬 | 2 | 4 | 中里網代瀬 | 舟渡 | 舟渡 | 舟渡 | | | |
| | 舟渡 | 中里 | 34 | 93 | | | | | | | |
| | | 窪 | | | 舟渡　窪 | | | | | | |
| | | 宮崎 | 32 | 102 | 舟渡宮蟹 | | | | | | |
| | | 入山 | | | 舟渡入山 | | | | | | |
| | | 蟹沢 | | | 舟渡宮蟹 | | | | | | |
| 南小国村 | 市野沢 | 市野沢 | 6 | 15 | 市野沢 | 市野沢 | 市野沢 | － | 玉川小 足中分校 | 南部 | 第７分団 第３部 |
| | 足水中里 | 足水中里 | 6 | 12 | 足水中里 | 足水中里 | 足水中里 | － | | | |
| | | 菅沼 | 2 | 5 | | | | | | | |
| | 百子沢 | 百子沢 | 3 | 6 | 百子沢 | 百子沢 | 百子沢 | 百子沢 | | | |
| | 滝倉 | 滝倉 | 0 | 0 | 樽口 | 滝倉 | 樽口 | － | | | |
| | 樽口 | 樽口 | 8 | 26 | | 樽口 | | 樽口 | | | |
| | 足野水 | 足野水 | 13 | 32 | 足野水 | 足野水 | 足野水 | 足野水 | 玉川小 | | 第７分団 第１部 |
| | 玉川 | 玉川 | 20 | 39 | 玉川 | 玉川 | 玉川 | 玉川 | | | |
| | | 下新田 | 15 | 39 | 新田 | 玉川新田 | 玉川新田 | 玉川新田 | | | |
| | | 玉川新田 | | | | | | | | | |
| | 片貝 | 片貝 | 15 | 46 | 片貝 | 片貝 | 片貝 | 片貝 | | | |
| | | 向片貝 | | | | | | | | | |
| | 中田山崎 | 中田山崎 | 10 | 25 | 中田山崎 | 中田山崎 | 中田山崎 | 中田山崎 | | | |
| | 玉川中里 | 玉川中里 | 7 | 20 | 玉川中里 | 玉川中里 | 玉川中里 | 玉川中里 | | | |
| | 泉岡 | 泉岡 | 10 | 25 | 泉岡 | 泉岡 | 泉岡 | 泉岡 | 小玉川小 | | 第７分団 第２部 |
| | 小玉川 | 小玉川 | 18 | 47 | 小玉川 | 小玉川 | 小玉川 | 小玉川 | | | |
| | | 六斗沢 | | | | | | | | | |
| | | 長者原 | 15 | 51 | 長者原 | 長者原 | 長者原 | 長者原 | | | |
| 津川村 | 沼沢 | 沼沢 | 29 | 69 | 沼沢一 | 沼沢一 | 沼沢一 | 沼沢 | 白沼小 | 白沼 | 第８分団 第１部 |
| | | | 41 | 120 | 沼沢二 | 沼沢二 | 沼沢二 | | | | |
| | | 間瀬 | 4 | 10 | 間瀬 | 間瀬 | 間瀬 | （沼沢に含む） | | | |
| | 白子沢 | 白子沢 | 16 | 49 | 白子沢 | 白子沢 | 白子沢 | 白子沢 | | | |
| | | 桜 | 0 | 0 | 桜沢中 | | | | | | |
| | | 沢中 | | | | | | | | | |
| | 叶水 | 土尾 | 27 | 75 | 上叶水一 | 上叶水 | 上叶水 | 上叶水 | 叶水小 | 東部 | 第８分団 第２部 |
| | | 山崎 | | | | | | | | | |
| | | 小叶水 | | | | | | | | | |
| | | 二渡戸 | 14 | 36 | 上叶水二 | | | | | | |
| | | 下叶水 | 5 | 19 | 下叶水 | 下叶水 | 下叶水 | － | | | |
| | | | 13 | 92 | | | | | | | |
| | 市野々 | 市野々 | 0 | 0 | | 市野々 | | | | | |
| | 大石沢 | 大石沢 | 19 | 50 | 下大石沢 | 下大石沢 | 下大石沢 | 下大石沢 | | | |
| | | 胡桃平 | 8 | 32 | 上大石沢 | 上大石沢 | 上大石沢 | 上大石沢 | | | |
| | 新股 | 新股 | 12 | 34 | 新股 | 新股 | 新股 | 新股 | | | |
| | 河原角 | 河原角 | 8 | 24 | 河原角 | 河原角 | 河原角 | 河原角 | | | |
| | 西滝 | 西滝 | 0 | 0 | | 滝 | | | | | |
| | | | 0 | 0 | | | | | | | |
| | 東滝 | 東滝 | 0 | 0 | | | | | | | |

| 旧町村 | 大字 | 区域名 | 平成２７年国勢調査 世帯数 | 人口 | 農業振興組合 | 行政区 | 駐在区 | 公民館 | 旧小学校区 | 体育協会 | 消防団 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 小国町 | 金目 | 金目 | 9 | 19 | 金目 | 金目 | 古田 | － | 沖庭小 | 沖庭 | 第５分団 第１部 |
| | 古田 | 古田 | 32 | 80 | 古田 | 古田 | | 古田 | | | |
| | 若山 | 若山 | 17 | 73 | 若山 | | | 若山 | | | |
| | | 舘 | 29 | 73 | 舘 | 舘 | 舘 | 舘 | | | |
| | 針生 | 針生 | 10 | 35 | 針新 | | | | | | |
| | 新屋敷 | 新屋敷 | 8 | 19 | | | | | | | |
| | 貝少 | 貝少 | 10 | 26 | 貝少 | | | | | | |
| | 増岡 | 舟場 | 11 | 29 | 舘に含む | | | | | | |
| | 小渡 | 小渡 | 16 | 51 | 小渡 | 小渡 | 小渡 | 小渡 | | | |
| | 伊佐領 | 伊佐領 | 33 | 88 | 伊佐領 | 伊佐領 | 伊佐領 | 伊佐領 | 伊佐領小 | 東南部 | 第３分団 第２部 |
| | | 蝶池 | 20 | 50 | | | | | | | |
| | | 大石 | | | | | | | | | |
| | | 請向 | | | | | | | | | |
| | 綱木箱口 | 綱木 | 0 | 0 | 綱木箱口 | 綱木箱口 | 綱木箱口 | 綱木箱口 | | | |
| | | 箱口 | 22 | 58 | | | | | | | |
| | 大宮 | 大宮 | 20 | 58 | 大宮 | 大宮 | 大宮 | 大宮 | 小国小 | 北東部 | 第４分団 第３部 |
| | 増岡 | 団子山 | 22 | 58 | 下林 | | | － | | | |
| | | 下林 | | | 団子山 | | | (大宮に含む) | | | 第４分団 第２部 |
| | | 増岡 | 7 | 19 | 横道 | 増岡 | 増岡 | | | | |
| | | 横道 | 28 | 84 | | | | | | | |
| | 湯の花 | 湯の花 | 20 | 49 | | | | | | | |
| | 西 | 西 | 31 | 89 | 増岡 | | | － | | | |
| | | | 19 | 56 | | 西 | 西 | | | | |
| | | | 1 | 3 | | 小芦五 | － | | | | |
| | | | 34 | 34 | | 若竹寮 | 若竹寮 | - | | 北東部東 | 第４分団 第１部 |
| | 北 | 北 | 61 | 178 | 北 | 小芦一 | 小芦 | 北 | | | |
| | | | 65 | 171 | | 北 | 北 | | | | |
| | | | 67 | 197 | | 旭町 | 旭町 | | | | |
| | 田沢頭 | 田沢頭 | 33 | 88 | 田沢頭 | 田沢頭 | 田沢頭 | 田沢頭 | | 北東部東 | 第４分団 第１部 |
| | 小国町 | 小国町 | 75 | 215 | 駅前 岩井沢 | 小国町一 小国町二 栄町一 栄町二 駅前一 駅前二 緑町一 緑町二 地蔵町 岩井沢一 岩井沢二 平林 兵庫舘一 | 小国町一 小国町二 栄町一 栄町二 駅前一 駅前二 緑町一 緑町二 地蔵町 岩井沢一 岩井沢二 平林 兵庫舘一 | － | | 町岩西 | 第２分団 第１部 第２分団 第２部 |
| | 栄町 | 栄町 | 55 | 136 | | | | | | | |
| | 緑町 | 緑町 | 148 | 365 | | | | | | | |
| | 岩井沢 | 岩井沢 | 234 | 685 | | | | | | 町岩東 | |
| | 兵庫舘 一～三丁目 | 兵庫舘 | 88 | 260 | － | | | | | | |
| | | | 71 | 191 | － | 兵庫舘二 | 兵庫舘二 | | | | |
| | 岩井沢 | 上岩井沢 | 27 | 86 | 上岩井沢 | 上岩井沢 | 上岩井沢 | 上岩井沢 | | | |
| | 小国小坂町 | 小国小坂町 | 321 | 798 | 坂町・本町 | 坂町一 坂町二 坂町三 坂町五 本町一 本町二 本町三 | 坂町一 坂町二 坂町三 坂町五 本町一 本町二 本町三 | 坂町・本町 | | 小坂町 | 第１分団 第１部・第２部 |
| | | (県職員AP) | 30 | 50 | － | | 県職員AP | － | | | |
| | 町原 | 町原 | 44 | 113 | 町原 | 町原 | 町原 | 町原 | | 東南部 | 第３分団 第１部 |
| | | 木落 | | | | | | | | | |
| | 芹出 | 芹出 | 4 | 7 | 松岡 | 松岡 | 松岡 | 松岡 | | | 第３分団 第２部 |
| | 松岡 | 松岡 | 22 | 64 | | | | | | | |
| | 朝篠 | 朝篠 | 11 | 27 | 朝篠 | | | 朝篠 | | | |
| | 杉沢 | 杉沢 | 14 | 36 | 杉沢 | 大滝 | 大滝 | 杉沢 | | | 第３分団 第１部 |
| | 新原 | 新原 | 15 | 37 | 大滝 | | | 大滝 | | | |
| | 大滝 | 大滝 | 25 | 68 | | | | | | | |
| | 種沢 | 種沢 | 18 | 46 | 種沢 | 種沢 | 種沢 | 種沢 | | | |
| | 黒沢 | 黒沢 | 17 | 49 | 黒沢 | 黒沢 | | 黒沢 | | | 第３－２ |
| | 幸町 | 幸町 | 35 | 110 | 幸町 | 幸町一 | 幸町一 | 幸町 | | 北東部 | 第４分団 第２部 |
| | | | 90 | 210 | | 幸町二 | 幸町二 | | | | |
| | 宮の台 | 宮の台 | 45 | 113 | － | 宮の台 | 宮の台 | (大宮に含む) | | | 第４－３ |
| | 東原 | 東原 | 78 | 222 | － | 東原 | 東原 | 東原 | | 東南部 | 第３－１ |
| | あけぼの | あけぼの | 118 | 408 | － | あけぼの | あけぼの | － | | 町岩東 | 第２分団 第２部 |
| 合　計 | | | 2,845 | 7,868 | | | | | | | |

### イ　まちづくりにおける区域設定

これまでのまちづくりにおいては、町内を中央地区、沖庭地区、北部地区、南部地区、東部地区、白沼地区の６つの地区に区分けし、各地区の地形や歴史、文化などをもとにテーマを設け、地域づくりを進めてきた。また、この地区割りは主に旧小学校区を基本としており、小学校を中心にコミュニティが形成されていた。

図表１－２０　まちづくりにおける設定区域と小中学校の状況（生徒数は令和元年５月１日現在）



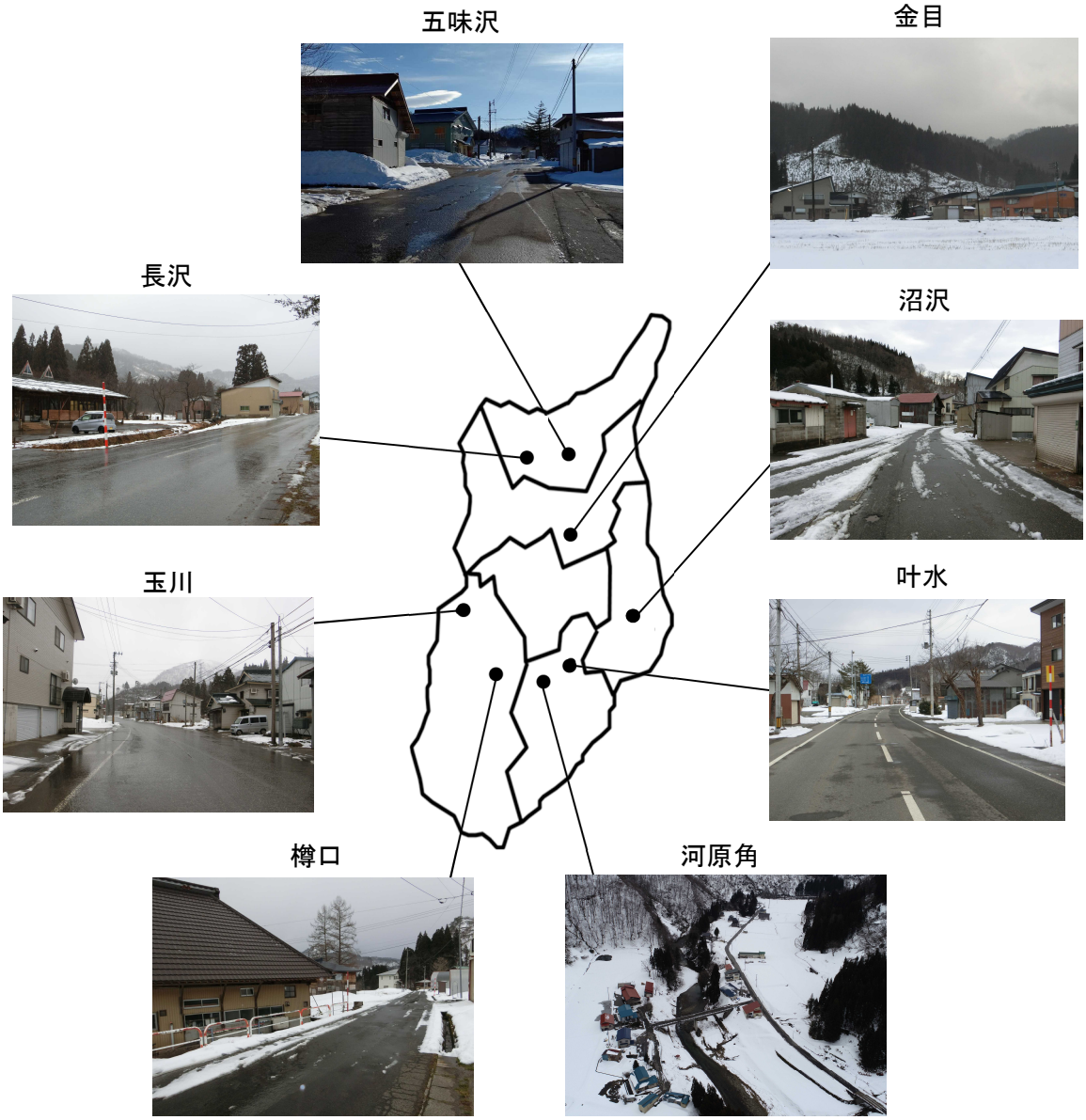
### (3) 現在の集落の実態

これまで小国町では、生活圏整備構想を始め、駐在員制度の導入など、全国に先駆けて集落対策を進めてきた。また、山村振興法に基づく振興山村の指定や、旧過疎地域対策緊急措置法に基づく過疎地域の指定を受け、これらの法制度を活用した各種山村対策や過疎対策を実施してきた。しかしながら前述のように、人口減少と少子高齢化は急激に進み、集落の維持のみならず、町内経済や社会保障など各分野にも大きな影響が及んでいる。

各集落の状況を見ると、高齢化と担い手不足が今後もより一層深刻となることが予想され、これまで実施してきた共同作業や祭りの継続が困難になるほか、農地や山林の管理、除雪の維持、災害時の対応など、様々な分野で課題や不安が生じている。

これらの課題や集落存亡の危機に対応すべく、住民・地域組織・行政・外部人財等が新たな機能を集落や地区に取り入れ、コミュニティ機能維持に向けた新たな環境づくりの方向性を探り、町内全域で展開していく必要がある。

図表１－２１　集落の現況写真



# 第２章　集落のコミュニティ機能の維持・保全状況と住民意識の実態

# 第２章　集落のコミュニティ機能の維持・保全状況と住民意識の実態

## １　町民アンケート調査について

### (1) 町民アンケート調査の概要

#### ア　調査の目的

小国町の集落の今後の在り方を検討する上で、現在の集落のコミュニティ機能の維持・活用状況等を把握し、これからの地域づくりの在り方を展望して集落、旧小学校区などの各地域構成単位が果たすべき機能や役割を検討・整理するとともに、現在の生活実態や居住意向、生活上の不安や社会的サービスとして望むもの等に関する町民意向を的確に把握するため、アンケート調査を実施した。

#### イ　調査対象

町内全世帯（悉皆調査）　※令和元年 6 月 30 日現在で 3,057 世帯

※原則、回答は世帯主とするが、家族の代筆も可

※回答者個人の意見ではなく、世帯（家）としての考えを回答してもらう

#### ウ　調査項目

図表２－１ アンケート調査の調査項目

| | |
|---|---|
| Ⅰ　世帯属性 | ● 世帯主の年齢、職業、居住地区、世帯人員、世帯構成、住宅の状況 |
| Ⅱ　世帯の継承状況 | ● 小国町での世帯履歴 |
| | ● 町内で別居している家族の有無、別居している家族（親・子）との行き来の頻度 |
| | ● 町外で暮らしている家族の有無、他出している子の帰省頻度 |
| | ● 今後の世帯（家）の継承予定 |
| Ⅲ　農地や山林の所有・管理状況 | ● 農地の所有状況、所有している農地の面積・管理状況、今後の農地の継承意向 |
| | ● 山林の所有状況、所有している山林の面積・管理状況、今後の山林の継承意向 |
| Ⅳ　生活環境の状況 | ● 集落（駐在区）での現在の暮らしの状況 |
| | ● 集落（駐在区）の将来（10 年後）の生活環境に対する見通し |
| Ⅴ　集落のコミュニティ機能の状況 | ● 集落で行われている共同作業や役まわりへの世帯としての参加状況 |
| | ● 集落で行われている共同作業や役まわりへの出役に対する負担感 |
| | ● 近隣集落や旧小学校区などで連携して実施している作業・活動 |
| | ● 将来的に近隣集落や旧小学校区、町全体で連携して実施すべき作業・活動 |
| | ● 集落の魅力を向上させるために必要な取組 |
| | ● 集落への移住者の受入に対する意向、受入促進のために行政が果たすべき役割 |
| Ⅵ　今後のまちづくり | ● 小国町で暮らしやすくしていくために力を入れるべき対策 |

#### エ　調査方法

配布：駐在員が各世帯に調査票を配布（9 月 2 日）

回収：駐在員経由で回収、もしくは各世帯より直接返送

### オ　回収状況

アンケートの回収状況は以下のとおりであり、町全体の回収率（有効回答）は 75.1%であった。

**図表２－２ アンケートの回収状況（地区別）**

| | 北部 | 沖庭 | 南部 | 東部 | 白沼 | 中心部 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 配布数 | 168 | 243 | 151 | 112 | 83 | 2,038 | 2,795 |
| 回収数 | 141 | 202 | 93 | 80 | 74 | 1,510 | 2,100 |
| 回収率 | 83.9% | 83.1% | 61.6% | 71.4% | 89.2% | 74.1% | 75.1% |

## (2)　町民アンケート調査結果の概要

### ア　世帯属性

- 世帯構成は、二世代世帯が 34.7%と最も多く、次いで夫婦のみ世帯が 26.5%、単独世帯が約 2 割であり、地区別に見ると、東部では夫婦のみ世帯が 35.0%と最も多い。また、住宅の状況を見ると、全体では持ち家が約９割を占めている。

### イ　世帯の継承状況

- 現在の世帯主より以前から小国町で暮らしている世帯は 77.1%であり、約 2 割は現在の世帯主の代から小国町で居住している。世帯主が 20～30 代の世帯の 43.4%は現在の世帯主の代から小国町で暮らしている世帯である。
- 町内に住んでいる家族がいるとした世帯は約半数であり、地区別では白沼が約 3 分の 1 と低い。町内に親がいるとする世帯は約半数であり、訪ねる頻度は週 1 回から月 1 回が約 6 割と最も多いが、南部と東部ではほぼ毎日とする世帯が 36.4%あり、逆に町内に住む子が訪れる頻度では、中心部が約 3 割と最も多い。
- 町外に家族がいる世帯は全体の 7 割強であり、うち 7 割弱が年に数回程度来訪するとしている。
- 現在の家の継承予定では、「持ち家だがまだ決めていない」とする世帯が約半数、「世帯主の子に引き継ぐ予定」が約 3 割であり、地区別では沖庭、南部で約 4 割が世帯主の子に引き継ぐ予定としている。また、世帯主の年齢が上がるにつれて「世帯主の子供に引き継ぐ予定」の割合が高くなる傾向がみられる。
- 「世帯主の子に引き継ぐ予定」と回答した世帯について、具体的に家を継ぐ予定の子供を見ると、全体では「同居している子供」が 67.1%であるが、地区別に見ると、東部ではその割合は約 5 割弱とやや低い。
- 「世帯主の代で引き払う予定」という世帯について、家を引き払った後の予定を見ると、無回答が 5 割弱あるが、約 3 割弱が「町外に転居する予定」であり、地区別では、東部・白沼で 4～5 割が「町外に転居する予定」となっている。

### ウ　農地や山林の所有・管理状況

- 回答のあった世帯の 4 割弱が農地を所有しており、中心部ではその割合は低く（25.2%）、周辺部では南部の 87.1%から白沼の 56.8%と幅が見られる。また、世帯主が若い世帯の農地の所有割合は低い。１世帯当たり平均面積は、田が 43～170a、畑が 17～55a であり、地区別では、田は北部（170a）と南部（110a）、畑は沖庭（55a）と南部（43a）が比較的広い。
- 所有している農地の現在の管理状況を見ると、全体で「大半を他者に貸与(委託)」している世帯が 35.7%と最も多く、次いで「自家ですべて耕作・管理」が 23.9%となっているが、東部では、「大半を他者に貸与」が５割程度、白沼では「ほとんど管理できず放置」が３割程度見られる。
- 所有している農地の今後の管理等に対する意向では、全体では「当代は管理を継続し、その後は後継者に任せる」とする世帯が約 4 割と最も多く、次いで「自家で所有するが管理は全て他者に委託」が 14.7%であり、地区別では白沼の約 3 割、南部の約 2 割が「耕作できなくなったら放置」としている。
- 山林の所有状況を見ると、全体では「所有していない」世帯が 49.3%で、「所有している」が 35.7%となっている。地区別に見ると、周辺部ではいずれも半数以上の世帯が「所有している」としており、特に沖庭や南部では地区全体の 3 分の 2（沖庭 67.3%、南部 66.7%）の世帯が山林を「所有している」と回答している。また、世帯主が若い世帯の山林の所有割合は低い。１世帯当たりの山林の平均面積は 259a であり、北部の 152a から東部や中心部の 285a まで様々である。
- 所有山林の現在の管理状況を見ると、全体では「特に何もしていない」とする割合が 3 分の 2 を占める。地区別に見ると、南部では 4 割強が自家で管理（作業も自家で実施：33.9%、作業は他者に依頼：8.1%）しており、他地区よりも高い割合となっている。世帯主が 60 代以上の世帯の 2 割弱が自家で所有・管理している。
- 所有山林の今後の管理について全体では「当代は管理を継続し、その後は後継者に任せたい」という意向が 4 割強と最も多く、東部で約 6 割、白沼で約 5 割とその傾向が顕著となっている。また、世帯主が 60 代以上の世帯では、今後も自家（後継者を含む）で所有・管理し、山林作業は自家又は他者に委託して行いたいという意向が比較的高い。

### エ　生活環境の状況

- 住んでいる集落（地区）の現在の生活環境に対する評価を項目間で比較すると、全体では「家屋の雪処理や道路の除排雪」が最も評価が低いが、「不便だが生活に支障が出るほど困っていない」程度の状況であり、次いで「鳥獣害対策」、「医療体制・救急医療体制」の順で評価が低くなっている。地区別に見ると、「鳥獣害対策」については、特に南部、白沼、北部で「生活に支障が出るほど困っている」とする割合が高い。
- 住んでいる集落（地区）の将来(10 年後)の生活環境に対する見通しは現状と比べて厳しくなると評価されており、特に「家屋の雪処理や道路の除排雪」が最も評価が低く、次いで「医

療体制・救急体制」、「福祉・健康」、「町外への移動・交通」の順で生活に支障が出るほど困る状態になることが懸念されている。地区別に見ると、「鳥獣害対策」や「家屋の雪処理や道路の除排雪」などは、南部を中心に「生活に支障が出るほど困る状態になっている」とする割合が 4～6 割と、現在の生活環境に対する評価よりも厳しくなっている。

**オ　集落のコミュニティ機能の状況**

- 集落活動への参加状況を見ると、全体では「回覧板等の行政連絡の伝達」が約 8 割と最も多く参加しており、次いで「集落内の婚礼や葬式における助け合い」が 7 割弱と参加率が高い。ただし、地区別では参加状況に差が見られ、全体として南部、北部、沖庭では「高齢者世帯の雪下ろしや冬期における助け合い」を除き、参加割合が高くなっている。また、世帯履歴別に見ると、当代から町に居住している世帯の方が、「回覧板等の行政連絡の伝達」を除き、総じて参加割合が低くなっている。
- 共同作業の負担感を見ると、全体では「あまり苦にならない」が約 3 割弱、「どちらともいえない」が 23.1%、「やや大変」が 18.7%の順であるが、地区別に見ると南部、東部、沖庭では「あまり苦にならない」とする割合と「やや大変」とする割合の両者が全体と比べて大きく、やや二極化の傾向が見える。
- 各集落活動について、集落単独ではなく近隣の集落(駐在区)と連携して実施している割合を見ると、全体で「祭りなどの伝統行事」が約 3 割で最も多く、次いで「イベント・交流事業」と「老人クラブの活動」が約 2 割の順となっている。地区別に見ると、白沼では「祭りなどの伝統行事」を始め、他地区よりも比較的近隣集落と連携している割合が高い一方、南部ではいずれの活動も近隣集落と連携して実施しているとする割合は 1～2 割程度と低くなっている。
- 各集落活動について、集落単独ではなく旧小学校区で連携して実施している割合を地区別に見ると、白沼では「自主防災活動」が 37.8%、「老人クラブ等の活動」が 33.8%と最も多く、北部や南部では「老人クラブ等の活動」が第 1 位であり、沖庭では「イベント・交流事業」が 17.3%で第 1 位と比較的高くなっており、中心部ではいずれの活動も 5 パーセント以内となっている。
- 将来(10 年後)の各集落活動における集落間等の連携の必要性について見ると、無回答、すなわち他集落等との連携は必要ないという意見がいずれの活動でも半数以上を占めているが、全般的に町全体で連携が必要とする活動が多く、「祭りなどの伝統行事」や「農作業や山林作業等の共同作業」を除く全ての活動が該当している。地区別に見ても、白沼では近隣の集落(駐在区)と連携が必要とする活動は「祭りなどの伝統行事」(36.5%) や北部では「家屋の雪下ろしや集会所等の除排雪」(23.4%) が比較的高いほかは、概ねどの地区においても町全体で連携が必要とする活動が高くなっており、特に「福祉健康づくり活動」が約 2 割以上と最も高くなっている。
- 居住集落の魅力を高めるために必要な取組としては、全体で「何ともいえない・わからな

い」とする世帯が 36.7%と最も多いが、必要とされた取組の中では、「若い世代が積極的に活躍できる集落の規約や役回りの見直し」が 25.4%、「町全体のイベントなど集落を越えた連携による取組」が 21.9%となっている。地区別に見ると、東部では「田舎暮らしや新規就農者等の積極的な受け入れ」と「若い世代が積極的に活躍できる集落の規約や役回りの見直し」がそれぞれ 30.0%と第 1 位となっているほか、白沼では「集落の共有財産を活用した交流活動」が第 2 位となっている。また、世帯主が 20～30 代の世帯は「田舎暮らしや新規就農者等の積極的な受け入れ」や「若い世代が積極的に活躍できる集落の規約や役回りの見直し」の割合が高い。

- 居住集落に移住者を受け入れることに対しては、全体で約 6 割の世帯が移住者が来る（増える）こと自体は賛成としており、移住者の受入に消極的な世帯は 2.7%とわずかではあるが、「何ともいえない・わからない」や無回答も比較的多い。また、賛成の割合は、世帯主が 80 代以上の世帯を除き、6 割を超えている。
- 居住集落に移住者が来る（増える）こと自体は賛成という世帯の内訳を見ると、「どんな人でも集落の住民と協力する気持ちがある人なら住んでほしい」が 39.4%と最も多く、次いで「小国町の出身かどうかにはこだわらないが、できれば雪国での生活経験がある人に住んでほしい」が 8.0%となっている。地区別に見ると、南部では「できれば集落住民の家族や親戚縁者に住んでほしい」が 16.1%と比較的高いが、東部では「どんな人でも」が 53.8%と特に高くなっている。世帯主の年齢別に見ると、「どんな人でも」は世帯主が 20～40 代と若い世帯において 5 割を超えている一方、世帯主が 70 代以上の世帯では、「できれば雪国での生活経験のある人に住んでほしい」の割合が他と比べてやや高い。
- 居住集落に移住者が来る（増える）こと自体は賛成という世帯のなかでも、「できれば雪国での生活経験のある人」(8.0%) 又は「どんな人でも集落住民と協力する気持ちがある人なら」(39.4%) と回答した世帯に対して、移住促進のために必要な施策を聞いたところ、全体では「移住者を受け入れる空き家のリフォームへの補助」が 52.7%と最も多く、次いで「集落と移住希望者とを仲介する人材の配置・派遣」が 34.2%、「移住希望者の短期滞在（お試し居住）施設の整備」が 30.3%となっている。地区別に見ると、南部のみ上位項目が全体傾向と異なり、第 1 位に「集落と移住希望者とを仲介する人材の配置・派遣」(39.0%)、第 2 位に「移住希望者を案内するツアーや集落住民との交流イベントに対する支援」(29.3%) が挙げられている。
- 居住集落に移住者が来る（増える）こと自体は賛成という世帯の中でも、「できれば雪国での生活経験のある人」(8.0%) 又は「どんな人でも集落住民と協力する気持ちがある人なら」(39.4%) と回答した世帯に対して、集落への外国人移住者の受入れに対する考えを聞いたところ、全体では約 7 割が外国人でも構わないとしている。地区別に見ると、南部では外国人でも構わないとする世帯が 43.9%と他の地区より低く、外国人にはあまり来てほしくないという割合が約 2 割と最も高くなっている。

### カ　今後のまちづくり

- 小国町で暮らしやすくしていくために必要な取組として、全体では「冬期の道路除排雪の充実・強化」が 42.5%で最も多く挙げられており、次いで「訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実」(35.0%)、「敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実」(33.2%) が必要とされている。
- 地区別に見ると、「冬期の道路除排雪の充実・強化」は中心部のほか北部や南部で第 1 位となっており、沖庭、東部、白沼では「集落や地区での暮らしやすい環境づくり」が第 1 位となっている。中心部で第 2 位の「敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実」は、周辺部では第 3 位以内に入っておらず、東部では唯一「出産・保育など子育て支援の充実」が第 2 位に挙げられている。このほか、周辺部では「バスなど公共交通の充実」や「保健・福祉サービスの充実」も上位に挙げられている。
- 世帯主の年齢別に、上位 5 項目を比較すると、20～30 代では「出産・保育など子育て支援の充実」や「新しい産業おこしや起業・創業の支援」が上位に挙げられているが、世帯主が 60 代以上の世帯では、「訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実」、「敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実」等が上位に挙げられている。なお、世帯主が 40 代以上の世帯では、いずれも「冬期の道路除排雪の充実や強化」が第 1 位に挙げられている。

## (3) 調査結果

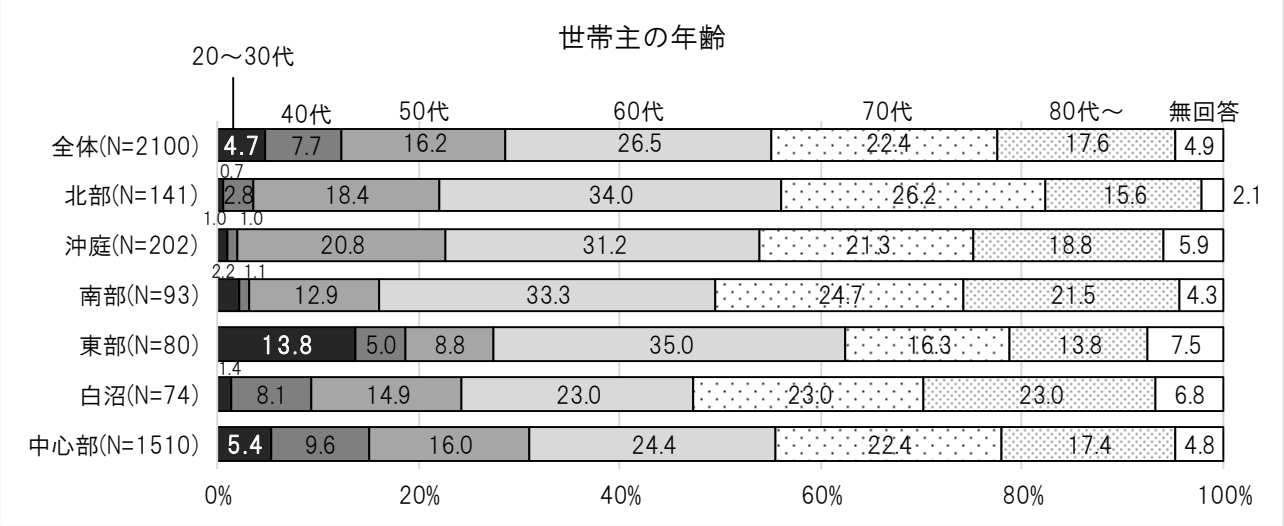
※ グラフ中の選択肢は、実際のアンケート票（２－４参照）における選択肢を略記している場合がある。

### ア 世帯属性

#### ①世帯主の年齢

回答世帯の世帯主の年齢を見ると、全体では 60 代以上が 7 割近くを占める。

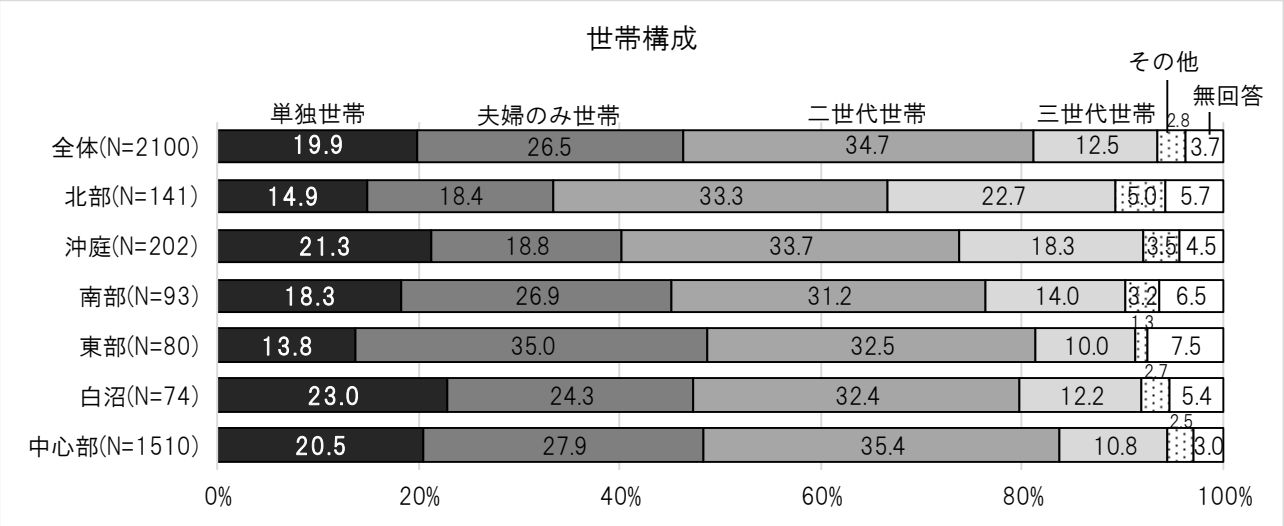
地区別に見ると、東部は世帯主が 20～30 代の世帯の割合が他地区と比較して高く、南部と白沼は世帯主が 70 代以上の世帯の割合が 5 割を超えている。




#### ②世帯構成

回答世帯の世帯構成を見ると、全体では二世代世帯が 34.7%と最も多く、次いで夫婦のみ世帯が 26.5%、単独世帯が 19.9%、三世代世帯が 12.5%となっている。

地区別に見ると、周辺５地区のうち白沼と沖庭では単独世帯の割合が 2 割強とやや高い割合となっている。また、東部は夫婦のみ世帯の割合が 35.0%と最も高い割合を占めている。

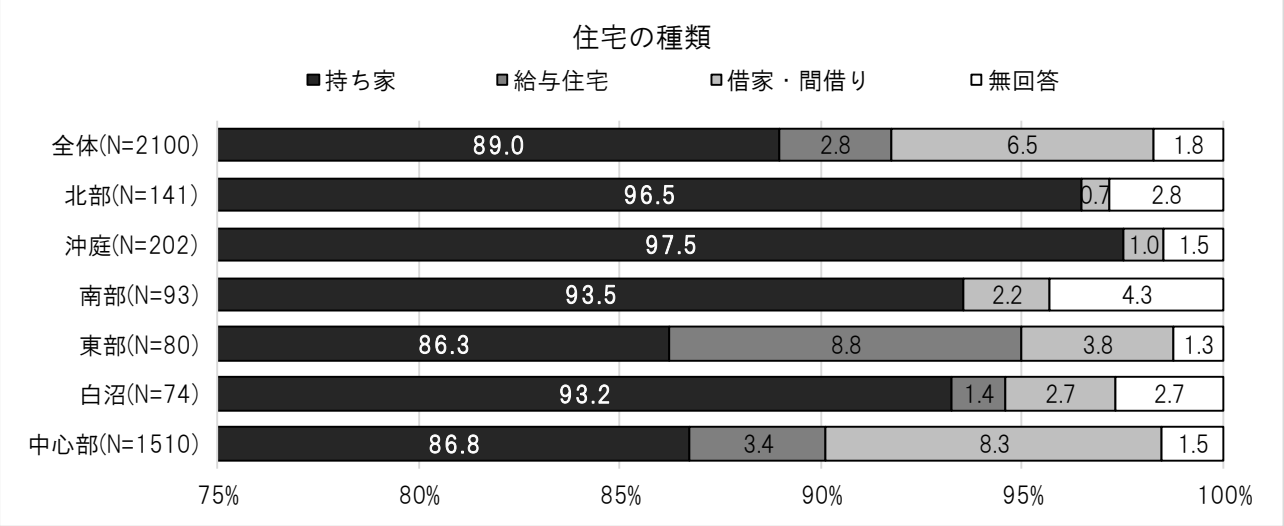



※ 「二世代世帯」は、夫婦＋子、夫婦＋親、男親又は女親＋子、祖父母＋孫の合計。

### ③住宅の種類

住宅の種類を見ると、全体では持ち家が約 9 割を占めている。

地区別に見ると、いずれの地区も持ち家が 9 割前後を占めているが、東部で給与住宅が 8.8%とやや高い。

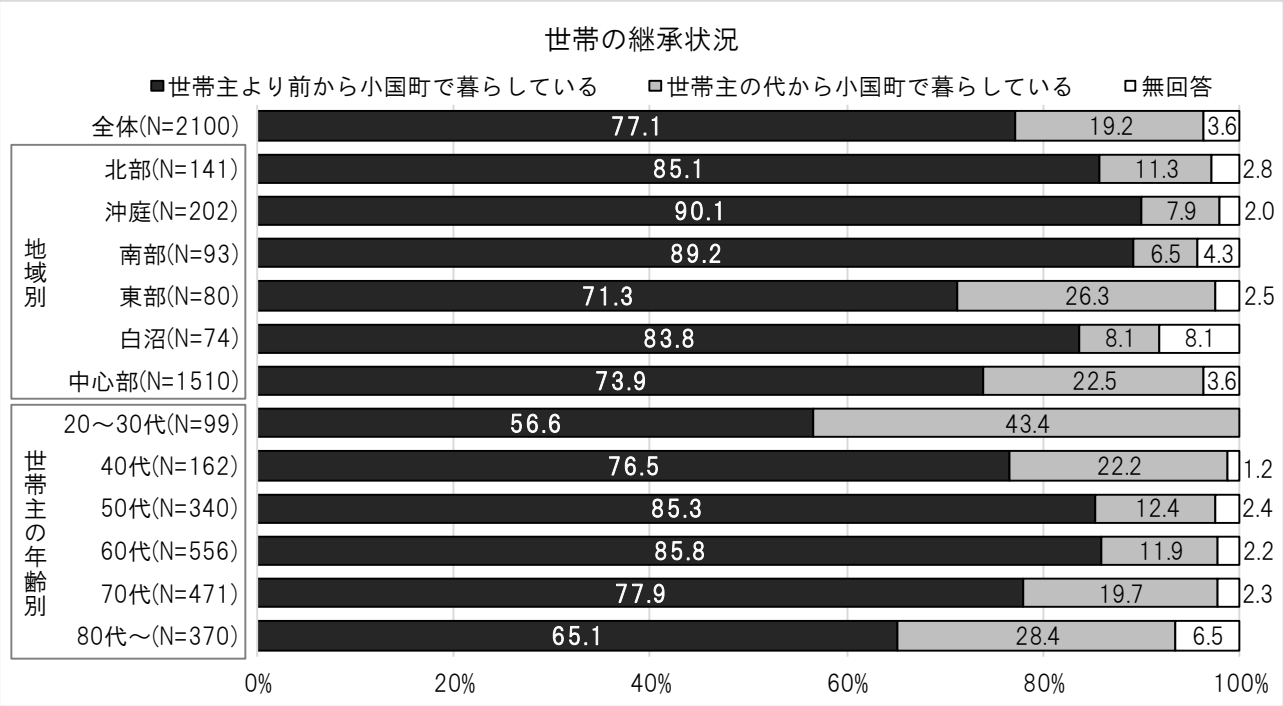



### ④世帯履歴

現在の世帯主の代より前から小国町で暮らしているという世帯は全回答世帯の 77.1%であり、約 2 割は現在の世帯主の代から小国町で暮らしている世帯である。

地区別に見ると、世帯主より前から小国町で暮らしているという世帯の割合は沖庭が約 9 割と最も高く、東部では現在の世帯主の代から小国町で暮らしているという割合が 26.3%と他地区と比較して最も高い。

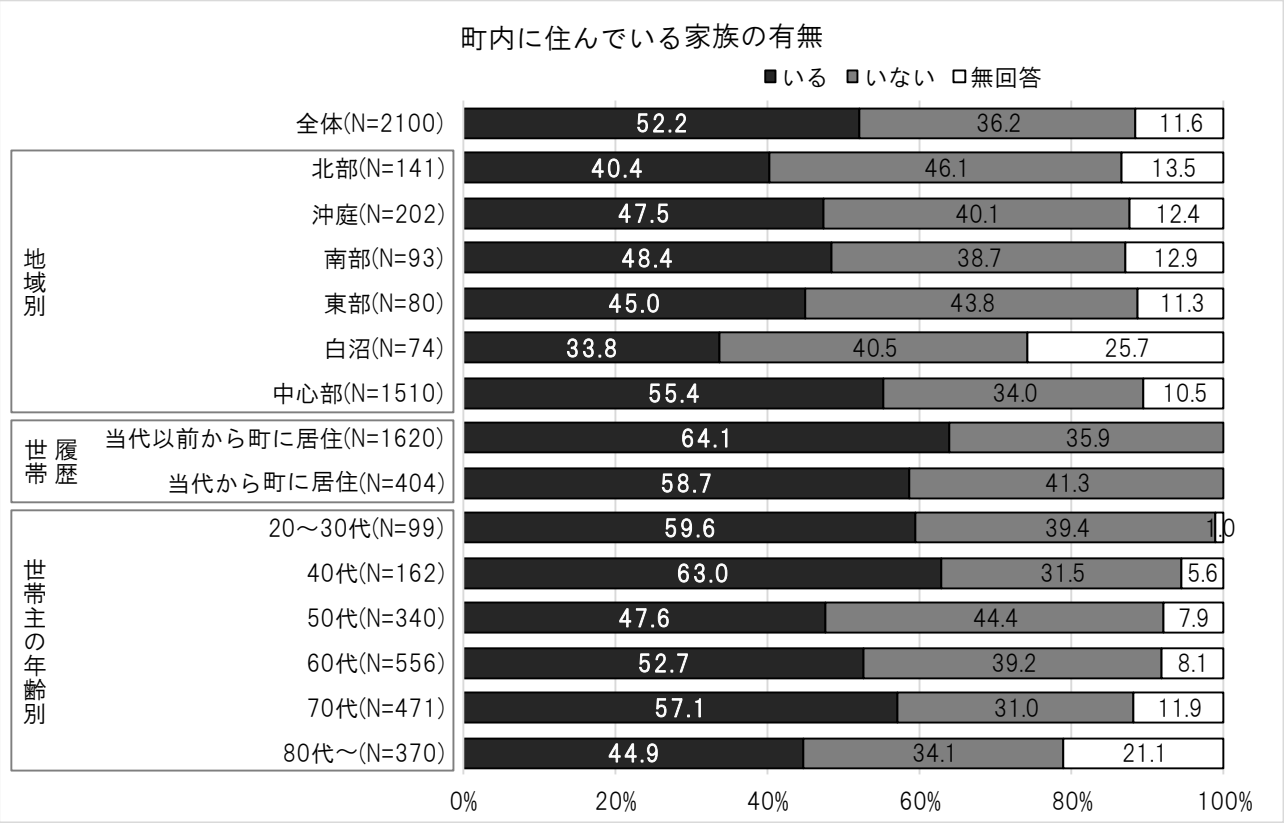
世帯主の年齢別に見ると、世帯主が 20～30 代の世帯では、現在の世帯主の代から小国町で暮らしている世帯が 43.4%と他地区に比較して最も高い。



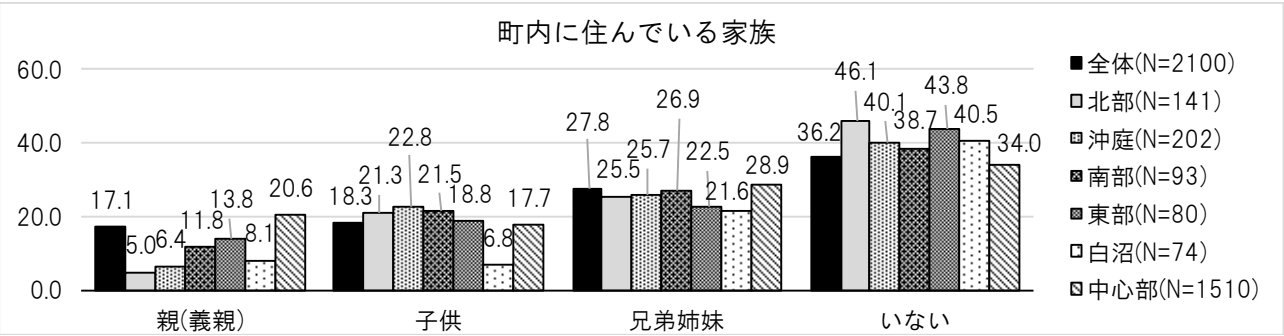
### ⑤町内で暮らす家族の有無及び訪問頻度

町内に家族が住んでいる世帯の割合は、全体では 52.2%であり、「町内に暮らしている家族はいない」という世帯（36.2%）を上回っているが、北部と白沼では逆に「いない」という世帯の割合の方が高い。

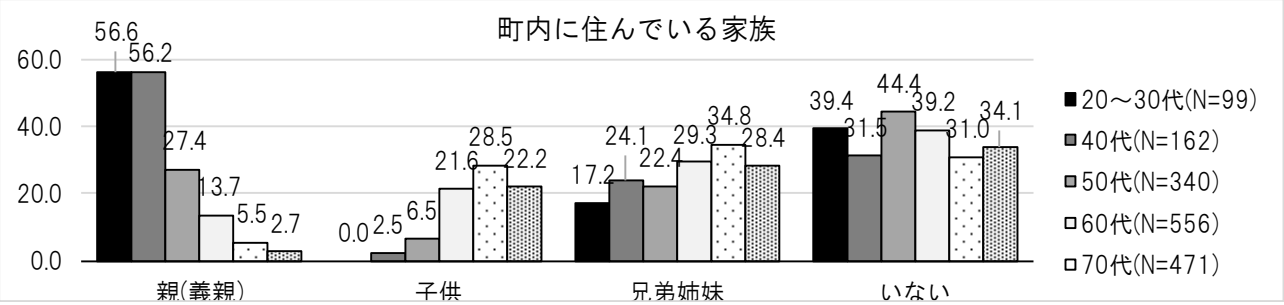
世帯履歴別に見ると、当代以前から町に居住していたという世帯の方が、町内に住んでいる家族が「いる」と回答している割合が若干高い。



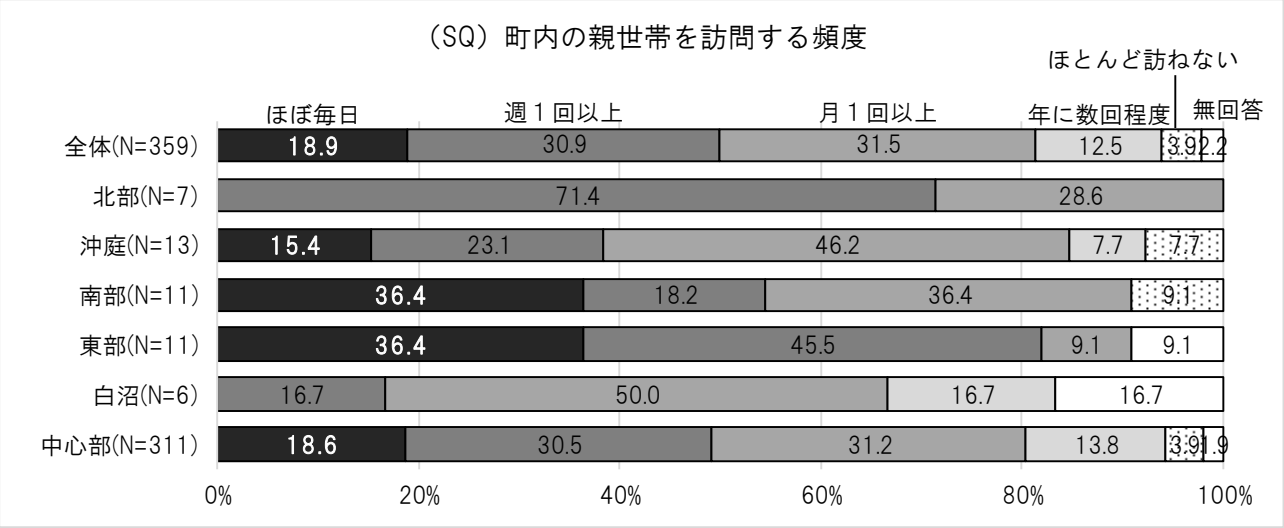

町内に住んでいる家族の詳細を見ると、全体では「兄弟姉妹」が 27.8%と最も多く、次いで「子供」が 18.3%、「親（義親）」が 17.1%となっている。地区別に見ると、町内に「親（義親）」が住んでいる世帯の割合は中心部で 20.6%と他地区に比較して最も高く、周辺部では「兄弟姉妹」や「子供」が住んでいる世帯の割合の方が高い。



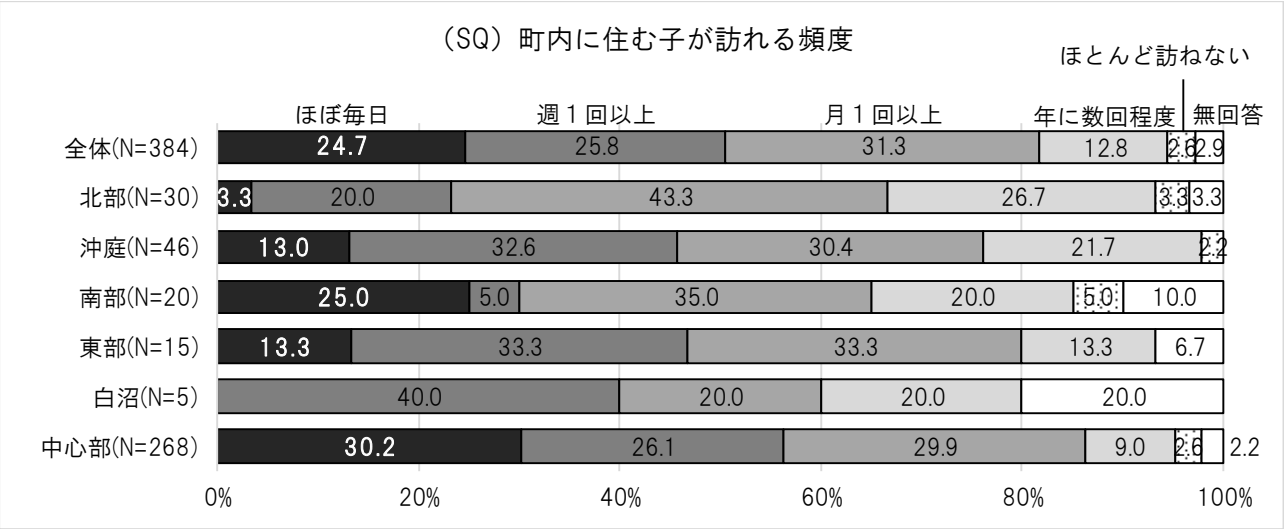

世帯主の年齢別に見ると、世帯主が 20～40 代の世帯では５割以上が町内に「親（義親）」が住んでいるとしている。




町内に親（義親）がいるという世帯について、当該世帯の人員が親（義親）世帯を訪問する頻度を見ると、全体では「月 1 回以上」が 31.5%と最も多く、「週 1 回以上」が 30.9%となっている。地区別に見ると、南部と東部では「ほぼ毎日」が 36.4%と比較的頻繁に訪れており、北部は「週 1 回以上」が 71.4%、白沼は「月 1 回以上」が 50.0%となっている。



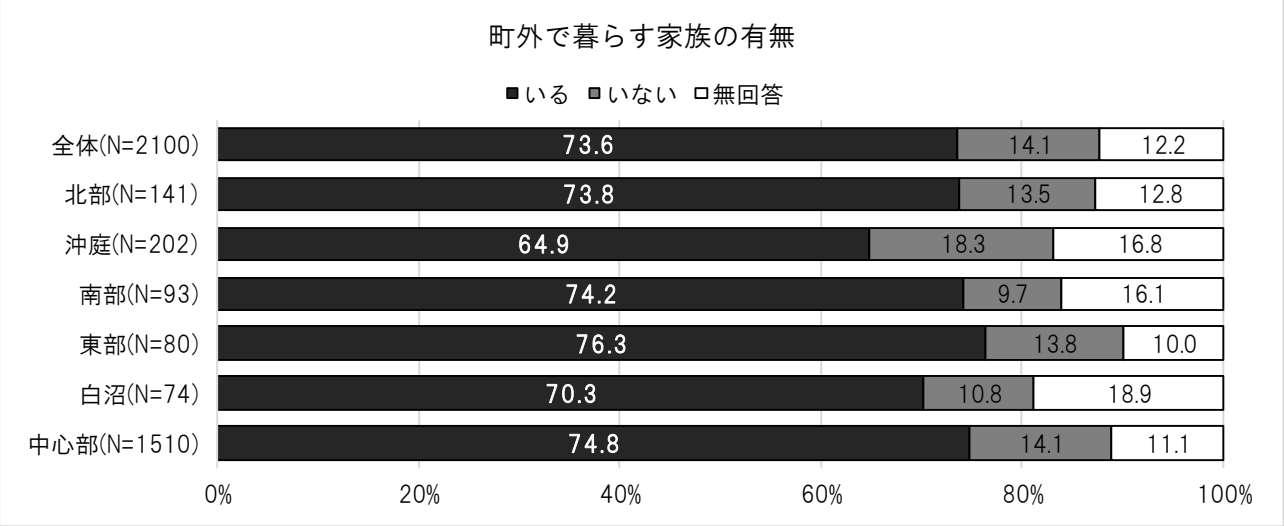

一方、町内に子供が住んでいるという世帯において、その子供が当該世帯を訪れる頻度を見ると、全体では「月 1 回以上」が 31.3%と最も多く、次いで「週 1 回以上」が 25.8%となっている。地区別に見ると、北部では「月 1 回以上」が 43.3%と最も多く、白沼では「週 1 回以上」が 40.0%と最も多い。

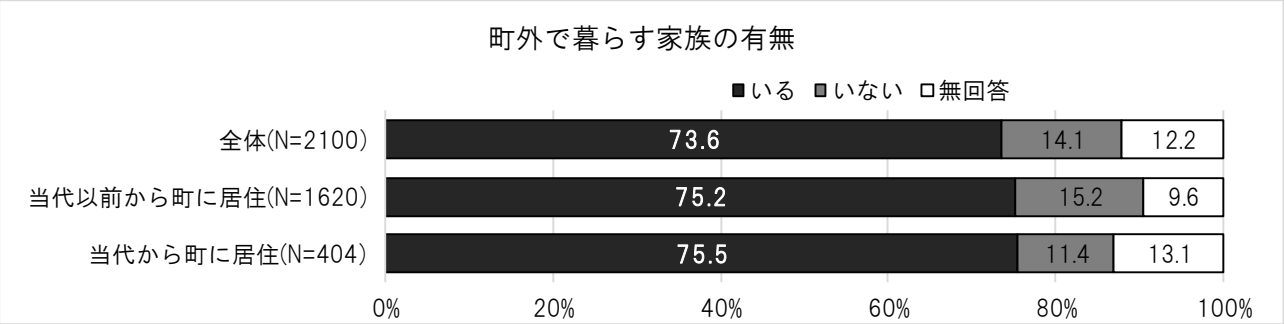


### ⑥町外で暮らす家族の有無及び来訪頻度

町外で暮らす家族がいるという世帯の割合は、全体で 73.6%を占め、地域別でもほとんどの地区で 7 割を超えているが、沖庭では 64.9%と低く、「いない」と回答した割合も 18.3%と、他地区と比較してやや高い。

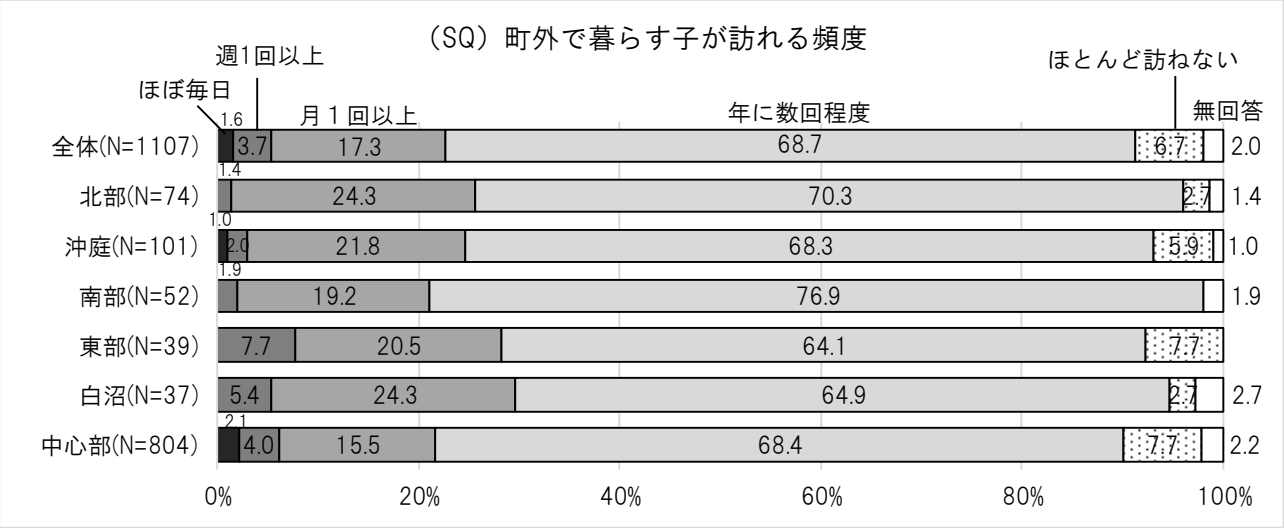
なお、世帯履歴別ではあまり差は見られない。




町外で暮らす子供が当該世帯を訪れる頻度を見ると、全体では「年に数回程度」が 68.7%と最も多く、月 1 回以上の頻度で町外から子供が訪れる世帯は 2 割程度である。

地区別に見ると、周辺部では東部と白沼で週 1 回以上の頻度で町外から子供が訪れる世帯の割合がやや高く、「年に数回程度」は南部が 76.9%と最も高い。



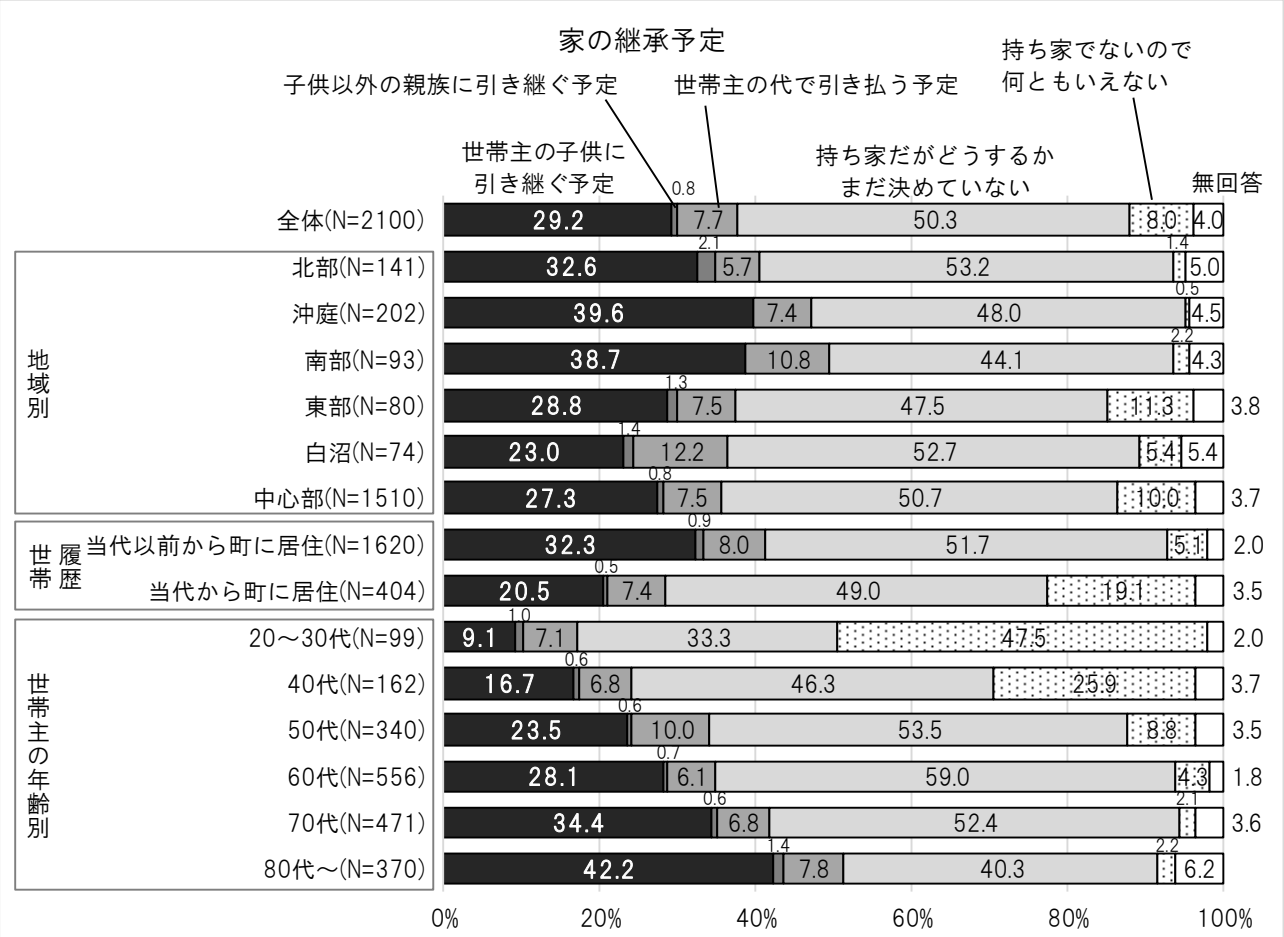
### ⑦今住んでいる家の継承予定

現在住んでいる家の継承予定では、全体では「持ち家だがどうするかはまだ決めていない」という世帯が 50.3%と約半数を占めており、次いで「世帯主の子供に引き継ぐ予定」が 29.2%となっている。

地区別に見ると、沖庭と南部では「世帯主の子供に引き継ぐ予定」がそれぞれ 39.6%、38.7%と約 4 割を占めているが、白沼では同割合は 23.0%と低くなっている。また、給与住宅の割合が高い東部は、「持ち家でないので何ともいえない」とする割合が 11.3%と高い。

世帯履歴別に見ると、当代から町に居住しているという世帯の方が「世帯主の子供に引き継ぐ予定」の割合が低く、「持ち家でないので何ともいえない」とする割合が高くなっている。

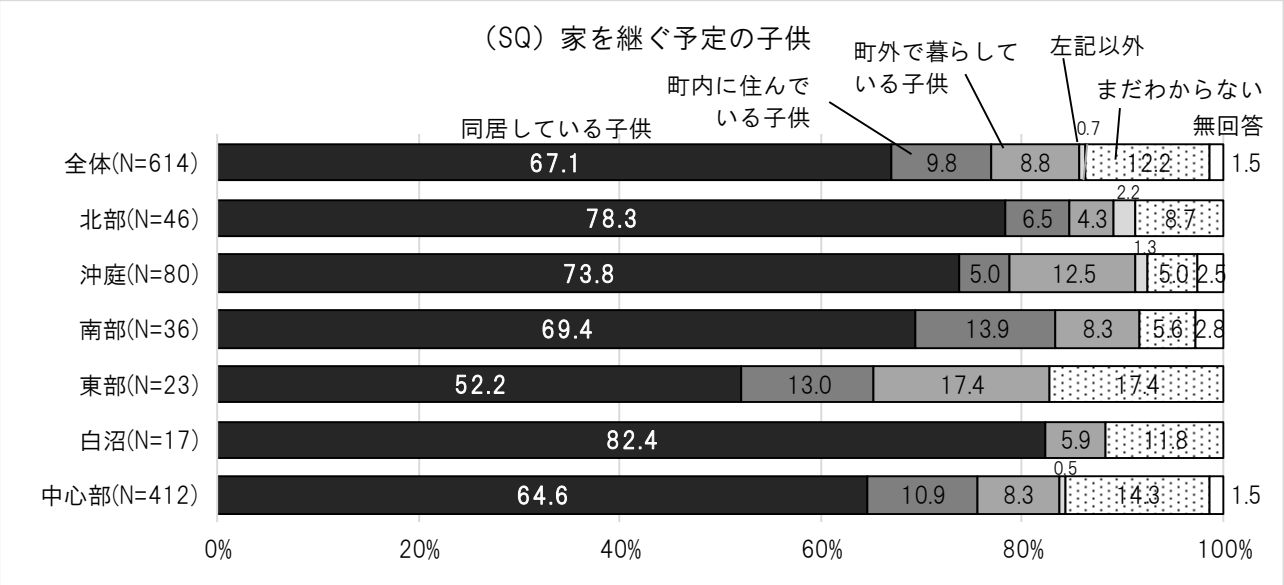
世帯主の年齢別に見ると、世帯主の年齢が上がるにつれて「世帯主の子供に引き継ぐ予定」の割合が高くなる傾向が見られる。

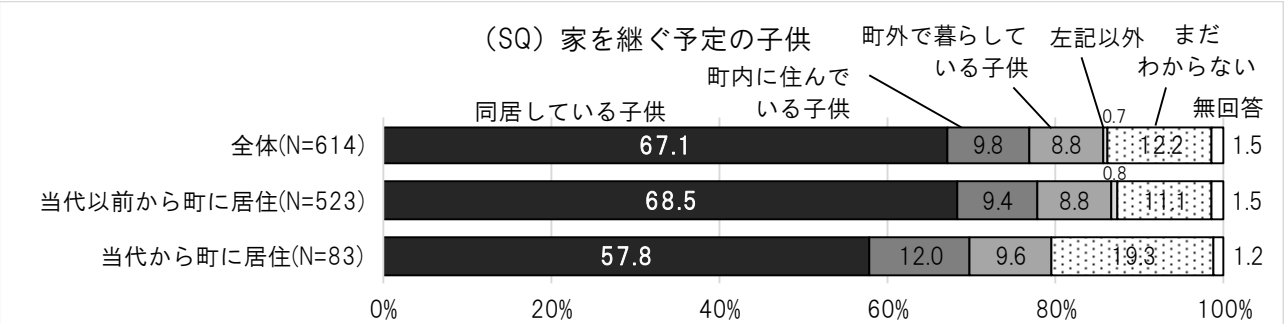


現在住んでいる家を「世帯主の子供に引き継ぐ」と回答した世帯において、その引き継ぐ予定の子供の属性を具体的に見ると、全体では「同居している子供」が 67.1%と最も多いが、「まだわからない」も 12.2%となっている。

引き継ぐ予定の子供は地区によって差が見られ、白沼では「同居している子供」が 82.4%と最も高くなっている一方、東部ではその割合は 52.2%と最も低く、「町外で暮らしている子供」もしくは「まだわからない」がともに 17.4%と比較的高くなっている。

また、世帯履歴別に見ると、当代から町に居住している世帯の方が、「同居している子供」に家を継がせるという割合が低く、「まだわからない」という割合が高い。

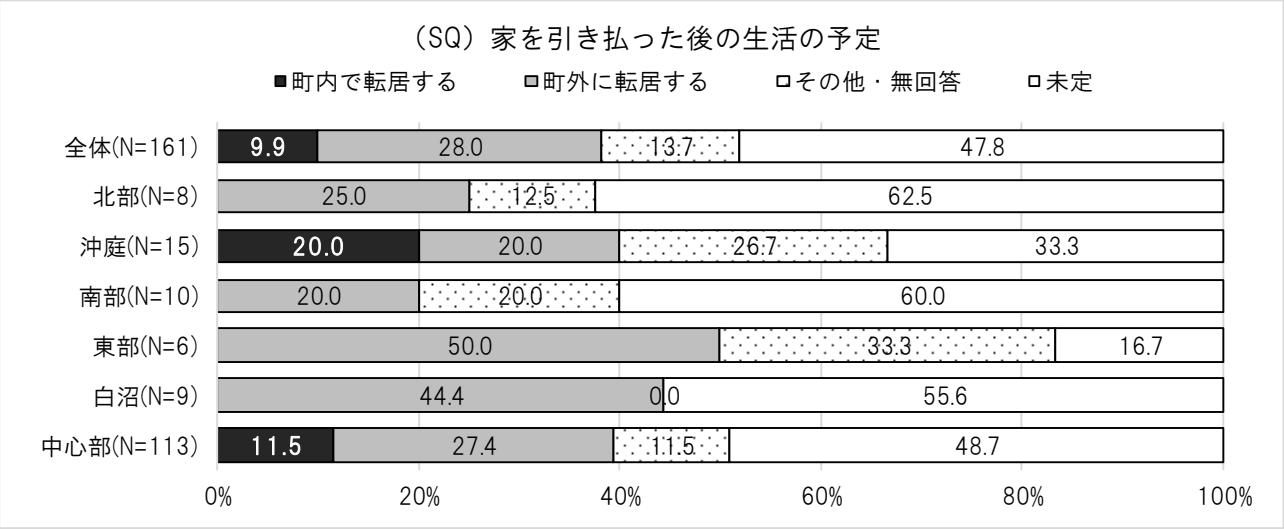


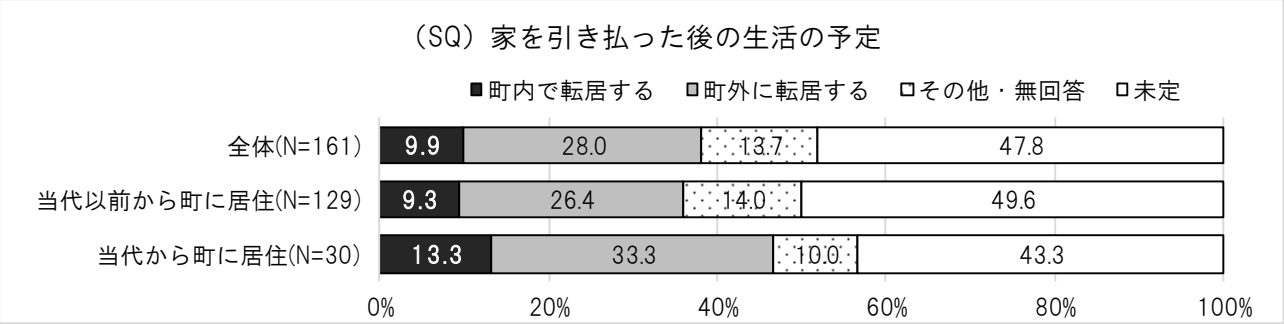



現在住んでいる家を「世帯主の代で引き払う予定」と回答した世帯において、家を引き払った後の生活の予定を聞いたところ、全体では「未定」が 47.8%と最も多くなっているが、「町外に転居する」が 28.0%で、町内で居住するという世帯（9.9%）よりも多くなっている。

地区別に見ると、「世帯主の代で引き払う予定」と回答した世帯の大部分は中心部のため、周辺部は母数が小さくなっているが、東部や白沼では「町外に転居する」割合がやや高い。

世帯履歴別に見ると、当代から町に居住しているという世帯の方が「未定」の割合が低くなっており、具体的な転居イメージを持っている割合が比較的高い。



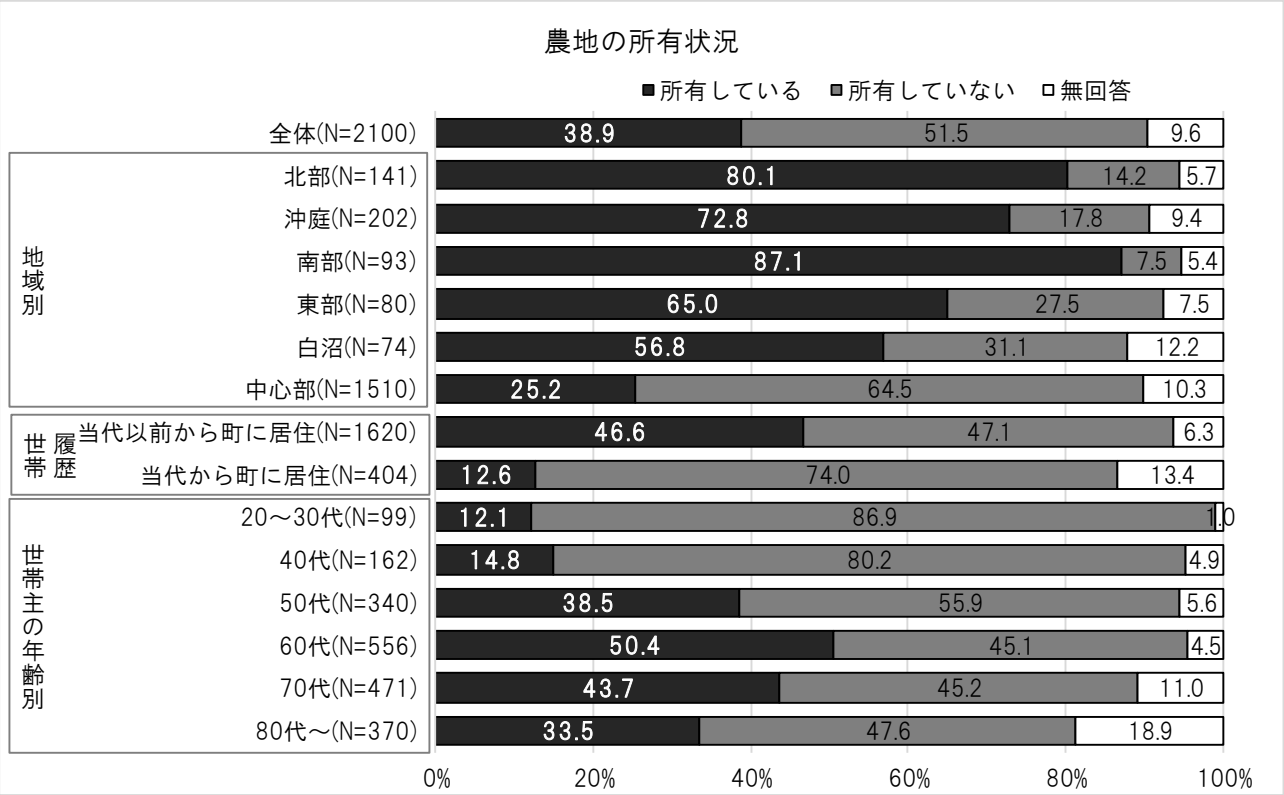
### イ　農地や山林の所有・管理状況

#### ①農地の所有・管理状況

農地の所有状況を見ると、全体では「所有している」世帯は 38.9%で、「所有していない」が 51.5%と半数超を占めている。地区別に見ると、中心部の世帯では「所有している」割合は 25.2%と低いが、周辺部では 5 割超が農地を所有しており、特に南部や北部では 8 割以上の世帯が農地を所有している。

世帯履歴別に見ると、当代から町に居住しているという世帯の 74.0%は農地を「所有していない」としている。

また、世帯主の年齢別で見ると、世帯主が 20～40 代までの世帯は、農地の所有割合は 2 割未満と低い。




回答のあった農地の所有面積の合計は、田が 50,532a、畑が 14,196a であるが、地区別に見ると田は中心部と北部がともに 1 万 a 以上であり、畑は沖庭が約 4.9 千 a、中心部が約 3 千 a となっている。

1 世帯当たりの農地の平均面積は全体で 79a であり、田は 110a、畑は 31a となっている。地区別に見ると、農地全体の平均面積は北部が 139a、南部が 107a と大きく、白沼は 34a と小さい。また、田と畑それぞれを見ると、田では北部が 170a と最も大きく、次いで南部が 110a の順となっており、畑では沖庭が 55a と最も大きく、次いで南部 43a の順となっている。

**図表２－３ 農地の所有面積（地区別・世帯継承状態別）**

| 農地の所有面積 | | 全体 | 地区別 | | | | | | 世帯継承状態 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 北部 | 沖庭 | 南部 | 東部 | 白沼 | 中心部 | 当代以前から | 当代から |
| 農地を所有している※世帯数 | 田 | 460 | 75 | 98 | 60 | 39 | 21 | 167 | 436 | 19 |
| | 畑 | 454 | 75 | 89 | 49 | 40 | 25 | 176 | 425 | 23 |
| | 全体 | 816 | 113 | 147 | 81 | 52 | 42 | 381 | 755 | 51 |
| 回答面積の合計(単位:a) | 田 | 50,532 | 12,716 | 8,940 | 6,584 | 3,688 | 912 | 17,692 | 49,236 | 1,276 |
| | 畑 | 14,196 | 2,962 | 4,903 | 2,098 | 686 | 516 | 3,031 | 13,979 | 193 |
| | 全体 | 64,728 | 15,678 | 13,844 | 8,682 | 4,373 | 1,428 | 20,723 | 63,215 | 1,469 |
| 世帯あたり平均面積(単位:a) | 田 | 110 | 170 | 91 | 110 | 95 | 43 | 106 | 113 | 67 |
| | 畑 | 31 | 39 | 55 | 43 | 17 | 21 | 17 | 33 | 8 |
| | 全体 | 79 | 139 | 94 | 107 | 84 | 34 | 54 | 84 | 29 |

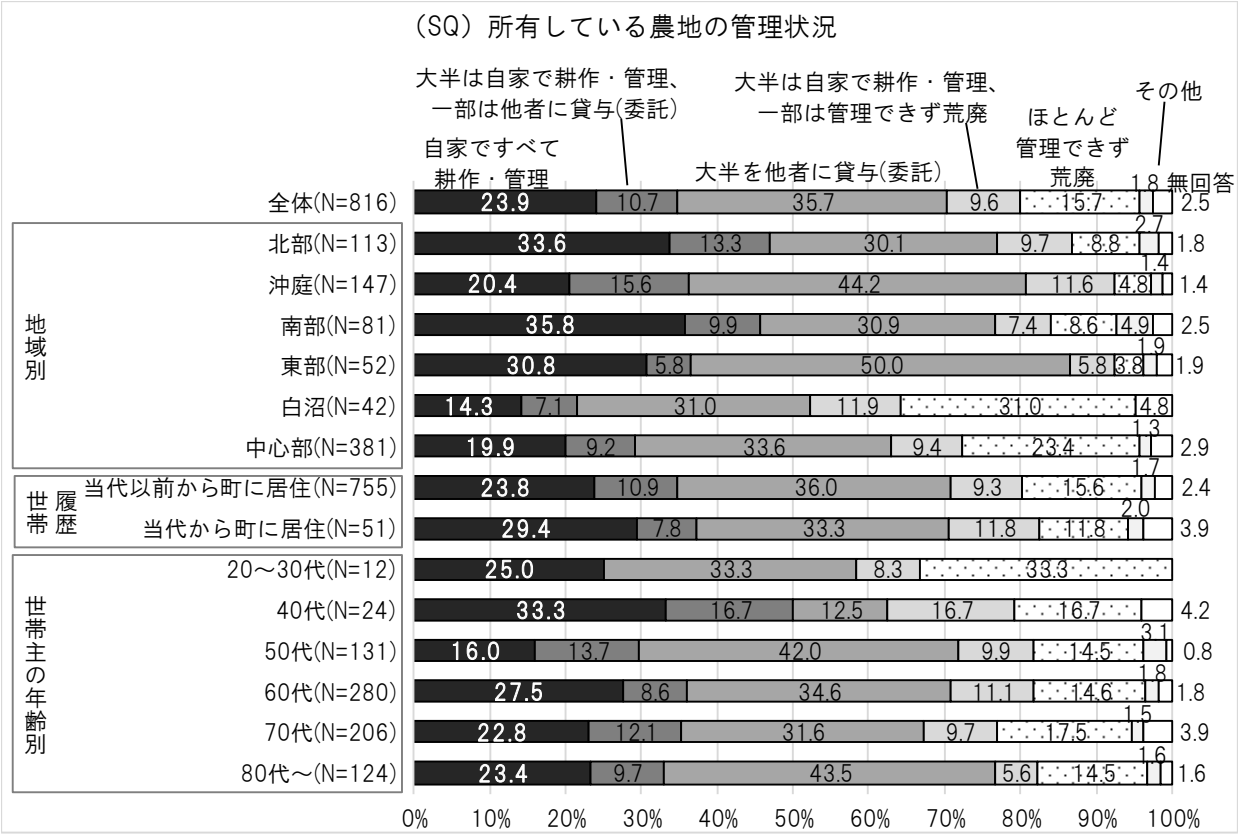
※農地を所有している世帯数の全体は、前問で「農地を所有している」と回答した世帯数であるが、田及び畑それぞれの所有世帯数は、それぞれの具体的な面積を回答した世帯数である。

所有している農地の管理状況を見ると、全体では「大半を他者（個人又は法人）に貸与（委託）している」が 35.7%と最も大きく、次いで「自家ですべて耕作・管理している」が 23.9%の順となっている。

地区別に見ると、東部と沖庭では「大半を他者に貸与(委託)」がそれぞれ 50.0%、44.2%と、半数又は半数近くが他者に貸与している。

世帯履歴別に見ると、当代から町に居住しているという世帯の方が「自家ですべて耕作・管理」している割合が若干高く、「ほとんど管理できず荒廃」している割合が小さくなっている。

世帯主の年齢別で見ると、「大半を他者に貸与(委託)」の割合は世帯主が 50 代及び 80 代以上の世帯で比較的高くなっている。また、世帯主が 20～30 代の世帯は農地を所有している世帯自体が少ないが、「ほとんど管理できず荒廃」が 3 分の 1 を占めている。



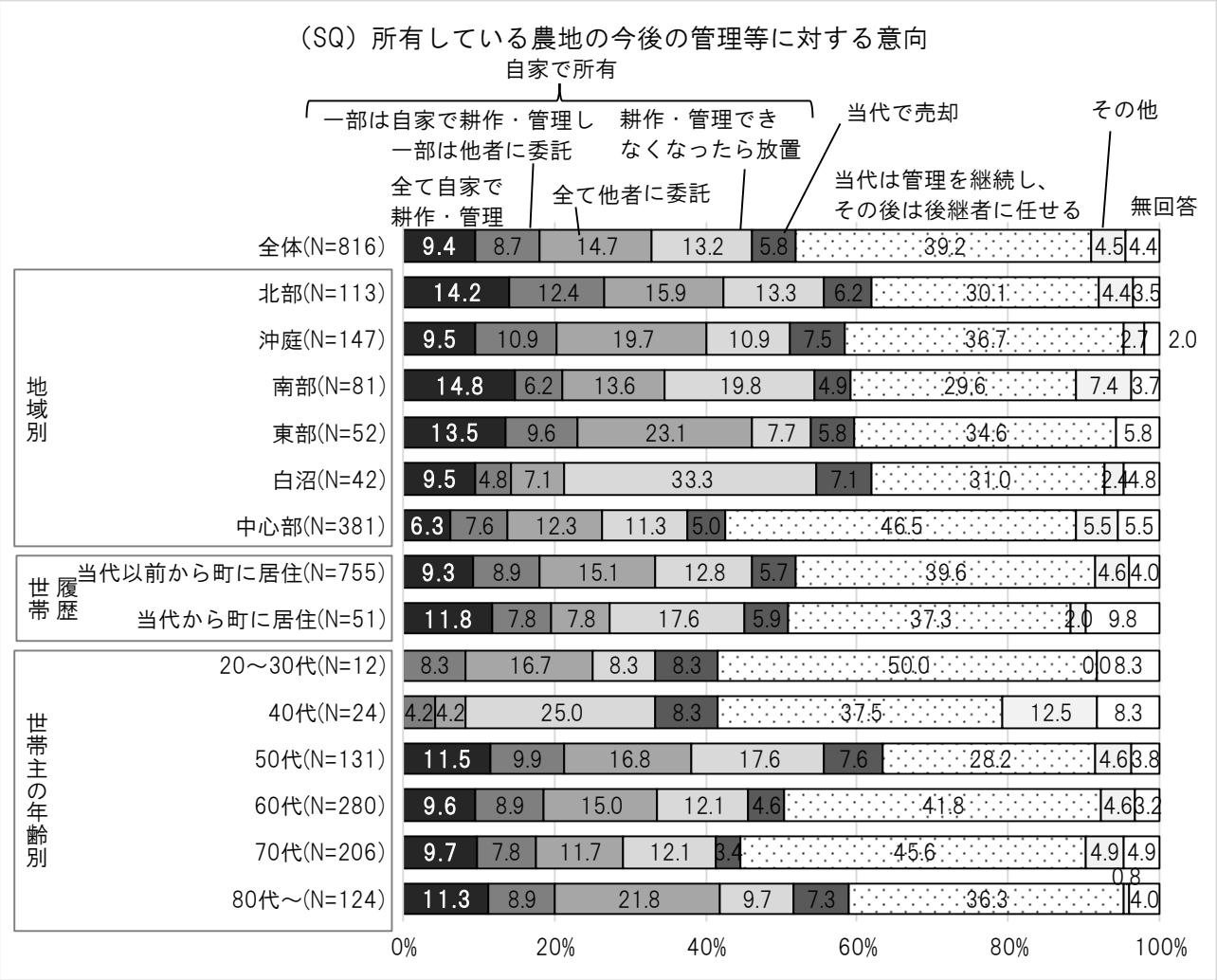

**②所有している農地の今後の管理等に対する意向**

所有している農地の今後の管理等に対する考えを見ると、全体では「当代（世帯主の代）では今のままの管理状態を継続するつもりだが、その後どうするかは後継者に任せる」とする世帯が 39.2%と最も多く、次いで「自家（後継者を含む）で所有するが、農作業はすべて他者に委託したい」が 14.7%の順である。

地区別では、「自家（後継者を含む）で所有するが、耕作・管理できなくなったらそのまま放置する」とする割合は、白沼（33.1%で第 1 位）及び南部（19.8%で第 2 位）で高い。

世帯履歴別に見ると、当代から町に居住しているという世帯の方が「自家（後継者を含む）で所有するが、耕作・管理できなくなったらそのまま放置する」という世帯の割合が若干高い。

世帯主の年齢別に見ると、今後も自家（後継者を含む）で所有し、自家又は他者に委託して管理したいという意向が最も高いのは世帯主が 80 代以上の世帯であり、世帯主が 40 代の世帯では、「自家（後継者を含む）で所有するが、耕作・管理できなくなったらそのまま放置する」が 25%と他世代と比較して最も高く、世帯主が 20～30 代の世帯では「当代（世帯主の代）では今のままの管理状態を継続するつもりだが、その後どうするかは後継者に任せる」が 50%と他世代に比較して最も高くなっている。


（SQ）所有している農地の今後の管理等に対する意向
自家で所有
全て自家で耕作・管理
一部は自家で耕作・管理し一部は他者に委託
全て他者に委託
耕作・管理できなくなったら放置
当代で売却
当代は管理を継続し、その後は後継者に任せる
その他
無回答
地域別
世帯履歴
世帯主の年齢別
全体(N=816) 9.4 8.7 14.7 13.2 5.8 39.2 4.5 4.4
北部(N=113) 14.2 12.4 15.9 13.3 6.2 30.1 4.4 3.5
沖庭(N=147) 9.5 10.9 19.7 10.9 7.5 36.7 2.7 2.0
南部(N=81) 14.8 6.2 13.6 19.8 4.9 29.6 7.4 3.7
東部(N=52) 13.5 9.6 23.1 7.7 5.8 34.6 5.8
白沼(N=42) 9.5 4.8 7.1 33.3 7.1 31.0 2.4 4.8
中心部(N=381) 6.3 7.6 12.3 11.3 5.0 46.5 5.5 5.5
当代以前から町に居住(N=755) 9.3 8.9 15.1 12.8 5.7 39.6 4.6 4.0
当代から町に居住(N=51) 11.8 7.8 7.8 17.6 5.9 37.3 2.0 9.8
20～30代(N=12) 8.3 16.7 8.3 8.3 50.0 0 0 8.3
40代(N=24) 4.2 4.2 25.0 8.3 37.5 12.5 8.3
50代(N=131) 11.5 9.9 16.8 17.6 7.6 28.2 4.6 3.8
60代(N=280) 9.6 8.9 15.0 12.1 4.6 41.8 4.6 3.2
70代(N=206) 9.7 7.8 11.7 12.1 3.4 45.6 4.9 4.9
80代～(N=124) 11.3 8.9 21.8 9.7 7.3 36.3 0.8 4.0
0%
20%
40%
60%
80%
100%

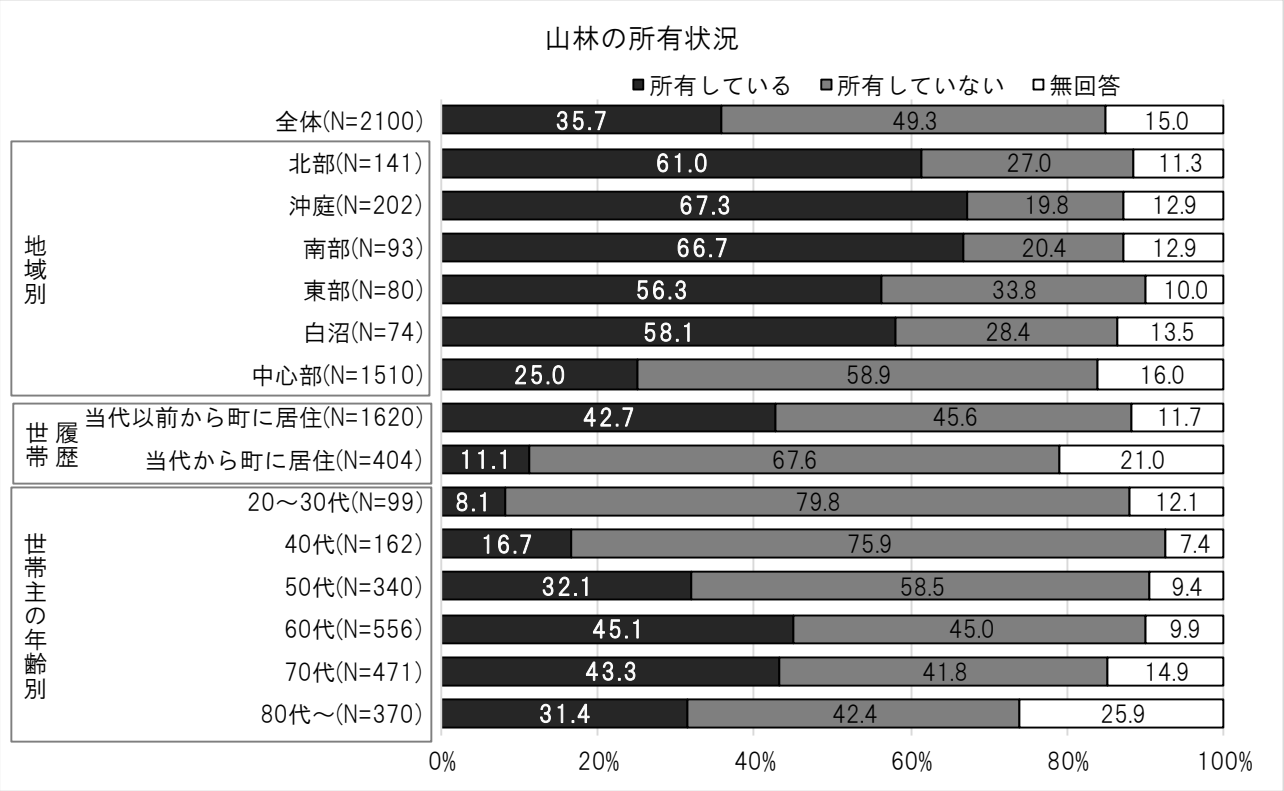
### ③山林の所有・管理状況

山林の所有状況を見ると、全体では「所有していない」とする世帯が 49.3%と半数近く、「所有している」世帯は 35.7%となっている。

地区別に見ると、周辺部ではいずれも 5 割以上の世帯が「所有している」としており、特に沖庭や南部では地区全体の 3 分の 2（沖庭 67.3%、南部 66.7%）の世帯が「所有している」と回答している。

世帯履歴別に見ると、当代から町に居住しているという世帯では、山林を「所有していない」割合が 7 割近くに上っており、山林を所有している世帯の割合は 11.1%に過ぎない。

世帯主の年齢別に見ると、農地同様、世帯主が若い世帯は山林の所有割合が低い。




回答のあった所有山林面積の合計は、全体で 976ha であり、1 世帯当たりの平均面積は 259a である。

地区別に見ると、北部は 1 世帯当たり 152a と他地区より小さいが、北部以外は 1 世帯当たり概ね 250 a ～280a 程度となっている。

| 山林の所有面積 | 全体 | 地域別 | | | | | | 世帯継承状態 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 北部 | 沖庭 | 南部 | 東部 | 白沼 | 中心部 | 当代以前から | 当代から |
| 山林所有世帯数※ | 376 | 50 | 68 | 38 | 30 | 25 | 165 | 348 | 22 |
| 合計面積(単位:ha) | 976 | 76 | 178 | 104 | 86 | 62 | 470 | 927 | 40 |
| 世帯あたり平均面積(単位:a) | 259 | 152 | 261 | 274 | 285 | 247 | 285 | 266 | 184 |

※山林所有世帯数は、前問で「山林を所有している」と回答した世帯のうち具体的な所有面積を回答した世帯数である。

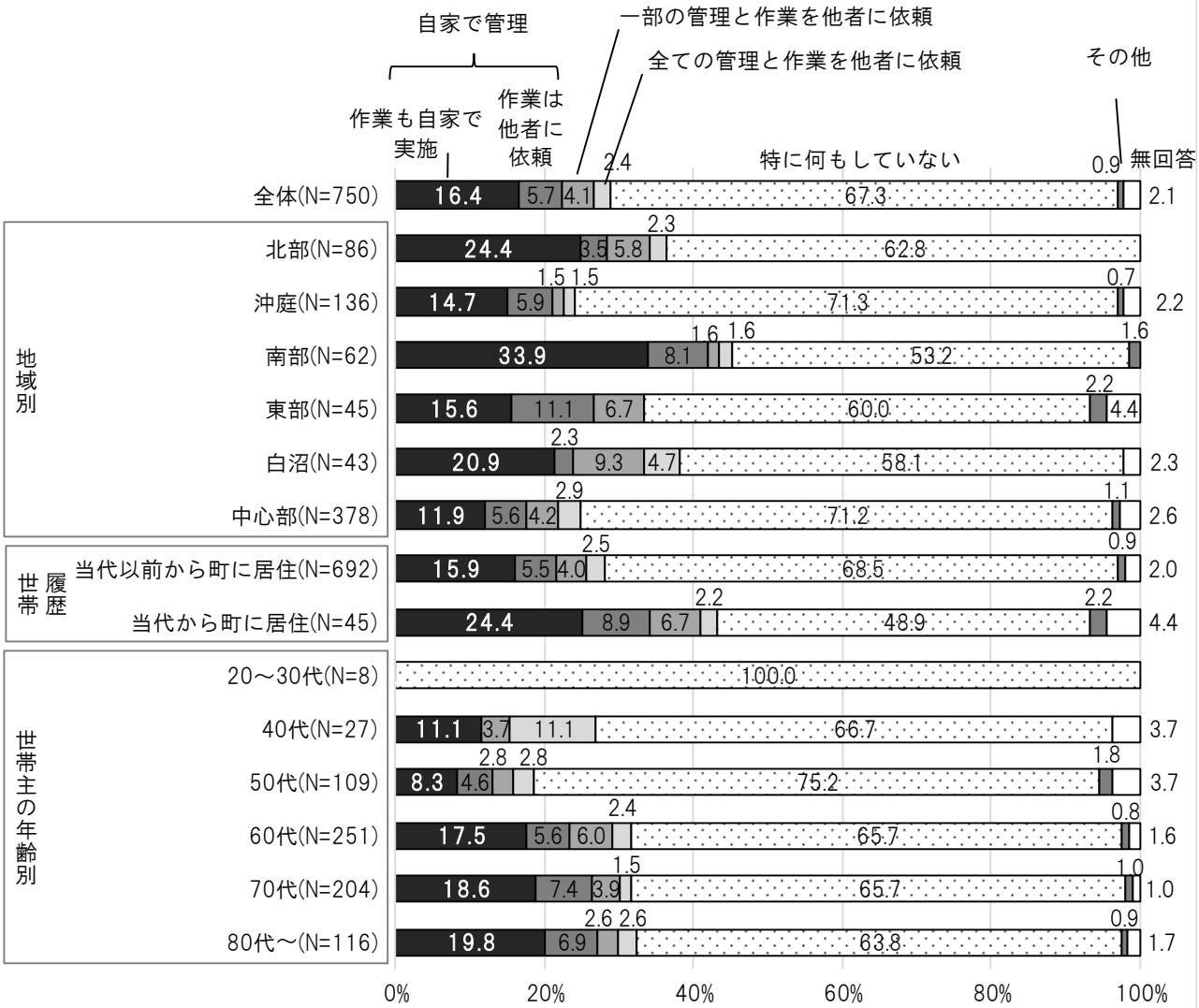
所有している山林の管理状況を見ると、全体では「特に何もしていない」とする割合が67.3%と最も高く、自家で管理している割合は2割強である。

地区別に見ると、南部では「全て自家で所有し、山林作業も自家で行っている」が33.9%、「全て自家で管理しているが、山林作業は他者（森林組合等）に依頼している」が8.1%と、4割強の世帯が自家で管理していると回答しており、他地区よりも自家で管理している世帯の割合が高い。

世帯履歴別に見ると、当代から町に居住しているという世帯では、「特に何もしていない」が5割弱（48.9%）であり、「全て自家で所有し、山林作業も自家で行っている」が24.4%と高い割合になっている。

世帯主の年齢別に見ると、世帯主が60代以上の世帯では、2割弱が「全て自家で所有し、山林作業も自家で行っている」としている。

（SQ）所有している山林の管理状況



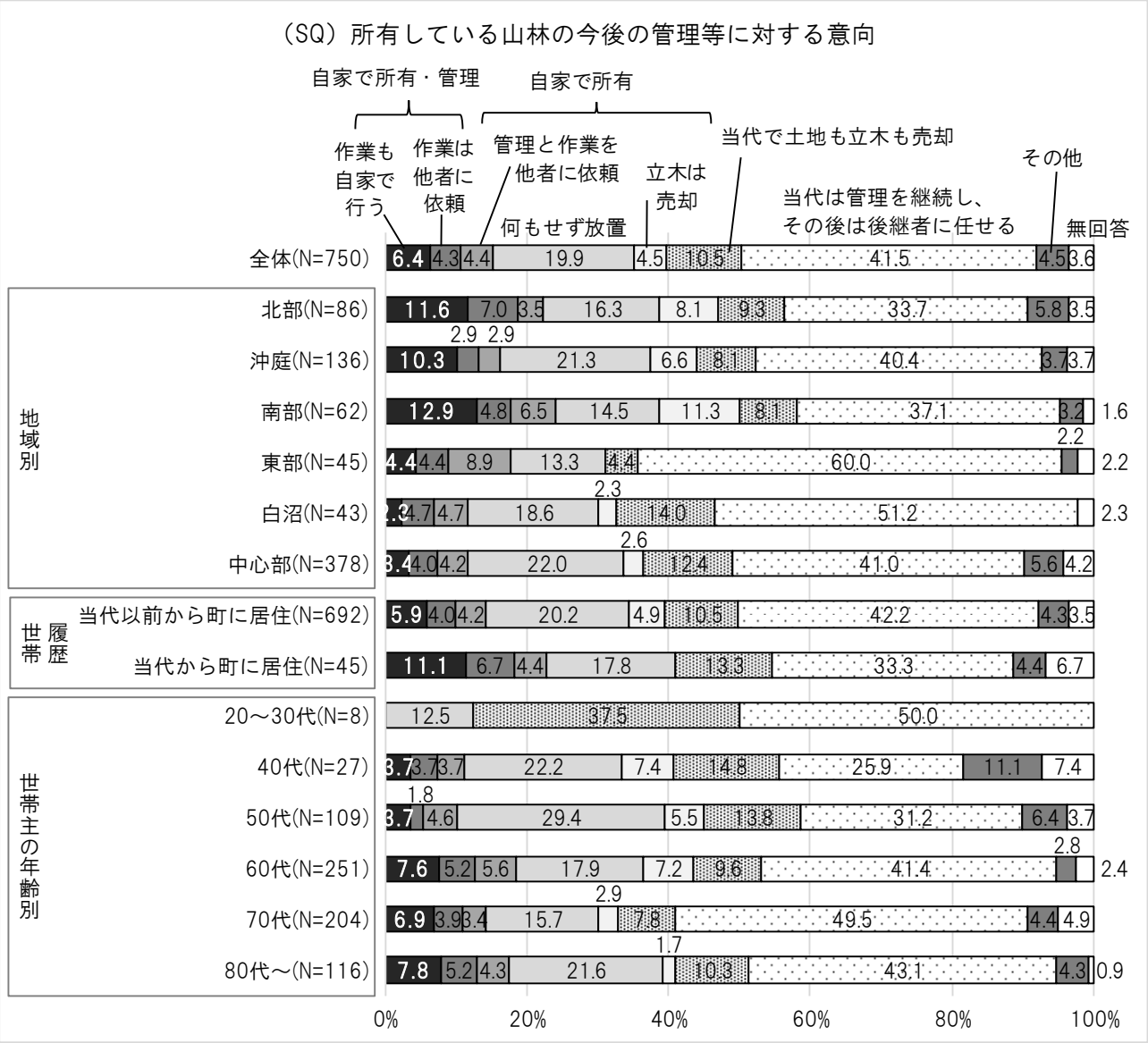
### ④所有している山林の今後の管理等に対する意向

所有している山林の今後の管理等に対する意向を見ると、全体では「当代（世帯主の代）では今のままの管理状態を継続するつもりだが、その後どうするかは後継者に任せる」とする世帯が 41.5%と最も多くなっている。

地区別に見ると、「当代は管理を継続し、その後は後継者に任せる」割合は、東部で 60.0%、白沼で 51.2%と、他地区よりも高い割合となっている。

世帯履歴別に見ると、当代から町に居住しているという世帯の方が自家で所有・管理するつもりという割合がやや高く、「当代は管理を継続し、その後は後継者に任せる」とする割合は 3 分の 1 となっている。

世帯主の年齢別に見ると、世帯主が 60 代以上の世帯では、今後も自家（後継者を含む）で所有・管理し、山林作業は自家又は他者に委託して行いたいという意向が高い。

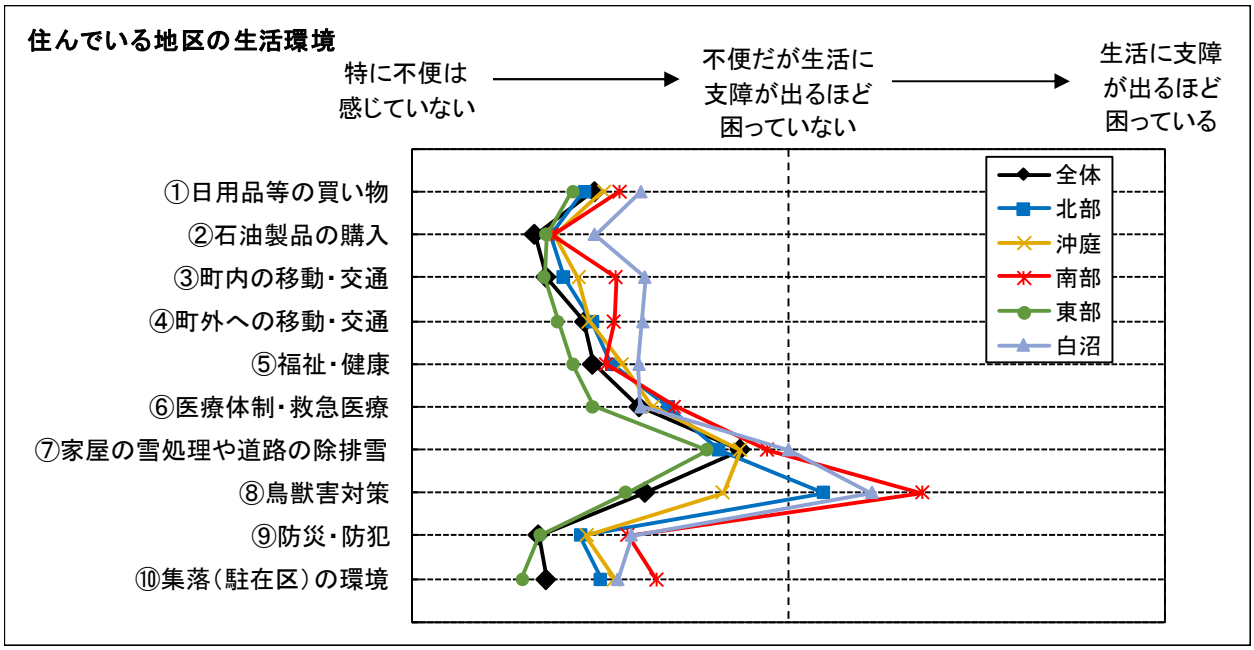


### ウ　生活環境の状況

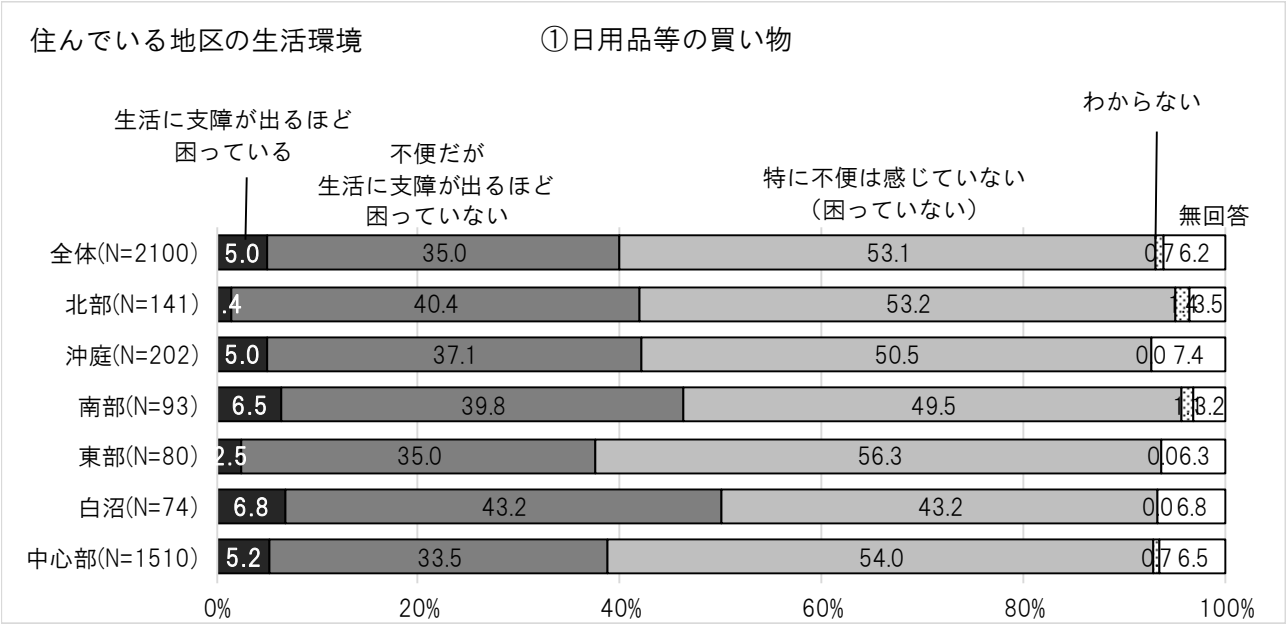
#### ①住んでいる集落（地区）の現在の生活環境に対する評価

住んでいる集落（地区）の現在の生活環境に対する評価を見ると、全体では「雪対策（家屋の雪処理や道路の除排雪）」に対する評価が最も低いが、評点化して見ると「不便だが生活に支障が出るほど困っていない」程度の評価である。これに次いで「鳥獣害対策」や「医療体制・救急医療」の順でやや評価が低くなっている。

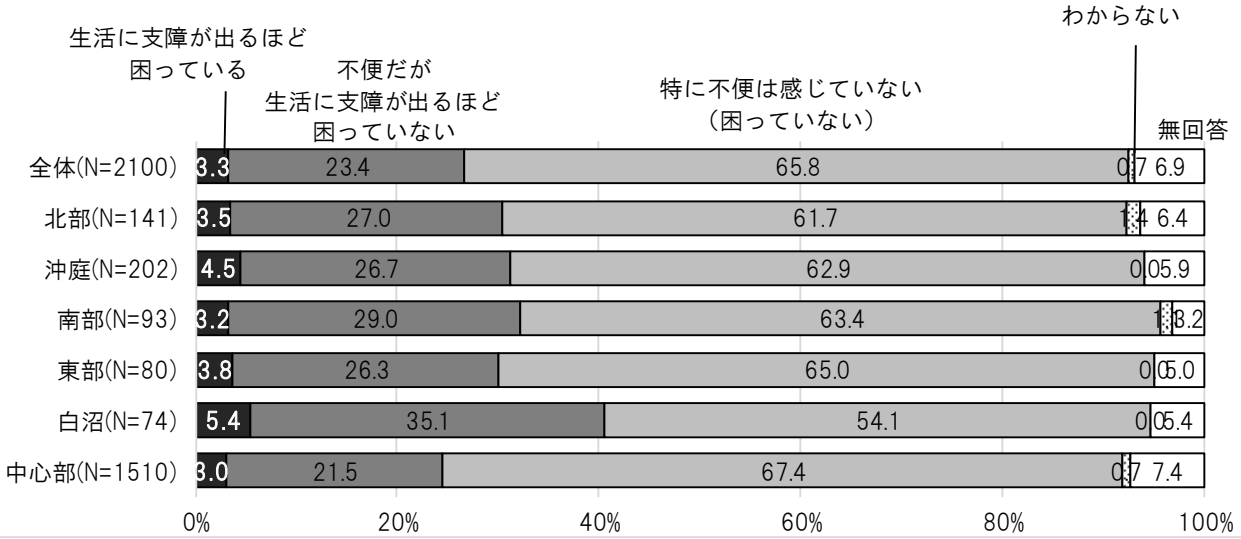
地区別に見ると、「雪対策（家屋の雪処理や道路の除排雪）」に対する評価は地域間の差は大きくないが、「鳥獣害対策」に対する評価は地区ごとに差が大きく、特に南部、白沼、北部では全体平均と比べ「生活に支障が出るほど困っている」状態に近い評価となっている。



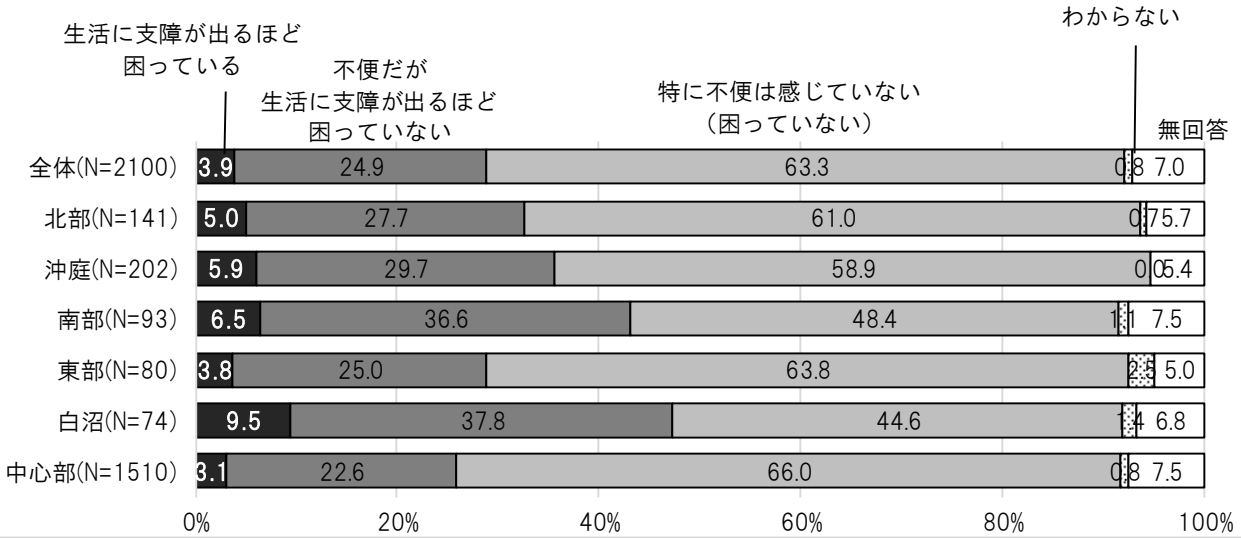

※　各項目に対する回答について、「生活に支障が出るほど困っている」を＋３、「不便だが生活に支障が出るほど困っていない」を＋２、「特に不便は感じていない」を＋１として回答を評点化し、各評点の合計を「わからない」及び無回答を除く回答者数で割って平均値を算出したもの。なお、中心部は全体とほぼ同傾向のため、グラフに表示していない。



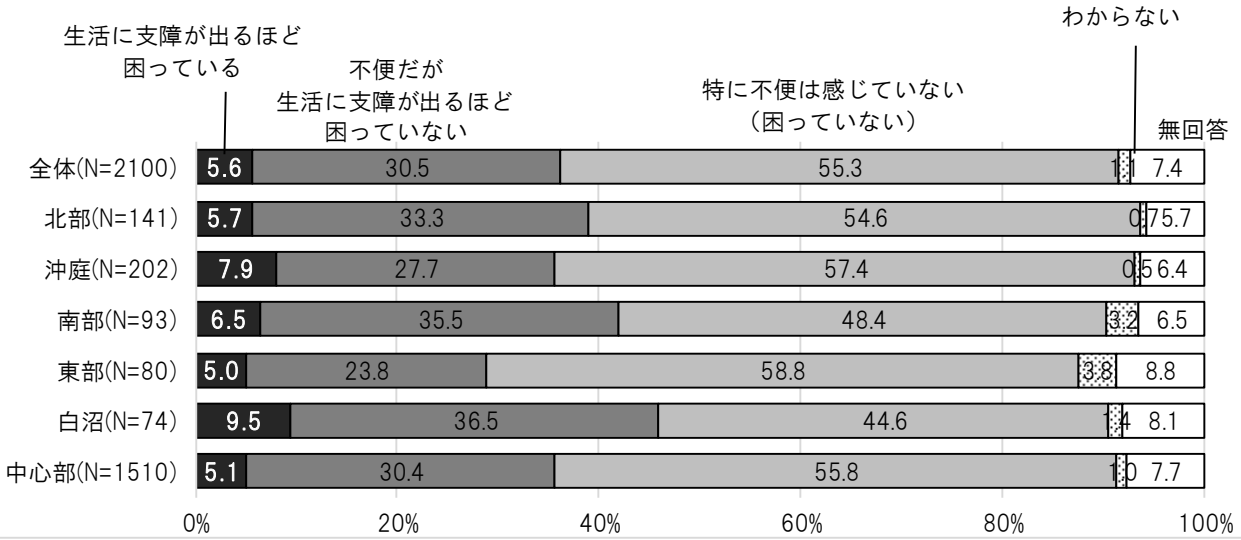
住んでいる地区の生活環境　　②石油製品の購入



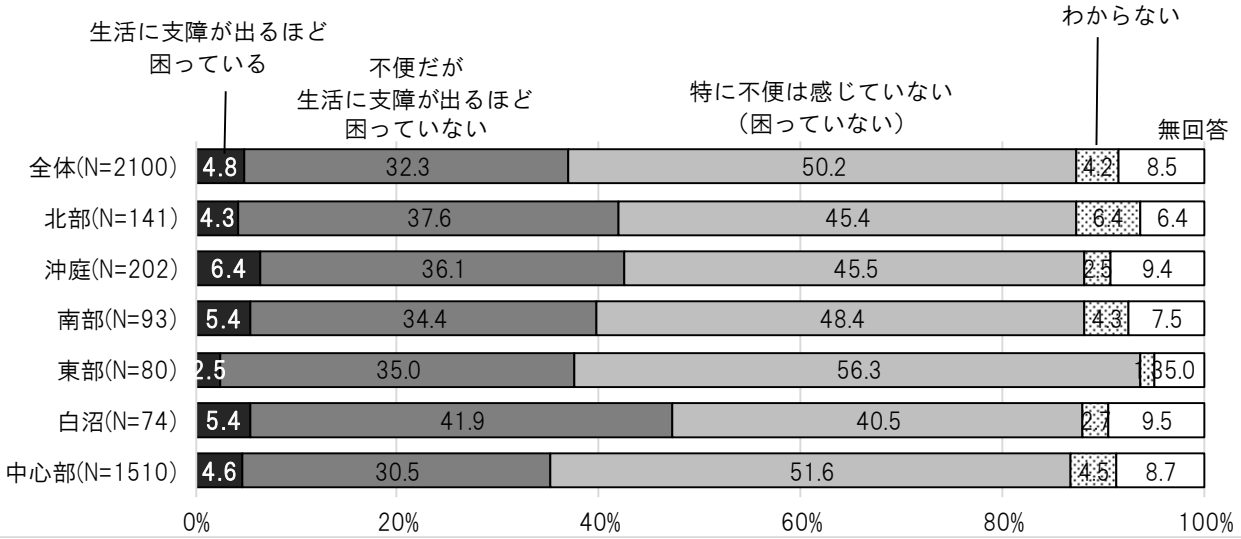

住んでいる地区の生活環境　　③町内の移動・交通



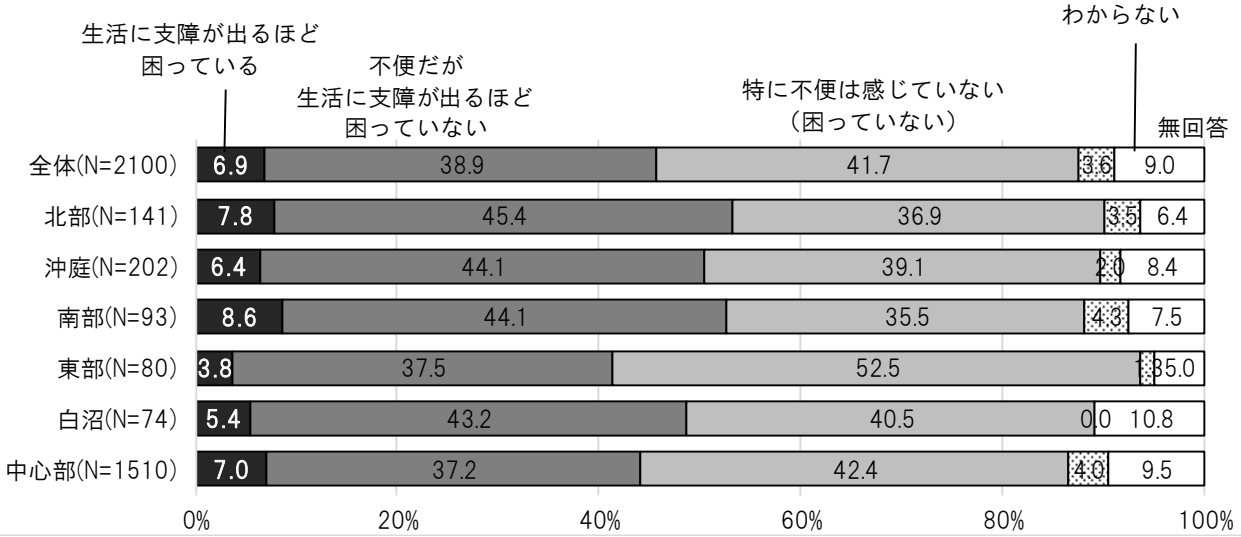

住んでいる地区の生活環境　　④町外への移動・交通



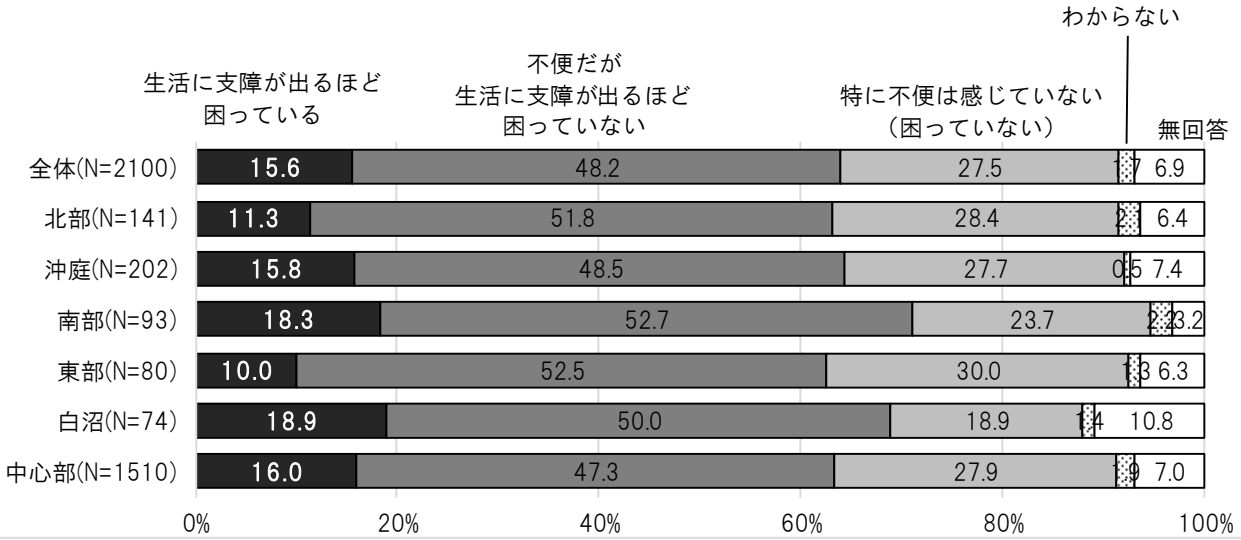
住んでいる地区の生活環境　　⑤福祉・健康



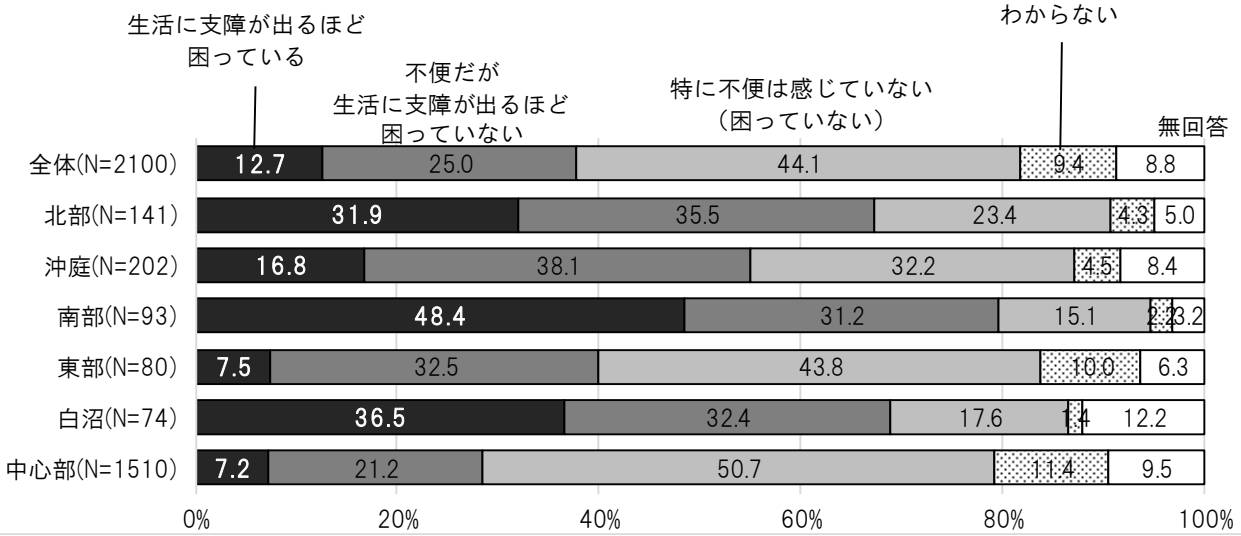

住んでいる地区の生活環境　　⑥医療体制・救急医療



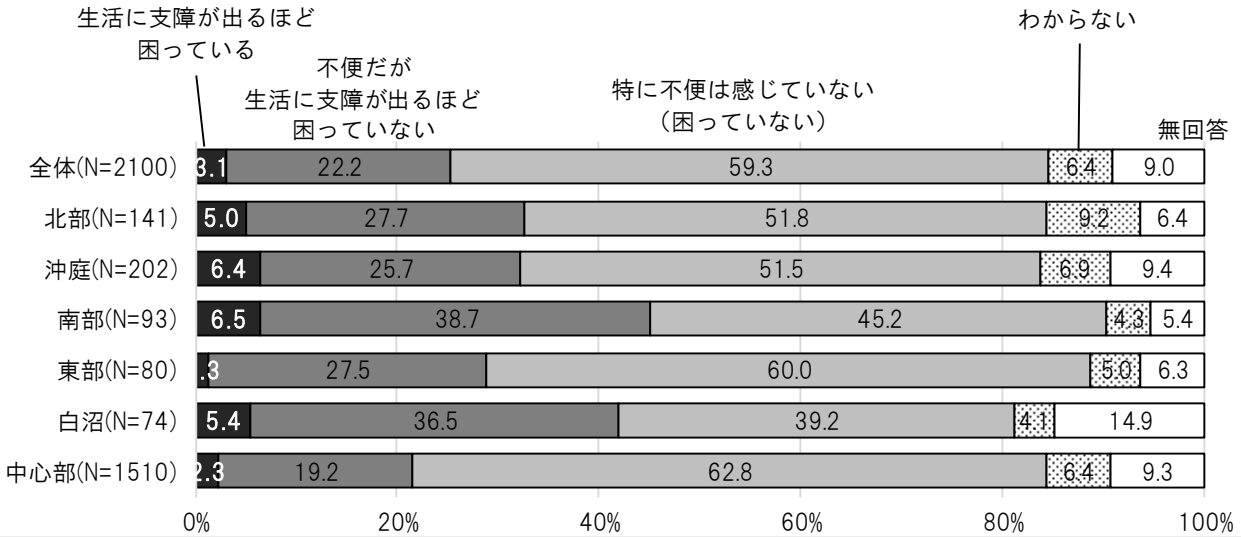

住んでいる地区の生活環境　　⑦家屋の雪処理や道路の除排雪



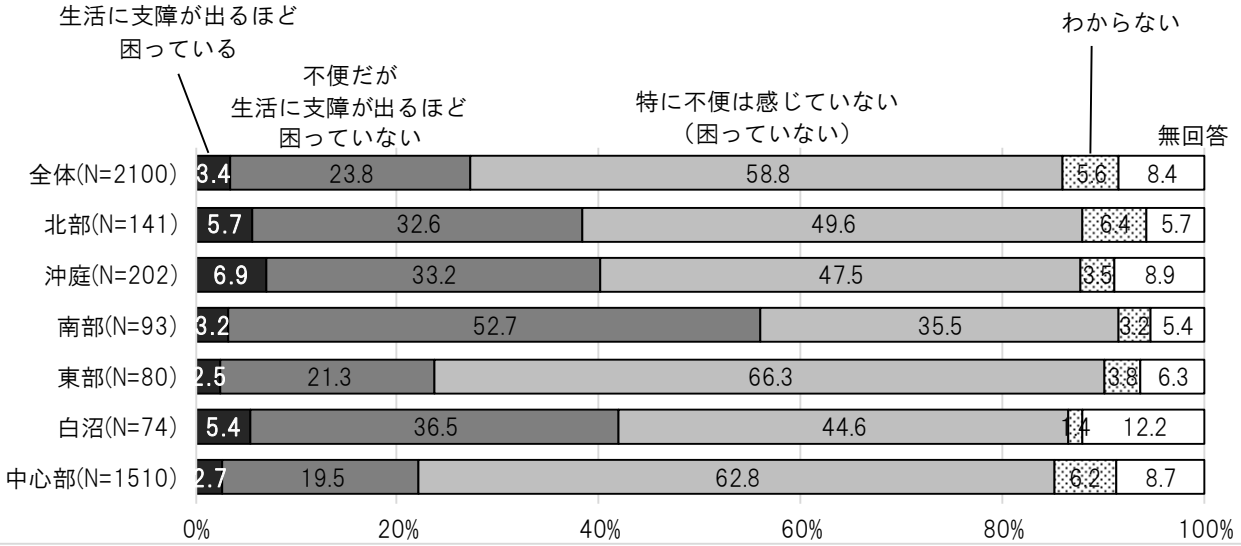
住んでいる地区の生活環境　　⑧鳥獣害対策




住んでいる地区の生活環境　　⑨防災・防犯



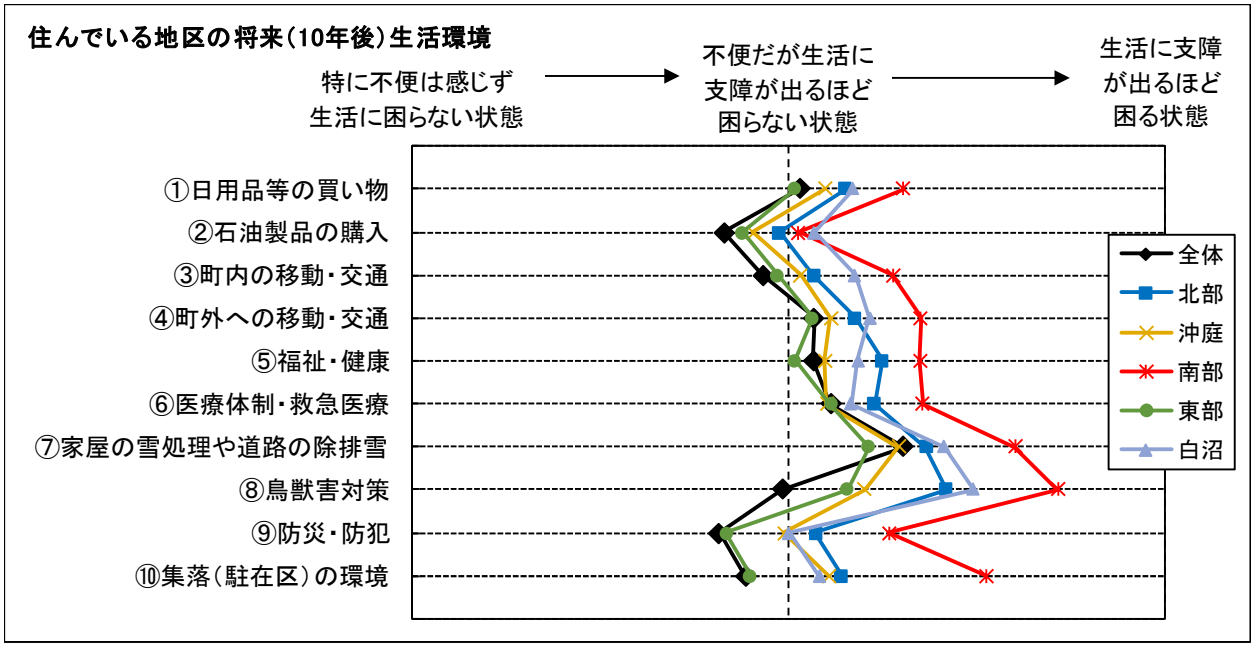

住んでいる地区の生活環境　　⑩集落（駐在区）の環境



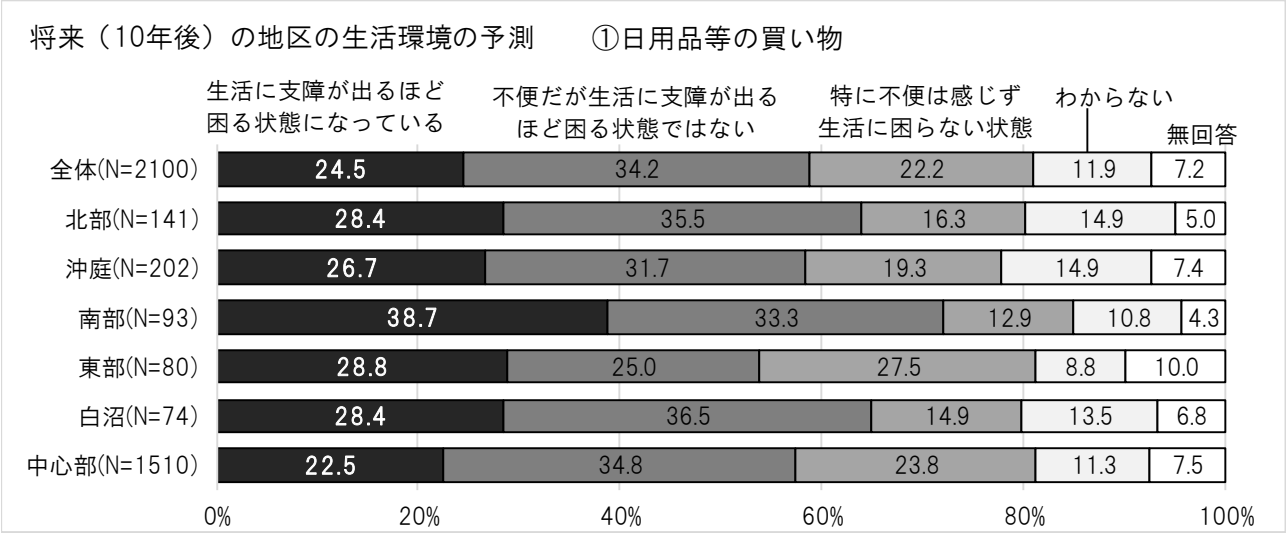
### ②住んでいる集落（地区）の将来（10 年後）の生活環境に対する予想

住んでいる集落（地区）の将来(10 年後)の生活環境の見通しを見ると、全体的に現在の生活環境に対する評価（①）と比べてより厳しい方向に評点が移動している。全体では「雪対策（家屋の雪処理や道路の除排雪）」が最も評価が低く、次いで「医療体制・救急医療」、「福祉・健康」、「町外への移動・交通」の順で「不便だが生活に支障が出るほど困らない状態」を越えている。

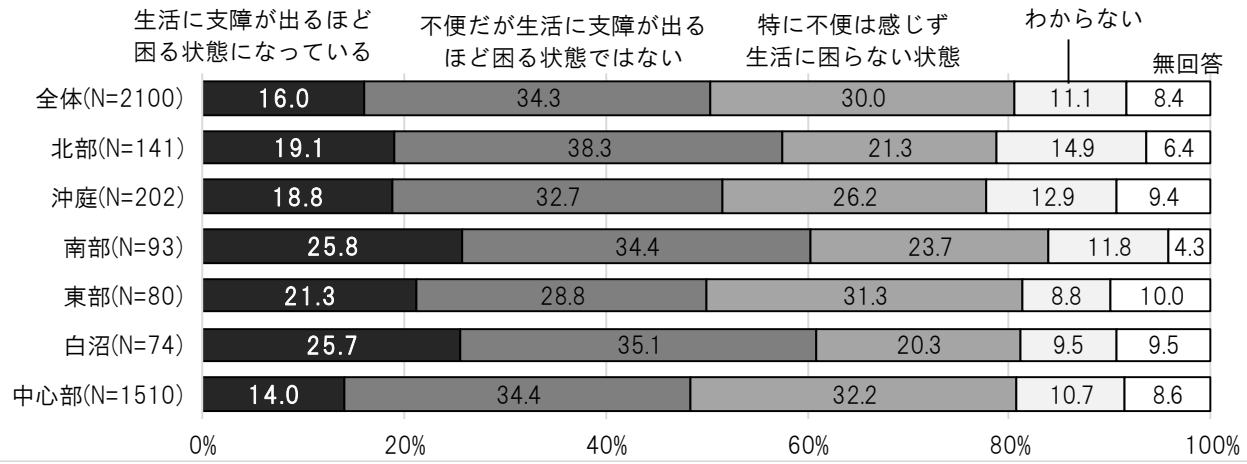
地区別に見ると、ほぼ全項目で南部が最も評価が低く、現状以上に将来は厳しい生活環境になると予測されている。また、白沼や北部も全項目で全体平均より評価が低くなっている。



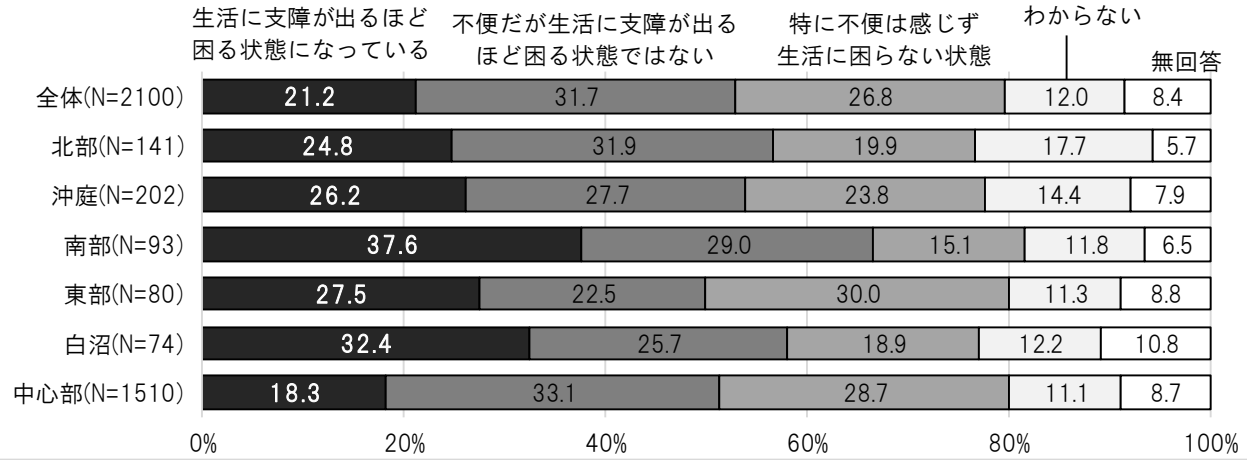

※　各項目に対する回答について、「生活に支障が出るほど困る状態になっていると思う」を＋３、「不便だが生活に支障が出るほど困らない状態だと思う」を＋２、「特に不便は感じず生活に困らない状態だと思う」を＋１として回答を評点化し、各評点の合計を「わからない」及び無回答を除く回答者数で割って平均値を算出したもの。なお、中心部は全体とほぼ同傾向のため、グラフに表示していない。



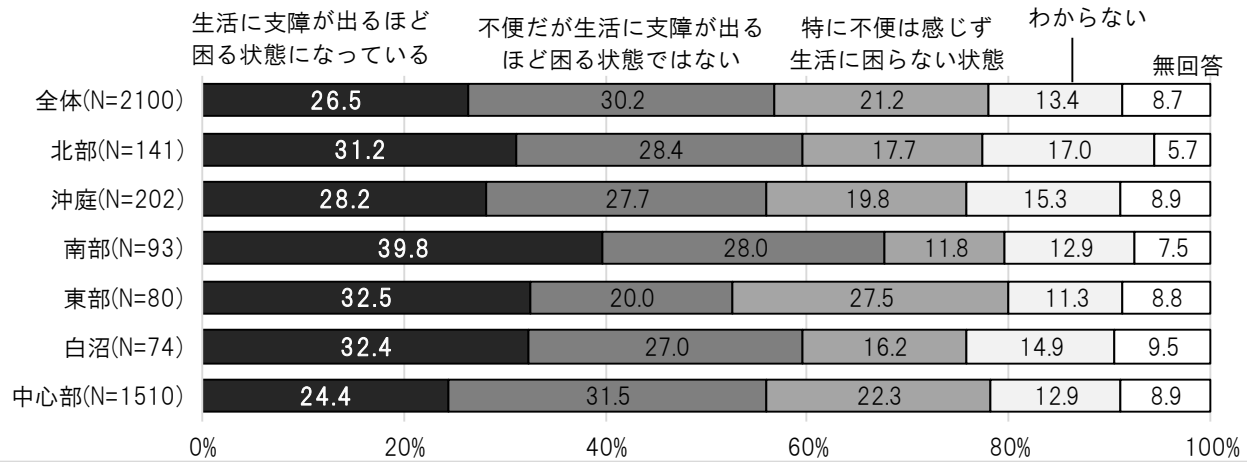
将来（10年後）の地区の生活環境の予測　②石油製品の購入

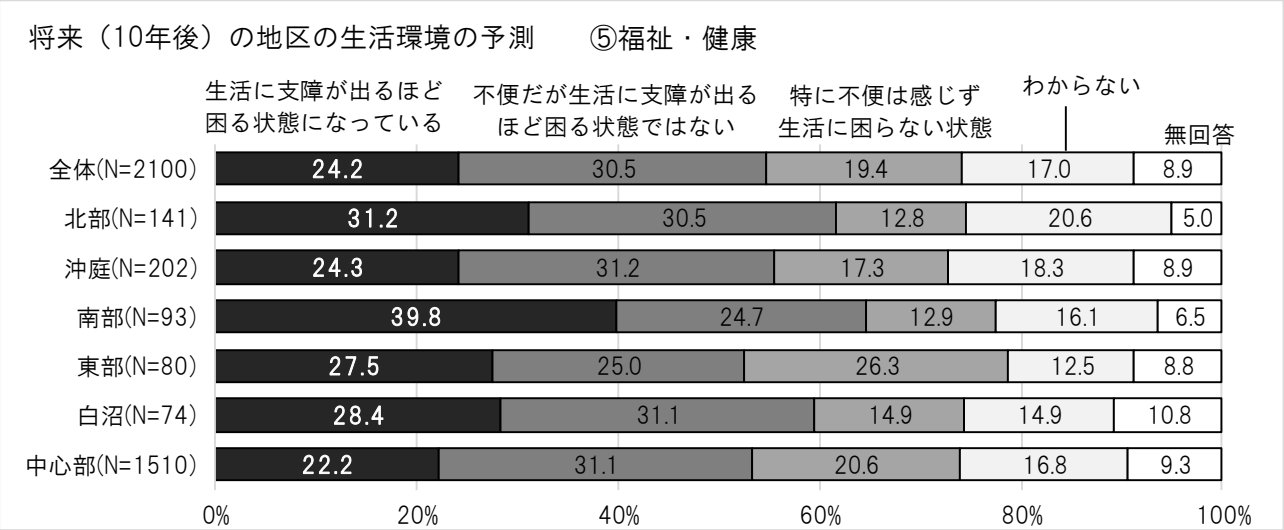


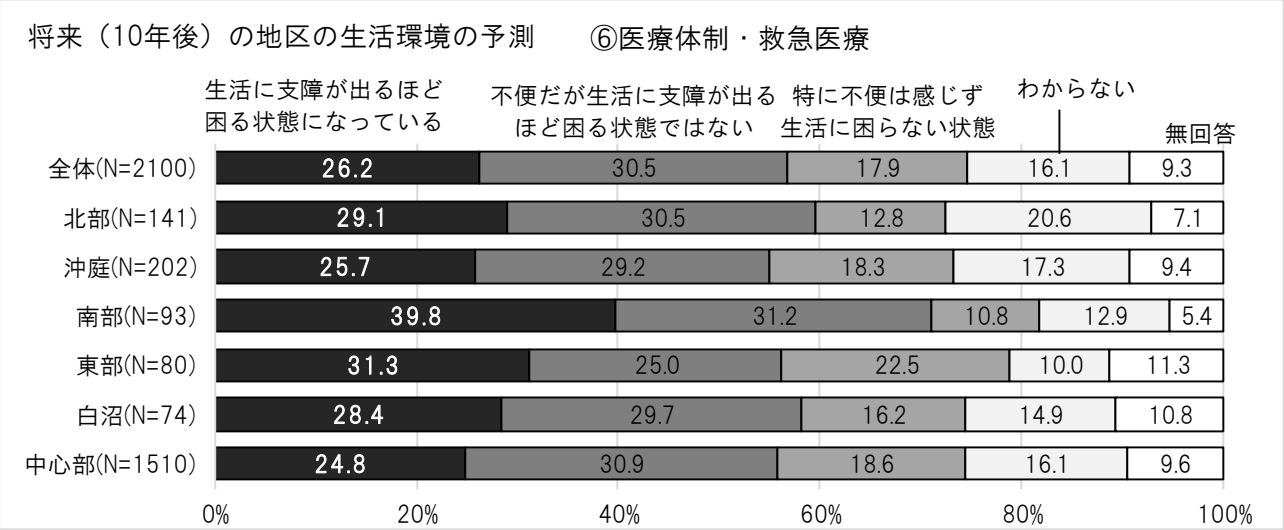

将来（10年後）の地区の生活環境の予測　③町内の移動・交通

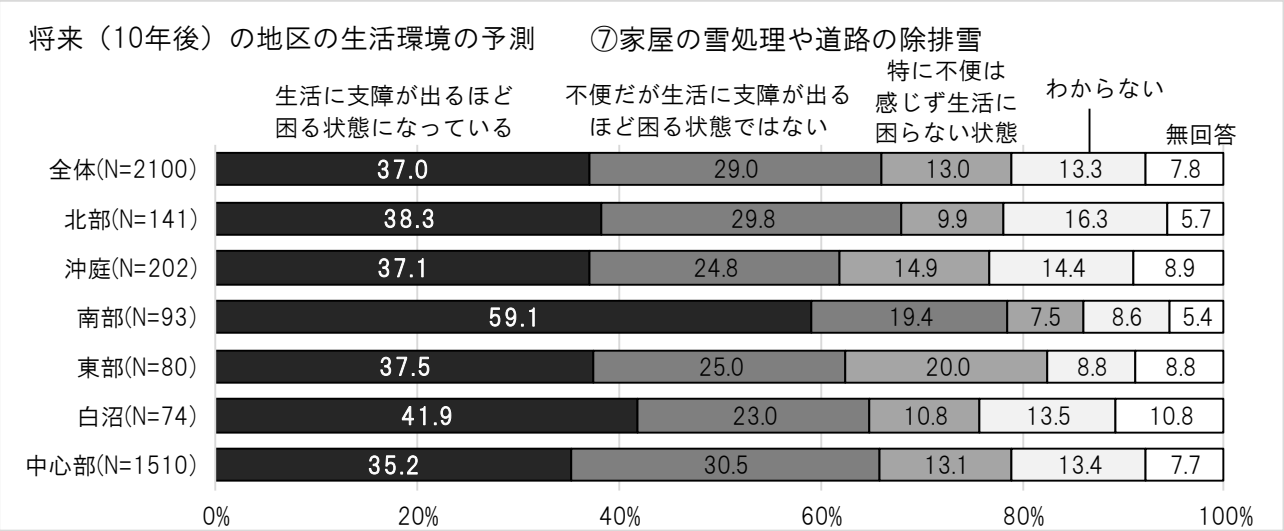


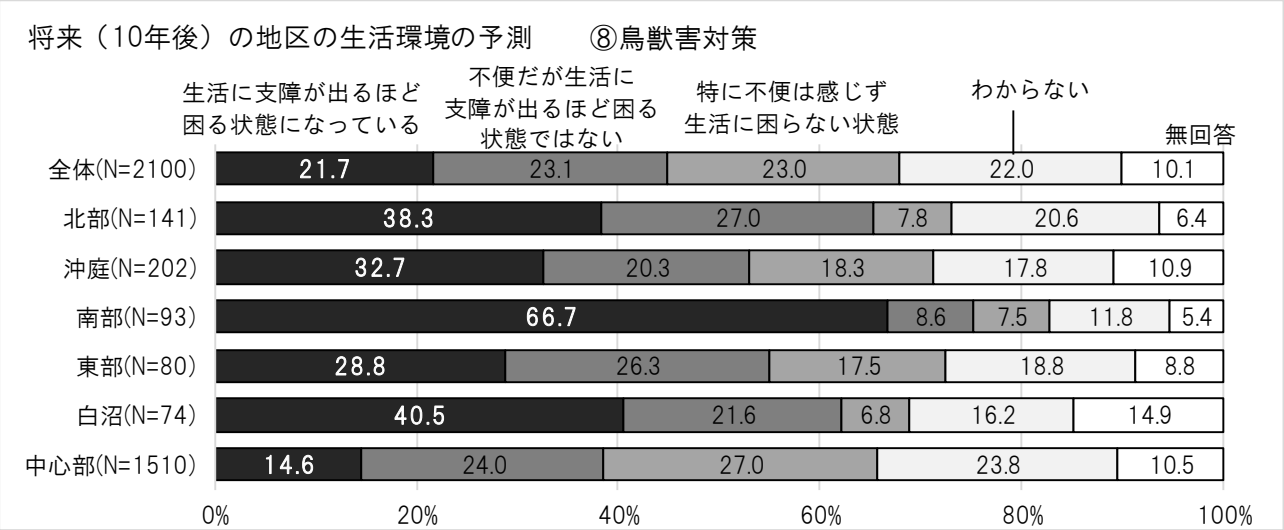

将来（10年後）の地区の生活環境の予測　④町外への移動・交通

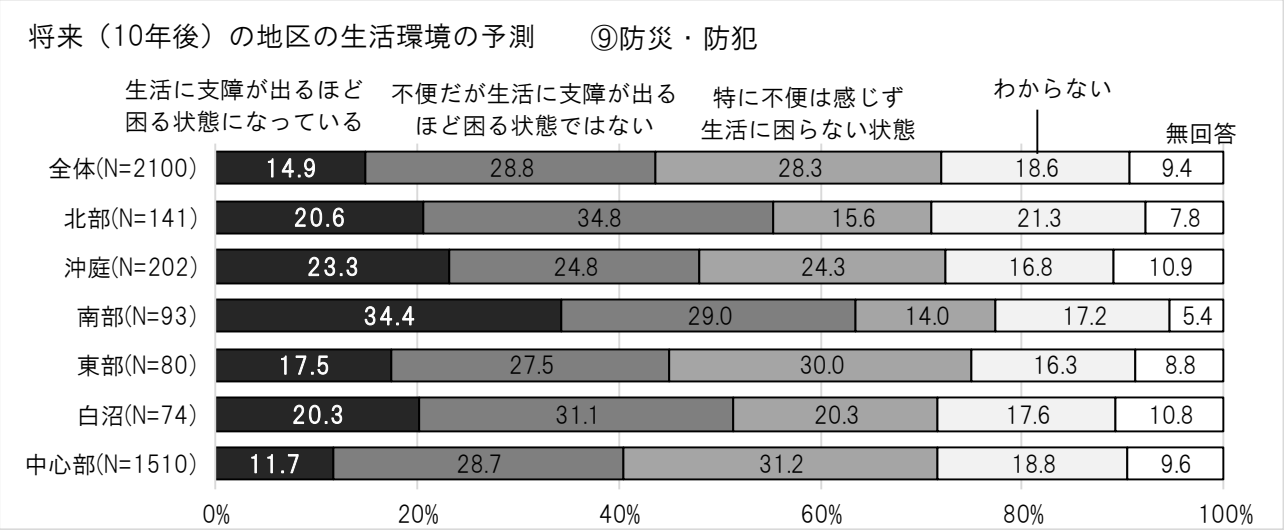


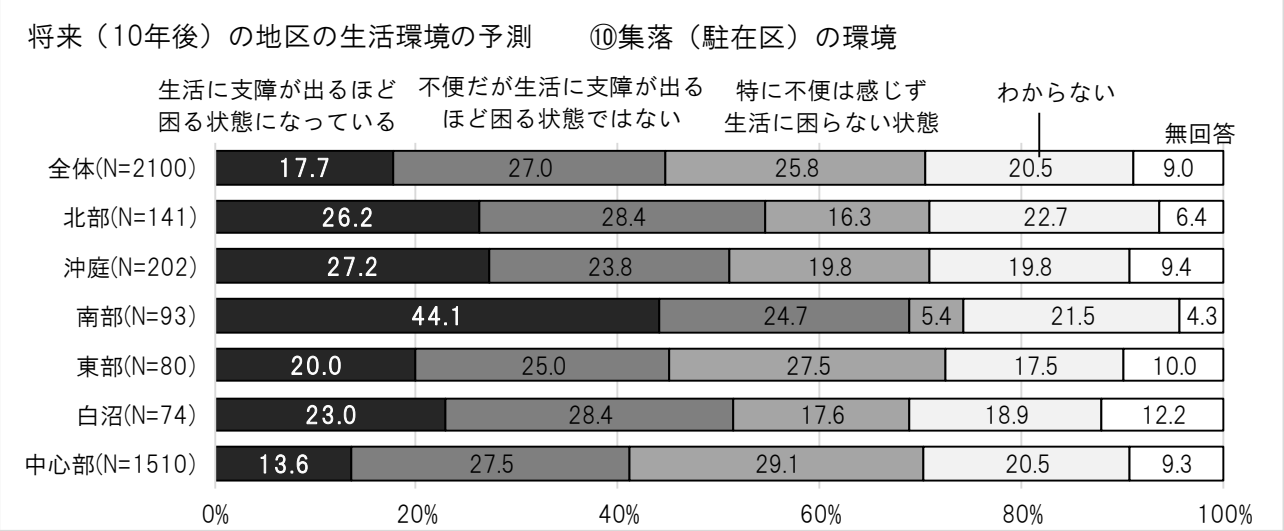

将来（10年後）の地区の生活環境の予測　⑤福祉・健康
生活に支障が出るほど困る状態になっている
不便だが生活に支障が出るほど困る状態ではない
特に不便は感じず生活に困らない状態
わからない
無回答
全体(N=2100) 24.2 30.5 19.4 17.0 8.9
北部(N=141) 31.2 30.5 12.8 20.6 5.0
沖庭(N=202) 24.3 31.2 17.3 18.3 8.9
南部(N=93) 39.8 24.7 12.9 16.1 6.5
東部(N=80) 27.5 25.0 26.3 12.5 8.8
白沼(N=74) 28.4 31.1 14.9 14.9 10.8
中心部(N=1510) 22.2 31.1 20.6 16.8 9.3
0%
20%
40%
60%
80%
100%


将来（10年後）の地区の生活環境の予測　⑥医療体制・救急医療
生活に支障が出るほど困る状態になっている
不便だが生活に支障が出るほど困る状態ではない
特に不便は感じず生活に困らない状態
わからない
無回答
全体(N=2100) 26.2 30.5 17.9 16.1 9.3
北部(N=141) 29.1 30.5 12.8 20.6 7.1
沖庭(N=202) 25.7 29.2 18.3 17.3 9.4
南部(N=93) 39.8 31.2 10.8 12.9 5.4
東部(N=80) 31.3 25.0 22.5 10.0 11.3
白沼(N=74) 28.4 29.7 16.2 14.9 10.8
中心部(N=1510) 24.8 30.9 18.6 16.1 9.6
0%
20%
40%
60%
80%
100%


将来（10年後）の地区の生活環境の予測　⑦家屋の雪処理や道路の除排雪
生活に支障が出るほど困る状態になっている
不便だが生活に支障が出るほど困る状態ではない
特に不便は感じず生活に困らない状態
わからない
無回答
全体(N=2100) 37.0 29.0 13.0 13.3 7.8
北部(N=141) 38.3 29.8 9.9 16.3 5.7
沖庭(N=202) 37.1 24.8 14.9 14.4 8.9
南部(N=93) 59.1 19.4 7.5 8.6 5.4
東部(N=80) 37.5 25.0 20.0 8.8 8.8
白沼(N=74) 41.9 23.0 10.8 13.5 10.8
中心部(N=1510) 35.2 30.5 13.1 13.4 7.7
0%
20%
40%
60%
80%
100%


将来（10年後）の地区の生活環境の予測　⑧鳥獣害対策
生活に支障が出るほど困る状態になっている
不便だが生活に支障が出るほど困る状態ではない
特に不便は感じず生活に困らない状態
わからない
無回答
全体(N=2100) 21.7 23.1 23.0 22.0 10.1
北部(N=141) 38.3 27.0 7.8 20.6 6.4
沖庭(N=202) 32.7 20.3 18.3 17.8 10.9
南部(N=93) 66.7 8.6 7.5 11.8 5.4
東部(N=80) 28.8 26.3 17.5 18.8 8.8
白沼(N=74) 40.5 21.6 6.8 16.2 14.9
中心部(N=1510) 14.6 24.0 27.0 23.8 10.5
0%
20%
40%
60%
80%
100%


将来（10年後）の地区の生活環境の予測　⑨防災・防犯
生活に支障が出るほど困る状態になっている
不便だが生活に支障が出るほど困る状態ではない
特に不便は感じず生活に困らない状態
わからない
無回答
全体(N=2100) 14.9 28.8 28.3 18.6 9.4
北部(N=141) 20.6 34.8 15.6 21.3 7.8
沖庭(N=202) 23.3 24.8 24.3 16.8 10.9
南部(N=93) 34.4 29.0 14.0 17.2 5.4
東部(N=80) 17.5 27.5 30.0 16.3 8.8
白沼(N=74) 20.3 31.1 20.3 17.6 10.8
中心部(N=1510) 11.7 28.7 31.2 18.8 9.6
0%
20%
40%
60%
80%
100%


将来（10年後）の地区の生活環境の予測　⑩集落（駐在区）の環境
生活に支障が出るほど困る状態になっている
不便だが生活に支障が出るほど困る状態ではない
特に不便は感じず生活に困らない状態
わからない
無回答
全体(N=2100) 17.7 27.0 25.8 20.5 9.0
北部(N=141) 26.2 28.4 16.3 22.7 6.4
沖庭(N=202) 27.2 23.8 19.8 19.8 9.4
南部(N=93) 44.1 24.7 5.4 21.5 4.3
東部(N=80) 20.0 25.0 27.5 17.5 10.0
白沼(N=74) 23.0 28.4 17.6 18.9 12.2
中心部(N=1510) 13.6 27.5 29.1 20.5 9.3
0%
20%
40%
60%
80%
100%

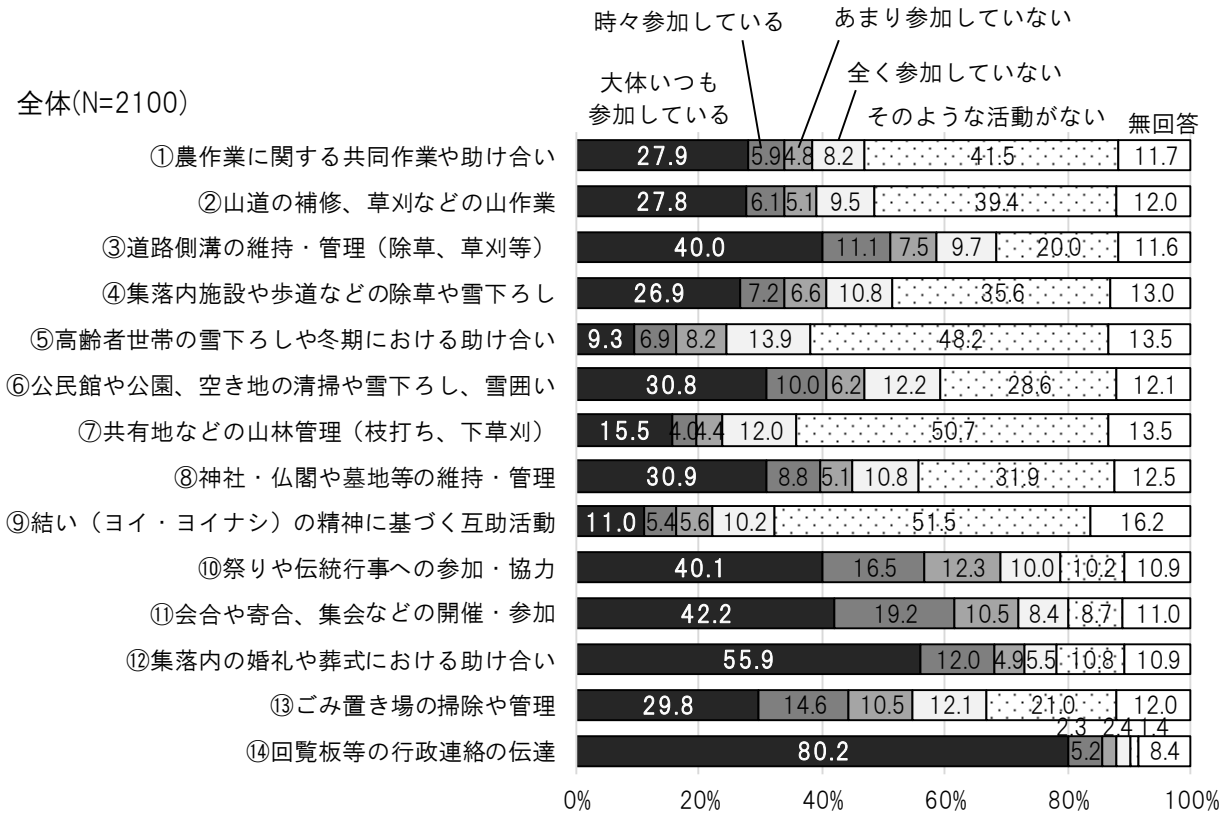
### エ　集落のコミュニティ機能の状況

#### ①集落活動への参加状況

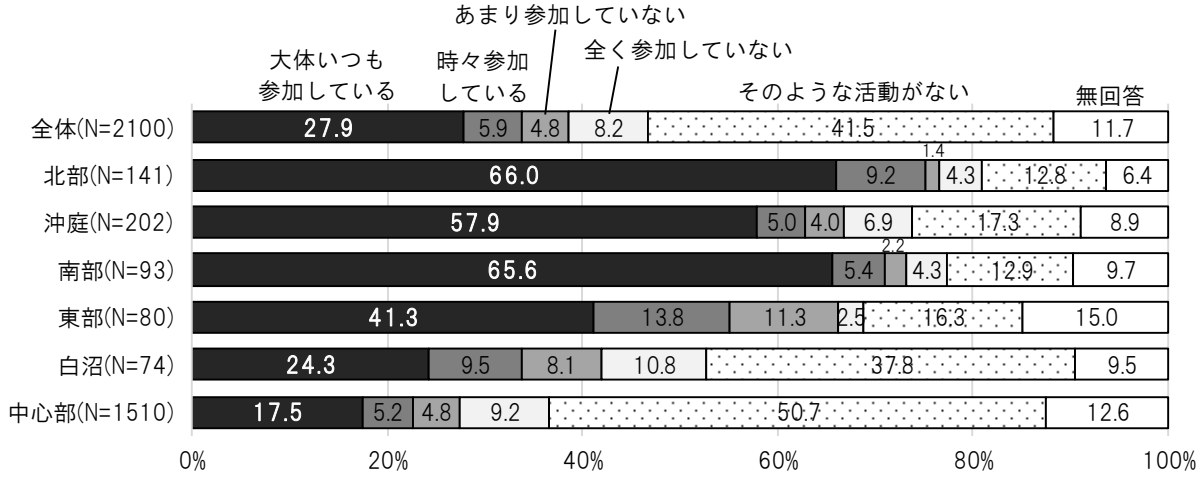
各世帯の集落活動への参加状況を見ると、全体では「回覧板等の行政連絡の伝達」について約 8 割(80.2%)の世帯が「大体いつも参加している」としており、次いで「集落内の婚礼や葬式における助け合い」について半数以上の 55.9%が「大体いつも参加している」としている。

地区別に見ると、項目により参加状況には地域差が見られ、南部、北部、沖庭では「高齢者世帯の雪下ろしや冬期における助け合い」を除く活動で参加世帯の割合が高くなっている。

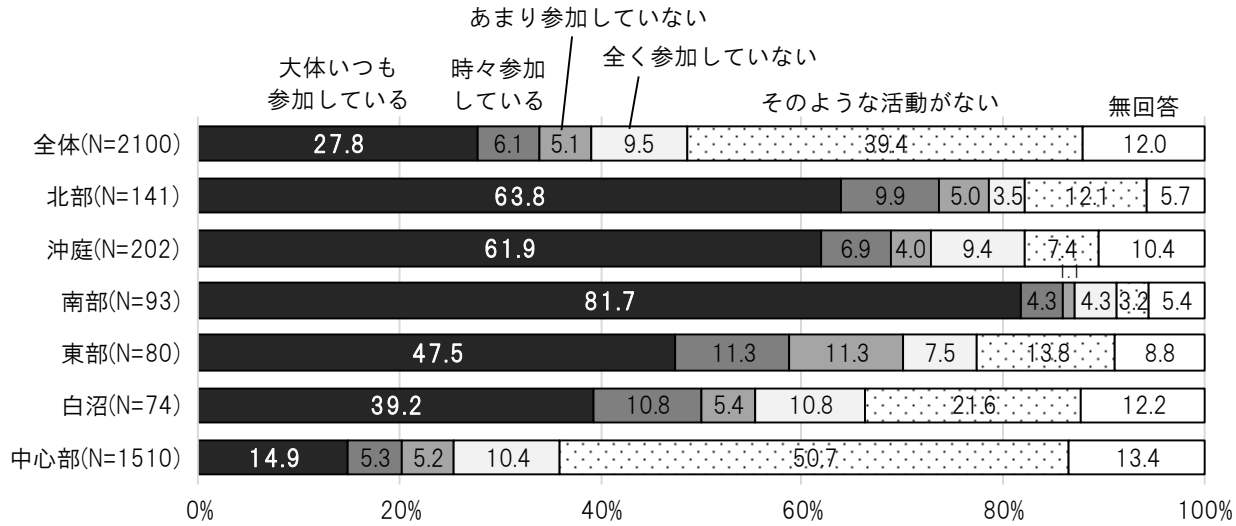
集落活動への参加状況



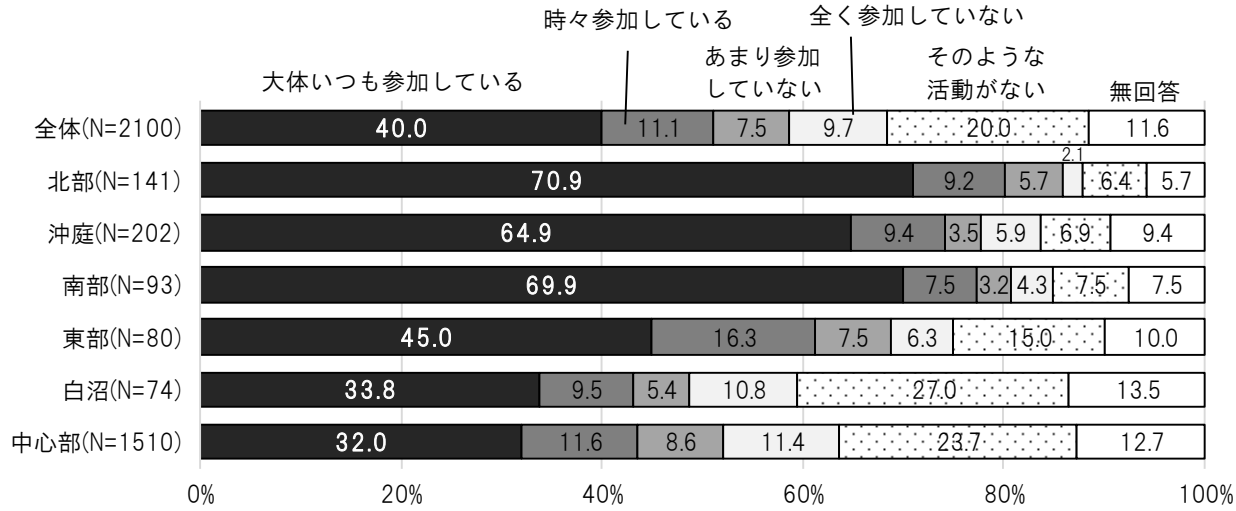
集落活動への参加状況　　①農作業に関する共同作業や助け合い



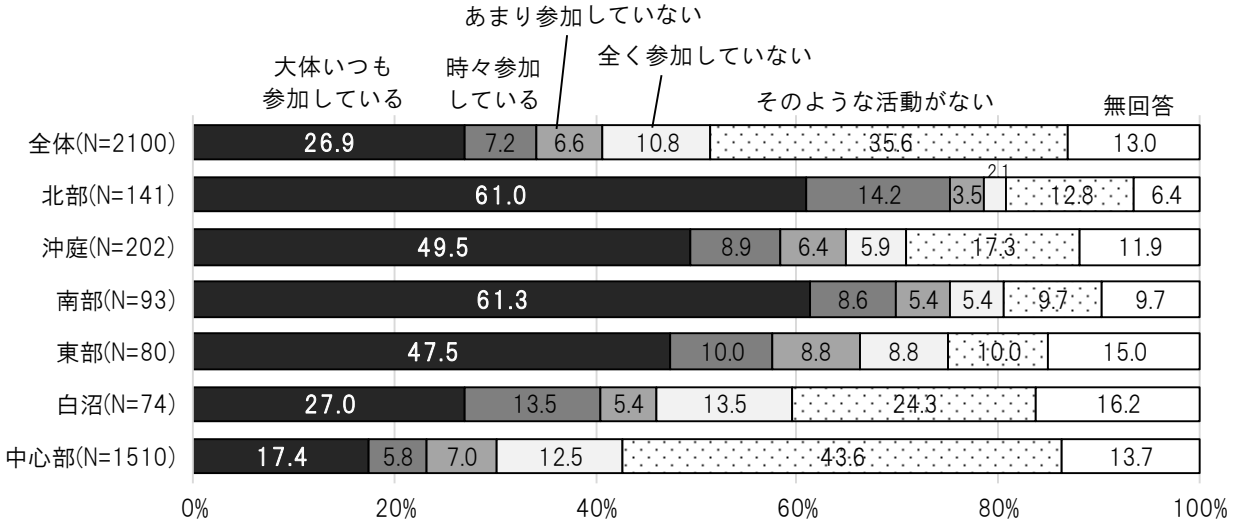

集落活動への参加状況　　②山道の補修、草刈などの山作業



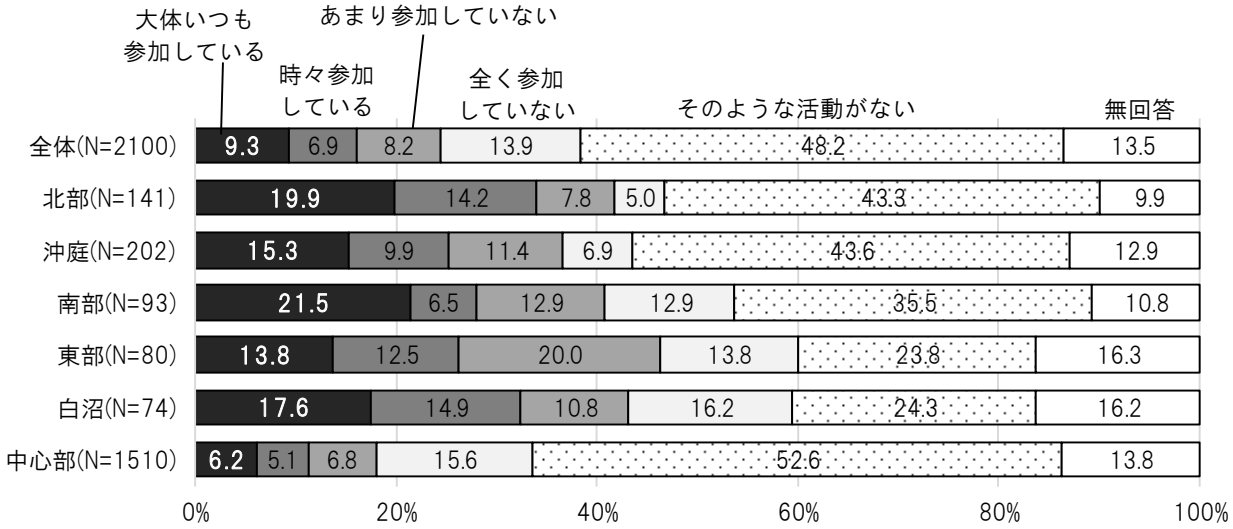

集落活動への参加状況　　③道路側溝の維持・管理（除草、草刈等）



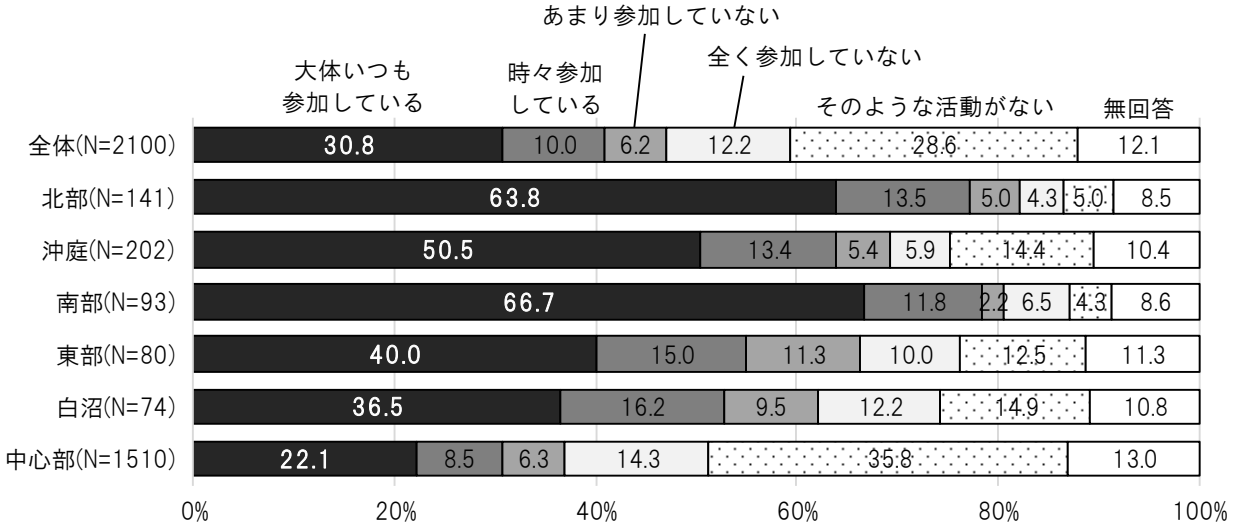
集落活動への参加状況　　④集落内施設や歩道などの除草や雪下ろし



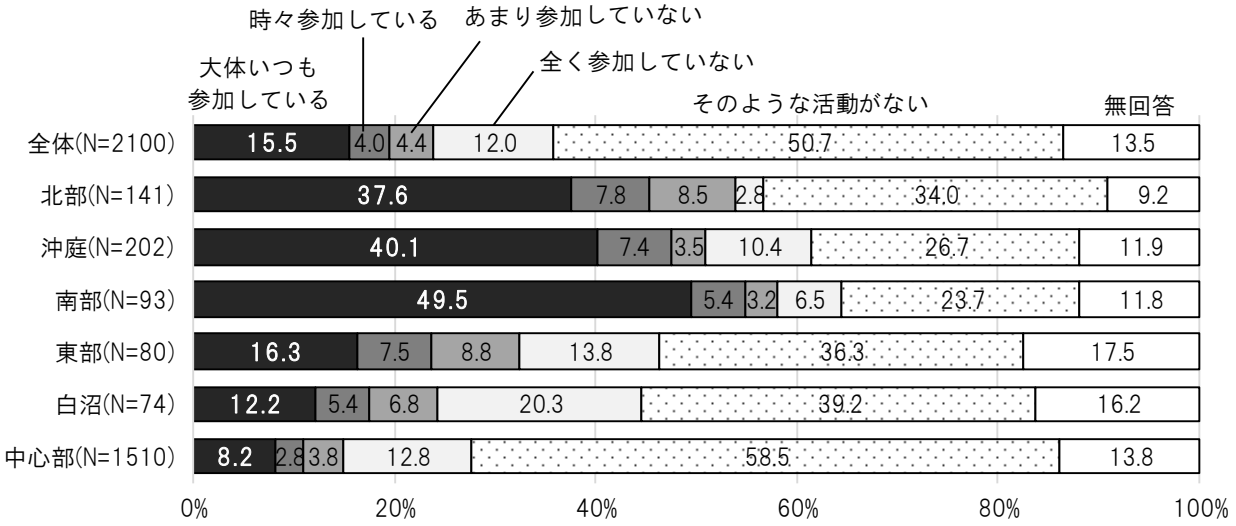

集落活動への参加状況　⑤高齢者世帯の雪下ろしや冬期における助け合い



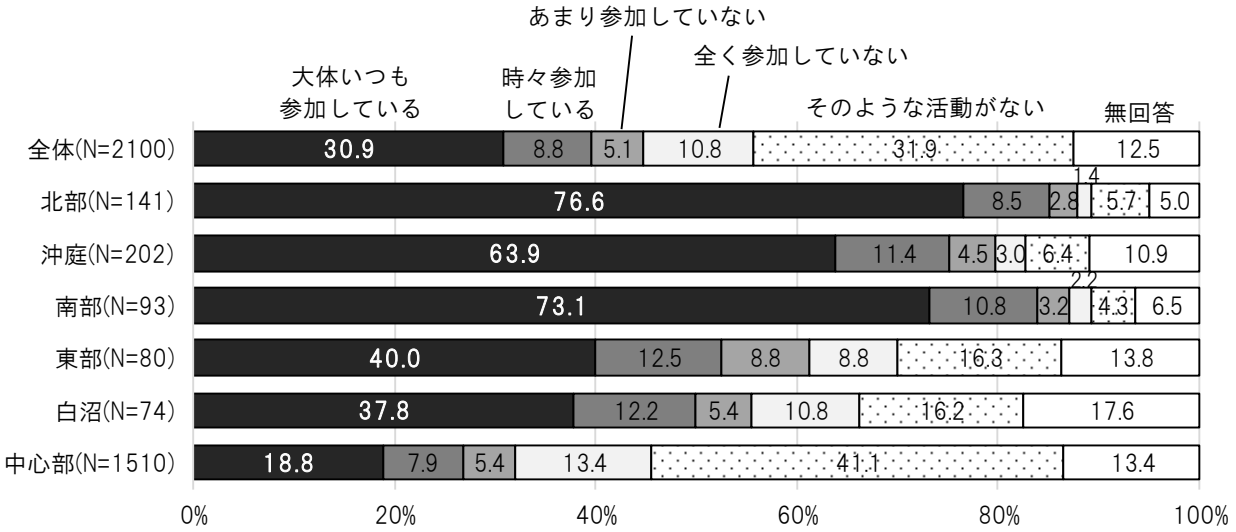

集落活動への参加状況 ⑥公民館や公園、空き地の清掃や雪下ろし、雪囲い



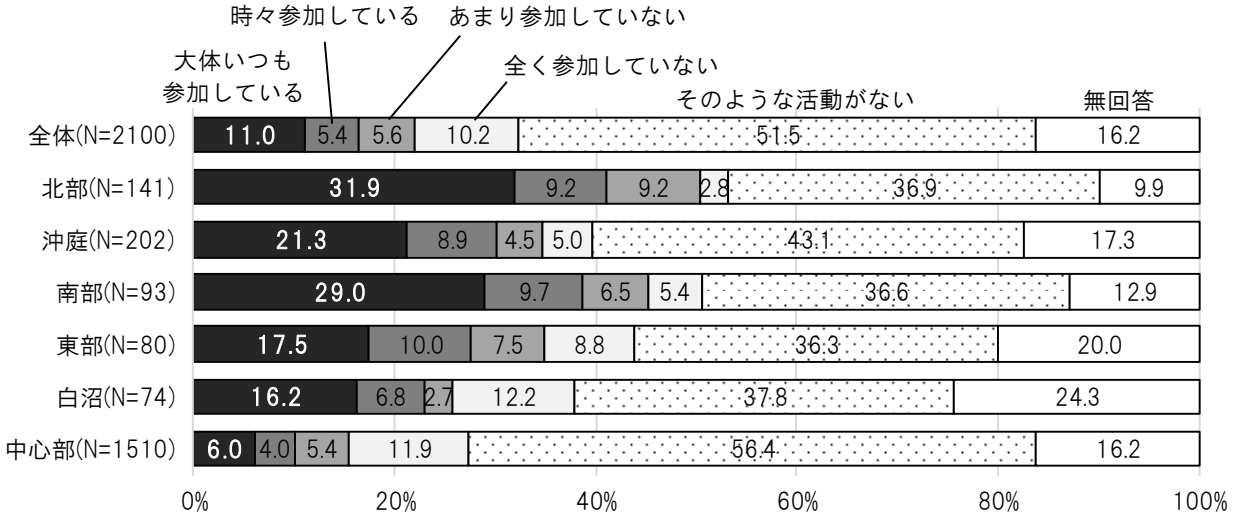
集落活動への参加状況　⑦共有地などの山林管理（枝打ち、下草刈）



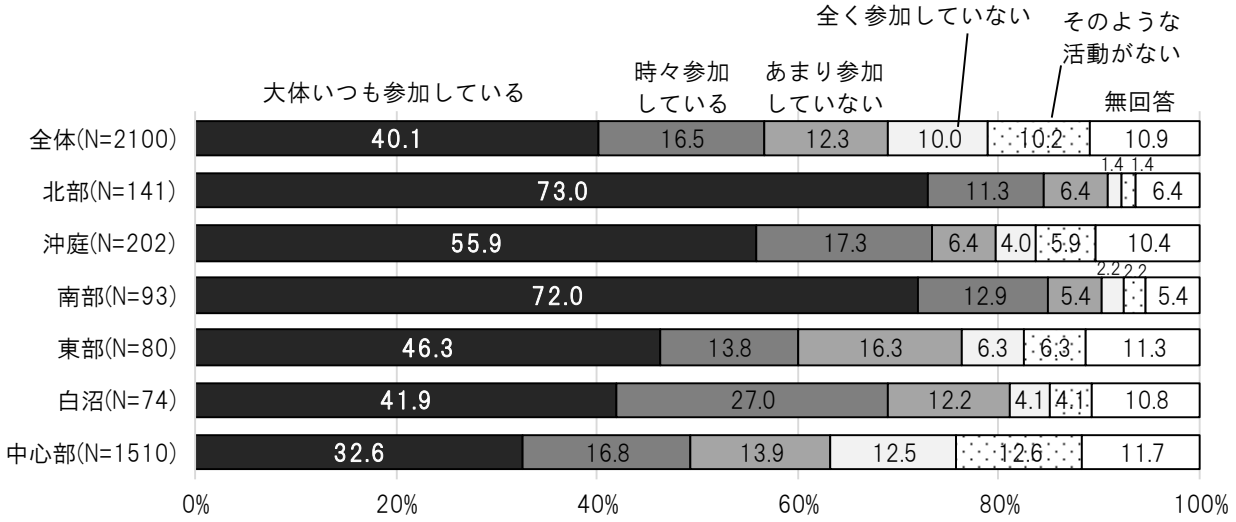

集落活動への参加状況　⑧神社・仏閣や墓地等の維持・管理



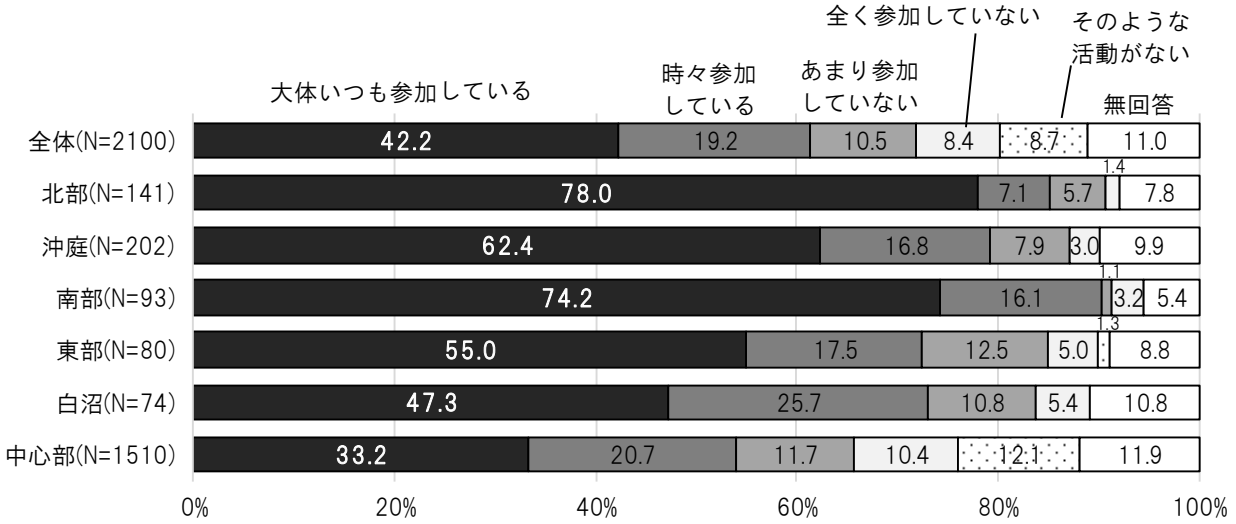

集落活動への参加状況 ⑨結い（ヨイ・ヨイナシ）の精神に基づく互助活動



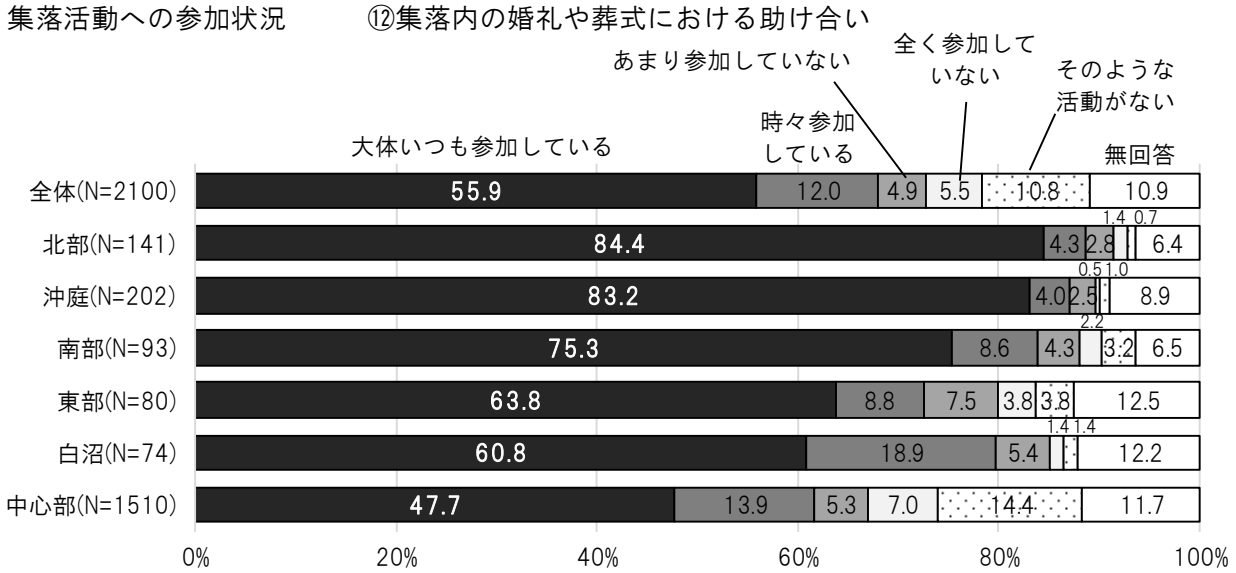
集落活動への参加状況　　⑩祭りや伝統行事への参加・協力

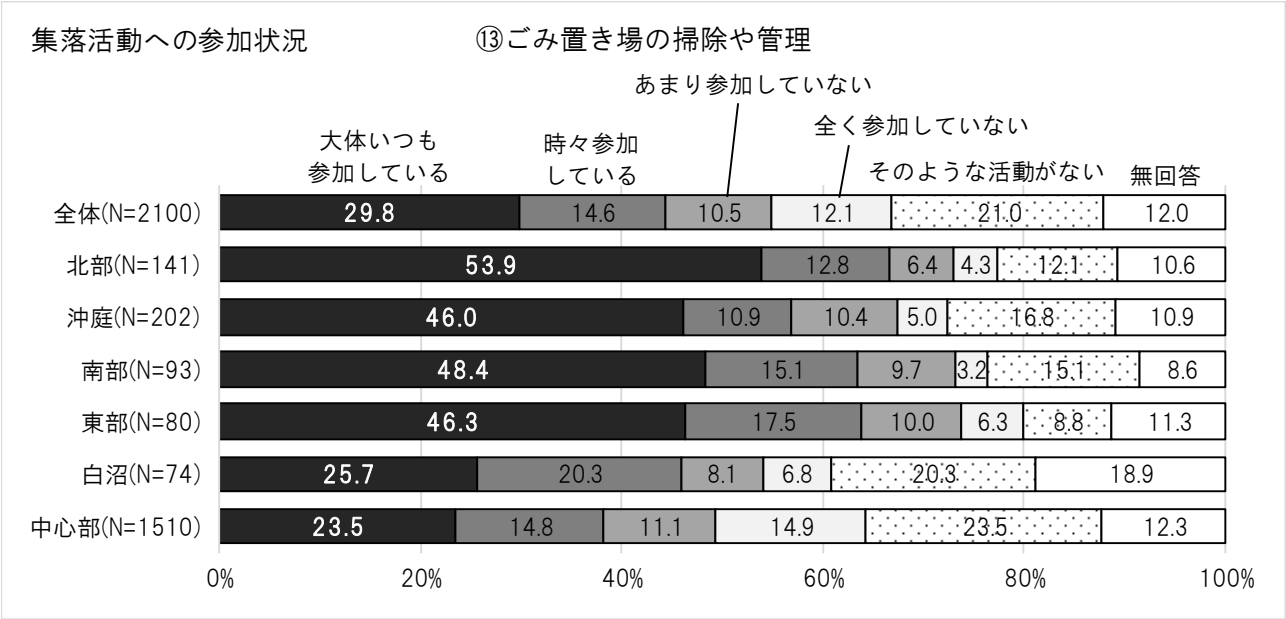


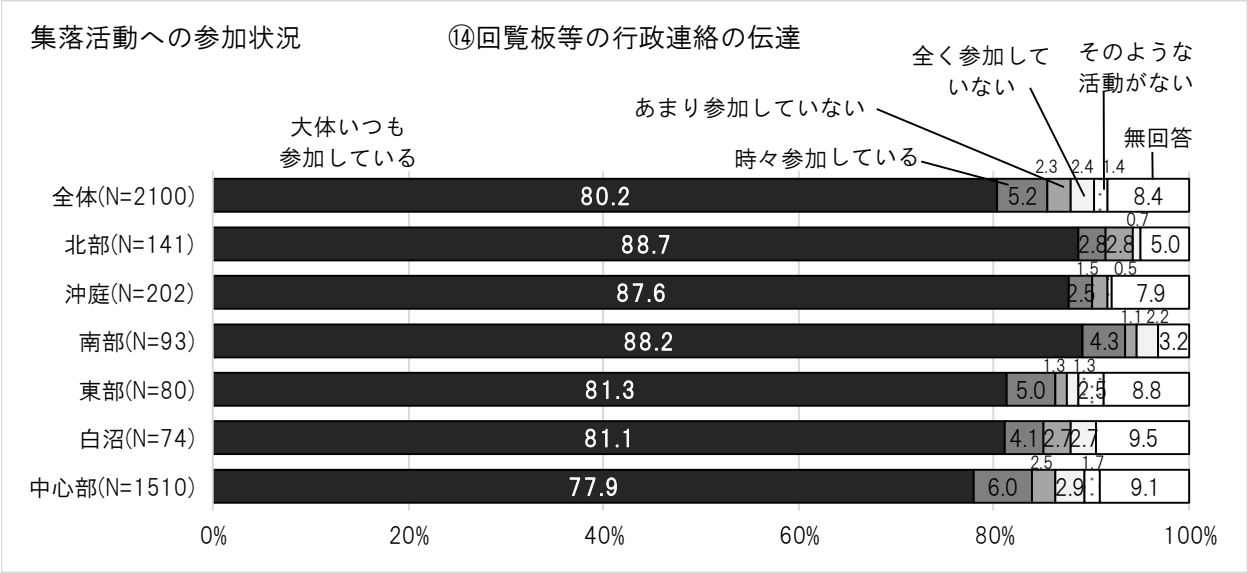

集落活動への参加状況　　⑪会合や寄合、集会などの開催・参加




集落活動への参加状況　　⑫集落内の婚礼や葬式における助け合い





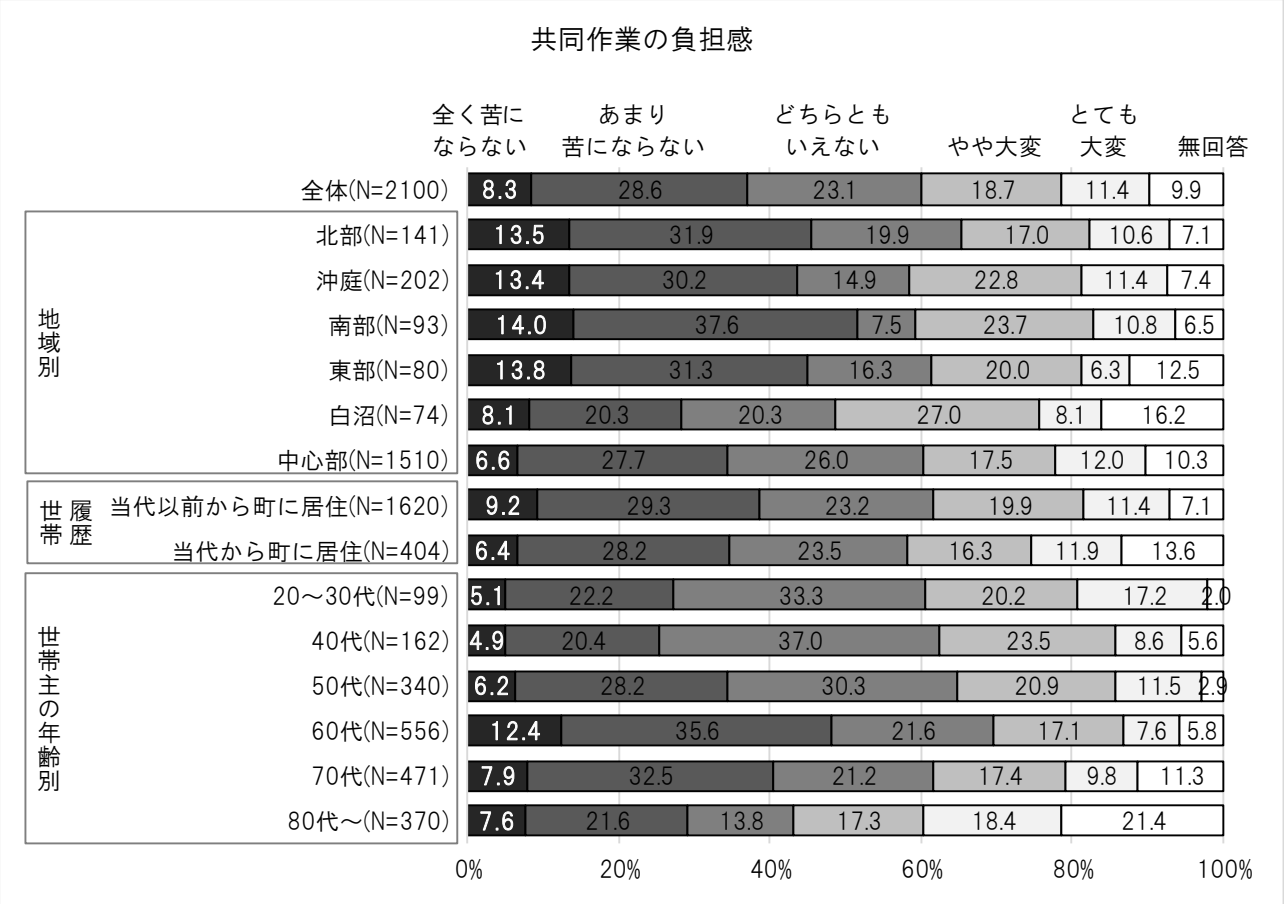




**②共同作業の負担感**

共同作業の負担感について見ると、全体では「あまり苦にならない」が 28.6%、「どちらともいえない」が 23.1%、「やや大変」が 18.7%の順である。

地区別に見ると、南部と沖庭では、「あまり苦にならない」が 3 割超と高いが、「やや大変」や「とても大変」の割合も比較的高く、地区内でやや二極化する傾向が見られる。

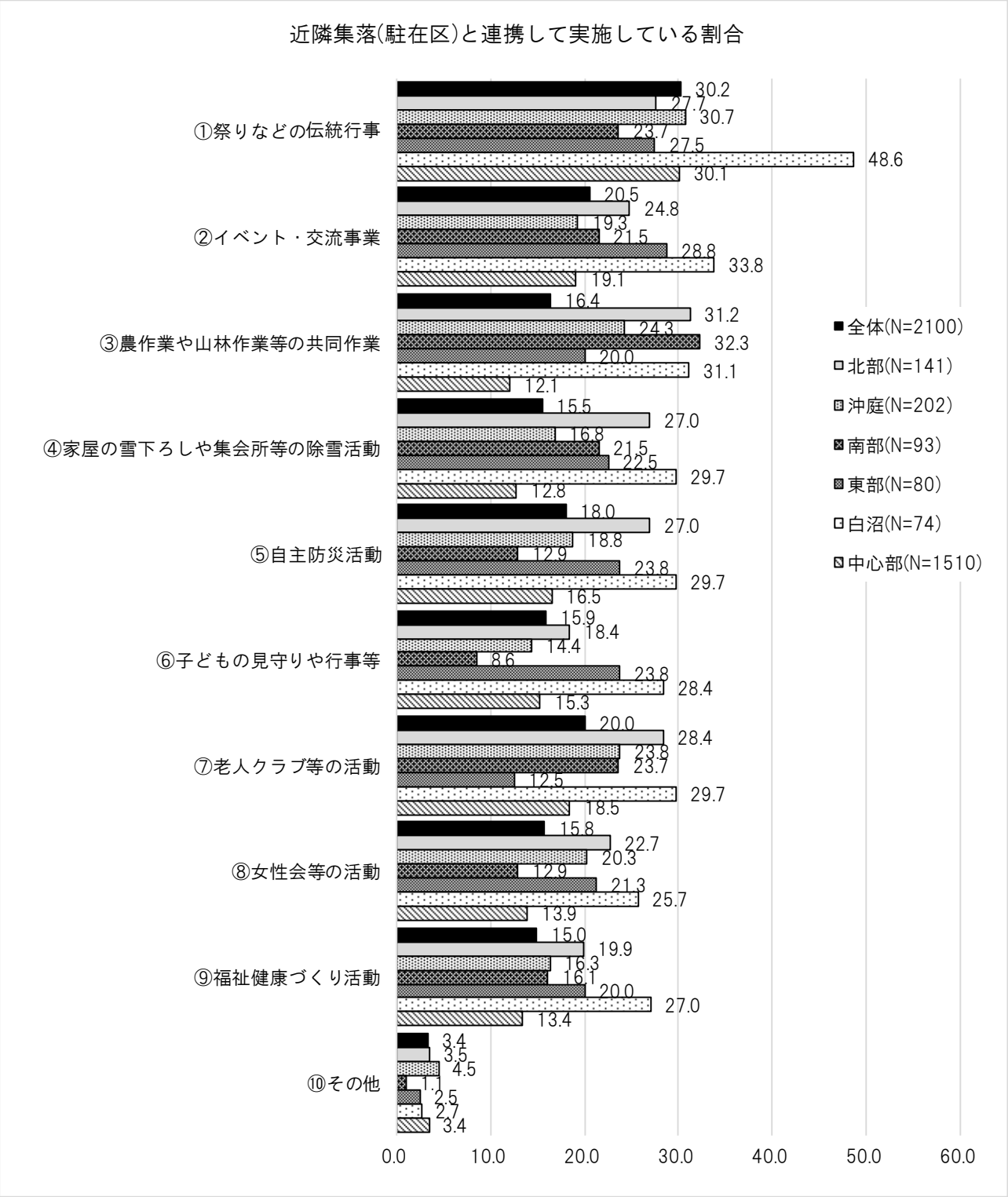
世帯履歴別では大差は見られないが、世帯主の年齢別にみると、世帯主が若い世帯の方が「やや大変」の割合が高く、世帯主が 20～30 代の世帯は 17.2%が「とても大変」としている。




**③集落活動の連携状況**

各集落活動について、集落単独ではなく近隣の集落(駐在区)と連携して実施している割合を見ると、全体では「祭りなどの伝統行事」が 30.2%で最も高く、次いで「イベント・交流事業」が 20.5%、「老人クラブの活動」が 20.0%の順で近隣集落との連携率が高くなっている。

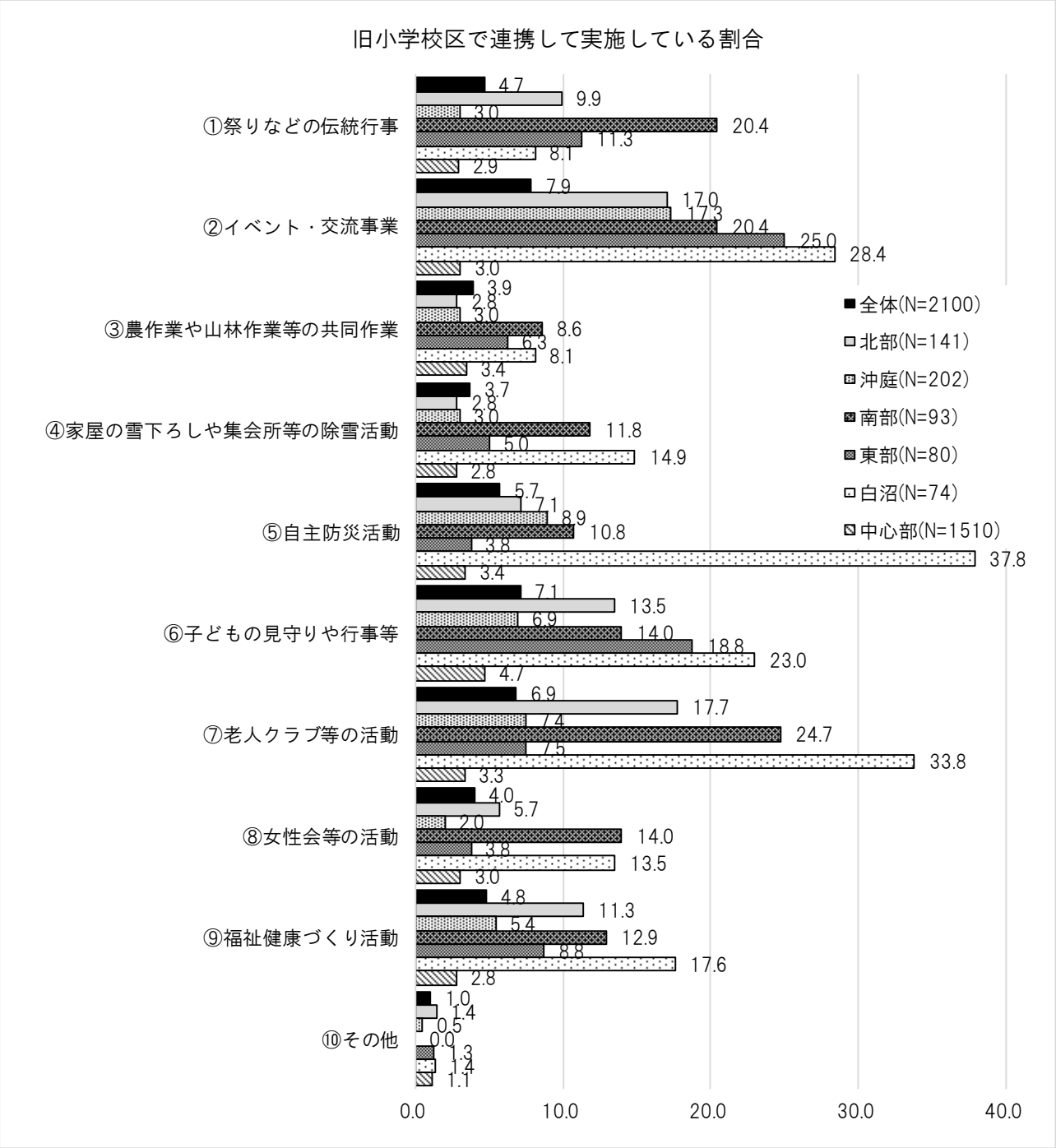
地区別に見ると、白沼では「祭りなどの伝統行事」を近隣集落と連携して実施しているとする回答が 48.6%と高く、他の集落活動についても 3 割程度で近隣集落と連携実施されている。一方、南部では、各活動とも近隣集落と連携して実施されているという割合は低い。




各集落活動について、集落単独ではなく旧小学校区で連携して実施している割合を見ると、全体では「イベント・交流事業」が 7.9%と最も高いほか、「子どもの見守りや行事等」が 7.1%となっている。

地区別に見ると、白沼では「自主防災活動」について旧小学校区で連携して実施しているとする世帯の割合が 37.8%と高く、「老人クラブ等の活動」についても 33.8%が旧小学校区で連携しているとしている。

その他の地区を見ると、北部や南部では「老人クラブ等の活動」が、また沖庭では「イベント・交流事業」が、それぞれ比較的高い割合となっている。

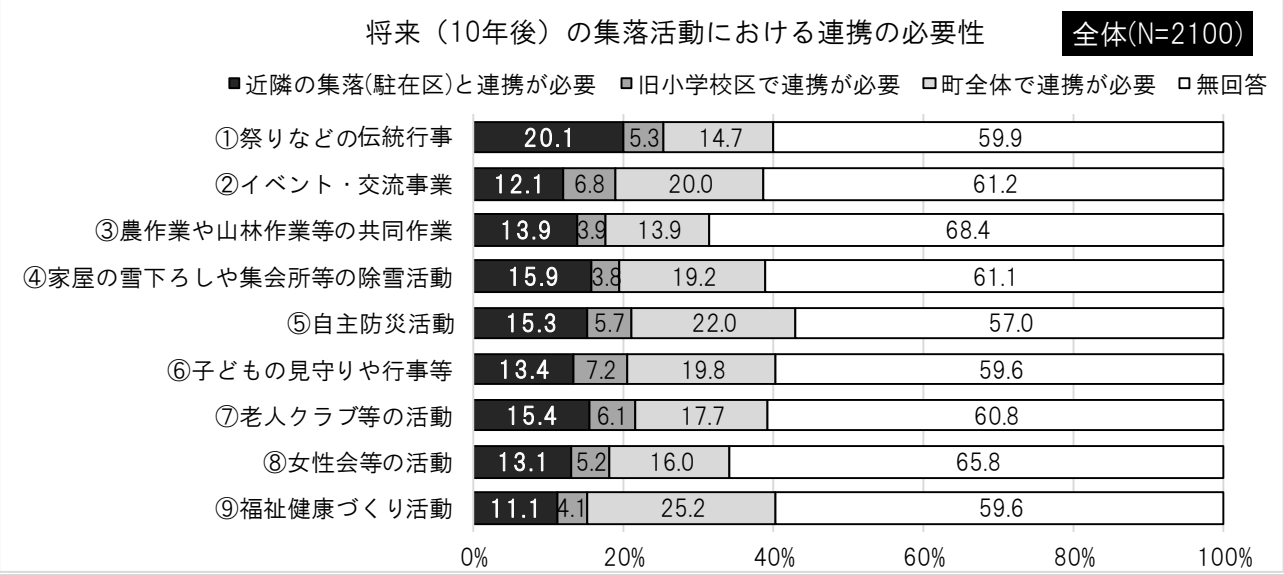


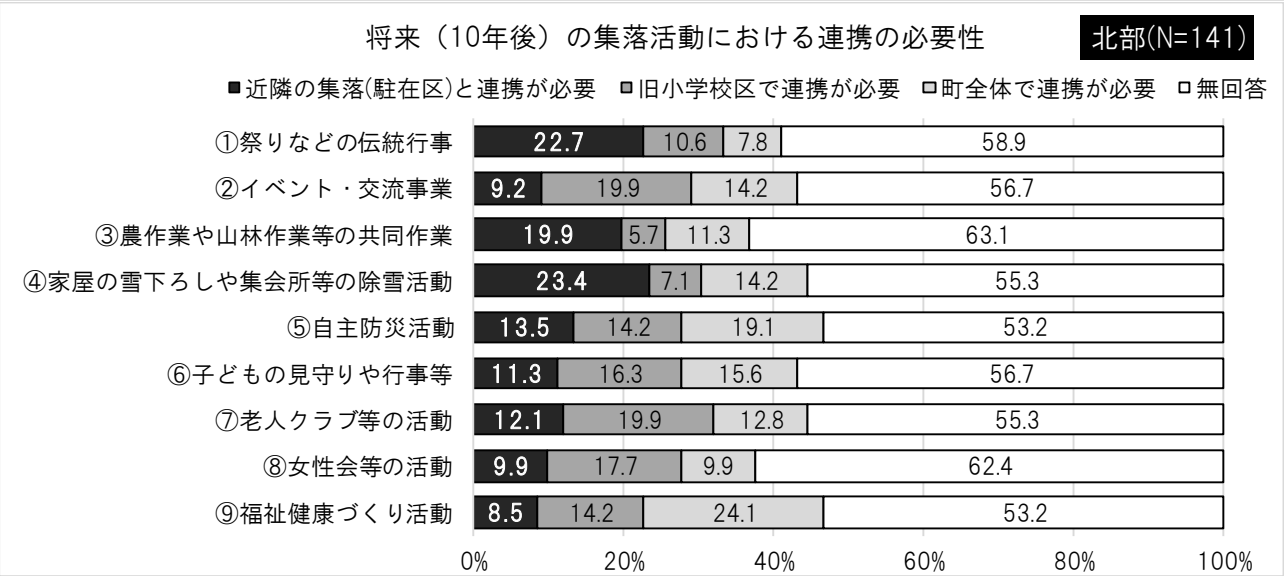

**④将来的（10 年後）な集落活動の連携の必要性**

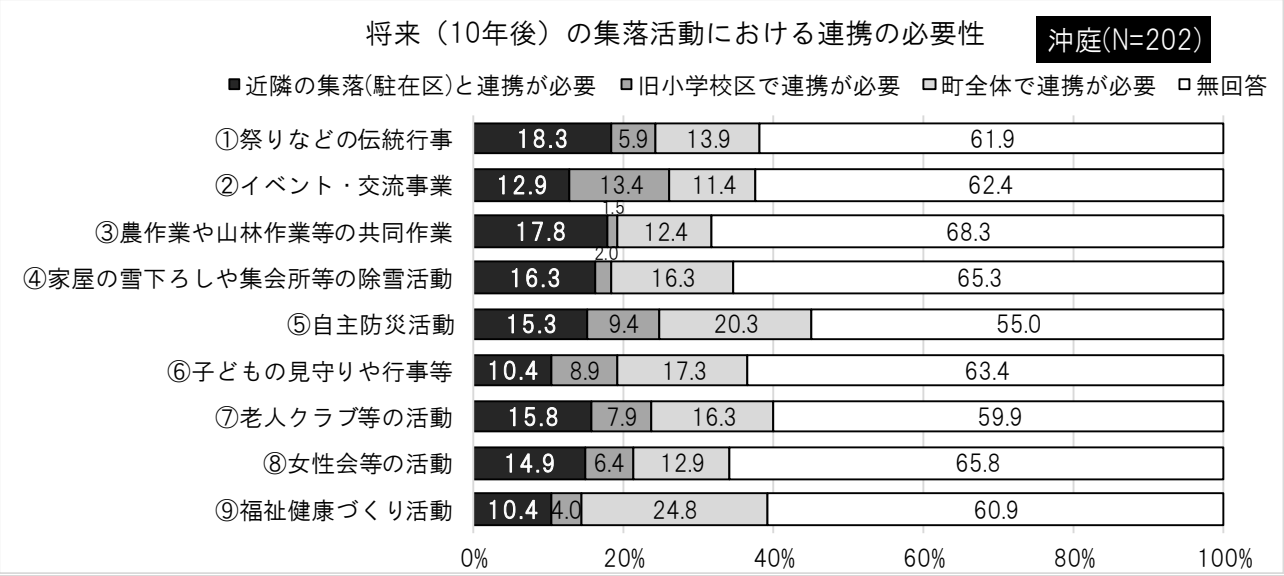
将来的に(概ね 10 年後くらいに)、集落単独ではなく近隣集落や旧小学校区、あるいは町全体で連携して実施する必要があると考えられる集落活動について見ると、全般的に無回答が多く、いずれの項目に対しても半数以上を占めるが、回答のあったものの中では、「祭りなどの伝統行事」や「農作業や山林作業等の共同作業」を除くすべての活動で、町全体で連携が必要という割合が最も高い。

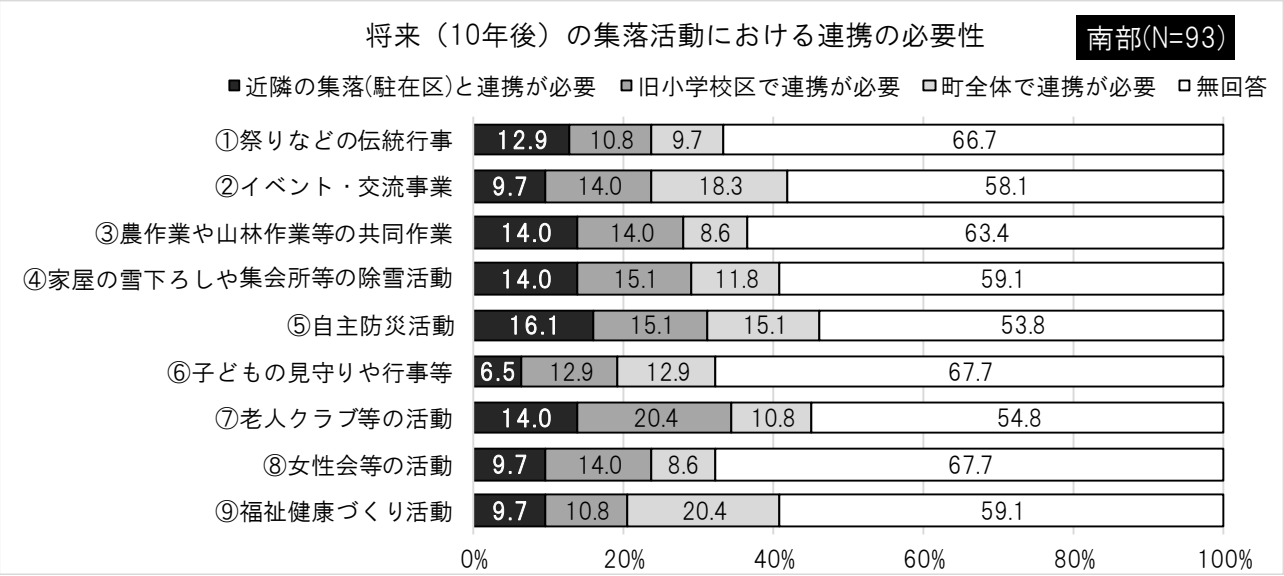
地区別に見ると、白沼では全体的にみて近隣の集落(駐在区)との連携が必要という割合が他地区よりも高くなっている。一方、沖庭では町全体での連携が必要という割合が高い項目が多く、南部では旧小学校区での連携が必要という項目が多い傾向が見られる。

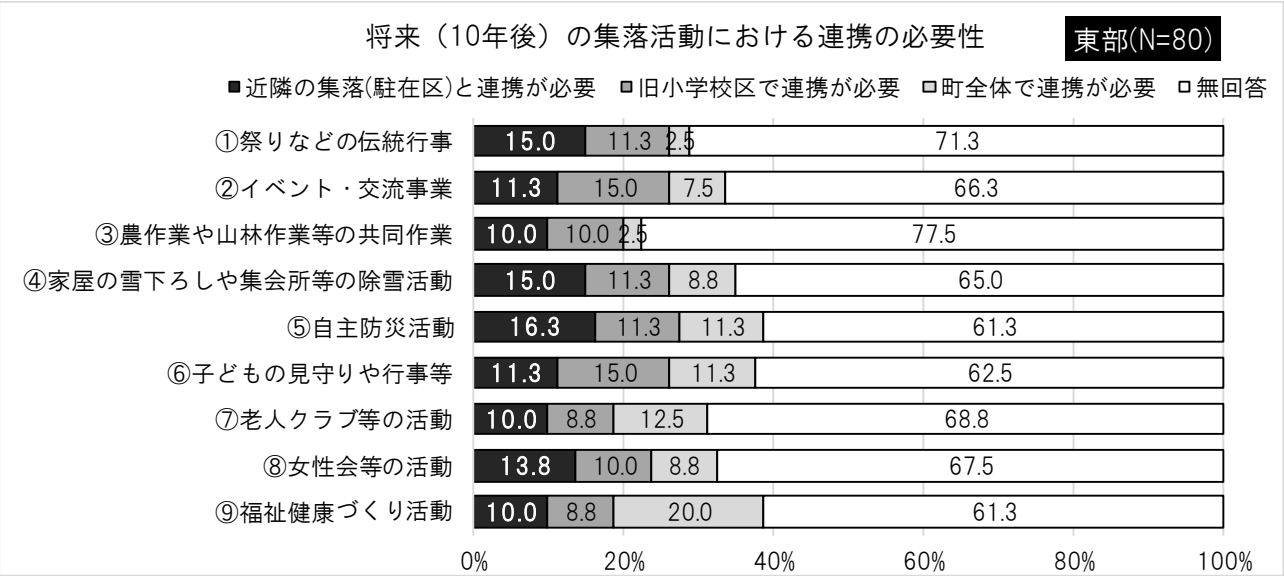
なお、「祭りなどの伝統行事」については近隣の集落（駐在区）との連携が必要という割合が、また「福祉健康づくり活動」は町全体での連携が必要という割合がどの地区でも高い。

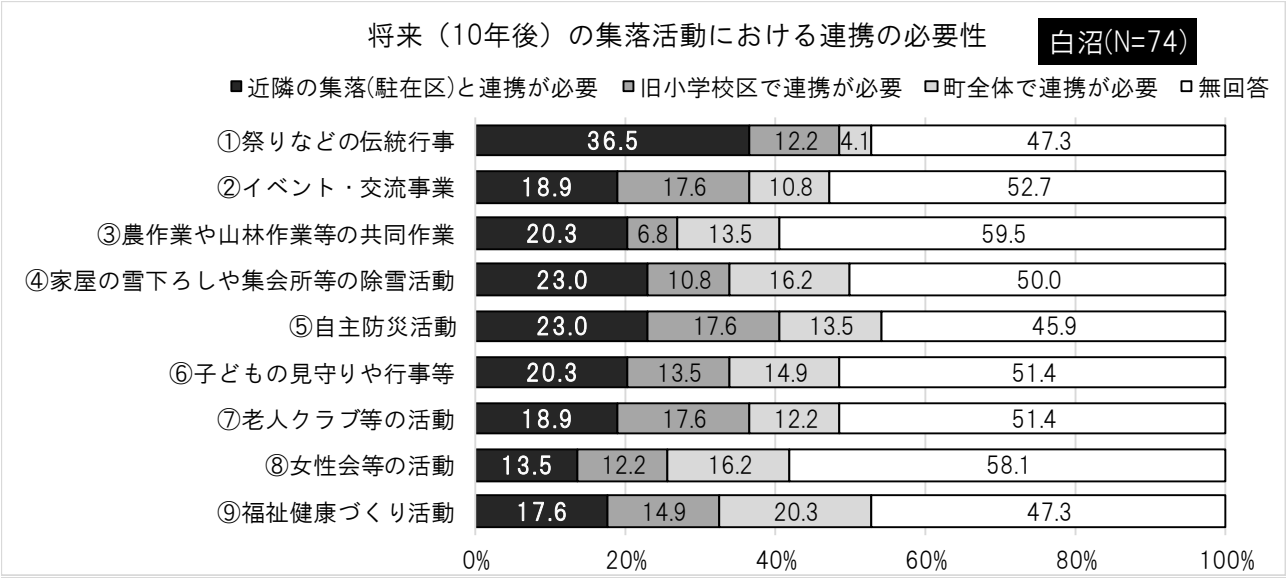


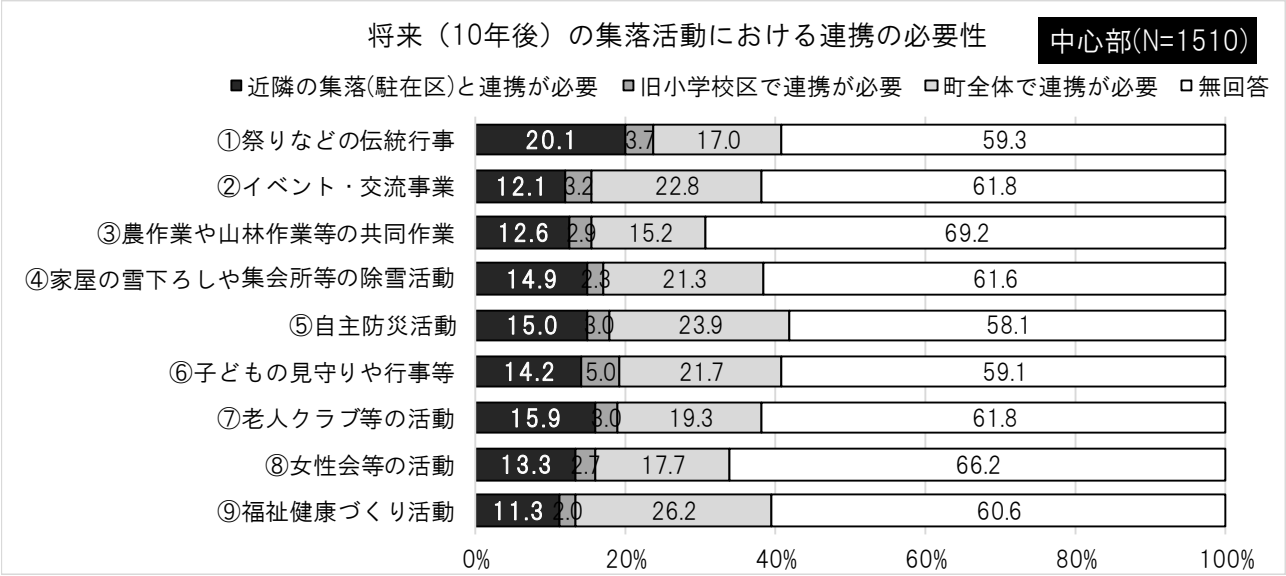




将来（10年後）の集落活動における連携の必要性
沖庭(N=202)
■近隣の集落(駐在区)と連携が必要 ■旧小学校区で連携が必要 □町全体で連携が必要 □無回答
①祭りなどの伝統行事 18.3 5.9 13.9 61.9
②イベント・交流事業 12.9 13.4 11.4 62.4
③農作業や山林作業等の共同作業 17.8 1.5 12.4 68.3
④家屋の雪下ろしや集会所等の除雪活動 16.3 2.0 16.3 65.3
⑤自主防災活動 15.3 9.4 20.3 55.0
⑥子どもの見守りや行事等 10.4 8.9 17.3 63.4
⑦老人クラブ等の活動 15.8 7.9 16.3 59.9
⑧女性会等の活動 14.9 6.4 12.9 65.8
⑨福祉健康づくり活動 10.4 4.0 24.8 60.9
0% 20% 40% 60% 80% 100%


将来（10年後）の集落活動における連携の必要性
南部(N=93)
■近隣の集落(駐在区)と連携が必要 ■旧小学校区で連携が必要 □町全体で連携が必要 □無回答
①祭りなどの伝統行事 12.9 10.8 9.7 66.7
②イベント・交流事業 9.7 14.0 18.3 58.1
③農作業や山林作業等の共同作業 14.0 14.0 8.6 63.4
④家屋の雪下ろしや集会所等の除雪活動 14.0 15.1 11.8 59.1
⑤自主防災活動 16.1 15.1 15.1 53.8
⑥子どもの見守りや行事等 6.5 12.9 12.9 67.7
⑦老人クラブ等の活動 14.0 20.4 10.8 54.8
⑧女性会等の活動 9.7 14.0 8.6 67.7
⑨福祉健康づくり活動 9.7 10.8 20.4 59.1
0% 20% 40% 60% 80% 100%


将来（10年後）の集落活動における連携の必要性
東部(N=80)
■近隣の集落(駐在区)と連携が必要 ■旧小学校区で連携が必要 □町全体で連携が必要 □無回答
①祭りなどの伝統行事 15.0 11.3 2.5 71.3
②イベント・交流事業 11.3 15.0 7.5 66.3
③農作業や山林作業等の共同作業 10.0 10.0 2.5 77.5
④家屋の雪下ろしや集会所等の除雪活動 15.0 11.3 8.8 65.0
⑤自主防災活動 16.3 11.3 11.3 61.3
⑥子どもの見守りや行事等 11.3 15.0 11.3 62.5
⑦老人クラブ等の活動 10.0 8.8 12.5 68.8
⑧女性会等の活動 13.8 10.0 8.8 67.5
⑨福祉健康づくり活動 10.0 8.8 20.0 61.3
0% 20% 40% 60% 80% 100%



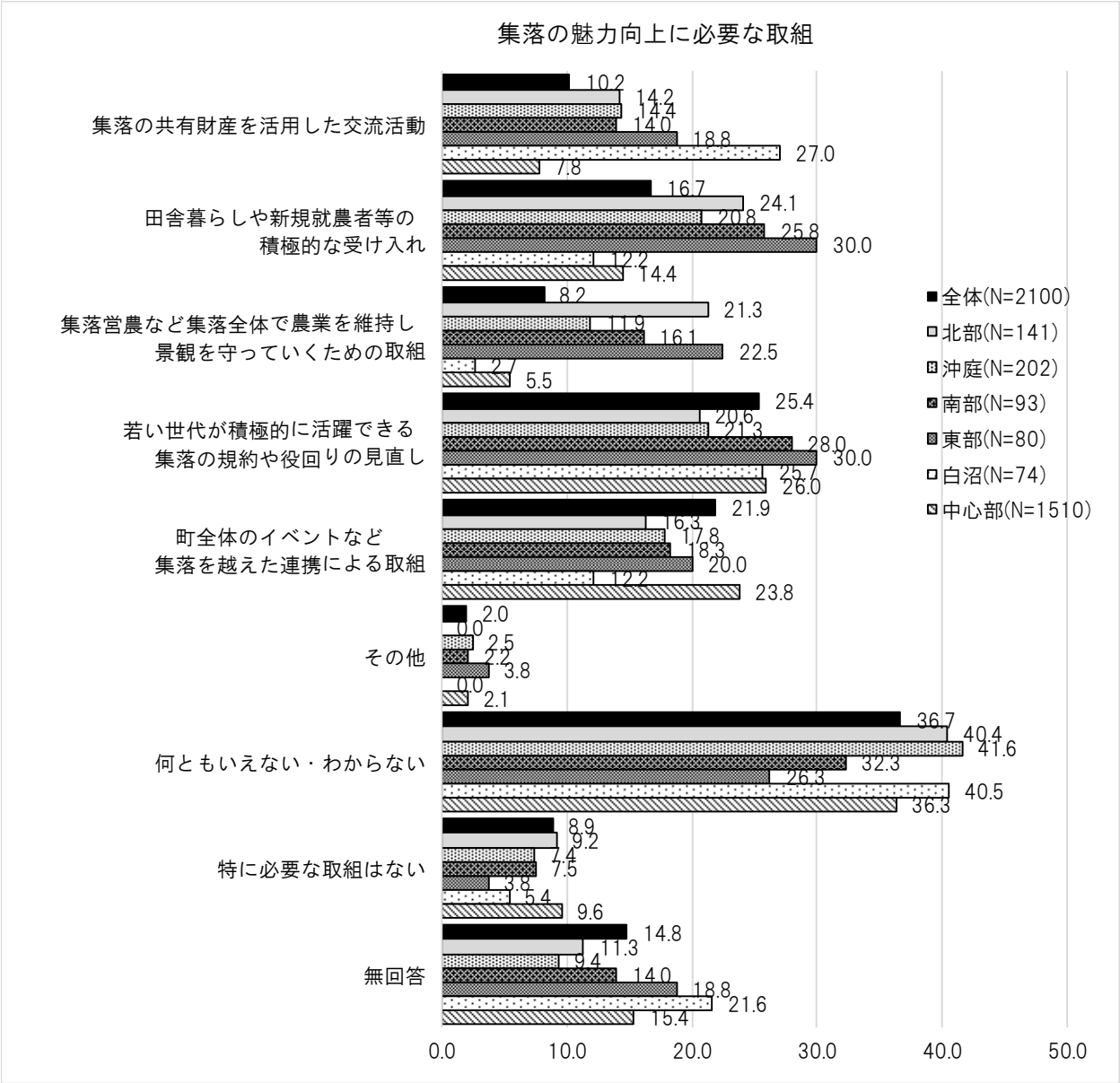



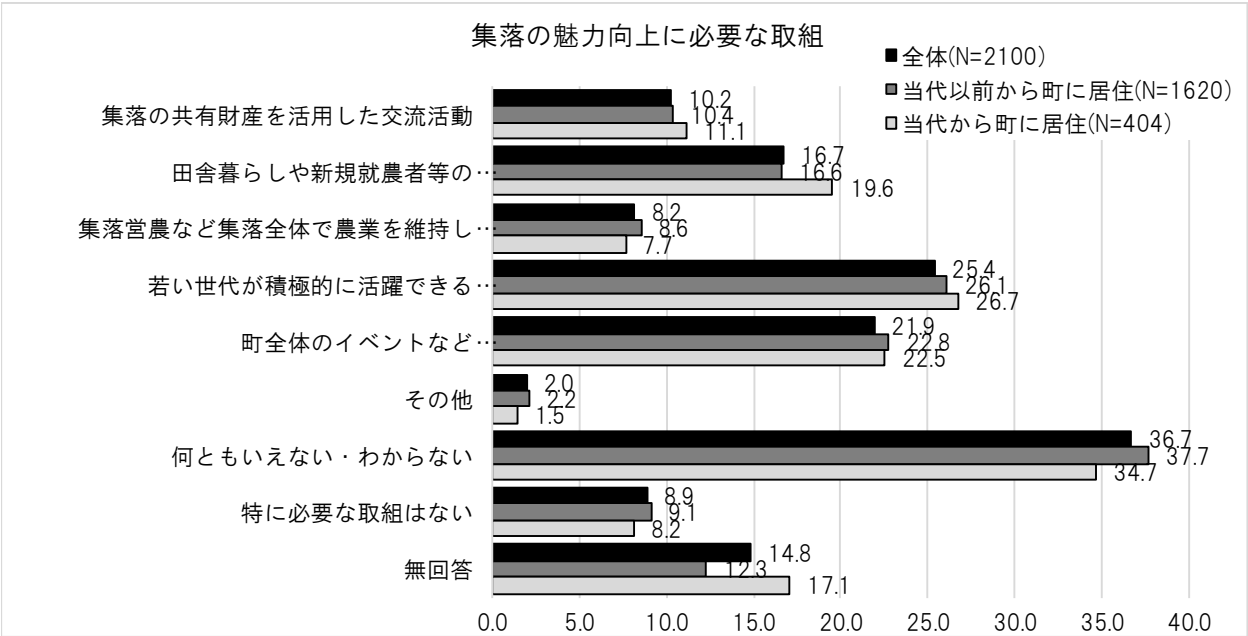

**⑤集落活性化に必要な取組**

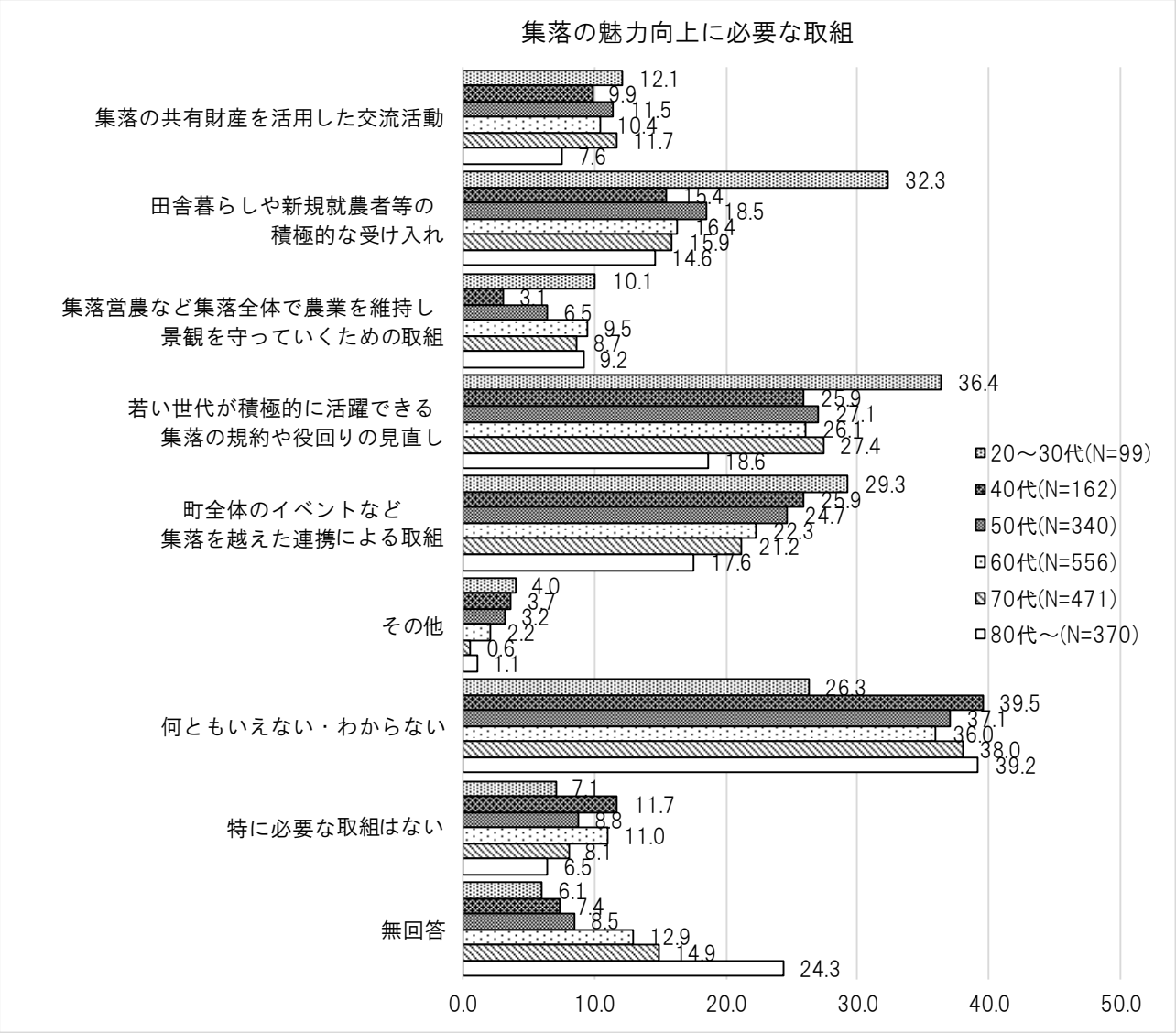
住んでいる集落の魅力を高めるために必要な取組としては、全体で「何ともいえない・わからない」とする世帯が 36.7%と最も多いが、必要な取組として挙げられた項目の中では、「若い世代が積極的に活躍できる集落の規約や役回りの見直し」が 25.4%、「町全体のイベントなど集落を越えた連携による取組」が 21.9%と高い割合となっている。

地区別に見ると、東部では「田舎暮らしや新規就農者等の積極的な受け入れ」と「若い世代が積極的に活躍できる集落の規約や役回りの見直し」がそれぞれ 30.0%と第 1 位となっているほか、白沼では「集落の共有財産を活用した交流活動」が 27.0%と他地区より高い。また、北部や南部、沖庭でも「田舎暮らしや新規就農者等の積極的な受け入れ」の割合が比較的高い。

当代から町に居住しているという世帯では、「田舎暮らしや新規就農者等の積極的な受け入れ」が必要との声がやや多く挙げられている。また、世帯主が 20～30 代の世帯は「田舎暮らしや新規就農者等の積極的な受け入れ」や「若い世代が積極的に活躍できる集落の規約や役回りの見直し」の割合が高い。


集落の魅力向上に必要な取組
集落の共有財産を活用した交流活動
田舎暮らしや新規就農者等の積極的な受け入れ
集落営農など集落全体で農業を維持し景観を守っていくための取組
若い世代が積極的に活躍できる集落の規約や役回りの見直し
町全体のイベントなど集落を越えた連携による取組
その他
何ともいえない・わからない
特に必要な取組はない
無回答
全体(N=2100)
北部(N=141)
沖庭(N=202)
南部(N=93)
東部(N=80)
白沼(N=74)
中心部(N=1510)
0.0
10.0
20.0
30.0
40.0
50.0


集落の魅力向上に必要な取組
全体(N=2100)
当代以前から町に居住(N=1620)
当代から町に居住(N=404)
集落の共有財産を活用した交流活動
田舎暮らしや新規就農者等の…
集落営農など集落全体で農業を維持し…
若い世代が積極的に活躍できる…
町全体のイベントなど…
その他
何ともいえない・わからない
特に必要な取組はない
無回答
0.0
5.0
10.0
15.0
20.0
25.0
30.0
35.0
40.0

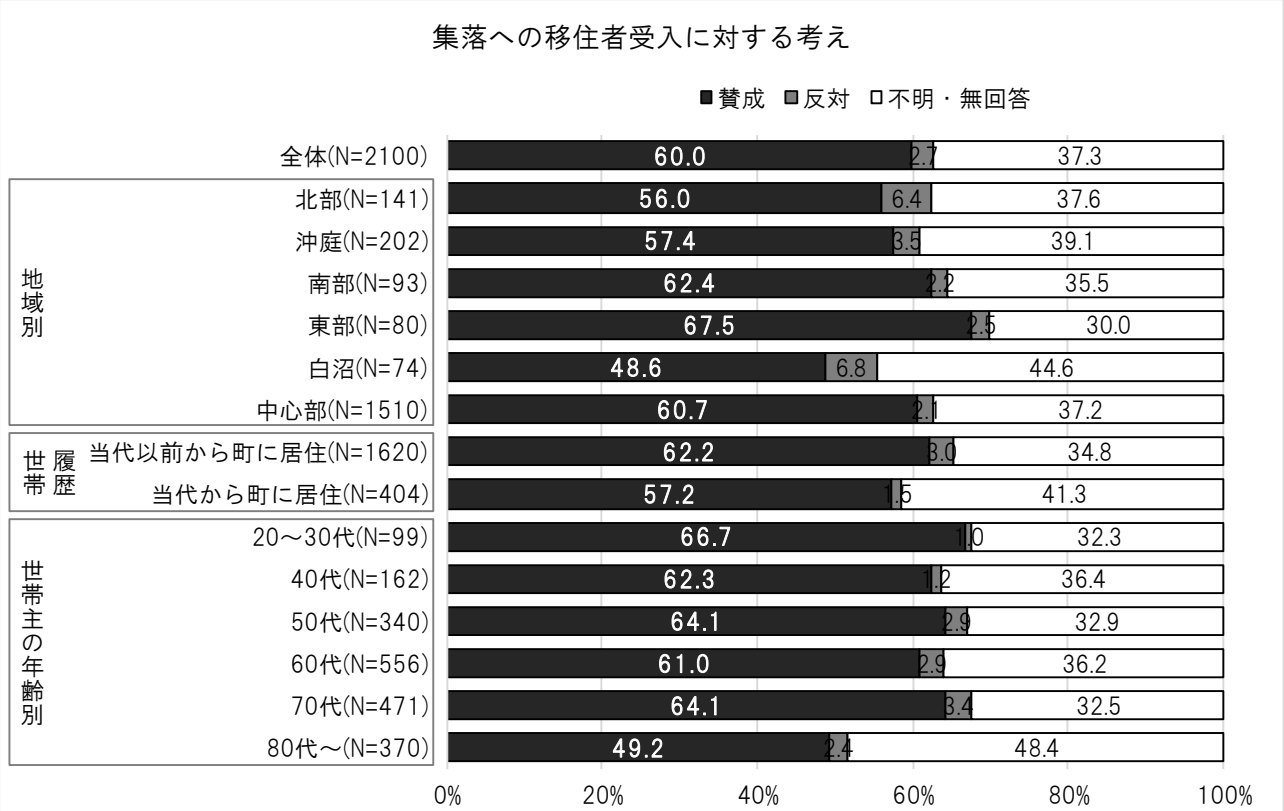

集落の魅力向上に必要な取組
集落の共有財産を活用した交流活動
12.1
9.9
11.5
10.4
11.7
7.6
田舎暮らしや新規就農者等の
積極的な受け入れ
32.3
15.4
18.5
16.4
15.9
14.6
集落営農など集落全体で農業を維持し
景観を守っていくための取組
10.1
3.1
6.5
9.5
8.7
9.2
若い世代が積極的に活躍できる
集落の規約や役回りの見直し
36.4
25.9
27.1
26.1
27.4
18.6
町全体のイベントなど
集落を越えた連携による取組
29.3
25.9
24.7
22.3
21.2
17.6
その他
4.0
3.7
3.2
2.2
0.6
1.1
何ともいえない・わからない
26.3
39.5
37.1
36.0
38.0
39.2
特に必要な取組はない
7.1
11.7
8.8
11.0
8.1
6.5
無回答
6.1
7.4
8.5
12.9
14.9
24.3
20～30代(N=99)
40代(N=162)
50代(N=340)
60代(N=556)
70代(N=471)
80代～(N=370)
0.0
10.0
20.0
30.0
40.0
50.0

### ⑥集落への移住者受入に対する考えと必要な施策

住んでいる集落に移住者を受け入れることに対する考えについて、選択肢から大きく賛成か反対かに分けて見ると、全体では約 6 割が賛成、すなわち集落に移住者が来る（増える）こと自体には賛成との見解を示しており、反対は 2.7%とわずかではあるが、不明や無回答も 37.3%ある。

地区別に見ると、白沼だけは、移住者が来る（増える）こと自体には賛成という割合が 5 割に満たない。

世帯主の年齢別では、世帯主が 80 代以上の世帯以外では賛成の割合が 6 割を超えている。

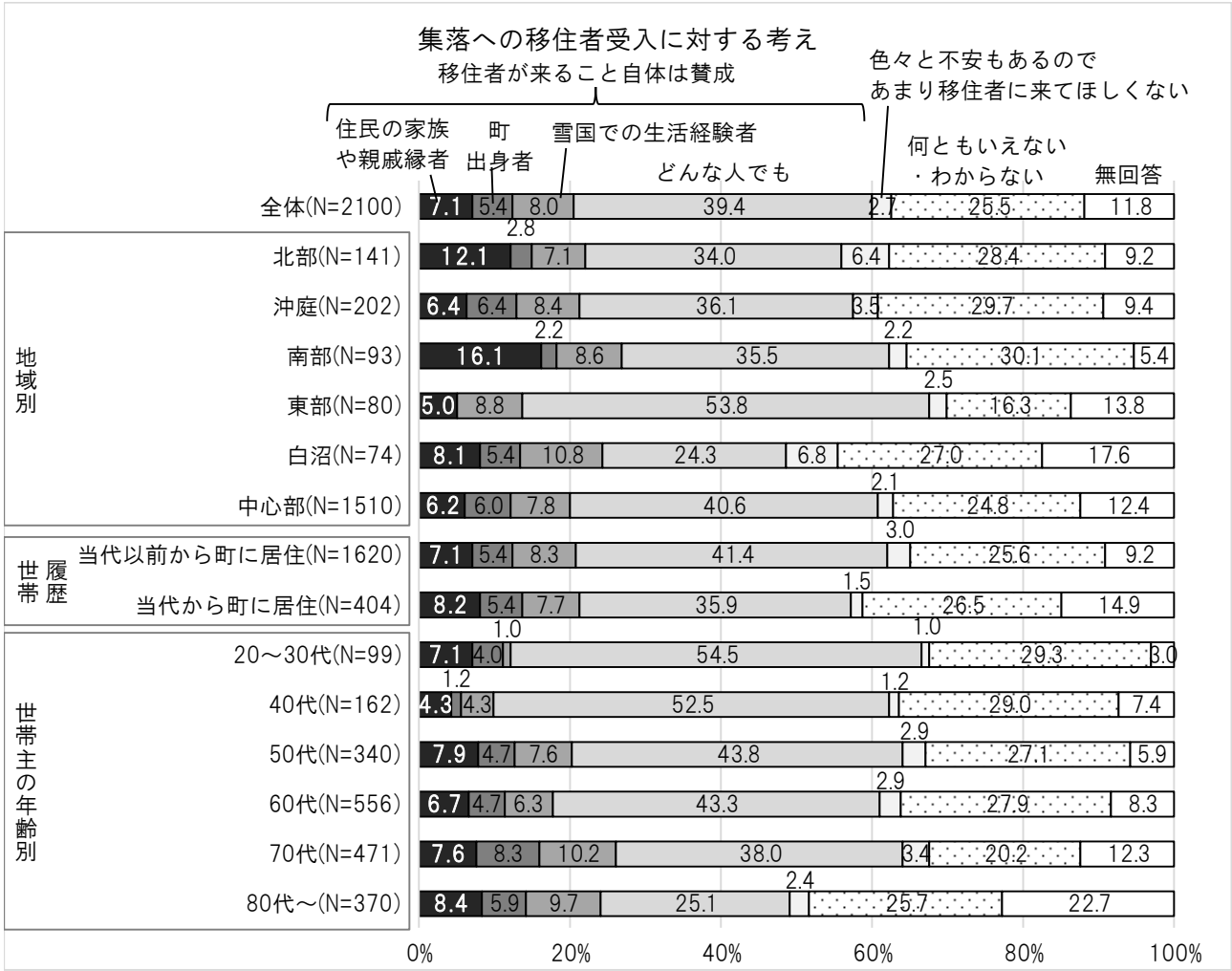


居住集落に移住者が来る（増える）こと自体は賛成という回答について、その内訳を見ると、「どんな人でも集落（駐在区）の住民と協力する気持ちがある人なら住んでほしい」が39.4%と最も多く、次いで「小国町の出身かどうかにはこだわらないが、できれば雪国での生活経験のある人に住んでほしい」が8.0%であり、「できれば集落住民の家族や親戚縁者に住んでほしい」（7.1%）や「できれば小国町出身の人に住んでほしい」（5.4%）といった声よりも高い。

地区別に見ると、南部では「できれば集落住民の家族や親戚縁者に住んでほしい」が16.1%と高い割合になっている一方、東部では「どんな人でも集落（駐在区）の住民と協力する気持ちがある人なら住んでほしい」が53.8%と半数を超えている。

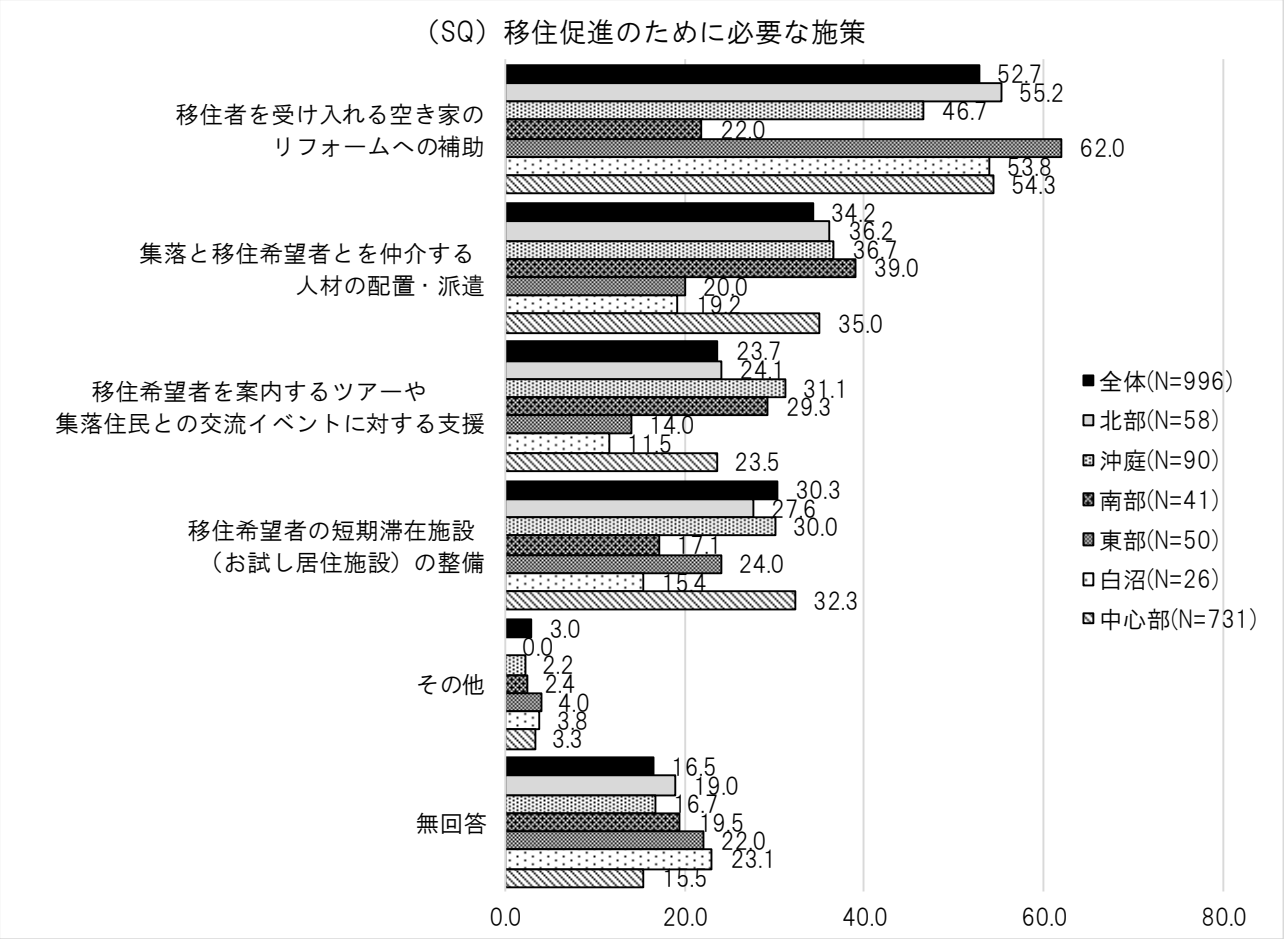
世帯履歴別に見ると、当代から町に居住している世帯の方が、移住者の受入れに対してやや消極的であるものの、あまり大きな差は見られない。

世帯主の年齢別に見ると、「どんな人でも集落（駐在区）の住民と協力する気持ちがある人なら住んでほしい」は世帯主が20～40代の若い世帯で5割を超えている。一方、世帯主が70代以上の世帯では、「小国町の出身かどうかにはこだわらないが、できれば雪国での生活経験のある人に住んでほしい」の割合が他地区と比べてやや高く、1割前後を占めている。



住んでいる集落に移住者が来る（増える）こと自体は賛成という世帯の中でも、「小国町の出身かどうかにはこだわらないが、できれば雪国での生活経験のある人に住んでほしい」（8.0%）又は「どんな人でも集落（駐在区）の住民と協力する気持ちがある人なら住んでほしい」（39.4%）と回答した世帯に対して、希望するような移住者の受入れを促進していくために行政に期待する施策を聞いたところ、全体では「移住者を受け入れる空き家のリフォームへの補助」が 52.7%と最もニーズが高く、次いで「集落と移住希望者とを仲介する人材の配置・派遣」が 34.2%、「移住希望者の短期滞在施設（お試し居住施設）の整備」が 30.3%となっている。

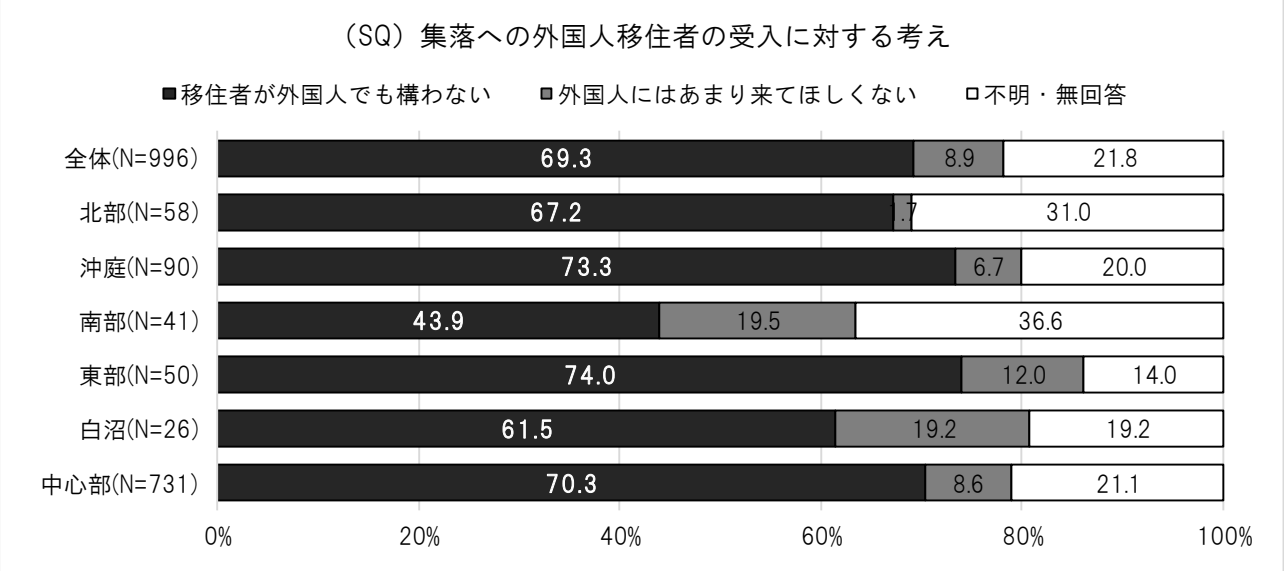
地区別に見ると、ほとんどは全体と同じ回答傾向であるが、南部だけは、第 1 位が「集落と移住希望者とを仲介する人材の配置・派遣」（39.0%）、第 2 位が「移住希望者を案内するツアーや集落住民との交流イベントに対する支援」（29.3%）となっている。

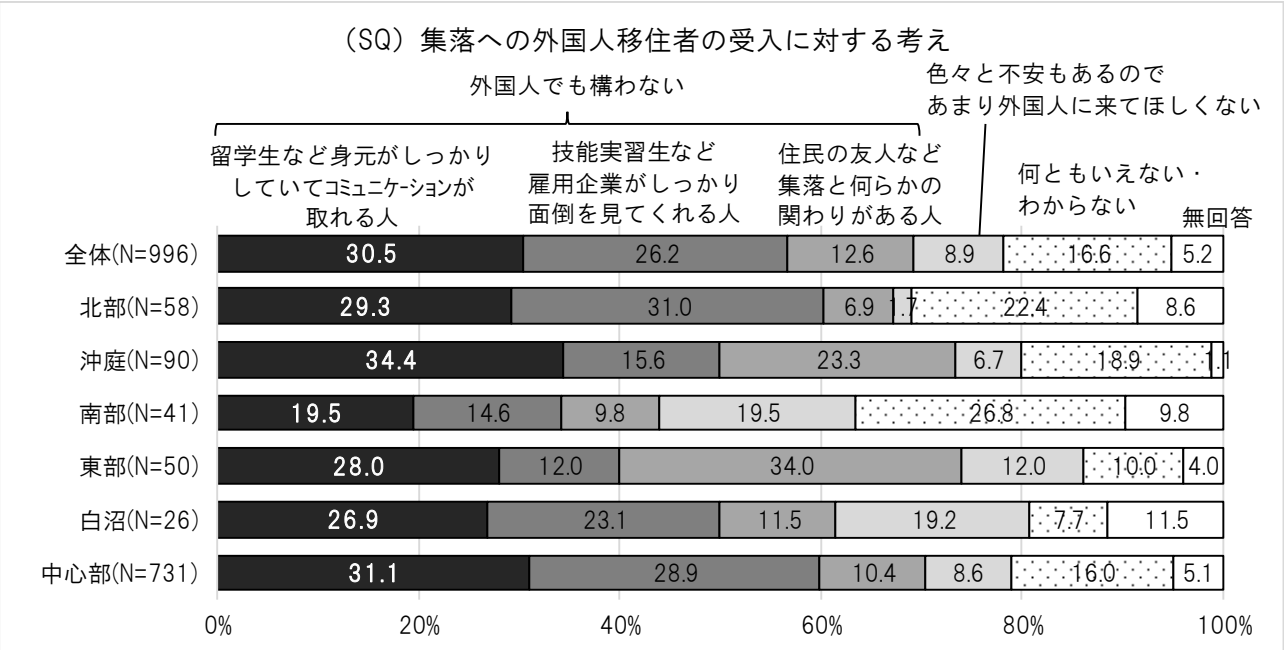


住んでいる集落に移住者が来る（増える）こと自体は賛成という世帯の中でも、「小国町の出身かどうかにはこだわらないが、できれば雪国での生活経験のある人に住んでほしい」（8.0%）又は「どんな人でも集落（駐在区）の住民と協力する気持ちがある人なら住んでほしい」（39.4%）と回答した世帯に対して、集落への外国人移住者の受入れに対する考えを聞いたところ、全体では約 7 割（69.3%）の世帯が移住者は外国人でも構わないとしている。

地区別に見ると、南部では外国人でも構わないという割合が 43.9%と他地区より低い。また南部と白沼では、外国人にはあまり来て（住んで）ほしくないという割合が 2 割近くとやや高くなっている。

集落への移住者が外国人でも構わないという回答の内訳を見ると、「留学生など身元がしっかりしていてある程度コミュニケーションがとれる人なら」が 30.5%と最も多く、次いで「町内企業の労働者や技能実習生で、企業がしっかり面倒を見てくれるなら」が 26.2%となっている。



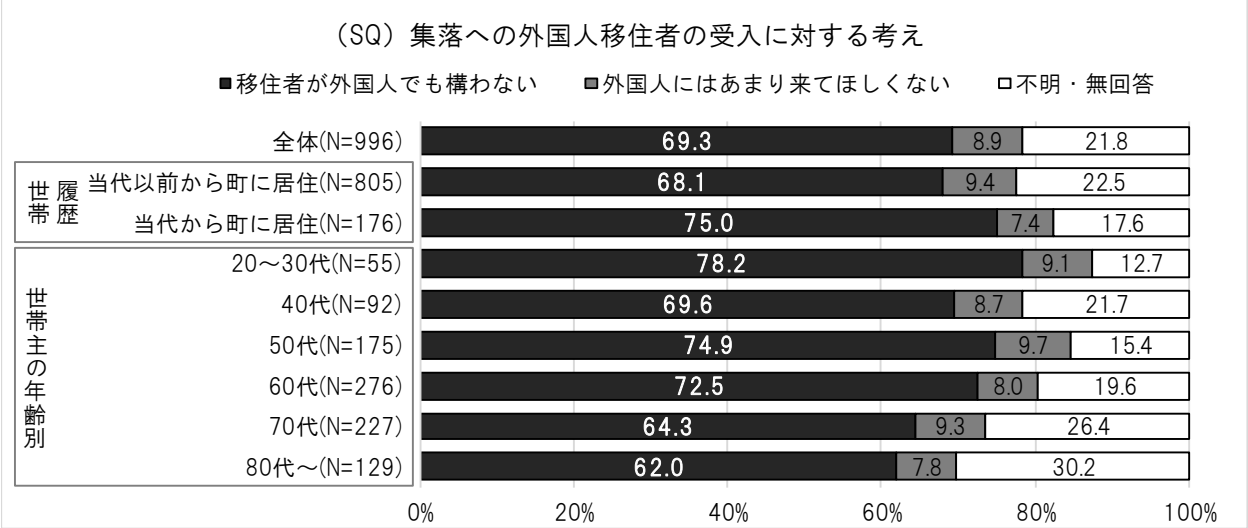



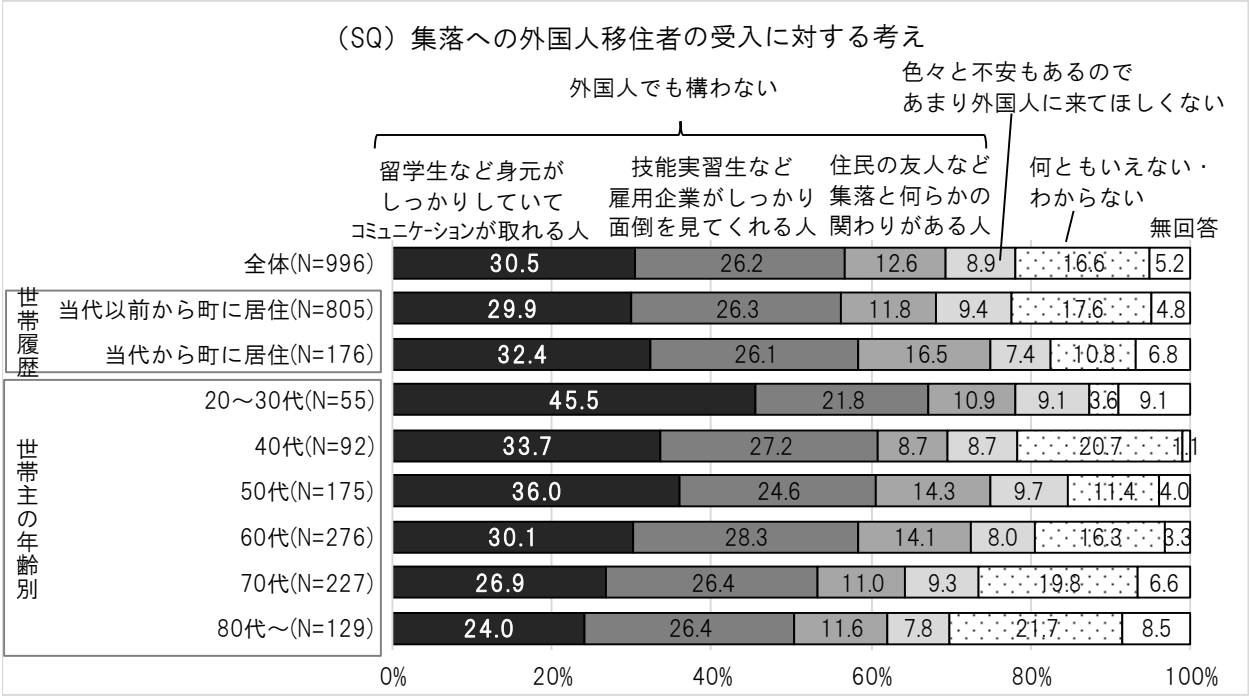
集落への外国人移住者の受入に対する考えについて世帯履歴別に見ると、当代から町に居住しているという世帯において集落への移住者が外国人でも構わないとする割合が若干高い。

集落への移住者が外国人でも構わないという回答の内訳を見ると、「集落住民の友人や知人など、集落（駐在区）に何らかのつながり・関わりがある人がいるのであれば」という割合は、当代から町に居住しているという世帯においてやや高くなっている。

世帯主の年齢別に見ると、集落への移住者が外国人でも構わないとする割合は世帯主が 20～30 代の世帯で 78.2%と最も高いが、世帯主が 50 代・60 代の世帯でも 7 割超が外国人でも構わないとしている。

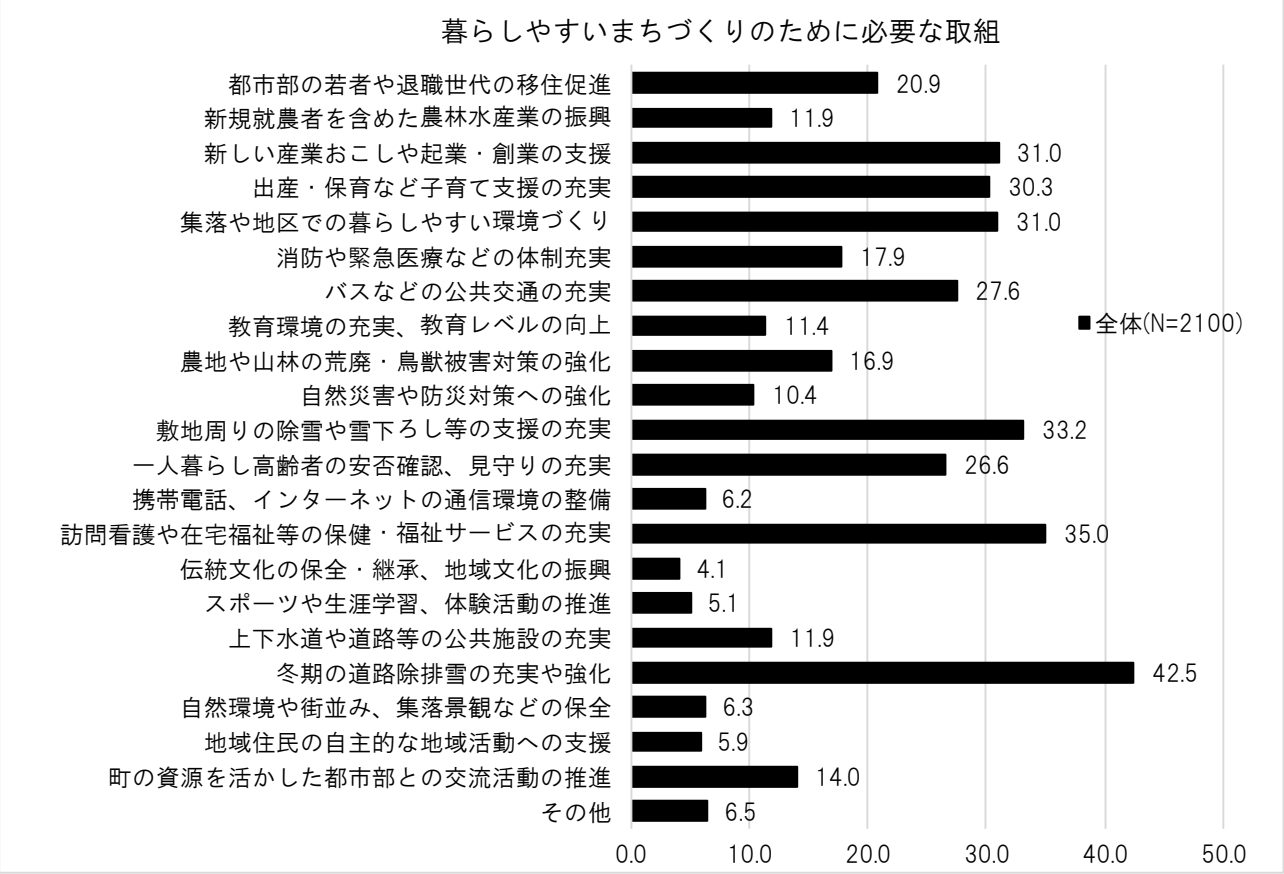
集落への移住者が外国人でも構わないという回答の内訳を見ると、「留学生など身元がしっかりしていてある程度コミュニケーションがとれる人なら」は世帯主が 20～30 代の世帯で 45.5%と最も高く、世帯主が 50 代・60 代の世帯は「集落住民の友人や知人など、集落（駐在区）に何らかのつながり・関わりがある人がいるのであれば」の割合が比較的高い。



### オ　今後のまちづくり

今後町で暮らしやすくしていくために必要な取組として、全体では「冬期の道路除排雪の充実・強化」が 42.5%で第 1 位、次いで「訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実」が 35.0%、「敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実」が 33.2%の順となっている。




上位 5 項目に挙げられた取組を地区別で比較（図表 2-4）すると、中心部及び北部、南部では「冬期の道路除排雪の充実や強化」が、沖庭、東部、白沼では「集落や地区での暮らしやすい環境づくり」が第 1 位である。中心部で第 2 位の「敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実」は、周辺部では第 3 位以内に入っておらず、東部では、唯一「出産・保育など子育て支援の充実」が第 2 位に挙げられている。このほか、周辺部では「バスなど公共交通の充実」や「保健・福祉サービスの充実」も上位に挙げられている。

世帯主の年齢別に、上位 5 項目を比較（図表 2-5）すると、ライフスタイルに応じて必要な取組として上位に挙げられているものが異なる傾向が見られる。

20～30 代では「出産・保育など子育て支援の充実」や「新しい産業おこしや起業・創業の支援」が上位に挙げられているが、世帯主の年齢が 40～50 代になるにつれてこれらの順位は下がり、世帯主が 60 代以上の世帯では、「訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実」、「敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実」等が上位に挙げられている。

なお、世帯主が 40 代以上の世帯では、いずれも「冬期の道路除排雪の充実や強化」が第 1 位に挙げられている。

図表２－４ 今後町で暮らしやすくしていくために必要な取組　地区別上位５項目

| 順 | 北部(N=141) | 沖庭(N=202) | 南部(N=93) | 東部(N=80) | 白沼(N=74) | 中心部(N=1510) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 冬期の道路除排雪の充実や強化(48.2%) | 集落や地区での暮らしやすい環境づくり(39.1%) | 冬期の道路除排雪の充実や強化(44.1%) | 集落や地区での暮らしやすい環境づくり(43.8%) | 集落や地区での暮らしやすい環境づくり(40.5%) | 冬期の道路除排雪の充実や強化(43.5%) |
| 2 | 集落や地区での暮らしやすい環境づくり(47.5%) | 訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実(37.6%) | 集落や地区での暮らしやすい環境づくり(40.9%) | 出産・保育など子育て支援の充実(35.0%) | バスなどの公共交通の充実(40.5%) | 敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実(34.8%) |
| 3 | 訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実(41.1%) | 冬期の道路除排雪の充実や強化(35.1%) | 訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実(39.8%) | バスなどの公共交通の充実(35.0%) | 冬期の道路除排雪の充実や強化(40.5%) | 訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実(34.6%) |
| 4 | 農地や山林の荒廃・鳥獣被害対策の強化(34.8%) | 一人暮らし高齢者の安否確認、見守りの充実(32.2%) | バスなどの公共交通の充実(35.5%) | 冬期の道路除排雪の充実や強化(31.3%) | 農地や山林の荒廃・鳥獣被害対策の強化(36.5%) | 新しい産業おこしや起業・創業の支援(33.0%) |
| 5 | 敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実(30.5%) | 新しい産業おこしや起業・創業の支援(30.7%) | 農地や山林の荒廃・鳥獣被害対策の強化(35.5%) | 訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実(26.3%) | 敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実(35.1%) | 出産・保育など子育て支援の充実(32.9%) |

図表２－５ 今後町で暮らしやすくしていくために必要な取組　世帯主の年齢別上位５項目

| 順 | 世帯主の年齢別 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 20～30 代(N=99) | 40 代(N=162) | 50 代(N=340) | 60 代(N=556) | 70 代(N=471) | 80 代～(N=370) |
| 1 | 出産・保育など子育て支援の充実(55.6%) | 冬期の道路除排雪の充実や強化(45.1%) | 冬期の道路除排雪の充実や強化(44.7%) | 冬期の道路除排雪の充実や強化(45.3%) | 冬期の道路除排雪の充実や強化(44.4%) | 冬期の道路除排雪の充実や強化(42.2%) |
| 2 | 新しい産業おこしや起業・創業の支援(33.3%) | 出産・保育など子育て支援の充実(41.4%) | 新しい産業おこしや起業・創業の支援(35.3%) | 訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実(37.8%) | 訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実(40.8%) | 訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実(39.2%) |
| 3 | 都市部の若者や退職世代の移住促進(32.3%) | 消防や緊急医療などの体制充実(31.5%) | 出産・保育など子育て支援の充実(33.8%) | 敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実(35.3%) | 敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実(38.4%) | バスなどの公共交通の充実(35.7%) |
| 4 | 消防や緊急医療などの体制充実(26.3%) | 新しい産業おこしや起業・創業の支援(29.6%) | 敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実(33.2%) | 集落や地区での暮らしやすい環境づくり(34.9%) | 集落や地区での暮らしやすい環境づくり(35.9%) | 集落や地区での暮らしやすい環境づくり(32.2%) |
| 5 | 敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実(24.2%) | 教育環境の充実、教育レベルの向上(25.9%) | 訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実(30.0%) | 新しい産業おこしや起業・創業の支援(30.8%) | 新しい産業おこしや起業・創業の支援(34.2%) | 敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実(31.6%) |

(4) アンケート票

## 小国町における集落機能の実態に関する住民アンケート調査

令和元年９月　　小国町・一般財団法人地方自治研究機構

**農山村地域では、古来より、集落の住民同士が互いに助け合って山林を管理したり、共同で農作業を行ったり、あるいは冠婚葬祭や道路の除雪など生活の様々な面で互いに助け合ってきました。しかし、人口減少や高齢化が進むことにより、こうした従来の集落活動やコミュニティ活動を続けていくのが難しくなる場面もみられるようになってきました。**

**そこで小国町では、町民のみなさんがお住まいの地域それぞれの地区・集落の状況や生活上お感じになっていることなどをお聞きするために、アンケート調査を実施することといたしました。**

**なにとぞ、調査の趣旨をご理解の上、ご協力を賜りますようお願いいたします。**

◆ このアンケート調査は、小国町にお住まいのすべての世帯にお願いしています。
◆ **質問には、世帯としてお答えください**（どなたがご記入いただいても結構です）。
◆ それぞれの質問に対し、あてはまる番号に○印をつけてください。また、〔　　〕の欄には、具体的に記入してください。
◆ お答えいただいた内容は、本調査の目的以外には使用いたしません。また、ご回答は統計的に処理するため、それぞれのご回答が公表されることはありません。
◆ ご記入いただいたアンケート調査票は、本調査票が入っていた封筒に封入していただき、９月２０日（金）頃までに隣組長さんを通じて駐在員さんに届くようにしてください。
◆ この調査に関するご質問・お問合せは下記までお願いいたします。

小国町役場　総合政策課　〔二馬・片桐・木村〕　TEL：0238-62-2264

### はじめに、あなたの世帯についておたずねします

**問1. 世帯主の年齢を右欄にご記入ください。**　　（　　）歳

**問2. 世帯主のご職業をお答えください。（○はひとつ）※兼業の方は主な職業に○をつけて下さい**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 農林業者 | 2 | 自営業者(1以外) | 3 | 会社員 | 4 | 公務員 |
| 5 | 団体職員 | 6 | 専業主婦(夫) | 7 | パート･アルバイト | 8 | 学生 |
| 9 | 無職 | 10 | その他(　　) | | | | |

**問3. お住まいの地区について、1から6の中からひとつに○をつけてください。また1から5までの地区にお住まいの方は、お住まいの駐在区についても○をつけてください。**

1　北部地域　→　a 五味沢　b 石滝　c 三ヶ字　d 六ヶ字　e 越長
2　沖庭地域　→　a 今市　b 尻無沢　c 舟渡　d 古田　e 舘　f 小渡
3　南部地域　→　a 市野沢　b 足水中里　c 百子沢　d 樽口　e 足野水　f 玉川　g 玉川新田　h 片貝　i 中田山崎　j 玉川中里　k 泉岡　l 小玉川　m 長者原
4　東部地域　→　a 上叶水　b 下叶水　c 下大石沢　d 上大石沢　e 新股　f 河原角
5　白沼地域　→　a 沼沢一　b 沼沢二　c 間瀬　d 白子沢
6　町中心部(上記以外)

**問4. あなたの世帯の人数を教えてください。**

| | | |
|---|---|---|
| 世帯全体 | 男（　　）人 | 女（　　）人 |
| うち 14 歳以下 | 男（　　）人 | 女（　　）人 |
| うち 65 歳以上 | 男（　　）人 | 女（　　）人 |

**問5. あなたの世帯の構成を教えてください。（○はひとつ）**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 単独世帯（一人暮らし） | 2 | 夫婦のみ世帯でともに 75 歳以上 |
| 3 | 夫婦のみ世帯でともに 65 歳以上（2は除く） | 4 | 夫婦のみ世帯（2・3以外） |
| 5 | 二世代世帯（夫婦と子の世帯） | 6 | 二世代世帯（男親又は女親と子の世帯） |
| 7 | 三世代世帯（親と子と孫）の世帯 | 8 | 兄弟姉妹のみの世帯 |
| 9 | その他（　　） | | |

**問6. あなたの世帯がお住まいの住宅の種類を教えてください。（○はひとつ）**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 持ち家 | 2 | 公営・公社の借家 | 3 | 民営の借家 |
| 4 | 給与住宅（社宅、官舎等） | 5 | 間借り | | |

## 小国町でのあなたの世帯の継承状況などについておたずねします

**問7. あなたの世帯は、小国町に代々続いている家ですか。（○はひとつ）**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 世帯主より前から小国町で暮らしている | 2 | 世帯主の代から小国町で暮らしている |

**問8. 現在同居している家族以外に、町内に住んでいる家族はいますか。（○はいくつでも）**
**※世帯主からみた続柄でお答えください。**

| | |
|---|---|
| 1 | 町内に親（義親）が住んでいる **（→1を選んだ場合は SQ1 にお答え下さい）** |
| 2 | 町内に子供（孫と同居している場合を含む）が住んでいる **（→2を選んだ場合は SQ2 にお答え下さい）** |
| 3 | 町内に兄弟姉妹（配偶者の兄弟姉妹）が住んでいる |
| 4 | 町内には他に家族は住んでいない（同居している方以外に家族がいない場合を含む） |

**SQ1　あなたの世帯では、町内の親（義親）の家をどのくらいの頻度で訪れますか。（○はひとつ）**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ほぼ毎日 | 2 | 週1回以上 | 3 | 月1回以上 |
| 4 | 年に数回程度 | 5 | ほとんど訪ねない | | |

**SQ2　町内に住んでる子供があなたの世帯を訪れる頻度はどれくらいですか。（○はひとつ）**
**※該当する子供が複数いる場合は、訪れる頻度の高い方を選んでください。**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ほぼ毎日 | 2 | 週1回以上 | 3 | 月1回以上 |
| 4 | 年に数回程度 | 5 | ほとんど訪ねてこない | | |

**問9. 現在同居している家族以外に、町外で暮らしている家族はいますか。（○はいくつでも）**
**※世帯主からみた続柄でお答えください。**

| | |
|---|---|
| 1 | 親（義親）が町外で暮らしている |
| 2 | 子供（孫を含む）が町外で暮らしている **（→2を選んだ場合は SQ1 にお答え下さい）** |
| 3 | 兄弟姉妹（配偶者の兄弟姉妹）が町外で暮らしている |
| 4 | 町外で暮らしている家族はいない（同居している方以外に家族がいない場合を含む） |

**SQ1　町外で暮らしている子供はどのくらいの頻度であなたの世帯を訪れますか。（○はひとつ）**
**※該当する子供が複数いる場合は、訪れる頻度の高い方を選んでください。**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ほぼ毎日 | 2 | 週1回以上 | 3 | 月1回以上 |
| 4 | 年に数回程度 | 5 | ほとんど訪ねてこない | | |

**問10. 今お住まいの家は、今後どうする予定ですか。（○はひとつ）**

| | |
|---|---|
| 1 | 世帯主の子供の代に引き継ぐ予定 **（→1を選んだ場合は SQ1 にお答え下さい）** |
| 2 | 世帯主の親族（子供以外）に引き継ぐ予定 |
| 3 | 世帯主の代で引き払う予定 **（→3を選んだ場合は SQ2 にお答え下さい）** |
| 4 | 持ち家だが、どうするかはまだ決まっていない |
| 5 | 持ち家ではないので、なんとも言えない |

**SQ1　今お住まいの家を引き継ぐ予定の「子供」について詳しくお教えください。（○はひとつ）**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 同居している子供が継いでくれる予定 | 2 | 町内に住んでいる子供が継いでくれる予定 |
| 3 | 町外で暮らしている子供が継いでくれる予定 | 4 | 1～3以外（　　） |
| 5 | 子供の代に引き継ぐ予定だが、実際にどの子が継ぐかはまだわからない | | |

**SQ2　世帯主の代で今の家を引き払った後の生活はどうする予定ですか。（○はひとつ）**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 町内に住んでいる親（義親）の家に移る予定 | 2 | 町内に住んでいる子供の家に移る予定 |
| 3 | 1・2以外で、町内で転居する予定 | 4 | 町外で暮らしている親（義親）の家に移る予定 |
| 5 | 町外で暮らしている子供の家に移る予定 | 6 | 4・5以外で、町外に転居する予定 |
| 7 | 1～6以外（　　） | 8 | まだわからない・決まっていない |

## 農地や山林の所有・管理状況についておたずねします

**問11. あなたの世帯では、町内に農地を所有していますか。（○はひとつ）**

| | |
|---|---|
| 1 | 所有している（名義が世帯主でない場合も含む） **（→1を選んだ場合は SQ1～3 にお答え下さい）** |
| 2 | 所有していない |

**SQ1　所有面積を右欄にご記入ください。**　　田（　　）アール　畑（　　）アール

**SQ2　あなたの世帯が所有している農地の現在の管理状況はいかがですか。（○はひとつ）**

| | |
|---|---|
| 1 | 自家ですべて耕作・管理している |
| 2 | 大半は自家で耕作・管理しているが、一部は個人又は法人に貸す又は委託している |
| 3 | 大半を個人又は法人に貸して（委託して）いる |
| 4 | 大半は自家で耕作・管理しているが、一部は管理できておらず荒れたままになっている |
| 5 | ほとんど管理できておらず荒れたままである |
| 6 | その他（　　） |

**SQ3　あなたの世帯では、所有している農地を今後どうしたいとお考えですか。（○はひとつ）**

| | |
|---|---|
| 1 | 自家（後継者を含む）で所有し、すべて自家で耕作・管理したい |
| 2 | 自家（後継者を含む）で所有し、一部は自家で耕作・管理するが、一部は他者に貸すか委託したい |
| 3 | 自家（後継者を含む）で所有するが、農作業は全て他者に任せたい（貸す又は委託する） |
| 4 | 自家（後継者を含む）で所有するが、自家で耕作・管理できなくなったらそのまま放置する |
| 5 | 世帯主の代で売却する |
| 6 | 世帯主の代では今のままの管理状態を継続するつもりだが、その後どうするかは後継者に任せる |
| 7 | その他（　　） |

**問12. あなたの世帯では、町内に山林を所有していますか。（○はひとつ）**

| | |
|---|---|
| 1 | 所有している（名義が世帯主でない場合も含む）（→1を選んだ場合はSQ1～3にお答え下さい） |
| 2 | 所有していない |

**SQ1　所有面積を右欄にご記入ください。**　（　　）アール

**SQ2　あなたの世帯が所有している山林の現在の管理状況はいかがですか。（○はひとつ）**

| | |
|---|---|
| 1 | 全て自家で管理し、山林作業も自家で行っている |
| 2 | 全て自家で管理しているが、山林作業は他者（森林組合等）に依頼している |
| 3 | 一部の山林のみ、管理や山林作業を他者（森林組合等）に任せている |
| 4 | 全ての山林の管理及び山林作業を他者（森林組合等）に任せている |
| 5 | 特に何もしていない |
| 6 | その他（　　） |

**SQ3　あなたの世帯では、所有している山林を今後どうしたいとお考えですか。（○はひとつ）**

| | |
|---|---|
| 1 | 自家（後継者を含む）で所有・管理し、山林作業も自家で行いたい |
| 2 | 自家（後継者を含む）で所有・管理するが、山林作業だけは他者に依頼したい |
| 3 | 自家（後継者を含む）で所有するが、管理も山林作業も他者に任せたい |
| 4 | 自分（後継者を含む）で所有するが、特に何もせず、そのまま放置する |
| 5 | 自家（後継者を含む）で土地は所有するが、立木は世帯主の代で売却する |
| 6 | 世帯主の代で土地も立木も売却する |
| 7 | 世帯主の代では今のままの管理状態を継続するつもりだが、その後どうするかは後継者に任せる |
| 8 | その他（　　） |

## お住まいの地区の生活環境についておたずねします

**問13. お住まいの集落（駐在区）での暮らしについて、あなたの世帯ではどのように感じていますか。**

| 以下の①～⑩それぞれについて、1から4のうちあてはまる番号をひとつずつ選び、○をつけてください。 | 生活に支障が出るほど困っている | 不便だが生活に支障が出るほど困っていない | 特に不便は感じていない（困っていない） | わからない |
|---|---|---|---|---|
| ①日用品等の買い物 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ②石油製品（灯油・ガソリン等）の購入 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ③町内の移動・交通 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ④町外への移動・交通 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑤福祉・健康 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑥医療体制・救急医療 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑦雪対策（家屋の雪処理や道路の除排雪） | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑧鳥獣害対策 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑨防災・防犯など暮らしの安全の確保 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑩集落（駐在区）の環境 | 1 | 2 | 3 | 4 |

**問14. では、将来（おおむね10年後くらい）のお住まいの集落での暮らしはどのようになっていると思いますか。**

**以下の①～⑩それぞれについて、1から4のうちあてはまる番号をひとつずつ選び○をつけてください。**

| | 生活に支障が出るほど困る状態になっていると思う | 不便だが生活に支障が出るほど困る状態にはならないと思う | 特に不便は感じず生活に困らない状態だと思う | わからない |
|---|---|---|---|---|
| ①日用品等の買い物 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ②石油製品（灯油・ガソリン等）の購入 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ③町内の移動・交通 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ④町外への移動・交通 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑤福祉・健康 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑥医療体制・救急医療 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑦雪対策（家屋の雪処理や道路の除排雪） | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑧鳥獣害対策 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑨防災・防犯など暮らしの安全の確保 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑩集落（駐在区）の環境 | 1 | 2 | 3 | 4 |

## お住まいの集落での活動状況についておたずねします

**問15. あなたの世帯は、お住まいの集落での共同作業や役まわり、コミュニティ活動などに参加していますか（参加しない代わりに「出不足料」を集落に支払っている場合は、以下では「参加」には含めないでください）。**

**以下の①～⑭それぞれについて、1から5のうちあてはまる番号をひとつずつ選び○をつけてください。**

| | 大体いつも参加している | ときどき参加している | あまり参加していない | まったく参加していない | そのような活動がない |
|---|---|---|---|---|---|
| ①農作業に関する共同作業や助け合い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ②山道の補修、草刈などの山作業 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ③道路側溝の維持・管理（除草、草刈等） | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ④集落内施設や歩道などの除草や雪下ろし | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ⑤高齢者世帯の雪下ろしや冬期における助け合い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ⑥公民館や公園、空き地の清掃や雪下ろし、雪囲い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ⑦共有地などの山林管理（枝打ち、下草刈） | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ⑧神社・仏閣や墓地等の維持・管理 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ⑨結い（ヨイ・ヨイナシ）の精神に基づく互助活動 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ⑩祭りや伝統行事への参加・協力 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ⑪会合や寄合、集会などの開催・参加 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ⑫集落内の婚礼や葬式における助け合い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ⑬ごみ置き場の掃除や管理 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ⑭回覧板等の行政連絡の伝達 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

**問16. 問15で挙げた集落での共同作業や役回り、コミュニティ活動に参加することについて、あなたの世帯ではどのようにお感じになっていますか。（○はひとつ）**

| | | |
|---|---|---|
| 1　全く苦にならない | 2　あまり苦にならない | 3　どちらともいえない |
| 4　やや大変である | 5　とても大変である | |

**問17. 次の作業や活動のうち、現在既に集落単独ではなく近隣の集落（駐在区）と一緒に実施したり、旧小学校区などのコミュニティ単位で連携して実施しているものはありますか。**

| 以下の①～⑩それぞれについて、1～2のうちあてはまる番号に○をつけてください。 | 近隣の集落（駐在区）と連携して実施している | 旧小学校区で連携して実施している |
|---|---|---|
| ①祭りなどの伝統行事 | 1 | 2 |
| ②イベント・交流事業 | 1 | 2 |
| ③農作業や山林作業等の共同作業 | 1 | 2 |
| ④家屋の雪下ろしや集会所等の除雪活動 | 1 | 2 |
| ⑤自主防災活動 | 1 | 2 |
| ⑥子どもの見守りや行事等 | 1 | 2 |
| ⑦老人クラブ等の活動 | 1 | 2 |
| ⑧女性会等の活動 | 1 | 2 |
| ⑨福祉健康づくり活動 | 1 | 2 |
| ⑩その他（　　） | 1 | 2 |

**問18. では、将来的に（おおむね10年後くらい）、集落単独ではなく近隣の集落（駐在区）や旧小学校区、あるいは町全体で連携して実施していかなくてはならなくなりそうなものはありますか。**

| 以下の①～⑩それぞれについて、1～3のうちあてはまる番号に○をつけてください。 | 近隣の集落（駐在区）と連携して実施する必要があるもの | 旧小学校区で連携して実施する必要があるもの | 町全体で連携して実施する必要があるもの |
|---|---|---|---|
| ①祭りなどの伝統行事 | 1 | 2 | 3 |
| ②イベント・交流事業 | 1 | 2 | 3 |
| ③農作業や山林作業等の共同作業 | 1 | 2 | 3 |
| ④家屋の雪下ろしや集会所等の除雪活動 | 1 | 2 | 3 |
| ⑤自主防災活動 | 1 | 2 | 3 |
| ⑥子どもの見守りや行事等 | 1 | 2 | 3 |
| ⑦老人クラブ等の活動 | 1 | 2 | 3 |
| ⑧女性会等の活動 | 1 | 2 | 3 |
| ⑨福祉健康づくり活動 | 1 | 2 | 3 |
| ⑩その他（　　） | 1 | 2 | 3 |

**問19. あなたの世帯では、お住まいの集落の魅力を高めていくために、今後どのような取組が必要だと思いますか。（○はいくつでも）**

| | |
|---|---|
| 1 | 集落の共有財産を活用した交流活動 |
| 2 | 田舎暮らしや新規就農者等の積極的な受け入れ |
| 3 | 集落営農など集落全体で農業を維持し景観を守っていくための取組 |
| 4 | 若い世代が積極的に活躍できる集落の規約や役回りの見直し |
| 5 | 町全体のイベントなど集落を越えた連携による取組 |
| 6 | その他（　　） |
| 7 | 何ともいえない・わからない |
| 8 | 特に必要な取組はない |

**問20. 人口減少や高齢化が進みつつある中で、お住まいの集落（駐在区）に移住者を受け入れることについて、あなたの世帯ではどのようにお感じになりますか。（○はひとつ）**

| | |
|---|---|
| 1 | 移住者が来る（増える）こと自体は賛成で、できれば集落住民の家族や親戚縁者に住んでほしい |
| 2 | 移住者が来る（増える）こと自体は賛成で、できれば小国町出身の人に住んでほしい |
| 3 | 移住者が来る（増える）こと自体は賛成で、小国町の出身かどうかにはこだわらないが、できれば雪国での生活経験のある人に住んでほしい **（→3 を選んだ場合は SQ1～2 にお答え下さい）** |
| 4 | 移住者が来る（増える）こと自体は賛成で、どんな人でも、集落（駐在区）の住民と協力する気持ちがある人なら住んでほしい **（→4 を選んだ場合は SQ1～2 にお答え下さい）** |
| 5 | 色々と不安もあるので、あまり移住者には来て（住んで）ほしくない |
| 6 | 何ともいえない・わからない |

**SQ1　お住まいの集落（駐在区）にあなたの世帯が希望するような移住者の受け入れを促進していくために、あなたの世帯が行政に期待することはありますか。（○はいくつでも）**

| | |
|---|---|
| 1 | 移住者を受け入れる空き家のリフォームへの補助 |
| 2 | 集落と移住希望者とを仲介する人材の配置・派遣 |
| 3 | 移住希望者を案内するツアーや集落住民との交流イベントに対する支援 |
| 4 | 移住希望者の短期滞在（お試し居住）施設の整備 |
| 5 | その他（　　） |

**SQ2　近年、外国人観光客の増加や外国人労働者の受入拡大といった動きもある中で、お住まいの集落（駐在区）への移住者として外国人を受け入れることについて、あなたの世帯はどのようにお感じになりますか。（○はひとつ）**

| | |
|---|---|
| 1 | 留学生など身元がしっかりしていてある程度コミュニケーションが取れる人なら、外国人でも構わない |
| 2 | 町内企業の労働者や技能実習生で、企業がしっかり面倒をみてくれるなら、外国人でも構わない |
| 3 | 集落住民の友人や知人など、集落（駐在区）に何らかのつながり・関わりがある人がいるのであれば、外国人でも構わない |
| 4 | 言語や文化の違いなど色々と不安もあるので、あまり外国人には来て（住んで）ほしくない |
| 5 | 何ともいえない・わからない |

## これからの小国町のまちづくりについておたずねします

**問21．あなたの世帯では、今後、小国町で暮らしやすくしていくために、どのようなことに力を入れるべきだとお考えになりますか。（○は５つまで）**

| | |
|---|---|
| 1 | 都市部の若者や退職世代の移住促進 |
| 2 | 新規就農者を含めた農林水産業の振興 |
| 3 | 新しい産業おこしや起業・創業の支援 |
| 4 | 出産・保育など子育て支援の充実 |
| 5 | 集落や地区での暮らしやすい環境づくり |
| 6 | 消防や緊急医療などの体制充実 |
| 7 | バスなどの公共交通の充実 |
| 8 | 教育環境の充実、教育レベルの向上 |
| 9 | 農地や山林の荒廃・鳥獣被害対策の強化 |
| 10 | 自然災害や防災対策への強化 |
| 11 | 敷地周りの除雪や雪下ろし等の支援の充実 |
| 12 | 一人暮らし高齢者の安否確認、見守りの充実 |
| 13 | 携帯電話、インターネットの通信環境の整備 |
| 14 | 訪問看護や在宅福祉等の保健・福祉サービスの充実 |
| 15 | 伝統文化の保全・継承、地域文化の振興 |
| 16 | スポーツや生涯学習、体験活動の推進 |
| 17 | 上下水道や道路等の公共施設の充実 |
| 18 | 冬期の道路除排雪の充実や強化 |
| 19 | 自然環境や街並み、集落景観などの保全 |
| 20 | 地域住民の自主的な地域活動への支援 |
| 21 | 町の資源を活かした都市部との交流活動の推進 |
| 22 | その他（　　） |

**以上で調査は終わりです。ご協力ありがとうございました。**

## ２　各種ヒアリング調査について

小国町の集落内の状況や住民意識等について把握するため、中心部を除く５地区（北部地区、沖庭地区、南部地区、東部地区、白沼地区）において、各地区の代表者等に座談会形式で、及び小国町内で活躍する人物等に対し個別にヒアリング調査を実施した。

### ２－１　５地区別座談会ヒアリング調査について

#### (1) ５地区別座談会ヒアリング調査の概要

**ア　調査の目的**

中心部を除く５地区において、各集落を取り巻く環境や諸問題についてより詳細に把握するため、各地区の拠点において座談会を開催し、地区の役員やまちづくりのリーダーなどに対するヒアリング調査を実施した。

**イ　調査の実施方法**

**①調査期間**

令和元年１０月２３日（水）から１１月７日（木）まで

**②形式**

座談会実施に当たっては、事前に聞き取り内容を通知し、当該項目に従い会を進行した。

**③ヒアリングの対象者**

中心部を除く５地区（北部・沖庭・南部・東部・白沼）において、各地区の廃校等を会場に、各地区の集落役員や駐在員、公民館長、農業振興組合長など地域リーダー的な人物を対象として座談会形式のヒアリングを行った。なお、南部地区は広く集落が点在しているため２地域に分けて実施した。

| No. | 地区 | ヒアリング会場 | ヒアリング日時 | 参加者数 | 性別 | | 年齢層（○○歳代） | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 男 | 女 | 20 | 30 | 40 | 50 | 60 | 70 |
| 1 | 北部 | 北部小中学校 | 11/ 7(木)18:30～20:00 | 6名 | 6 | － | | | | | 5 | 1 |
| 2 | 沖庭 | 沖庭小学校 | 10/23(水)18:30～20:00 | 9名 | 8 | 1 | | | | 3 | 6 | |
| 3 | 南部 | 小玉川小中学校 | 10/30(水)15:30～17:00 | 3名 | 3 | － | | | | 1 | 2 | |
| 4 | | 玉川ｺﾐｭﾆﾃｨｾﾝﾀｰ | 10/30(水)18:30～20:00 | 9名 | 7 | 2 | | | 1 | 2 | 5 | 1 |
| 5 | 東部 | 水源の郷交流館 | 10/29(火)18:30～20:00 | 10名 | 10 | － | | 1 | | | 8 | 1 |
| 6 | 白沼 | 白沼小中学校 | 10/28(月)18:30～20:00 | 6名 | 6 | － | | 1 | | 2 | 2 | 1 |
| 計 | | 6会場 | | 43名 | 40 | 3 | － | 2 | 1 | 8 | 28 | 4 |

④ヒアリング項目

- 居住集落における共同作業等の活動と今後の見通し
- 今後残していきたい行事や集落財産
- 集落内での困り事とその対処に必要な社会的サービス
- 社会基盤（道路、農地、水路など）の維持・管理上の問題
- 部落有財産などの管理の現状と見通し
- 近隣集落との連携による地域づくりにおいて最適な地域割り
- 移住者などの外部人材の受け入れにあたっての意向や課題
- その他、自由意見

## (2) ５地区別座談会ヒアリング調査結果

### ア　５地区ヒアリング結果の総括

#### ① 居住集落における共同作業等の活動と今後の見通し

- 若年層住民の多寡が集落間格差に大きな影響を与えている。13 年前の調査（以下「前回調査」という。）では集落単位で維持されていた河川清掃などの共同作業や祭りなどの地域文化的な行事は、一部の集落を除き大半が継続の困難さを訴えている。
- 現在でも共同作業に出られない世帯は「出遅れ料」（不参加の場合、集落に支払う所定の金額）を徴収している集落もあるが、金銭よりも作業要員の手配の方が有難い（若手作業員に負担が集中）との声も多く聞かれた。水利権を持っている者は水路の作業は免除という集落があった（共同作業は問題なく実施されている）。
- 対策として、隔年実施、縮小化、優先度を決めるなど負担軽減の取組も行っているが、山林等の管理をやめた集落（沖庭、白沼）もあり、全般的には、若い担い手がいないため将来を不安視する集落が多い。
- 一方、一部（東部）ではあるが若年層や女性が中心となりイベントを企画から盛り上げている集落があるものの、そうした集落においても若手の不足から将来を懸念する声も出始めている。
- 前回調査に見られた「困難さの中でもできることはやろう」という意識は変わらないものの、「できなくなれば外部に委託し維持」という見込みどおりにはなっていない。

#### ② 今後残していきたい行事や集落財産

- 地域の伝統行事、特に地域の名物や風習となっているものについては前回調査同様、存続を望む声が多かった。その他、収入源としてのわらび園、田畑が挙げられたほか、当地財産として「蛍の出る村」というものもあった。
- 東部の集落では、運動会や文化祭といった学校行事等を通しての交流、「当該集落そのもの」という声もあり、地域への愛着が強く感じられる内容であった。
- また、次の項目に関連するが、祭りを続けたいなら行政が続けられる方法を考えて欲しいという意見もあった。

### ③ 集落内での困り事やそれに対する必要な社会的サービス

- 前回調査同様、当然ながら雪対策継続への要望が全地区満遍なく挙げられた。行政サービスとしての除雪は、町外と比較しレベルが高いとの評価の声も散見された。
- 高齢化進展、特に老齢者の一人暮らし増加への対応として、交通網等インフラの充実、高齢者の集会所設置のほか、農業の後継者不在や鳥獣被害対策を強く訴える地域も散見された。
- 先進的な意見として、隣同士の家屋が離れていることから、回覧板の電子化を提案するものもあった。

### ④ 社会基盤（道路、農地、水路など）の維持・管理上の問題

- 前回調査では、町道以外の部分でも維持補修まで行政に要望するなど行政依存の傾向が見られる地域も出現しつつあった。今回調査では、その傾向は変わらないものの、その要望内容は集落生活を続けていくうえでの切実なものに変化している。
- 全地区において、水路、農地等の管理が後継者不在等によって困難になっていることが挙げられた。これらの管理に非農家も参加している地域があるが、参加者が限られていること、整備や砂防は行政支援がないと農業の維持が難しくなっていることが問題として挙げられた。
- 野生動物による農作物被害対策を強く訴える地域が散見された。

### ⑤ 部落有財産の管理の現状と見通し

- 山林などの共有財産は、その権利を有する者のみで構成される組織で維持管理し、外部から転入した者などはその組織に加入できない（財産を分けてもらえない）という運用は継続されている。
- 権利は集落を離れる際に放棄するという取り決めにより管理されているところ、不動産登記を相続時に変更していないため、権利者があやふやになっているところ、検地を行い図面を作成し権利関係がはっきりしているところ（南部）もあった。
- 今回調査では、集落間に格差があるものの、東部の一部を除き山林は従来のような管理ができない傾向にあることが分かった。
- 林道の道薙ぎだけは何とか実施、外部の助けを借りて何とか実施、村人以外が入山しては困る（南部）といった集落のほか、処分済み（北部）、市町村に管理運営を任せ各集落と協議しながら作業予定（北部）というものから、ここ 10 年山林の手入れをしていない（南部）、「共有林はお荷物」（沖庭）という声すらもあった。東部で、「全戸で実施」という集落もあったが、今後の担い手不足を懸念、共有地の権利者の確定（移住により共有地の持ち分登記が未整備）を進めるべきとの声もあった。
- わらび園については、全地区担い手不足の中、山焼きは手伝いを依頼するなど何とか維持しているが、若い人の関心も低く客も減少傾向にあり、今後は難しいとしている。

### ⑥ 近隣集落との連携による地域づくりにおいて最適な地域割り

- 前回調査同様、今回調査では、全地区において「（旧）小学校区」という意識が強かった。その他、地区によっては駐在区、町体育協会区分、隣の集落、「管理の目的により皆で考える」など様々な意見もあった。
- 近隣集落との連携については、前回調査では集落維持が困難であっても活動の共同化には消極的姿勢が見られたが、今回調査では全般的にその姿勢に大きな変化はない。ごく一部に連携の意見があったが、懐疑的な見方をする集落、集落間距離が離れているため高齢者の移動が負担といったことから、自分の集落が困っているのに他の集落に手を貸す余裕などないという意見もあった。

### ⑦ 移住者など外部人材の受入にあたっての意向や課題

- 住居に配慮する姿勢があったほか、職探しや閉鎖的な村の状況を懸念する声もあった。積極性の程度はあるが、一部を除き受入れには抵抗がなかった。また、「共同作業に参加できる人」という条件付きの意見もあった。
- 白沼からは意見がほとんどなく、「地域内の意向は聞いていないからわからない」というものもあった。

### ⑧ その他（特記すべき自由意見）

- 地元の学校に対する思いは強く、「学校統廃合後の集落のあり方を考えるべきだった」、「少子化で学校がなくなる前に、学校がなくなったあとの集落を考えよう」というものや、「今までのことを無理に続けるのではなく、次代の変化を受入れた負担のない地域づくり」といった地域に対する思いが目立った。
- 「進学すると小国町に戻って来なくなる」という声がいくつかあった。

イ　５地区ヒアリング結果の項目別

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 1．居住集落における共同作業等の活動と今後の見通し | 【北部】一部高齢化進展により道の刈り払いが困難になっている集落があるものの、全般的には生活に密着した共同作業、地域伝統の祭りが行われている。集落によっては山野への無断立ち入り禁止看板の管理が実施されたり、地域名物の事業により活性化を画策したりしている。しかし、若者が少なく今後を懸念する声も一部集落で出始めている。<br><br>【沖庭】高齢化の進展及び若い担い手がいないため、伝統行事や共同作業の継続が困難になりつつある。実施等を隔年にした集落、土砂の撤去、草刈、山道の管理を10年前にやめた集落もあった。<br><br>【南部（小玉川）】全般的には、地域伝統の熊祭りを始めとした行事や共同作業は維持されている。しかし、高齢化の進展による担い手不足を学生の応援で補っていることに対する将来への懸念の声が聞かれた。<br><br>【南部（玉川）】世帯は高齢化したものの地域行事、共同作業は何とか行われている。しかし、担い手不足による高齢者の負担感も増し、国有林の山道の道刈り箇所の縮小化、参加者の減少による行事の中止もみられ、将来の継続は不安視されている。<br><br>【東部】毎年恒例の年中行事（花見、盆踊り、収穫祭、さいず焼きなど）を若い人が企画実行したり、女性や子どもも含め活発な地域活動を行ったりしている集落がある一方、共同作業が困難になっている集落があるなど集落間の格差が見られた。<br><br>【白沼】少子高齢化の進展及び若い担い手がいないため、伝統行事や共同作業の参加者が年々減っている。共同作業については、隔年実施や優先順位をつけ絞って実施したもの（刈り払い）、中止としたもの（共有林での作業）もあり、今後の継続の難しさを訴える声が多かった。 |
| 2．残していきたい行事や財産 | 【北部】さいず焼き、神社仏閣での祭り、公民館での宴会、ゲートボール大会など現在実施している様々なものが挙げられた。町文化財指定の木像の男神像（氏神）に係る祭り、山の神神社初詣時に子どもに賽銭をばら撒き、皆平等に分ける風習といったものも挙げられた。<br><br>【沖庭】現在実施しているものは満遍なく挙がったが、特に地域の伝統行事（舟渡獅子踊り、盆踊り、神社の祭り）は残したいとの意見が多数。当地財産として「蛍の出る村」というものがあった。<br><br>【南部（小玉川）】伝統行事とくに熊祭りの存続や美しい景観（山林、田園）の保存を望む声が強かった。また、マタギ文化やわらび園の維持を望む声もあった。<br><br>【南部（玉川）】子どもがいなくなり、子ども向けの行事（歩こう会、雪まつりなど）がなくなった。地域の伝統行事（しめ縄つくり、春と秋の祭り）のほか、大事な収入源であるわらび園、田畑、親睦会は残したいという意見があった。<br><br>【東部】湧き水、わらび園や田畑といった有形のものから、運動会や文化祭といった学校行事、人との交流、「集落そのもの」といった無形のものまで挙げられた。「その時の住民ができる範囲でやればよい」という意見も見られた。<br><br>【白沼】山林や田畑といった自然、祭りや盆踊りといった伝統行事が挙げられた。 |

| 項目 | 内容 |
| --- | --- |
| 3．集落内の困り事とその対処に必要な社会的サービス | 【北部】除雪対策の声が多かったほか、一人暮らしの高齢世帯増加傾向を懸念し、交通網や高齢者の集会所確保といった生活面やインフラ等のサービスの要望があった。また、農業のみでの生活では厳しいことから農業の後継者がいない、サルの被害の増加により農作物が収穫できないというものがあった。<br><br>【沖庭】除雪や雪下ろし作業に対する人の手配への要望が多かった。その他、交通の改善（バスのコース、巡回頻度）、神社や公民館の維持管理に対するものがあった。<br><br>【南部（小玉川）】高齢化に伴うバスの増便とコースの充実のほか、一人暮らしの高齢者の見守りサービス、有害動物による作物の被害対策の声もあった。<br><br>【南部（玉川）】70 歳以上の高齢世帯が多く、車の運転の困難さが増しているため、日常生活（買い物や通院など）での移動手段の支援の声が多かった。その他、力仕事が困難なため、業者に作業を委託する費用の助成、空き家の解体、地域での役職（役割）の多さと長期間の就任による多忙さの解決の声、サルやクマ等による農作物被害対策への助成の声も寄せられた。<br><br>【東部】夜間や高齢者の除雪対策、除雪に対する更なる金銭的な援助、バスの増便、県道の道刈りによる熊の出没対策、男性高齢者の外出への誘い（趣味の講座等への参加）、UIJターンを含めた若年移住者からの要望の汲み上げと支援、回覧板の電子化など活発な意見が出された。<br><br>【白沼】高齢者宅や道路沿いの空き家の雪下ろしの要望が多く、人的支援の要請が強かった。その他、防災ラジオの受信状況の改善の声もあった。 |
| 4．社会基盤の維持・管理上の問題 | 【北部】「水路（防火用水を兼ねる）の補修維持管理や流木、土砂流入の清掃は多額の費用と労力を要するうえ早急な対応が必要なこと」、「日中住民がまばらで人付き合いも薄れたため、緊急時の不安」、「農地の維持管理費（機械や資材の購入費）が高く収入に見合わない」、「わらび園への道路がない」といったもののほか、「農林分野の補助事業の事務作業が煩雑なため人的な支援のほか行政に対する更なる財政的な支援の要請」といった様々なことが挙げられた。根本的な問題として、作業要員の高齢化進展とする声が目立った。<br><br>【沖庭】高齢化と後継者不足により、水路の管理や道路（補修、土砂崩れ対策）の管理、農地の耕作が困難になっているとの声が多かった。<br><br>【南部（小玉川）】家族（農家）の後継者不足を嘆く声のほか、サルやクマによる農作物の被害を嘆く声、道路除雪レベルの低下を訴える声もあった。<br><br>【南部（玉川）】水路等は組合等で管理しているが、後継者がなく今後を不安視、また、機械の老朽化により管理が大変といった意見のほか、事故が多発している道路の整備、荒れ地、サルやクマの被害対策の声もあった。<br><br>【東部】農地や水路の管理は非農家も参加しているが、参加者は限られており、整備や砂防は行政の支援がないと農業の維持は難しくなっている。除雪で壊れたガードレールや道路陥没の放置、近年増大するイノシシやサルなど野生動物による被害を訴える声があった。<br><br>【白沼】水路や農地の管理において、人手や後継者が少ないという意見に集中した。田畑の登記上の問題（地目や名義の変更制限）を挙げる声もあった。 |

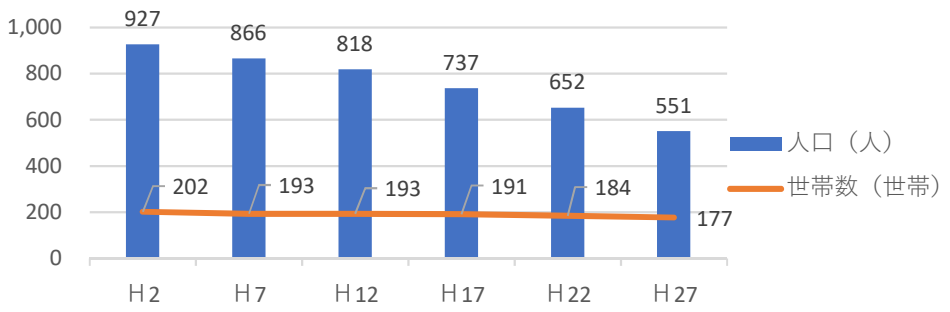
| 項目 | 内容 |
| --- | --- |
| 5．部落有財産などの管理の現状と見通し | 【北部】ほとんど処分してない、山林は活用していない、わらび園の作業は高齢化と客入りの減少で継続が難しくなっているというものがあった。山林等は放置せず市町村に管理運営を任せ、各部落と協議しながら作業を行っていく予定としたものもあった。<br><br>【沖庭】共有林の管理が高齢化で難しくなっている。林道の道なぎのみ実施し山林は手入れしていない、山焼きは手伝いを依頼しているという声もあった。現時点では「共有林はお荷物」と思っている人もおり、10 年後が心配である。<br><br>【南部（小玉川）】高齢化は進んだものの重機や学生の支援により財産管理は継続できているが、今後の見通しは不透明。また、「わらび園を除き、村人以外が入山しては困る」という集落もあり、維持は難しいとしている意見もあった。<br><br>【南部（玉川）】山林の杉の手入れについて、下刈りや間伐が困難になりここ 10 年は何もしていない。わらび園は、賃貸契約の場合は組合管理しているものの、個人経営は外部への依頼により何とかやっており、将来が不安視されている。<br><br>【東部】全戸で実施という集落があった一方、わらび園の山焼きや部落林・山道の管理は少子高齢化による担い手不足で今後は難しくなるという集落もあった。管理はしていないという集落もあり、移転した住民の共有地持ち分登記の整備と所有者の確定を進めるべきとの声もあった。<br><br>【白沼】高齢化しているが何とか管理は続けているものの、わらび園は若い人の関心が低く今後が懸念される状況である。 |
| 6．近隣集落との連携による地域づくりにおいて、最適な地域割り | 【北部】「旧北部小中学校」が目立ったが、地域づくりの内容により駐在区、旧北部小中学校などに分ける、地域発展と若者来訪に向けた視点により皆で考えるといったものがあった。<br><br>【沖庭】旧沖庭小学校区（4つの校区）という意見が強かった。その他、駐在区、隣の集落という意見もあった。<br><br>【南部（小玉川）】旧学校区エリアが機能しているという意見で一致していた。<br><br>【南部（玉川）】旧小学校区という意見が目立った。近隣集落との連携という声があった一方、住民にその意識は薄いのではという懐疑的な見方もあった。<br><br>【東部】叶水小学校区を単位とした地域活動が定着しているため、学校区が最適という意見が多かった。その他、隣の集落、町体育協会区分というものもあった。<br><br>【白沼】意見は分散し、今までどおりの白沼地区、旧小学校エリア、転居者を集めての地域づくりといったものが出された。 |
| 7．移住者など外部人材の受入れに当たっての意向や課題 | 【北部】移住者は歓迎だが、職や居宅（空き家がない）を心配する声が目立った。<br><br>【沖庭】概ね受入れに対する抵抗はなく、空き家の活用（リフォーム可）を推奨する意見が出されたものの、農業以外の職探しの難しさを懸念する声もあった。<br><br>【南部（小玉川）】移住者受入れには賛成の意見が多いものの、閉鎖的な村の状況を懸念する声も一部あった。 |

| 項目 | 内容 |
| --- | --- |
| | 【南部（玉川）】若い人がいると活気があって頼もしい、希望者がいれば受け入れたいという意見が大勢を占めたものの、反対意見もあるようである。また、集落内1戸の外部移住者が住民と交流しないことから、「共同作業に参加できる人」という条件付きの意見も出された。<br><br>【東部】積極的な受入れ姿勢が見られた。そのため、上水道の完備や住居の手配を要望する声があった。<br><br>【白沼】意見はほとんどなく、少数ながら「受け入れたい」、「分からない」というものがあった。 |
| 8. その他<br>（特記すべき自由意見） | 【北部】<br>・働きに出るには、一人1台ずつ車をもたねばならない（経済的に負担が大きい）。<br>・山林木材がタダ同然になり生活できない。<br>・田の借り手が減少している。<br><br>【沖庭】<br>・自動車以外の移動手段として、小学生送迎用のバス利用。<br>・学校をなくした時点で集落の在り方を考えるべきだった。穏やかな集落なので、話合いの雰囲気はある。<br><br>【南部（小玉川）】<br>・自然と温泉が売りの地域で、宿泊施設等の設備の見直しや有効活用が必要。<br><br>【南部（玉川）】<br>・子の生き方を親は尊重する時代。親は高齢となっても地元に残って余生を楽しく過ごしたいという考え方の人がほとんどである。<br>・学校が休校になってから地域に元気がなくなり地域が変わっていった。<br>・全体的に数年間は大丈夫。それから先は分からない。<br><br>【東部】<br>・今までやってきたことを無理に続けるのではなく、時代の変化を受け入れ、負担のない地域づくりを考えるべき。行事や財産を残しても暮らしにくくなるのは本末転倒。できないことはやらない。<br>・少子化で学校がなくなる前に、なくなった後の集落コミュニティを考えよう。<br><br>【白沼】<br>・祭りの場所を山の上から下に移動したら、人が集まった。 |

ウ　５地区ヒアリング結果の各地区明細

①北部地区

※ 下表の「集落名」の赤文字は 10 世帯以下、下線は出席者が関わる集落

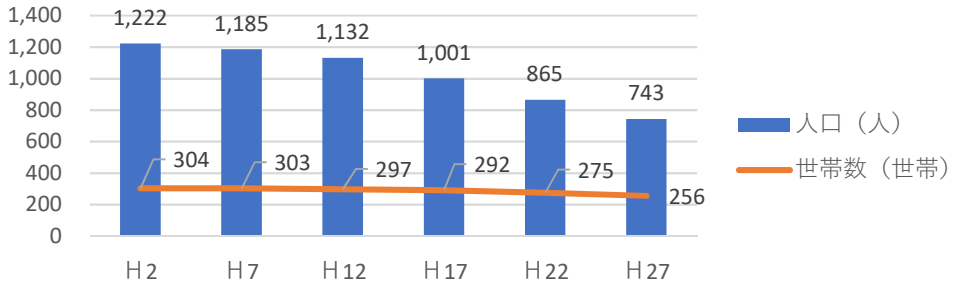
| 構成する集落名 | 四ヶ字、折戸・入折戸、二ヵ字、小股、樋倉、徳網、五味沢、長沢、越中里 |
|---|---|
| 人口と世帯数の推移 |  |
| ヒアリング〔計 6 名〕 | 民生委員、農業振興組合長、地区振興協議会会長、駐在員 |
| 1．居住集落における共同作業等の活動と今後の見通し | ・年 2 回、春、秋用水路の手入れ等共同作業を行い、その後春は花見、秋は収穫祭を実施しコミュニケーションを図っている。その他状況に応じて、夏季の早朝作業、冬季間は公民館、神社の除雪等の共同作業を行っている。<br>・地域において除雪は今のところ問題なく、各戸上手く回っていると思われる。<br>・公民館活動、公民館周りの草刈り、山野への立ち入り禁止看板立て（小股継続）。<br>・山の道なぎ、多面的機能支払交付金に関する活動（水路・農道・農地）（三ヶ字継続）。<br>・共同作業（年 3 回）。毎年ではないが、部落で芋煮会。植栽作業。<br>・塩の道の道路の刈り払いを（年 1 回）実施しているが、住民の高齢化が進み困難。<br>・集落の公民館を中心とした活動（家族慰安会等）を行っているが、若者が少なく今後が心配だ。<br>・人が少なくなるのはどこの地区でも同じだが、若い人が来るにはどうするか悩んでいる。<br>・大字五味沢地区には、駐在員を中心に三大事業と称されるものあり。①6月の山開き、②7月の魚つかみ大会、③3月の雪の学校、これらを組み合わせて活性化を図りながら継続していきたい。 |
| 2．残していきたい行事や財産 | ・越中里には小国町の文化財にも指定されている、建造物第 1 号板碑、彫刻第 8 号男神像がある。男神像については木像のため虫食いなどによる損傷が大分あるので、昨年教育委員会の指導の下、東北芸術工科大学で燻蒸（防虫処理）を行った。男神像は地区の氏神（菅原神社）のご神体であるので、毎年 8 月 25 日、これに関わるお祭り（神事）を地域ぐるみで行っているので、二つの文化財ともに子々孫々に伝承していきたい。<br>・さいず焼き、穀蔵様のお祭り、鎮守様のお祭り兼部落全員参加の芋煮会。（小股）<br>・公民館活動を中心とした行事や田畑。<br>・折戸部落では毎年 8 月 13 日に盆祭りをやっている。全家族が公民館で宴会をやっている。<br>・山の神神社での初詣（神社内より外に向けて賽銭を撒く。子どもが拾って皆平等に分ける。他にない風習だと思う。さいず焼き（部落皆集まり、公民館で直会する）地蔵祭り、稲荷神社での初午、ゲートボール大会 |

| | |
|---|---|
| 3．集落内の困り事とその対処に必要な社会的サービス | ・地域格差をなくすためには、冬季間の除雪を始め、道路網の整備が最も重要である。農地の維持管理、以前は三ちゃん農業と称して、多かれ少なかれ家族ぐるみで農業（米作り）を手伝ったものである。現在北部地区は、同居家族戸数は意外と多いと思うが、農業では生活できないと思われるので、後継者がいない。<br>・サル被害なども増加し、野菜も採ることができない。<br>・冬の除雪。<br>・当集落も高齢化が進み、一人暮らしの家庭が多くなりつつあり、生活面やインフラ等のサービスが必要。<br>・部落内で高齢者の集まる所、場所がほしいと思う。 |
| 4．社会基盤の維持・管理上の問題 | ・若者は町内に働きに出ており、日中地域に人が少ないこと。以前と違い、近所付き合いも薄れ、土日はともかくいざ急病人や災害が発生した場合不安がある。<br>・多面的機能支払交付金を活用しているが、メンバーが高齢化してきている。<br>・高齢化が進み、今までのようなことはできないのではないか。<br>・管理の場所を少なくする。<br>・農地の維持については、農業機械、資材が高額で収入と見合わない。<br>・水路の維持については、春と秋に刈り払いを行うとともに、状況に応じて都度補修作業を行っているが、水路の老朽化が進むとともに、水路上の落石、落木、土砂が多く、きれいにするには多額の費用と労働力が必要となる。水路は集落の防火用水も兼ねているので、早急の修復が必要。<br>・折戸地内で中川原と地名がある。そこは今わらびを作っている。道路がなく困っている。<br>・多面的機能支払事業を取り組むに当たり、五味沢共生会を立ち上げて 6 年目。後継者を育成中。事務作業等が多く煩雑なため、もう少し行政の力でお手伝いを願う。財政面も拡大援助願う。 |
| 5．部落有財産などの管理の現状と見通し | ・財産はほとんど処分して、残りはほとんどない。<br>・山及び山林は現在活用していない。<br>・塩の道の刈り払い、わらび園は集落で作業、管理を行っているが、高齢化が進み継続が難しい状況。<br>・折戸わらび園は毎年お客も少なくなっているが、続く限りやっていくつもりだ。<br>・山林等はこのまま放置すれば国の管理になるところ、今度は市町村に管理、運営を任されたので、各部落と協議しながら行っていけば、良い方向に行くと思う。 |
| 6．近隣集落との連携による地域づくりにおいて、最適な地域割り | ・現在、旧あさひ保育園で地域サロンを実施しているが、自分の地域サロンだと下駄履きでも参加できるが、広範囲だと着る物から考えないと、という話も聞こえる。<br>・地域づくりの内容により、駐在地区でのエリア、旧北部小中学校区域等に分かれる。<br>・集落の少子化、高齢化が進んでいるが、旧小学校区エリアが良いと思う。<br>・もっと地区を良くするにはどうするか、もっと若人が集まるにはどうするか、皆で考える会を作る。 |
| 7．移住者など外部人材の受入れに当たっての意向や課題 | ・移住は大歓迎であるが、何で生計を立てるか課題である。<br>・受け入れたいとは思っているが空き家がない。<br>・移住希望者がいれば受け入れたいが、移住者の仕事がない。（特に若者の場合）<br>・移住希望者があれば、受入れには土地があれば良いと思う。<br>・町内外の空き家を活用していくこと。 |

| | |
|---|---|
| 8. その他 | ・農山村地域においては町内と違い、働きに出るには一人1台ずつ車を持たなければならない。それなりに経済面で大変だ。<br>・田を借りる方もだんだんと減少しており不安だ。<br>・山林木材もただみたいな値段になり、農山村では生活しにくくなった。<br>・農山村で豊かな生活ができるよう、よろしくお願いしたい。<br>・北部地区には多くの橋及び砂防ダムがあるが、大雨等でこれらが崩落した場合、日常生活に支障を来す。ハザードマップと合わせ崩落した場合の対策等検討されているのか。<br>・無駄を省く観点から、新しい建造物、施設を建設するのではなく、今すぐ利用できるもの（例えば、りふれ、旧北部小中学校、旧あさひ保育園）を活用すれば良い。10年後には町民 5,000 人、その 15 年後には 3,000 人と人口減となる。最終的にはりふれを活用すべし。 |

②沖庭地区

※ 下表の「集落名」の赤文字は 10 世帯以下、下線は出席者が関わる集落

| 構成する集落名 | 金目、古田、若山、舘、貝少、小渡、今市、尻無沢、舟渡 |
|---|---|
| 人口と世帯数の推移 |  |
| ヒアリング〔計 9 名〕 | 公民館青年文化部長、農業振興組合長、民生委員、公民館長、共同活動保全会会長、消防団分団長、若衆頭 |
| 1. 居住集落における共同作業等の活動と今後の見通し | ・一年おきに盆踊りと獅子踊りを実施している。人口減少により今後の継続は厳しくなると思われるが、数年間は問題ない。<br>・山道の道刈を年 3 回、排水路の清掃を年 1 回実施している。人口減少に伴い、参加者も減少しており、今後の継続は厳しくなると思う。<br>・高齢化に伴い山に行かなくなり、若者は山に興味を持たないことから、一部山道の管理を約 10 年前に廃止した。2 か所の神社の祭りに関わる山道の整備は年 1 回ずつ実施している。<br>・今市地区は空き家も少なく、子どももおり、焼野のわらび園からの収入もある。人口減少はあるが、他集落からの人足や企業が協力し、若者を連れてきてくれるため、今後も集落のコミュニティ機能は継続される。<br>・山道の道なぎ、林道の道なぎ、獅子踊り、盆踊り等、若い人達がいないのでだんだん大変になる(排水路清掃等も)。<br>・村の共有財産を維持するため、公民館やその他設備、年 2 回の共同作業を行っているが、高齢化が進み、今後継続が危ぶまれる<br>・神社のお祭り、参道整備(各年 1 回)　山からの水路の管理(年 2、3 回)。土砂の撤去、草刈り、山道の管理は 10 年くらい前にやめた。<br>・2 年に一度盆踊りと獅子踊り(年々人口が減り、継続が難しくなる)。　ほかに山道の道なぎ 3 回(全体、沖庭神社、財産区)　、排水路清掃(人口減少により、年々大変になる)、神社の春・秋祭り。<br>・山道の草刈り、用水路、排水路清掃→持続の可否。春・夏のお祭り(神社の維持・管理)→組織からの脱退、収入不足。<br>・神社の祭り(年 1 回)、寺の管理(年 2 回)、部落の歳頭焼きや契約など、若い人がいなくなり継続も大変になる。<br>・共有林の刈り払い、公民館活動の芋煮会ほか。<br>・公民館活動として、獅子踊りと盆踊りを隔年毎に行っている。また、毎年山道の道なぎ、排水路清掃を行っているが、少子高齢化が進み、今後の事業、活動の維持が困難になると思う。<br>・歳頭焼き、ワラの手配が困難になってきている。<br>・共同墓地の草刈り整備(年 1 回)継続。<br>・用水路他山道などの草刈り(年 2 回)、わらびの草刈り(年 1 回)を実施。高齢化のため、今後の対策なし。 |

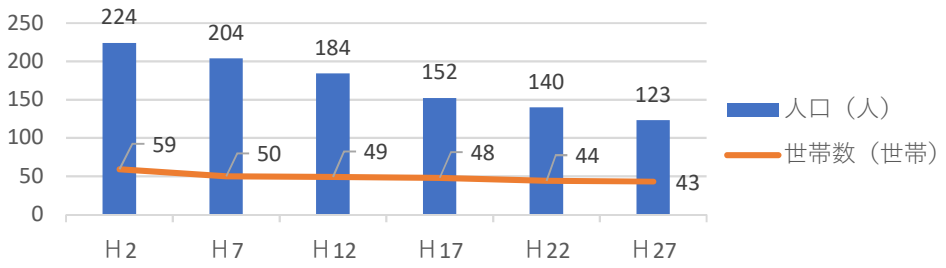
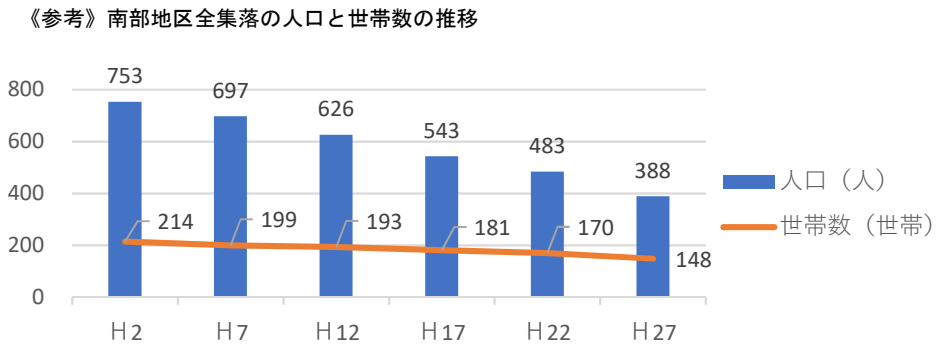
| | |
|---|---|
| **2．残していきたい行事や財産** | ・夏祭りは可能な限り、参加者を集め実施しており、当面継続する見込みである。<br>・舟渡獅子踊り等残していきたい。<br>・田畑等は高齢者が多くて、管理できなくなる。<br>・酒飲みの機会を増やした。<br>・獅子踊り、盆踊り、神社の祭り（4 集落）<br>・獅子踊り、盆踊り、収穫感謝祭、高齢者サロン、レクリエーションスポーツ大会（町外の子も）<br>・神社の祭りなど<br>・神事（お祭り）<br>・舟渡の獅子踊りはできるだけ伝承できるよう地区を離れた人にも声を掛け残したい。<br>・歳頭焼き、共同墓地の草刈り整備<br>・蛍の出る村 |
| **3．集落内の困り事とその対処に必要な社会的サービス** | ・消防団員の高齢化が著しく、団員数が減少していることから、非常事態への対応に不安がある。<br>・必要のない箇所を除雪するなどの無駄が見受けられる。住民の意向を聞いて除雪をしてもらいたい。<br>・高齢者宅の除雪を手伝っているが、手伝いにも限界がある。<br>・町の「高齢者等暮らし応援」を利用した際、母屋は対応してくれたが、小屋は対象外のため対応してもらえなかった。（複数意見）<br>・神社、公民館等、維持、管理が大変。<br>・バスが農道を走っているので、集落内を走って欲しい。<br>・高齢者が多いので、除雪や屋根の雪下ろしに対する助成。<br>・山道管理や排水路管理が人口減少で難しくなる。人的助成を必要とする。<br>・交通面のサービス、利用しやすさ、安価。<br>・除雪、町への買い物移動（交通の）。<br>・冬の除雪と屋根の雪下ろしに対する助成。<br>・除雪作業はもちろん必要。 |
| **4．社会基盤の維持・管理上の問題** | ・山から水を引いており、年 2～3 回ほど大雨に伴い土砂が流入した場合、その対応が必要となる。重労働だが、欠かすことができない作業のため、将来的に不安がある。<br>・山道管理や排水路清掃などの参加者は年々減少している。維持管理のため、人を雇ってでも実施しなければならないが、誰に頼めばよいかが分からなくて困っている。行政には、雇い手の情報を提供してもらいたい。<br>・高齢化と後継者不足（複数意見）<br>・水路の管理は人手では困難な事も多い。農地用でもあるが、火災時の水利としても利用しているので、維持していかなければならない。<br>・農地、道路、水路など多面的機能支払交付金を活用し管理している。農作業が困難な人の田は、大規模農業者が耕作している。ただし、どちらも高齢化が進み、5 年ごと見直しが必要である。<br>・農業の後継者不足、依頼する農家の増加、荒れ地の増加。<br>・水路関係は地権者が共同で作業をしているが、10 年後は高齢化で心配。<br>・町道が相当傷んでいるが、改良の予定はないか。<br>・道路の管理、特に老朽化した橋、雨天時の土砂崩れ対策 |

| | |
|---|---|
| **5．部落有財産などの管理の現状と見通し** | ・森林管理署からの借地に植林した杉が、伐採期になったため刈払いし集落内で分けた。杉の財産的価値も鑑み、新たな植林はしないこととなった。<br>・所有財産に魅力を感じなくなってきている。<br>・農地は高齢化と後継者不足により、不要という意見もある。<br>・共有者会があるが、高齢化で管理が大変。<br>・村人足という形で維持しているが、高齢化が進んでいる。<br>・屏風は持ち回りで管理している。<br>・部落山林は特に手入れはしていない。ただし、年 1 回林道の道なぎを行っている。人口減少により作業は難しい。<br>・組織を作って管理している。 後継者不足。<br>・今は管理しているが、人が少なくなり大変になっている。<br>・部落で（公民館）運営している。山焼きは手伝いの人を依頼している。10 年後は心配。<br>・共有林があるが、ほとんど何もしていない。取得時点の背景は分からないが、現時点ではお荷物と思っている人も多い。<br>・わらび園の管理と運営 |
| **6．近隣集落との連携による地域づくりにおいて、最適な地域割り** | ・自らの集落が問題を抱えているなかで、他集落に力を貸すということにはならない。<br>・隣の集落との距離もあり、高齢化が進むと行くことも困難となる。<br>・旧小学校を起点とし、スポーツを通じて地区内の様々な集落から人が集まり、集落を越えたコミュニティを形成している。そのコミュニティが地域づくりにおいて重要である。行政には、スポーツ交流を支援してもらいたい。<br>・年 1 回のレクリエーションスポーツ大会を閉校の翌年から実施しており、保育園児から高齢者まで世代を越えて交流をしている。子どもたちにその活動を通して、自分の地区を大切に思ってもらうよう取り組んできた。これらのスポーツを通じた活動をどうしたら更に活性化させるか行政に検討してもらいたい。<br>・隣の集落と連携。<br>・地域づくりとは何か、幅が広すぎて答えられない。<br>・駐在区。何をして地域づくりをしていくのかによるが、沖庭は旧学区が 4 つに分かれていたので、その考えも有り。<br>・旧学校区で地域づくりの内容を検討して地域全体で行うか、決定すべきと思う。<br>・旧小学校区　狭い範囲では人口が少なすぎる。<br>・隣の集落<br>・駐在区エリアを組み合わせ　舘・小渡、古田、舟渡、尻無沢・今市<br>・一昔前の様な沖庭地区 |

| | |
|---|---|
| 7．移住者など外部人材の受入れに当たっての意向や課題 | ・外部人材を取り入れることは良いと思う。ただし、空き家をリフォームし無料で貸し出すようなメリットがないと人には来てもらえないのではないか。<br>・古田歌舞伎に地域おこし協力隊も出演している。門外不出という考え方は古く、外部からの人間を受け入れなければ、継続できない状況になっている。これらの取組には賛成。<br>・外部人材の受入れについて抵抗感はないが、地域おこし協力隊のように地域と外部人材の間に行政などが入り、調整する仕組みなどがないと不安に思う。<br>・ただ人口減少を防ぐために誰でも良いので来てくださいとは言えないのではないか。住民と同じ感覚や目線で考えられる人であれば良いと思う。<br>・空屋があるので、利用してもらいたい。<br>・移住者は歓迎するが、他の町に例もあるので、町で助成してくれれば何らか人口不足を解消できるのではないか（空き家をリフォームして何年か住んでもらうとか）。<br>・それぞれ自分のことで精一杯になってしまった。土地も田畑もある。<br>・希望者は受け入れたい。空き家はあるので住むのはよいが、仕事を探せるか不安である。<br>・空き家はあるが、老朽化している。<br>・不明。部落内での話は誰も発言なし。<br>・積極的に受け入れるということではないが、特に問題はないのでは。考えたこともないので、地域内の意向をまとめたことはない。<br>・移住者、外国人歓迎。 |
| 8．その他 | ・何をやるにしても高齢化、人がいないので大変だ。<br>・もっと簡単にできるようにしてもらいたい（共有者会等）。<br>・どこも高齢化が進んでいる。体力的に外に出るのも厳しい人が増えてくるので、買い物、医者へ行く手段は自動車しかない。何とか通学用の小型バスを日中利用できるようにしてほしい。それに対して何か分かるような説明もしてくれれば助かる。<br>・学校をなくした時点で、考えなければならなかった。「自分の家が良ければ」という考えが進んだ気がする。栃倉は近所同士気に掛けながら暮らしている、意外と穏やかな部落。若い人の言うことを聞いてくれる。<br>・集落だけでなく、旧学校区での考え、活動などの話し合いも必要である。<br>・何か考えるなら、自分や家族の為に温暖化対策に何をすべきか。子どもや孫のために守りたい。これから台風や災害は、まだ大きくなると思う。町としては何をすべきか。 |

③南部地区（小玉川）

※ 下表の「集落名」の赤文字は 10 世帯以下、下線は出席者が関わる集落

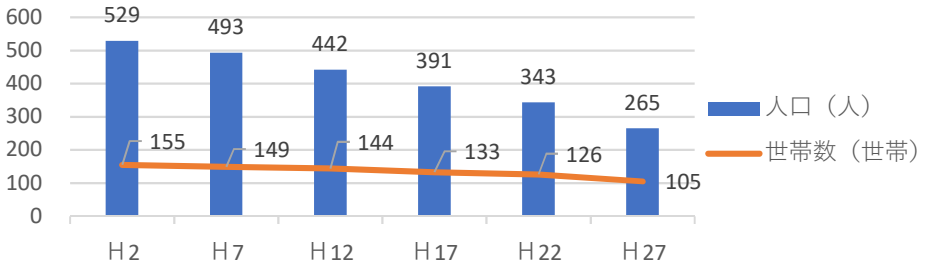
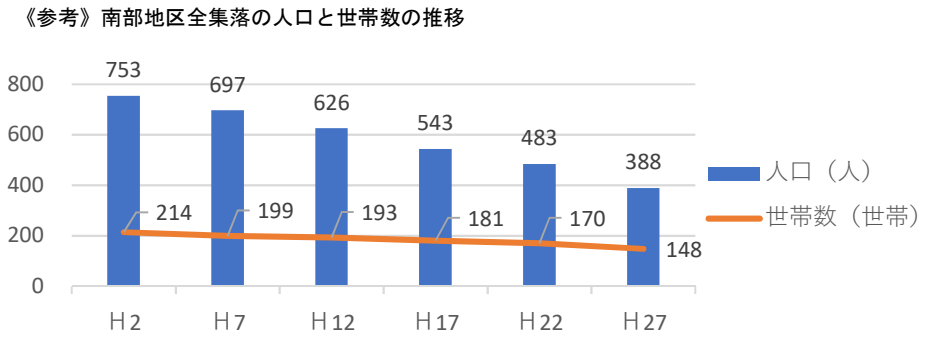
| 対象となる集落名 | 小玉川、長者原、泉岡 |
|---|---|
| 人口と世帯数の推移<br>（グラフは、本座談会対象３集落の合計） |  |
| 《参考》<br>南部地区全集落の<br>人口と世帯数の推移 |  |
| ヒアリング〔計 3 名〕 | 駐在員、農業振興組合長 |
| 1．居住集落における共同作業等の活動と今後の見通し | ・用水路点検整備（春・秋各 1 回）、祭事（山日待、古峰、秋祭り）、山道等草刈り（年 1 回）、公民館施設管理　当面現状維持と思う。<br>・小玉川自整協は二大字（旧学校区）をまとめた形で春には「熊まつり」、秋は「トレッキング」、冬は「雪まつり」など外部向けイベントのほか、地元向け行事の開催などを行っている。また、旧小玉川小学校の管理業務、マタギの郷交流館管理業務を受託している。近年、学生の応援などがあり変わらず行っているが、高齢化も進んでおり同様の活動が継続できるかは不透明だ。<br>・大きな行事として熊まつりがあるが、大学生などの力を借り何とかやっている。今後もそのような状況が続くと思う。<br>・共同作業として林道の刈り払いを行っているが、やはり高齢化が進み予定時間内に終わらず、作業員の負担が大きくなってきているのが現状。<br>・わらび園事業（維持作業・かや刈り含む）は高齢化によりサービス低下、草刈りは高齢化により作業困難（大字道なぎ人足）。<br>・熊まつりを準備とともに 2 日掛けて行っているが、家を離れた若者達が連休に帰って来てやっとというのが現実。<br>・山道なぎの維持も、道を知らない若い人がいて困難になりつつある。<br>・共同作業に出ない人から「出遅れ料」を取っている。<br>・山焼きは学生ボランティアがやっている。<br>・わらび園は収入源となり、祭りなどの資金源になっているので、外部の人を頼んでででも続けたい。<br>・水路については、壊れた個所は多面的機能支払交付金で、補修、清掃は、もともと水利権を持っている者は免除している。<br>・出遅れ料は実作業1万円、軽作業8千円としている。 |

| | |
|---|---|
| 2．残していきたい行事や財産 | ・町を代表する観光地の沿線としても、特に農地を中心に景観を守れるのか近々の課題と思う。<br>・春の「熊まつり」、冬の「雪まつり」は外部の方にも好評であり、小国町を印象付けるもののため、継続できればと考えている。<br>・熊まつり、わらび園。<br>・熊まつりや収穫祭は残していきたい行事だが、これも高齢化等で大変になり、ボランティア等の協力がないとできなくなってきている。今後は地元民が本当に楽しめる行事へと進めていく方向へ。<br>・美しい景観（山林、田園含む）、マタギ文化（山間部で野生の動物を獲り、暮らす文化）。<br>・熊まつり、秋まつり、山日まつりなどの行事　わらび園の維持、現在小玉川公民館で観光わらび園を営業しているが、山焼き、営業、カヤ刈り等維持して行く事が難しくなりつつある。<br>・熊まつりを続けたいなら、行政がどうしたら続けられるのか考えて欲しい。 |
| 3．集落内の困り事とその対処に必要な社会的サービス | ・人口の減少。<br>・一人暮らしの高齢者が増えてくると思われる。そのような方を見守ってくれるサービスの充実。<br>・除雪に対する助成は必要だと思う。<br>・バス等の交通機関について、今後ますます高齢化が進み、ほとんどの人がお世話になると思うので、本数やコース等の充実をお願いしたい。<br>・有害動物による被害（畑・田）については助成と見回り、里に熊が出ることについては、助成と安全確保をして欲しい。<br>・バスの本数を増やしてもらい、併せて時刻表の見直しもして欲しい。 |
| 4．社会基盤の維持・管理上の問題 | ・人口の減少。<br>・自整協としては行っていない。<br>・田んぼを自分でやっている人が少なくなってきた。いずれ引き継ぐ人がいなくなるのではないか。<br>・農地の維持管理は高齢化により大変になってきている。せっかく育てた農作物をサルや熊に食い荒らされるのでは、何のために管理しているのか分からない。<br>・後継者がいないため、作物を作れず田畑が荒れる。<br>・道路除雪のレベル低下。<br>・後継者が不足している。 |
| 5．部落有財産などの管理の現状と見通し | ・当集落には部落有財産としての土地はほとんどなく、大字地として活用している所は町有地である。山林の活用がほとんどない現状で、今後課題となりつつある。<br>・人足等共同作業について、高齢化はしているが今のところ管理できている。今後どうかは分からない。<br>・わらび園の管理運営はやはり高齢化が進み、重機や学生達の協力に頼る割合が増えてきている。<br>・維持は難しい。村人以外が入山して困る（わらび園以外）。<br>・チェーンソーで枝落としして管理しており、杉は売れる状態にある。<br>・部落の中で検地を行い図面あり、借地割合もはっきりしている。<br>・財産は集落を出る人に一筆もらい、残っている人だけで管理している。<br>・借りて杉を植えている山林は、返す場合木を伐採するか放棄する。<br>・集落外に出て田を貸しても、水路部分については大字の掟に従ってもらっている。 |

| | |
|---|---|
| 6．近隣集落との連携による地域づくりにおいて、最適な地域割り | ・現在すでに旧学校区エリアで組織化されている。<br>・本地区の場合は、旧学校区が良いと考えられる。<br>・現在自整協（旧学校区）で活動しているので、このままで良いと思う。<br>・小玉川に関しては、学校区で一つの自治にしたらどうかと思う。<br>・近隣集落も少子高齢化が小玉川より進んでおり、学校区が望ましい。 |
| 7．移住者など外部人材の受入れに当たっての意向や課題 | ・現在すでに移住者が定住しており、今の所問題はない。その他希望がいれば、前向きに話し合いはできると思う。<br>・自整協としては現に移住者と連携をとりつつある。<br>・若い人が移住してくれればいいが、高齢者が来てもあまり意味がないと思う。<br>・移住希望者がいれば受入れは賛成だが、雪深く交通の便の悪いこの地を好んで来る人はいるのか。<br>・私は受け入れたいが、閉鎖的な村なので難しい。<br>・移住者を受け入れて行きたい。現在 2 軒空き家あり。<br>・かつて外部の人を受け入れるに当たっては大字の規約を盾に反対者する人がいた。その人がいなくなり、変更したことで外部の人を受け入れやすい環境ができた。 |
| 8．その他 | ・最近特に自然災害が多発し避難所の条件が重要視されているが、ハザードマップで指定されている旧小玉川小中学校は使用できる水の「質」、「量」共に問題も有り、飲料、トイレ使用に支障がある実態。通常の学校活用にも問題となっている事から、早急な改善が必要と思う。<br>・すばらしい自然と温泉が売りのこの小玉川。現在ある宿泊施設等が有効に活用されていない（山荘、川入荘で昼食がとれないのはとても残念）。建て替えするのか、改修するのか、それともこのままか。<br>・子どもたちに小国のデメリットを強調しすぎ。住む面白さも伝えるべき。 |

④南部地区（玉川）

※ 下表の「集落名」の赤文字は 10 世帯以下、下線は出席者が関わる集落

| | |
|---|---|
| 対象となる集落名 | 玉川、玉川新田、足野水、市野沢、足水中里、百子沢、樽口、玉川中里、中田山崎、片貝 |
| 人口と世帯数の推移<br>（グラフは、本座談会対象の 10 集落の合計） |  |
| 《参考》<br>南部地区全集落の<br>人口と世帯数の推移 |  |
| ヒアリング〔計 10 名〕 | 総代、公民館長、地区保全会会長、駐在員、民生委員 |
| 1．居住集落における共同作業等の活動と今後の見通し | ・玉川部落会（玉川と新田）の作業が年 3 回（春と秋の堀普請、夏の山道なぎ）、ほかに地域の各施設の除雪作業を実施している。高齢者世帯が多く、将来継続は困難である。<br>・行事（年始交歓会、トン汁祭り【除雪作業後】、秋祭り、しめ縄作り）<br>・1 月新年顔合わせ・歳頭焼き、3 月公民館・地区の総会、7 月山道なぎ、8 月杉の下刈り、9 月焼き肉・芋煮会・・・など、年間を通して行事がある。高齢者が多く、人もいないため中止になる行事もある。<br>・大字玉川では年4回作業があるが、高齢化して大変になってきた。<br>・お祭り（神社に行くだけ）、下刈り堀上げ、若い人が少ないため困難。<br>・堀の草刈り、掃除、山道なぎ<br>・わらび園火入れ、防火帯草刈り、山道整備（高齢化が進み大変になる）。<br>・現在国有林の山道の草刈りを実施しているが、7～8カ所あるが今は人手不足で（年1回）3～4カ所くらいしかできていない。若い人も少ないので継続は困難になるかもしれない。部落有の共有林の草刈りは人手不足と木材価格が安いので今後はやらないと思う。<br>・色々な活動は人がいなくて中止になり、神社の維持が困難になってきた。<br>・共有林の草刈り年1回、施設の雪堀り、春と秋の祭り、堀普請年2回、今後縮小していく。<br>・堀の整備はコンクリート化により草取り等が楽になった。<br>・人がいないので共同作業ができなくなっている。神社や空き家の解体も考えている状況にある。 |

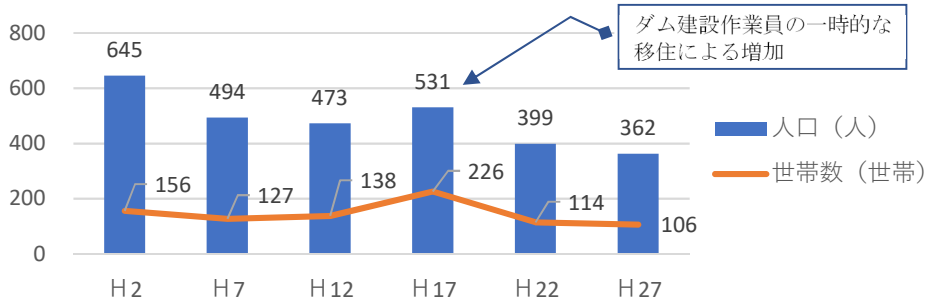
| | |
|---|---|
| **2．残していきたい行事や財産** | ・行われていた行事が、子ども達が部落にいなくなってから参加者も少なくなり、なくなっている（歩こう会、自治会旅行会、雪まつりなど）。これから先、残しておきたいのは伝統である。しめ縄作りの行事だが、人数が足らず継続は困難で、今後どうしていくか検討中である。<br>・当地区にはミニライスセンターがあり、田んぼを作る人がいれば活きる。畑に関しては、作りたいがサルの被害が多くて大変。秋祭りに行う芋煮会や焼き肉は残したい。<br>・部落の財産は杉林が少ししかない状態<br>・9 月 11 日山上神社のお祭り、小正月のさいず焼き<br>・秋祭り、田畑<br>・年1回の部落の懇親会は今後も残していきたい。わらび園は部落の大事な収入源なので残したい。<br>・個人の田畑は、現在耕作している人ができなくなれば終わり、部落有地は住んでいる人がいなくなれば町有地になるが、子ども達が戻る見込みがないので、20 年後は町有地の可能性大。<br>・春と秋の祭り。 |
| **3．集落内の困り事とその対処に必要な社会的サービス** | ・70 歳以上の高齢者世帯が多く、地域内の共同作業（力仕事）は困難。今後作業を縮小するか業者に委託するしかなく、財政面でも厳しく助成が必要。玉川の住人 21 名・世帯数 12（内、高齢世帯 8）、空き家 8 軒、新田地区 13 世帯（住人 35 名）空き家 4 軒<br>・地区的に風が強く雪がよく落ちるため、屋根の雪下ろしはそんなに必要ないが、今後ますます高齢化して車の運転が困難になり、買い物など交通手段が大変になる。国道に出る道路の改良が必要。新たな高規格道路も玉川寄りにすべき。<br>・高齢者が多いものの今は個々で除雪しているが、除雪ができない人がでてくる。また、高齢ドライバーも多く、そうした対策として、バスやタクシー等の助成が必要。<br>・高齢者が多いため、運転ができなくなると交通の手段がない。<br>・現在はなんとか大丈夫だが、数年後一人暮らしが 80 代・90 代になることを考えると心配。<br>・居住地域内の土地の維持管理に対する助成。<br>・助成と人足が必要。<br>・現在年をとって子どものところや老人ホームに行ったきりで、半分以上が空き家だが、亡くなる人が多いので、家の解体が具体的になってきた。数年後は軒数が半分以下になると思う。雪下ろしはユンボを頼めばなんとかなるので、車が無理になった年寄りの買い物、病院への通院など、日々の生活上の支えがあると助かる。<br>・公民館活動、駐在員、防犯組合、その他数多くの役職があり1人で2つも3つもこなさなければならない。例えば交通安全母の会は子どものいる家は1軒しかなく、その人が何年も班長をしなければならない。交代するにも年寄りだけしかいない。<br>・消防団は1班しかないところが数カ所ある。緊急時、安全な場所に年寄りが移動できない。<br>・高齢で家族から運転をやめて欲しいと言われているが、不便さを考えるとやめられない。新潟方面から移動販売車が1軒でも来てくれるので助かっている。 |

| | |
|---|---|
| **4．社会基盤の維持・管理上の問題** | ・田んぼの水不足に対しては、玉川農業揚水組合で維持管理をしている。吸管の取り付け、撤去作業を 5 人ほどでやっているが、メンバーは高齢化しており、後継者もいなく、今後が不安である。<br>・水利組合があるが、高齢化している状況。ここ 4～5 年くらいは大丈夫。<br>・農地や水路を管理しているが、機械が古くなって管理が大変になってきた。<br>・部落では 6 軒しかないため人がいない。いつまでできるか分からない。<br>・今は7～9人で作業しているが、何年後まで大丈夫なのか。<br>・高齢化になり、人手不足。<br>・現在 15 戸のうち、水稲を作付けしているのは 4 戸しかない。田畑が草木が伸びて、サル、熊などが来やすくなるが高齢化して刈る人も少ないので助成が必要。<br>・後継者がいない。<br>・南部に入る道路、非常に狭く事故も多発。何とかしてほしい。 |
| **5．部落有財産などの管理の現状と見通し** | ・わらび園等はない。部落会の土地（山など）があり、個人で借り入れ杉を植えている。組合員の減少と高齢化により、今後どうしていくかは将来総会にて議論することになると思う。<br>・わらび園は運営しておらず、ほとんど立木になった。山林の杉の手入れは木も大きくない。ここ 10 年は何もしていない。下刈りや間伐は難しい。<br>・特に管理はしていない。ただし、わらび園はわらび園組合に貸しているので、組合で管理している。<br>・わらび園を管理運営しているが、高齢化して山焼きができないので、外部の人を毎回 3～4 名頼み、なんとかやっている。今後心配。<br>・現在手を加えていない。<br>・杉が主なので管理はしなくていい。<br>・杉林の財産があるが条件が悪く売れない。集落を出ていった人には権利を放棄してもらうことになっている。発電所の権利は価値があるので残したい。 |
| **6．近隣集落との連携による地域づくりにおいて、最適な地域割り** | ・エリアが広いとまとまりがつかないと思う。隣の集落と連携すべきと思うが、住民のその意識は薄いものと予想される。<br>・近隣集落との連携しかない。<br>・足中地区（学校区）・・・市野沢、百子沢、足水中里、樽口で良いと思う。<br>・最適人数で。<br>・玉川コミュニティセンターに年1回位（玉川小学校区）集まり、親睦会などをやった方がよい。<br>・旧小学校区でやるしかないと思う。<br>・旧学校区のエリアで良い。<br>・10 年以内に一人暮らしになる家が 3～4 軒ある。 |

| | |
|---|---|
| 7. 移住者など外部人材の受入れに当たっての意向や課題 | ・人を増やすには、子どもを呼び戻すか移住希望者を受け入れるしかないと思うが、受入れに対し反対意見もある。<br>・空き家は3軒。来る人がいれば受け入れる。<br>・人口が少ないため、高齢のため無理だと思う。<br>・今現在受け入れている。若い人がいるということが、活気も出て頼もしい。<br>・現在、移住者がいるが交流がなく、水路や道脇の問題が出ている。部落の事業に参加できないようなら外部人材は受け入れたくない。<br>・受け入れたいが希望者がいるとは思えないと、みんな考えている。<br>・希望者がいれば受け入れたい。 |
| 8. その他 | ・子どもが家に残らなければならないという時代ではなくなり、子どもの生き方を尊重し、自由に人生を歩ませているのが今の時代なのだと思う。親が地元に残り、高齢となり、好きなことをして余生を楽しみたいという考えの人がほとんどである。地域に子どもがいないということは、人口減少の大きな要因であり、学校が休校になってから地域に元気がなくなり、変わってきていると思う(最大 12 人の子どもがいた時期があった)。<br>・飯豊山や温泉など、名勝地があるのでもう少し活用できるように。<br>・町内(病院等)への交通手段が心配。<br>・全体的に数年間は大丈夫だと思う。将来的には心配、どうなるのか分からない。<br>・サル、熊などの野生動物が田畑を荒らし住民が困っている。離農者の草刈りへの助成や人足の支援などできたら良い。<br>・高校生の進学率が上がると小国には残らないといった悪循環がある。 |

⑤東部地区

※ 下表の「集落名」の赤文字は 10 世帯以下、下線は出席者が関わる集落。

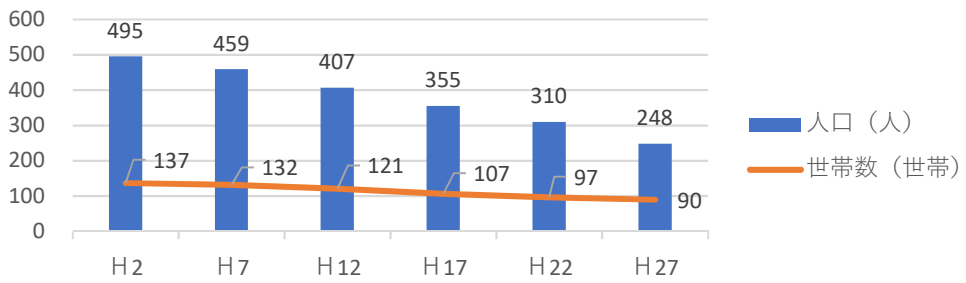
| 構成する集落名 | 上大石沢、下大石沢、河原角、新股、上叶水、下叶水 |
|---|---|
| 人口と世帯数の推移 |  |
| ヒアリング〔計 10 名〕 | 駐在員、農業振興組合長、地区振興協議会会長、自治会長、地区保全会会長、 |
| 1．居住集落における共同作業等の活動と今後の見通し | ・わらび園の火入れは継続、盆踊りも継続。<br>・水路、山道等の刈り払いを年 1 回やっている。段々来られなくなる人がおり、大変になっている。<br>・水路の草刈り、夜祭り、火祭り等、公園・神社の管理は細々と簡単に行っている。<br>・毎年恒例の花見会、盆踊り大会、収穫祭、さいず焼きとあるが、若い人中心で企画実行しており、当分心配ないと思う。<br>・上大石沢集落では県の緑環境税を利用し、公園を作り植樹を行い桜の木を中心に立派な花を咲かせ、春の花見や夏の花壇作りなど女性子どもも含め活発に行ってきた。定年になった人を中心に維持管理し、公民館活動を絶やさず継続していきたい。<br>・下叶水は 2 軒だけのため、特に何もない。<br>・花見は継続可、水路の草刈りについて、インフラ整備の部分は集落単位では厳しいかもしれない。盆踊りは継続可、運動会や文化祭は学校がなくなればどうなるか不安、さいず焼きは継続可。<br>・新年の顔合わせ会、わらび園の管理・運営（5～7 月迄）、神社の祭り（9 月）、忘年会、水路の草刈り、いきいきサロン（月 1 回）、10 年位は問題ない。 |
| 2．残していきたい行事や財産 | ・わらび園管理・営業、田畑。／・集落そのもの、移住希望者は受け入れてきた。<br>・飲料水も各戸湧き水（清水）を利用しているが、この所の天候で渇水する家も出てきている。<br>・人と人との交流ができることについては、ずっと継続していきたい。<br>・学校を中心にした運動会や文化祭、そして地域あげてのふる里祭りは残したい。<br>・農業はそれぞれ後継者が育っている。<br>・河川アダプタ事業による川なぎ清掃などは人がいなくなり中止したが、村の山の道刈りなどは続けていきたい。<br>・叶水小中学校を中心に運動会や文化祭（ふるさと祭り）は例年すばらしい成果を上げている。地域の中核となる学校の存続と整備が望まれる。<br>・運動会や文化祭などの学校行事は、地域外からも沢山の人が参加し、出身者の里帰りの機会にもなっており重要な行事。（2 名）<br>・その他は時代に合わせてその時の住民ができる範囲でやれば良い。<br>・新年の顔合わせ会、わらび園の管理・運営（5～7 月迄）、神社の祭り（9 月）、忘年会、水路の草刈り、いきいきサロン（月 1 回）、10 年位は問題ない。<br>・部落名の共有地（16 名の権利）が代替わりにより登記不能になっている。今なら、ギリギリ登記変更ができるかもしれない。<br>・山林について、小国町を離れる場合、権利放棄する取り決めとなっている。<br>・山林は道を造ると価値が出るが、途中に国有地があるため作れない。 |

| | |
|---|---|
| 3．集落内の困り事とその対処に必要な社会的サービス | ・高齢者が多く、冬の除雪等が困難になってくる。<br>・部落内で共同作業するが、人手不足のため助成が必要。<br>・飲料水の渇水。<br>・今後は現在週 1 回のバスの増便等。<br>・男の高齢者がどうしても家にこもりがちなので、もっと役立てられる取組や趣味の講座等があったらどうか。<br>・除雪は互いに助け合うようになっているので、もう少し経費の助成等できたらいいと思う。<br>・東部地区は他からの移住者や U ターン者が多く、若者の定住が増えているが、そういう人たちが望んでいることをもっと収集し、行政も援助する体制があれば、まだまだ人口と子どもの増加は望めると思う。<br>・県道の草刈りが不十分なため、熊が道路に出てきて大変危険。通学路なので、管理はしっかりしてほしい。<br>・組長（駐在員）は負担が大きいのでは。希望に応じてペーパーをなくし、電子化のみで対応するとか。<br>・雪が多いときは、夜の除雪もお願いしたい。 |
| 4．社会基盤の維持・管理上の問題 | ・農地や水路の管理は多面的機能支払交付金を活用しているが、出られるメンバーが数名であり大変になっている。<br>・町道の管理を、町であまりしてくれない。<br>・除雪でこわれたガードレールや道路の陥没、側溝の中の泥など。<br>・近年イノシシ、サル等の野生動物の被害が増加。<br>・今後は労働力不足が懸念される（高齢化）。<br>・多面的機能支払交付金等活用するためにも、もっと事務的なことを簡単にして継続できるようにして欲しいし、更なる水路の整備を進めて欲しい。<br>・農業をしていない人も堀上げや水路の草刈りなどを協力してやっているが、水路や砂防の整備などは行政の力を借りないと、農業を維持する人も部落の環境の維持も大変になる。<br>・下叶水は 2 軒で対応できる（集落管理の施設などがないため、日常的な手入れだけで十分維持できる）。<br>・簡易水道組合が継続していけるかは疑問。できる人が限られ、その人への負担が大きくなってしまう。<br>・冬季にたまに仕事が夜遅くなったりした時、除雪の状況により帰れない時もある。小さい子どもがいると大変なので問題だ。 |
| 5．部落有財産などの管理の現状と見通し | ・わらび園を管理する住民は高齢化しているし、この地を離れたら特に若い者は帰ろうとしない。<br>・わらび園の山焼きの人数の確保ができなくなるので、管理が難しくなる。<br>・共有地は税金分のあがり（収入）が毎年あるわけではない。山林に関しては温暖化防止等様々な恩恵が言われているため、税金はとらず、こうした環境保全についての地域活動に逆に金を出すべきというのが今ふうの考え方ではないか。<br>・部落林や山道の管理など、年々老齢者が多く難しくなっている。<br>・特に管理などしていない。ダム建設に伴い、移転した住民の持ち分がある共有地について、今後所有が不明確になったり不在になったりするおそれがあり、権利の整理が必要。<br>・全戸で行っているので問題ない。 |

| | |
|---|---|
| **6. 近隣集落との連携による地域づくりにおいて、最適な地域割り** | ・当地区においては、やはり小学校区を中心とした連携をしていくべきと思う。<br>・まだいまの部落のままでいいと思う。先のことは分からない。<br>・現在は上大石沢、下大石沢で連携が進みつつある。<br>・今のところ学校区が適当と思う。<br>・叶水小中学校区。<br>・東部地区はすでに小学校区を単位とした地域活動が定着しており、現状のままで良い。<br>・体協<br>・隣の集落が良い。 |
| **7. 移住者など外部人材の受入れに当たっての意向や課題** | ・移住希望者がいれば受け入れたい。(2 名の発言)<br>・移住希望者がいれば受け入れたいが、全部が入り込めない事がある。<br>・外部人材を受け入れることはいいと思う。しかし、こんな雪の深い所に移住者は来ないだろう。<br>・少しずつ空き家も出ているが、リフォームくらいしないと住みにくい。高齢で移住者の場合、健康に不安が出てくると医療に対する不安と除雪はかなり負担になっている。<br>・上大石沢は早くから他からの受入れを行ってきた。これまでの課題は、上水道が完備されなく不便であったこと。<br>・移住希望者はいるが、空き家がないためなかなか声を掛けられない。<br>・ウェルカム。<br>・移住者がいれば受け入れる。<br>・町は外から来る人の声に、積極的に耳を傾けて欲しい。 |
| **8. その他** | ・公共住宅的な物があれば地域で生き長らえる。<br>・学校を中心に集落の活動が多いので、来訪した住民が活用しやすい学校の整備(例:トイレの整備)もやって欲しい。<br>・町と住民との座談会などをもち、具体的にできる地域づくりを行っていくことが必要だと思う。<br>・今までやってきたことを無理に続けるのではなく、時代に合った負担の少ない地域づくりが大切。できる人ができることをできる範囲でやる。できないことはやらないという割り切りができないと、地域の中で負担ばかりが増えてどんどん暮らしにくくなる。行事や財産を残しても、暮らしにくくては何もならない(昔は行事や財産が暮らしを支えていた。今とは位置付けが違う。時代の変化を受け入れるべき)。<br>・学校がなくなる前になくなった後のことを考えておかないと、集落コミュニティは一気にしぼむと思う。<br>・学校がなくなると店もなくなる。<br>・小国高校は進学を勧めるので、生徒が町に残らない。<br>・東京に行く人を小国で育てるのは疑問。<br>・小国は大きな災害被害はなく、豪雪のみ。アピールポイントにならないか。<br>・中学生が小学生と遊べるのは小国の良い所。ここを伸ばしてほしい。<br>・学校は皆一緒に学ぶので、目が行き届かない所もある。地域の人から学ぶことがどれだけ重要で楽しいことか見直してほしい。<br>・飲料水が足りないので、外から来る人を受け入れるに当たり、水を気にしてしまう。<br>・最近、山からの土砂の流入が多く、用水路がすぐに埋まってしまう。 |

⑥白沼地区

※ 下表の「集落名」の赤文字は 10 世帯以下、下線は出席者が関わる集落。

| 構成する集落名 | 間瀬、沼沢、白子沢 |
|---|---|
| 人口と世帯数の推移 |  |
| ヒアリング〔計 6 名〕 | 自治会館館長、駐在員、総代、消防団団長、消防団部長、福祉関係団体会長 |
| 1. 居住集落における共同作業等の活動と今後の見通し | ・共有林の境界刈り払い（1 年置き）。<br>・盆踊り、防災フェスティバル等、年々参加者が減ってきている。若い担い手がいない。<br>・刈り払いは年 1 回やっていたが、住民に高齢者が多く、ひどい所だけ絞ってやっている。<br>・今の所、夏祭りを実施しているが、困難になると思う。<br>・何事も共同作業には人は集まらない。高齢者が多いため出来ない。<br>・共有林野の共同作業は中止とした。<br>・運動会、盆踊り等のイベント活動の長期的継続は難しい。<br>・隣の集落と協働するという雰囲気はない。<br>・「財産」には入れないが、共同作業はやってもらう。 |
| 2. 残していきたい行事や財産 | ・白子神社の祭り（春・夏）は残していきたい。<br>・山林を残したい。<br>・財産の有無が行事の継続の可否、集落同士の共同作業の協力の有無につながっている。<br>・盆踊りはやっているが、今後の継続は困難になると思う。<br>・田をやっている人はいない。田をそば畑にしてもらい耕作している所は、農地が残っていて良いと思う。<br>・田畑は残しても、あとを継ぐ人はいないし来ない。<br>・今ある姿は自然の流れで、残さなければならないものは思い当たらない。 |
| 3. 集落内の困り事とその対処に必要な社会的サービス | ・高齢者宅の除雪が大変に思う。<br>・道路沿いの空き家があり、屋根からの落雪が心配である。<br>・雪下ろしに助成してもらうと良い。（複数意見）<br>・防災ラジオが全戸受信できるように整備して欲しい。 |
| 4. 社会基盤の維持・管理上の問題 | ・水路の管理をしているが、人手も少なくなり大変である。<br>・農地、水路はメンバーがいなくて機能していない。<br>・後継者がいないため、農地や水路の管理は難しい。<br>・田畑の荒れ地を維持しても、経過年数等の制限によって、地目や名義が変更できないこと。生存中に処理できない。 |

| | |
|---|---|
| **5．部落有財産などの管理の現状と見通し** | ・わらび組合も高齢化により、会員数も減少している。<br>・わらび園は大字沼沢で管理しているが、担い手がいない。<br>・わらび園は、今は管理運営している。<br>・林道ができたらわらび園経営を計画しているが、若い人はわらびに関心がなく、どうなるか不安がある。<br>・部落有財産ばかりか、個人の財産さえも管理が出来なくなる。 |
| **6．近隣集落との連携による地域づくりにおいて、最適な地域割り** | ・いままで通どおり、白沼地区（沼沢と一緒）でやっていきたい（ふくしの里、体協等）。<br>・旧小学校のエリアでやった方がいいと思う。<br>・出て行った人も集めて地域づくりをしていった方がよいと思う。 |
| **7．移住者など外部人材の受入れに当たっての意向や課題** | ・地域内の意向は聞いていないので分からない。<br>・希望者がいれば受け入れていきたい。 |
| **8．その他** | ・祭りの開催場所を下（平地）に移したら、人が集まっている。<br>・防災訓練も年 1 回やっている。<br>・東北初の道路協力団体になり活用している。<br>・白沼地区の現状維持は 10 年持つかどうか。 |

## ２－２　個別ヒアリング調査について

### (1) 個別ヒアリング調査の概要

#### ア　調査の目的

アンケート調査ではとらえきれない各地の実情や新しい取組等を把握するため、町内で活躍する町民(移住者を含む)や団体、町民の生活を支える団体等に対し、聞き取り調査を実施した。

#### イ　調査の実施方法

**①調査期間**

令和元年１０月２３日（水）から１０月３１日（木）まで７日間

**②形式**

事前に聞き取り項目を通知した上で、当日は聞き取り項目を網羅する形で自由に発言してもらった。

**③ヒアリングの対象者**

各地区において、①地域活性化や交流活動などに積極的に取り組んでいる住民、②移住者、地域おこし協力隊等や団体、③町民を対象とした行政サービス等各種サービスを提供する団体等及び④雇用の観点から町に大きな貢献をしている法人（それぞれ下表参照）に対して、個別のヒアリング調査を実施した。

| No. | 調査対象者･機関等 | ① | ② | ③ | ④ | 調査日 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 地元地域文化研究者･移住者 | | ○ | | | 10/23(水)15:30～17:00 |
| 2 | 山形県小国警察署南部駐在所 | | | ○ | | 10/24(木)13:30～15:00 |
| 3 | 小国町商工会 | | | ○ | | 10/24(木)15:30～17:00 |
| 4 | JA山形おきたま小国支店 | | | ○ | | 10/25(金)10:30～12:00 |
| 5 | 西置賜行政組合消防本部消防署小国分署 | | | ○ | | 10/25(金)13:30～15:00 |
| 6 | 協力隊3名 | | ○ | | | 10/25(金)15:30～17:00 |
| 7 | 地元企業 | | | | ○ | 10/28(月)10:00～11:00 |
| 8 | 若手農家･移住者 | | ○ | | | 10/28(月)11:20～12:20 |
| 9 | 小国郵便局 | | | ○ | | 10/28(月)15:30～17:00 |
| 10 | 協力隊 | | ○ | | | 10/29(火) 9:30～10:30 |
| 11 | 地元の学校 | | ○ | | | 10/29(火)11:00～12:10 |
| 12 | 山形県小国警察署沼沢駐在所 | | | ○ | | 10/29(火)13:30～15:00 |
| 13 | 地元企業 | | | | ○ | 10/29(火)15:30～16:30 |
| 14 | 地元若手農家2名 | ○ | | | | 10/30(水)10:30～12:00 |
| 15 | 山形県小国警察署北部駐在所 | | | ○ | | 10/30(水)13:30～14:30 |
| 16 | 社会福祉法人小国町社会福祉協議会 | | | ○ | | 10/31(木)10:30～11:30 |
| 17 | 米農家、菓子等製造販売事業者 | ○ | (○) | | | 10/31(木)13:00～14:00 |
| 18 | 地元若手農家 | ○ | | | | 10/31(木)15:30～16:30 |

※表はヒアリング日時順。

④ヒアリング項目

それぞれの立場あるいは業務を通して見た集落の状況、課題や問題、提案等を聞き取り。

- 小国町の魅力
- 日常の活動を通して見た集落等の状況
- 集落での暮らしぶり
- 生活の仕方、事業経営の仕方
- まちづくりへの提案や要望　など

(2) 個別ヒアリング調査結果

ア　個別ヒアリング結果の総括

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 農業<br>【No.4、8、14、18】 | ・稲作や畜産が適している。しかし、稲作は、米価が安い上に、豪雪地帯なので県内他地域と比較し効率面で厳しい状況にある。畜産は若手が台頭している。<br>・70 代が支えているが 40～50 代が少なくこれからが大変。<br>・初期投資の資金負担が重く、新規にやるなら廃業農家から受け継ぐか、助成金などの支援が必要。<br>・野生動物の被害が深刻化している。このままでは、農業の形が変わってしまう。<br>・耕作放棄地は、増加傾向にある(北部は荒れている。ただし、東部の叶水は農地不足の状況)。<br>・農地や牧草地のゾーニングを考えるべき。耕作放棄地に放牧したり、農地の奥に牛を放牧したりすれば野生動物対策につながる。わらび園や耕作放棄地に広葉樹を植えれば、わらびが生え雑草が生えなくなり、将来の木材需要にも応えられ、40 年サイクルの自然循環が生まれる。<br>・新規農業者に対し、家の確保と地域に合った農業を指導できるプロの支援者が必要。 |
| 商工業<br>【No.3】 | ・所得水準は県内でも上位だが、消費の 8 割以上が町外に流出。原因は、中心部までの交通の不便さや町内小売価格の割高感、ネット利用の普及が考えられる。<br>・新潟の業者が1軒でも定期的に来てくれるので助かるという声もある。<br>・高齢化と後継者不足により廃業が増加。<br>・活性化には成功事例が必要。 |
| 高齢者の事件事故等<br>【No.2、12、15】 | ・高齢ゆえの自損事故はあるが、交通事故はない。<br>・高齢で免許を返上したいが、移動手段がなくなるのでできないという声も散見される。 |
| 雇用<br>【No.5、7、9、13】 | ・企業の募集採用は町民中心に考えているが、今のところ問題なく採用できている。しかし、集めにくい環境になってきたことは感じている。<br>・県立高校の教師は約 3 年で異動する。募集採用活動において自社を理解してもらい親交が図れる頃になると転勤しまうことは残念である。<br>・郵便局や消防団は、緊急時の業務継続の観点から町内からの応募を重視しているが、採用に苦労している。<br>・個人情報に対する意識の高まりから、消防団に推薦する人を探せない時代となった。<br>・外国人の技能実習生は、日本人と比べ職種が限られる。 |
| 移住者<br>【No.1、6、8、10、12】 | ・小国は自分のライフスタイルが合わないと住めない。<br>・「警戒心を感じる」という声がある一方、「歓迎する雰囲気があった」との声も。<br>・郷に入っては郷に従えという雰囲気がある。<br>・移住後に地域に溶け込むには、自らの努力も必要。 |
| 集落の体質<br>【No.1、6、10、11、12、17】 | ・イベントが重複すると対抗意識を感じる(一緒に盛り上げようという発想が感じられない)。<br>・「田舎の付き合い」を強調する年配者がいて、話し合っても理解してもらえない。<br>・世代間の考え方のギャップを感じる(年配者は現状維持の考え方が強い)。<br>・峠にある集落のため歴史的に人の出入りがあり、人をもてなす雰囲気がある。 |

| | |
|---|---|
| 集落を支える若手の声【№6、10、14、18】 | ・若手に色々と役職を付けたり作業をやらせたりし過ぎ。<br>・若手の共同作業の負担が重い。特に、共同作業後、明るいうちから飲み会が始まり、その準備と片付けも若手にやらせるので、午後の予定が立たなくなる。<br>・町から出ていった人を遮断するような雰囲気がある。 |
| まちづくりへの意見・提言【№1、8、11】 | ・中心部と周辺部、集落ごとに状況が異なるため、対策の一本化は難しい。<br>・農山村社会の変化の要因は、過疎・高齢化だけでなく、生業の多様化やライフスタイルの変化によるところが大きい。<br>・従来のような集落内での助け合いよりも、集落外にいる子どもや知り合い、公的な助けの方が重要になっているのが、現実ではないか。<br>・地域の歴史や文化に誇りを持ち、それらを子どもや外へ伝えていくことが重要。<br>・子どもたちに今から競争させず、この町でできることを学ばせてあげたい。<br>・子どもには町の活性化の期待をかけず、この地で伸び伸びと過ごせるよう見守って欲しい。 |

### イ　個別ヒアリング調査結果の明細

①地域おこし協力隊（南部地区居住 20 代、沖庭地区居住 20 代、中心部居住 30 代、東部地区居住 20 代　計 4 名）

それぞれ中心部、東部、南部、沖庭で活躍

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 小国を選択した理由 | ・学生時代から小国を知っていて、田舎暮らしにあこがれていた、人生を見つめ直すのに最適な場所と思った、雪深く協力隊が行きそうもない所に行くことこそ協力隊の意味があると思った（実際に来てみると想像以上の雪の厳しさ）、東京の協力隊ブースで興味を持った。 |
| 移住後の地域の反応 | ・受入れに対する抵抗感は感じなかったものの警戒心を感ずることがある一方、「居てくれるだけでよい」と言われることもある。<br>・偏見もなくすんなり受け入れる環境 |
| 業務遂行上の困り事 | ・人手不足で作業負担は重い。特に平日の早朝からの作業はつらい。<br>・「田舎の付き合い」を強調する人がいて、話し合っても分かってもらえない。<br>・土日のイベントの重複。<br>・明るいうちからの飲み会（準備から片付けまで若手がやるしきたり。飲むとその後の予定がつぶれる）<br>・話し相手になるような同年代の若い人が地域にいない。<br>・雪は年々苦痛になっている。 |
| 業務を通して見た問題や課題等 | ・世代間の考え方のギャップ（年配は現状維持の考え方が強い傾向）<br>・イベントが重なると地域間の競争意識（客の取り合い）が働くこともある。<br>・共同作業の負担を考えると、戻ってこられない家族もいるのではないかと感ずる。 |
| 提案・意見 | ・集落に余力はない。集落同士で協力し合う場合、若い人の負担がより重くなるのではないか。<br>・現状の集落のコミュニティ機能をすべて維持しようとするなら、人を増やさないとやっていけない。<br>・地域おこし協力隊は地元の若手と協力しあっていくのが効率的かつ効果的活動になる。<br>・協力隊を置く場合、地域での協力隊の必要性を調査し優先度を考えて配置すべき。<br>・小国は自然環境や社会環境が自分のライフスタイルと合わないと住めない。 |

②地元若手農家（30～40 代　計 3 名）

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 家業を継いだ理由 | ・家業が楽しいから継いだ。<br>・友人から故郷の環境の面白さを教えられ、故郷に愛着心が芽生えた。故郷に住むには、家業を継げば生計を立てやすかったから（家よりも集落に対する思いの方が強かった）。 |
| 集落の状況 | ・集落にいることで、色々な役を任せられ、重荷になっている。 |
| 業務を通して見た問題や課題等 | ・イノシシやサルによる被害がひどいが、迅速に駆除する体制になっていない。<br>・現状の米価では収入が苦しいが、それでも良いという人しか現状は農家をやっていけない。<br>・旧来の農家はマイナス思考が多いが、近年危機感から積極性も芽生えているところもある。 |
| 提案・意見 | ・水稲、畑、畜産などのゾーニングを考えるべき。牛を放てば害獣対策になるという他県での事例あり。<br>・耕作放棄地を牧場にしたらどうか。<br>・農業は初期投資が負担なので、廃業農家から引き継ぐのが良い。<br>・農に興味を持つ人には積極的に支援したい。<br>・わらび園や耕作放棄地に広葉樹を植林すれば、わらびが生え雑草が生えない。40 年サイクルの自然循環により、わらびでの収入が期待でき、将来の木材需要にも応えられる。<br>・外部の人に町に住んでもらうことではなく、小国町に実際来てもらうことが重要。移住するかどうかは結果の問題である。<br>・町を出て行くことは個人の自由であるが、出て行った後に、生まれ育った所とシャットダウンしてしまうことの方が問題である。<br>・人口減少が進んでいるが、無理に人を増やす施策はナンセンス。<br>・生まれた所に帰って住まないといけないということに、こだわりすぎている。 |

③若手農家（移住者、30 代、中心部居住）

中心部で季節ごとの様々な農作業等をしている。

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 移住した理由 | ・東北の自然と有機農業にあこがれ、小国で炭焼きをしている人（師匠）との出会いをきっかけに移住。 |
| 移住後の地域への溶け込み | ・集落内に相談できる人がいたため、すんなりと移住できた。また、外部の人を歓迎する雰囲気があった。しかし、移住後に地域に溶け込むためには自らの努力も必要と思う。 |
| 業務を通して見た問題や課題等 | ・イノシシやサルによる被害対策が大変。このままでは農業の形が変わってしまう。<br>・小国は雨が多いので、可能性があるのは米。しかし、米の将来性には疑問を感じている。手広くやるには多額の設備投資が必要。新規農業は、厳しい環境にあると思う。<br>・牛も可能性はなくもない。<br>・もともと集落内には農家が少なく、共同作業がないため、水路の整備等一人でやっている。<br>・将来を考えると一緒に農業をする仲間が近くにいないため、大変だろうと思う。 |
| 提案・意見 | ・移住して農業をやりたい人には、家を確保し、地域の風土に合った農業を指導できるプロのサポーターが必要。<br>・外部人材は必要だが、集落の人で中心となる人が不可欠。<br>・子どもたちは、社会に出たら嫌でも競争しなくてはいけないので、今から競争させずに、今小国町でできることを学ばせてあげたい。 |

④農家兼事業経営者（移住者、60 代、東部地区居住）

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 移住した理由 | ・結婚を機に当地（夫の家）に移住。 |
| 移住後の地域への溶け込み | ・当地は昔から人をもてなす風土があり、すんなりと移住できたうえ、隣の人が気に掛けてくれた。豪雪は気にならなかった。 |
| 事業を始めたきっかけ等 | ・もともと雑穀が好きで、栽培に携わっているうちに色々な人に出会いネットワークが広がり、それを使ったお菓子作り、食育への関心から自然と事業も広がっていった。大学生のボランティアが来て手伝ったり、地域住民を雇ったりしながら、皆が地域で楽しく過ごせ、お金が回ればよいと考えている。 |
| 業務を通して見た問題や課題等 | （当集落は上の世代が下の世代に譲る雰囲気があること、人をもてなす風土から、特に発言はなかった。） |
| 提案・意見 | ・外から小国に来た人たちに評判が良いのに人が増えないので、町は食べ物のおいしさや豊かな自然をもっと上手にアピールして欲しい。<br>・道の駅での小国のアピールが足りないのでもっと工夫し、地元のものが売れるようにして欲しい。<br>・町民は東京に出るとそのまま就職してしまい小国に戻らなくなるが、小国を離れても小国とのつながりが持てるような仕事をして欲しい。 |

⑤地元の地域文化研究者（移住者、40 代）

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 移住した理由 | ・狩猟文化や森林文化に興味があった。 |
| 集落の現状 | ・大前提として小国町の場合、中心部と周辺部、集落ごとに状況が異なるため、対策の一本化は難しい。<br>・町内の地域行事や集落の共同作業の多くが農山村社会において息づいていたものであり、それらの変化の原因は、過疎・高齢化だけでなく、生業の多様化やライフスタイルの変化によるところが大きい。その中で、代々継承されてきた農地や森林などの財産や文化財が地域の人たちにとって重荷となっている場合さえ生じている。<br>・今も継続されている共同作業においては元気な人の負担が大きくなっている。また、従来のような集落内での助け合いよりも、集落外にいる子どもや知り合い、公的な助けの方が重要になっているのが現実ではないか。その中で、「地域コミュニティ機能」の維持だけを問題にすることに疑問を感じる。むしろ集落そのものをどう維持していくかが切実な課題だと思う。 |
| 提言 | ・地域の歴史や文化に誇りを持ち、それらを子どもや外へ伝えていくことが集落の維持やコミュニティの醸成において重要。そのための地域の教育や人づくり、場づくりを、移住者や外部の人間と一緒になって行政主導、地域主体で進めていく必要がある。 |

⑥地元企業２社

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 事業所と職員 | ・社員のうち町内出身者は７割超。<br>・最近、外国人労働者を採用、アパートに居住している。外国人労働者が地元に溶け込めるよう、様々な地元のイベント（スポーツ、祭り、防災訓練など）に誘っている。<br>・長年にわたり祭りやイベントを実施し、地域住民とともに楽しんでいる。<br>・労働力について、現在は充足しているものの、近い将来不足するものと現場サイドでは懸念している。<br>・町外出身者は、除雪の負担や雪道運転への不安から寮やアパート（中心部）に住んでいる。 |
| 採用活動 | ・地元高校からの希望は減り、人を集めにくい環境になってきたと感じる。<br>・町住民中心の採用方針は続けている。 |
| 提案・意見 | ・私立高校は採用担当がいて長期に勤務するが、県立高校は教師が約３年単位で転勤してしまうため、親交が深まり当社を理解してもらう頃異動となり、当社への就職につなげにくいと感じる。<br>・教師は小国の自然の素晴らしさと地元企業で働くことの良さを生徒にもっと伝えて欲しい。<br>・外国人の技能実習制度は職種が限られているため、小国町では日本人の方が適材である。 |

⑦当地の教育機関

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 学校と生徒の状況 | ・農業を重視した教育を実施。この地に残る卒業生は多い。<br>・小国から数名入学している。<br>・学校と卒業生のつながりは強く、卒業生が小国に来ることもある。 |
| 地域と学校生活 | ・地域とは、イベントを通して交流を図っている。<br>・当校の畑はクマの被害に遭っている。<br>・除雪は大変だが、生徒はそれを楽しんでいるようだ（関東など県外出身が多い）。<br>・生徒は、地域貢献より、自然が大好きで動いている。 |
| 提案・意見 | ・小学校統廃合前は、学校対抗のイベントで地域が盛り上がっていたのに、廃校した地域は残念。<br>・町は、小国の自然環境は情操教育や子育てに良いこと、仕事があることをアピールすべき。<br>・地域の活性化を考えたとき、地域に学校があることは重要。ただし、子どもには町の活性化の期待をかけず、この地で伸び伸びと過ごせるよう見守って欲しい。<br>・生徒の大半は県外出身者で雪も大変と感じているようだが、不便さの中から楽しさを発見することで、視点が変わるようである。 |

⑧小国町商工会

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 住民の<br>消費行動 | ・基幹企業もあり、町民の平均所得は県内上位だが、町外への交通の便の良さ、ネット利用の普及などにより、町内の消費はかなり低い（町民の所得は高いが、8割以上町外に出ている）。 |
| 商工業の状況 | ・高齢化と後継者不足により廃業が増加。<br>・コンビニエンスストアの売り上げは好調。<br>・地域を担うような企業は少なくなり、生活をしていくための事業が多くなった。 |
| 提案 | ・まず、町内での活動の成功事例が欲しい（成功事例が現状を変える突破口になるはず）。<br>・地域おこし協力隊を始めとした若者が、商工業の世界に入って来て活動するなら、商工会としては協力したい。商工業発展に役立つような特殊な技術を持った人材が欲しい。<br>・（買い物弱者対策として）商品を路線バスで配達し、各地区のサポーターがバス停で受取、各世帯へ配達できるような物流の仕組みはできないか。今後、そういった仕組みづくりが必要。<br>・商店街のイベントを賑やかにできる人、イベントを復活できる人、ネット販売の仕組みづくりができる人など、外部人材でも良いので、そういった人材が必要。 |

⑨ＪＡ山形おきたま小国支店

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 小国の農業 | ・小国町の農業は米と畜産が主体。<br>・稲作は水田面積の約5割程度。<br>・畜産農家は若手が台頭している。<br>・米作は県内でも非効率（1反当り 10 俵のところ小国は 8 俵）。気候の差が一番の原因。<br>・北部は危機的状況、叶水は農地が足りないくらいの状況。<br>・これまで自家用米を作る兼業農家がいたが、今はほとんどいなくなった。<br>・小国町の主要な農家は、現在 70 代の方が多い。40～50 代の農家が少なく、5 年後、10 年後に離農されると、非常に大変。<br>・各集落に担い手農家がいて、誰かが離農したらその担い手が集積をして、これまで耕作放棄地はほとんどなかった。今は担い手も高齢化しており、担い手自身が農地を手放している。 |
| 農業の問題や<br>課題 | ・担い手が高齢化し、農地を手放すようになっている（売却したい人もいる）。小国は農地間の距離が大きく集約営農は困難である。<br>・中間層がいないため、農業を指導できる人が減少している。<br>・害獣被害がひどい。（電気柵の設置や犬の放し飼いで対処しているところもある。）<br>・小国町の条件を考えると、就農の気持ちはあっても、生活を考えると就農できない。 |
| 農業振興の<br>提案 | ・地域おこし協力隊が農業に興味を持ち、来ているため、そうした人材を活かしたい。<br>・現状、農業で生計を立てるには厳しい状況であり、新規に農業を始める人に対し、生活面での支援が必要である。 |

⑩小国郵便局

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 人口減少が事業に与える影響 | ・高齢者への配達はあまりない(配達は都市部の半数程度)。<br>・人口減少により、全般的に仕事量は減り、人員もピーク時から激減している。<br>・有料で見回りサービスを実施しているが、利用件数は極めて少ない。<br>・災害による道路寸断時などの通勤リスク回避のため現地採用をしたいが、思うように人が集まらない。 |
| 事業を通して見た集落 | ・人がいない。歩いている人もほとんどいない。<br>・電灯がない集落があり、クマがいないか暗くなると不安になる。子どもにも危険だと思う。<br>・働く場所への通勤を考えると、周辺集落に住むのは厳しい状況にあるということを実感する。 |
| 地域密着の経営 | ・日常業務で多くの町民と親交を図っている強みを活かし、小国郵便局をよろず相談所のような組織にできる可能性がある。<br>・好立地条件を活かし他機関と提携すれば、小国の観光にも協力できるかもしれない。<br>・町と締結した包括連携に関する協定に基づき、町と協力しながら地域貢献していきたい。<br>・小国町内の雇用も積極的に考えているが、人は集まらない状況。 |

⑪社会福祉法人小国町社会福祉協議会

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 事業の状況 | ・金銭、食べ物、除雪等日常生活の困りごとの相談をしており、内容により町など適切な機関につないでいる。<br>・コミュニケーションを図る事業としてサロン事業を町内 34 か所で展開している(平成 18 年は 7 カ所)。<br>・介護保険事業は、人口減により参加者も減少している。<br>・ヘルパーは充足し、向こう 10 年は体制が整っている。<br>・セコムと提携し高齢者を見守る「生活支援システム」は、希望者がいなくなり数年前に廃止(平成 18 年は 5 世帯が契約)。<br>・サロンについては、世話人が重要な役割を果たしているため、育成を図っている。しかし、世話人も高齢化しており、次の世代にうまく引き継げない面がある。 |
| 提案 | ・door to door の考えで支援が必要な人は有償で送迎している。サロンに出掛けたいが移動手段がない高齢者に対しては、近所の人が気にかけ送迎している。そうした送迎をヘルパーのサービスメニューへ追加するなどできればコミュニケーションの向上に役立って良いと思う。 |

⑫西置賜行政組合消防本部消防署小国分署

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 消防団の状況 | ・消防団入団は若い人が多い(町内は特に)。団員が入る見込みのない地域がある。<br>・少人数体制なので、緊急時、一番先に呼ばれたところが結果的に優先されてしまう。 |
| 駐在所と地域とのつながり | ・親の消防団の役割に対する理解不足が、子どもの職業選択に際し後順位にしてしまう遠因のように思える。<br>・全分団の意見交換会において、「小中学生がいないのでこれからの団員不足が不安」、「周辺集落から町内に移転したい」、「近所付き合いがないので勧誘しにくい」という声が上がった。<br>・個人情報保護の意識の高まりから、推薦すべき人を探せないというのが大きな問題。 |
| 課題 | ・自主防災組織の対応範囲は、避難する場所を考えて設定すべき。<br>・小国は先日の台風においても大きな被害はなかったが、事業所や家庭はもっと防災意識(防災行事への参加など)を高めて欲しい。 |

⑬山形県小国警察署各駐在所（3 カ所）

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| **集落の様子** | 〈南部駐在所〉<br>・自給自足の生活が根付き、環境に適応しているように思える。<br>・運転に不安があっても交通が不便なため、やむなく運転を続けている人もいる。<br>・サルなどの被害に困っている住民は多い。<br><br>〈沼沢駐在所〉…8 年ほど前の駐在所再編により、当駐在所の管轄は広がった。<br>・不便さが当たり前という意識があるようだ。<br>・運転免許を返上したいという高齢者は多いが、交通が不便なのでできないという声も多い（高齢者の事故はない）。<br>・緊急事態より、日常生活（買い物、通院）の不便さの相談が多い。<br>・高齢者同士の交流はあるようだ。<br>・去年から今年にかけて空き家は増えている。解体すべきものは解体を要請している。空き家でも所有者が時々来ているので倒壊の心配はない。<br>・わらび園の管理など共同でしっかりと管理しているので、警備しやすい環境である。<br>・もともと豪雪地帯なので、高性能な除雪機を各家庭が所有するなど、心構えはできている。<br><br>〈北部駐在所〉…対応した巡査部長は着任後、冬季未経験<br>・自動車がないと町へ出るのが大変（不便さへの不満はよく聞く）。<br>・外部の人が来ると集落の人は関心を持つ。<br>・空き家はそれほど多くない。<br>・クマが出る、サルによる農作物への被害がある。 |
| **駐在所と地域とのつながり** | 〈南部駐在所〉<br>・一人暮らし高齢者が増加しているため、事故や犯罪に巻き込まれないように配慮している。孤独死についても巡回を通じ安否確認している。<br>・やさしく接し、いろいろと教えてくれる人が多いと感じる。<br><br>〈沼沢駐在所〉<br>・警官や協力隊といった職業は受入れ可能な雰囲気はあるが、「郷に入っては郷に従え」という意識を感じる（見慣れない人に対し、住民は非常に高い関心を持つ）。<br><br>〈北部駐在所〉<br>・地域の人から行事への誘いがある。 |
| **提案・意見（個人的なもの）** | 〈南部駐在所〉<br>・外部の人を呼んで小国の良さを発見してもらい、外部に発信したらどうか。<br>・地域おこし協力隊を各地域に置けば、活性化できる地域もある。<br><br>〈沼沢駐在所〉<br>・若者一人の負担が段々重くなっているように感ずる。<br><br>〈北部駐在所〉<br>・今のところ十分な巡回ができているが、今後、一人暮らしが多くなると事故や犯罪に巻き込まれないようにきめ細かく対応できるか懸念がある。 |

# 第３章　集落のコミュニティ機能の維持に向けた新たな環境づくり

# 第３章　集落のコミュニティ機能の維持に向けた新たな環境づくり

## １　集落の実態調査から浮かび上がる課題

### (1) 集落のコミュニティ機能の現状と課題

#### ア　アンケート調査結果からみた集落のコミュニティ機能の現状と課題

アンケート調査から集落のコミュニティ機能の現状をみると、全体では平成18年度調査と比べて大きな傾向の変化はないが、地区ごとに傾向が大きく異なっている。

例えば、「農作業に関する共同作業や助け合い」については、全体の27.9%が「大体いつも参加している」と述べているが、特に北部では66.0%、南部では、65.6%、沖庭では57.9%が「大体いつも参加している」と述べている。

この傾向は他の集落のコミュニティ機能でも同様であり、「山道の補修や草刈などの山作業」や「道路側溝の維持・管理」、「集落内施設や歩道などの除草や雪下ろし」等でも見られる。

町中心部に総人口の４分の３が集中しているため、全体集計では課題が見えづらいが、周辺部では中心部に比べて人口減少や高齢化が大きく進んでおり、集落のコミュニティ機能の担い手がいないことが大きな課題となっている。

特に「公民館や公園、空き地の清掃や雪下ろし、雪囲い」や「会合や寄合い」、「祭りや伝統行事への参加・協力」についても、「時々参加している」もしくは「あまり参加していない」とする回答が多く、最も他の地区と比べて農地が少なく厳しい状況にある白沼地区では「近隣集落と連携」している割合が48.6%と高く、自主防災活動や老人クラブ等の活動でも旧小学校区で連携している割合がそれぞれ37.8%、33.8%と高くなっている。

将来的な集落活動の連携の必要性についても、4割近くが必要と感じており、周辺地域では近隣の集落や旧小学校区で連携が必要とする声もあるが、中心部では町全体で連携が必要とする声も高い。

**図表３－１　アンケートの地区別概要**

| 地区 | アンケートの概要 |
|---|---|
| 北部 | ・　三世代世帯の割合が5地区の中で最も高く、町内に別世帯で家族が住んでいる割合が比較的低い。農地・山林の所有割合が高く、自家ですべて耕作・管理している割合も高くなっており、将来も自家で所有・管理を続けたいという意向が比較的高い。<br>・　生活環境については「鳥獣害対策」の評価が比較的低い。<br>・　集落活動への参加状況は高く、「農作業や山林作業等の共同作業」を始め、既に近隣集落と連携して実施している活動が比較的多い。集落の魅力向上のために「田舎暮らしや新規就農者等の積極的な受入れ」を望む声が比較的多いが、移住者の受入れについては他地区よりやや消極的であり、集落住民の家族や親 |

| | |
|---|---|
| | 戚縁者ならよいという世帯が比較的多い。<br>・ 今後のまちづくりに対する要望としては「冬期の道路除排雪の充実や強化」が半数近くから求められている。 |
| 沖庭 | ・ 現在の世帯主より前から小国で暮らしている世帯の割合が5地区の中で最も高く、町外で暮らす家族がいる割合は最も低い。持ち家比率も最も高く、その家は「世帯主の子供に引き継ぐ予定」とする割合が高い。<br>・ 農地・山林の所有割合は高いが、自家で管理せず大半を他者に貸与していたり放置している世帯が多く、将来どうするかは後継者に任せるという割合が高い。<br>・ 現状の生活環境や将来の見通しについては全体平均に近い評価。<br>・ 集落活動への参加状況は比較的高く、近隣集落や旧小学校区での連携割合は比較的低い。移住者の受入れに関しては、町出身者や雪国での生活経験者を望む声が比較的多く、「移住希望者を案内するツアーや集落住民との交流イベントに対する支援」が必要とする割合が高い。外国人の受入れにも対しても肯定的。<br>・ 今後のまちづくりに必要な取組では「集落や地区での暮らしやすい環境づくり」が第1位。 |
| 南部 | ・ 現在の世帯主より以前から小国町で暮らしている世帯が多く、世帯主の子供に家を引き継ぐ予定という割合も高い。また、町内で暮らしている親を訪ねる頻度も高い。<br>・ 農地・山林の所有割合が高く、自家で全て耕作・管理をしている世帯が多いほか、将来も自家で所有・管理を続けたいという意向が最も強い。<br>・ 生活環境に関しては、「鳥獣害対策」の評価が5地区の中で特に低く、将来はそれに加え「家屋の雪処理や道路除排雪」が問題。<br>・ 現在の集落活動の参加意識は比較的高く、近隣集落との連携割合もあまり高くない。移住者の受入れには肯定的だが、できれば集落住民の家族や親戚縁者がいいという割合が高く、第三者を受け入れるには「集落と移住希望者とを仲介する人材の配置・派遣」が必要との声が多い。しかし、外国人移住者の受入れには消極的。<br>・ 今後のまちづくりに対しては「冬期の道路除排雪の充実や強化」が第 1 位。 |
| 東部 | ・ 夫婦のみ世帯の割合が5地区の中で最も高く、現在の世帯主の代から小国で暮らしているという世帯が26%を占める。給与住宅が1割弱を占めるため、家の継承予定についても「持ち家でないので何とも言えない」とする割合が他地区より高い。<br>・ 農地・山林の所有割合は6割前後で北部・沖庭・南部ほどは高くない。耕作や山林作業は他者に委託している割合が比較的高く、今後の管理についても、農地は「全て他者に委託したい」、山林は「後継者に任せたい」という意見がそれぞれ他地区より高い。<br>・ 生活環境に対する評価については、福祉や医療体制などを中心に、現状・将来のいずれも全体平均より高評価（不便を感じていない）の項目が見られる。<br>・ 集落活動の参加状況は北部・沖庭・南部ほど高くはないが、近隣集落や旧小学校区での連携の必要性に対する認識も比較的低い。<br>・ 集落の魅力向上のために「田舎暮らしや新規就農者等の積極的な受入れ」と「若い世代が積極的に活躍できる集落の規約や役回りの見直し」が必要との声が5地区中で最も高い。<br>・ 集落への移住者の受入には最も肯定的で、親戚縁者や出身にはこだわらず集落住民と協力する気持ちがある人ならどんな人でもよいという声が5割を超えている。外国人の受入れに対しても肯定的。移住促進のためには「移住者を受け入れる空き家のリフォームへの補助」が必要との声が多い。<br>・ 今後のまちづくりに必要な取組では「集落や地区での暮らしやすい環境づくり」が第1位。 |

| | |
|---|---|
| 白沼 | ・ 単独世帯の割合が5地区の中で最も高く、町内に別世帯で家族がいる割合が最も低い。家の継承予定についても「世帯主の子供に引き継ぐ予定」の割合が低く、「世帯主の代で引き払う予定」の割合が最も高い。<br>・ 農地の所有割合は周辺部では最も低く、「ほとんど管理できず荒廃」と「大半を他者に貸与(委託)」がそれぞれ3割ずつを占める。<br>・ 生活環境に関しては、「鳥獣害対策」の評価が南部に次いで低いほか、相対的に評点が低い項目が多い。また集落活動への参加状況も他地区と比べて総じて低く、既に近隣集落や旧小学校区と連携して実施している活動の割合が高い。<br>・ 集落の魅力向上に必要な取組では「集落の共有財産を活用した交流活動」の割合が高い。<br>・ 移住者の受入れに関しては賛成が5割を下回っており、5地区中で最も消極的。<br>・ 今後のまちづくりに対しては「集落や地区での暮らしやすい環境づくり」と「バスなどの公共交通の充実」、「冬期の道路除排雪の充実や強化」が同率1位に挙げられている。 |

### イ　ヒアリング調査結果からみた集落のコミュニティ機能の現状と課題

#### ① 座談会ヒアリングのポイント

どの地区においても担い手不足から集落のコミュニティ機能の低下が指摘されているが、現状の評価では、冬期の除雪対策や鳥獣被害対策、交通対策などに焦点が絞られている。

**図表３－２　座談会ヒアリングの概要**

| テーマ | 主な意見 |
|---|---|
| 集落における共同作業等の活動と今後の見通し | ● いずれの集落も過疎化・高齢化により人手不足であり、従来の作業の縮小や中止が見られる。<br>● 一方、若い人が企画・実施したり（東部）、担い手不足を学生の応援で補っている（南部）集落も一部見られている。<br>● いずれの地区も、伝統行事や集落景観などの有形無形の地域文化の継承を求める声が高い。 |
| 集落内の困りごととその対処に必要な社会的サービス | 沖庭；除雪に対する人の手配や交通の改善<br>白沼；空き家の雪下ろし（人的支援）や防災ラジオの受信状況<br>東部；除雪対策、交通の改善（バス）、高齢男性の社会参加、移住者支援等<br>南部；交通手段の改善や業者への費用助成、空き家の解体、鳥獣害対策 |
| 社会基盤の維持・管理上の課題 | ● 担い手不足により農地や水路の管理が困難になってきているほか、東部や南部では野生生物による被害や除雪によるガードレールや道路陥没等の被害（東部）が挙げられている。 |
| 部落有財産などの管理の現状と見通し | ● わらび園の管理も担い手不足で困難になりつつあり、山林の管理はしていないという集落（沖庭、東部、南部）や、村人以外は山林に入らせない（南部）という集落もある。 |
| 集落連携に最適な地域割り | ● いずれの地区でも旧小学校区が最適との見解。 |
| 移住者等の外部人材受入れに対する意向や課題 | ● 希望者は受け入れたいという声は全地区で聞かれたが、雪の多さから希望者がいるとは思えないという悲観的な声や、過去の受入れ経験から地域に非協力的な者の受入れに対して否定的な意見も。 |
| その他 | ● 小学生送迎用のバスを有効利用した交通の改善（沖庭）や宿泊施設等の設備の見直し・有効利用（南部）などの意見が挙げられたほか、時代の変化を受入れ負担のない地域づくりを提唱する意見（東部）も聞かれた。 |

### ② 個別ヒアリングのポイント

地域活性化や交流活動に積極的に取り組んでいる住民、移住者、地域おこし協力隊、また各種団体や町内企業等に個別ヒアリングを行った結果、下表のように様々な意見が示された。

ただ、こうした意見を集約したり、提言する機会が地区内ではないことも事実であり、更に検討が必要と考えられる。

**図表３－３　個別ヒアリングの概要**

| 対象者 | 主な意見 |
|---|---|
| 若手の<br>農業関係者 | ● 廃業した農家から農業を受け継げば初期投資の負担が少なくなる。<br>● 新規就農者（移住者）には職業としてのサポーターが必要。自分を受け入れてくれる場所を作ることや、水稲、畑、畜産などのゾーニングを考え、獣害対策として耕作放棄地を牧場に転換する等の考えも必要。<br>● 若い世代が町外に流出するのは仕方ない（個人の自由）。生まれ育ったところにいずれ戻らなければならないという考えに固執するのもどうかと思う。それより、生まれ育った町とのつながりが転出したとたんに途切れてしまうことの方が問題。 |
| 移住者 | ● 活動している集落は自立しているが、共同作業後の飲み会が負担。<br>● 地域行事を残したいのは若者より年配者。元気な人や若い世代の負担が大きく世代間のギャップがある。<br>● コミュニティ自体が重荷と考え始めているような活動を無理にでも維持する必要はあるのか。<br>● 町での暮らしについて胸を張って話せる町民が少ない。小国の歴史や文化を再発見し、町民の中に地域への誇りを生み出すことが重要。<br>● 子供に小国の文化や価値を認識させ、楽しく暮らせるような未来を描くことでコミュニティ醸成を図ることも重要。<br>● 町民か否かに関わらず集落の暮らしに価値を感ずる人が住めるような環境づくりを進めるべき。 |
| 町内企業 | ● なるべく地元から採用したいが、小国高校からの希望は減っており、人を集めにくい環境になりつつある。<br>● 現在は労働力は充足しているが、近い将来不足すると懸念している。将来的な労働力の確保に対する現場サイドの危機感は強い。<br>● 外国人の技能実習制度は職種が限られるため、町（事業所）では複数の作業がこなせる日本人の方が適している。 |
| その他の<br>団体関係者 | ● 地域の活性化を考えたとき、地域に学校があることは重要だが、子どもには町の活性化の期待をせず、伸び伸びと過ごせるよう見守ってほしい。<br>● 子どもの試行錯誤が地域活性化につながる。<br>● 主要な農家は 70 代が中心で、特に北部の農業は危機的な状況であり、新規就農者の支援体制が必要。逆に東部には担い手もおり、むしろ農地が足りない状況。<br>● 町内の若手がまちづくりに挑戦しており、成功事例が積み重なれば町全体の活力向上につながる。 |

### (2) 平成１８年調査との比較によるコミュニティ機能の変遷

小国町における今後のコミュニティ機能の在り方を検討する上では、第１章で整理した集落を取り巻く様々な社会的状況の変化とともに、地域社会を構成する住民の意識において、集落あるいはコミュニティ機能がどのようにとらえられているか、また集落を取り巻く環境やライフスタイルの変化とともに、住民の意識がどのように変化してきたかを整理する必要がある。

そこで、ここでは、主に町民アンケート調査及びヒアリング調査の結果から、集落のコミュニティ機能に係る住民意識を整理した。

なお、町民アンケート調査については、平成 18 年調査は 20 歳以上の全町民を対象とした個人調査であったが、今回は世帯調査（各世帯で一人が回答）であり、回答者の年齢構成は実際の町民の年齢構成と比べて高齢層が厚くなっていることから、総じて高齢者の意見が実際よりも強く反映されている可能性があることに留意が必要である。

#### ア　町民の集落活動やコミュニティ機能に対する意識の変化

平成18年調査と本調査におけるアンケート結果を比較すると、町民の参加率の高い集落活動には概ね変化は見られず、集落での冠婚葬祭や寄合い、道路側溝の維持管理（道刈りなど）等については、現在も４割以上の世帯が参加して維持されている。

このように、各地区において各種の共同作業に対する高い参加意識が維持されているが、その実態をヒアリング調査から見ると、現状としては作業水準を下げたり活動頻度を落としたりするなどして何とか維持されている状態であることがうかがえる。

実際、アンケート結果でも、共同作業への負担感は平成18年調査の時よりも増しており（図表３－４アンケート結果の比較、最下段項目参照）、特に若い世代において「とても大変」と強い負担感を示す割合が高くなっている（アンケート調査結果64頁「共同作業の負担感」参照）。

個別ヒアリング調査においても、若年層から特に「高齢化の進行が深刻化する中で、地域で数少ない若者に様々な集落活動の担い手としての役割が集中している点が問題」として各地区で指摘されており、今後のコミュニティ機能の維持は一層困難になると見られる。

また、全町的に積雪への不安は強いものの、集落活動の参加状況のうち、「高齢者世帯の雪下ろしや冬期の雪処理に係る助け合い」に対する回答を比較すると、「そのような活動がない」と回答した割合は平成18年調査では27.4％であったが、本調査では48.2％と５割近くに上っており、集落活動としての雪処理における助け合いは減りつつある。

**図表３－４　アンケート調査結果の比較**

| 項　目 | | 平成 18 年(個人調査) | 令和元年(世帯調査) |
|---|---|---|---|
| 集落活動への参加率(参加している) | 回覧板など行政連絡の伝達 | 男性 65.4%　女性 57.0% | 世帯 80.2% |
| | 冠婚葬祭における助け合い | 男性 53.7%　女性 41.9% | 世帯 55.9% |
| | 祭り･伝統行事への参加･協力 | 男性 38.3%　女性 28.0% | 世帯 40.1% |
| | 会合や集会の開催、参加 | 男性 40.3%　女性 24.1% | 世帯 42.2% |
| | 道路側溝の維持･管理 | 男性 39.4%　女性 19.5% | 世帯 40.0% |
| 共同作業の負担感（とても大変＋やや大変） | | 男性 17.2%　女性 19.7% | 世帯 30.1% |

### イ　今後の集落活性化やコミュニティ機能の維持に対する意識の変化

上述のように、集落単位での様々な活動はもはやぎりぎりの状態まで切り詰めて何とか維持されているのが実態であり、特に祭りなどの伝統行事や農作業・山林作業等の共同作業については、近い将来、近隣集落との連携が必要になるという認識が２割程度の世帯で示されていることから、これまでと同じ形でコミュニティ機能を維持することに限界を感じている町民が少なくないことが分かる。

また、居住集落の魅力を高めていくために必要な取組は何かという問いかけに対して、本調査では具体的な取組ではなく「何ともいえない・わからない」が最も高い割合となったことからも、集落の将来に対する町民の閉塞感がうかがえる。

ただし、同設問の第２位以下の回答をみると、平成18年調査で第１位だった「若い世代が積極的に活躍できる集落の規約や役回りの見直し」は本年度調査でも第２位に、また平成18年調査で第３位だった「町全体でのイベントなど地区や集落を越えた連携による取組」は本年度調査でも第３位に挙げられており、若い世代がより自由に活躍できる仕組みや広域的な枠組みが必要という認識がうかがえる。

ヒアリング調査においても、若年層や女性が中心となって活性化イベントを企画・実施している集落も出始めていることが把握され、また特に移住者や若年層からは、従来の地域運営の在り方を変える必要性を指摘する声が聞かれており、新たな枠組みでの集落活動の展開が求められている。

**図表３－５　アンケート調査結果の比較**

| 項　目 | | 平成 18 年(個人調査) | 令和元年(世帯調査) |
|---|---|---|---|
| 集落の魅力向上のために必要な取組 | 第 1 位 | 集落規約･役回りの見直し(37.1%) | 何ともいえない･わからない(36.7%) |
| | 第 2 位 | 転入者の積極的な受入れ(32.2%) | 集落規約･役回りの見直し(25.4%) |
| | 第 3 位 | 地区･集落を越えた連携による取組(26.6%) | 集落を越えた連携による取組(21.9%) |
| | 第 4 位 | 何ともいえない･わからない(17.0%) | 転入者の積極的な受け入れ(16.7%) |

### ウ　残すべき集落のコミュニティ機能とその維持方策に対する意識の変化

総じて、道刈りや祭り等の伝統行事は今後も集落活動として存続させるべきという認識はいずれの地区においても主流であると言えるが、特に山道の道刈りなどは部落有財産の有無やその管理方法によって集落ごとに維持状況が異なるため、今後の望ましい維持方策についての見通しも各地区により見解が異なる。

また、祭りや地域の伝統行事は集落の連帯感を醸成する上でも残したい集落活動として挙げられているが、近隣集落の手も借りながら維持していきたいという声が聞かれた平成18年調査の時と比べると、行事の担い手確保は一層困難になっている。ヒアリング調査では、行政に維持方策のアイデア出しを求める声も聞かれるなど、住民主体の集落活動として維持していこうという意識は弱まっているように見受けられる。

図表３－６　座談会ヒアリング調査結果の比較

| 項　目 | 平成 18 年 | 令和元年 |
|---|---|---|
| 残すべき集落のコミュニティ機能とその維持方策 | ・祭り等の伝統行事は近隣の集落間で子どもや若者を借りながら維持していくという考えが強い<br>・伝統芸能の保存など集落のしきたりを守ろうとするこだわりも見られる | ・山道の道刈りは今後も必要との認識があるが、維持方策は集落により考えが異なる<br>・祭り等の伝統行事は存続が望まれているが具体的な維持方策のアイデアは乏しく、町が維持方策を検討すべきという意見も |
| 部落有財産の管理の現状と見通し | ・部落有財産の権利所有者の多くが転居/不明で今後の管理方策の見通しが持てない状況にある集落もあれば、転出の際に権利放棄させる取り決めによって管理が維持されている集落もあり様々<br>・部落有財産（観光わらび園）を活用した活性化方策を検討し始めた集落も | ・所有権の管理方法による部落有財産の管理状態の差がより鮮明となっている<br>・所有権を明確にしている集落でも、管理水準を下げたり外部の手を借りるなどして何とか維持している状況<br>・観光わらび園としての活用も担い手不足や若年層の関心の低さから継続が困難に |

### エ　コミュニティ機能の維持に向けた集落間連携に対する意識の変化

平成18年調査では、集落として共同作業やコミュニティ活動を維持していくためには「一集落で維持できなくなった共同作業は近隣の集落同士で助け合う」ことが必要という認識が３割程度見られた。

この集落間連携に対する意向にはあまり変化は見られず、本調査においても、将来的には近隣集落や旧小学校区、あるいは町全体で連携していく必要があるという認識は、各集落活動で３～４割程度であった。

ヒアリング調査においても、近隣集落との連携には消極的な声が多く聞かれ、共同作業への負担感が増している一方で、あまり集落間連携に対する志向は高まっていないことがうかがえる。

ただし、集落間連携を考える場合には、旧小学校区が最も取り組みやすいという見解は全ての地区で聞かれた。しかし、平成20年度より順次各地区の小学校が小国小学校に統合され、平成26年度には叶水小学校（東部）を除く６校全てが閉校したことにより、以前のような学校区としての活動がなくなり、それに伴い連帯意識が薄れてきている実態にある。

図表３－７　座談会ヒアリング調査結果の比較

| 項　目 | 平成 18 年 | 令和元年 |
|---|---|---|
| 集落間連携に対する意識 | ・あくまでも集落活動は集落ごとに行われており、維持困難になったからといって周辺集落と共同実施しようという雰囲気はあまり見られない | ・集落維持が困難であっても近隣集落との共同実施には消極的<br>・連携するとしたら最も馴染み深い地域割りは（旧）小学校区という意見が多い |

### (3) 集落が抱える今日的課題

生活となりわいが一体となった集落での暮らしにおいて代表的な集落のコミュニティ機能であった資源管理機能や生産補完機能は、担い手不足や若年層における関心の低下などにより活動の維持が難しくなりつつある。

資源管理機能は、観光わらび園の運営など部落有資源としての活用が図られている集落では、現在でもある程度集落活動として維持されているが、若い世代の関心は低く、今後の管理が困難な状況にある。また、共有林の維持・管理はこの10年間で何もしていない集落も見られるなど危機的状況にある。

生産補完機能は、どの地区においても大幅に弱体化しているが、農林業の担い手不足と高齢化により、農地の維持管理や水路の修繕などが困難になってきている集落が増え、機能の弱体化が顕著であり、共同作業の負担感に現れている。

生活扶助機能についても同様に、地域の伝統行事や冠婚葬祭・葬式における助け合い、回覧板等の行政連絡の伝達等は未だ辛うじて残っているが、作業の範囲や水準を下げて何とか維持している状況であり、集落活動の中心となっているのは高齢者世代が多いことから、今後の過疎化や高齢化により将来は存続が危惧されている。

一方、集落運営のかじ取りは高齢層が握っており、若い世代に実作業の負担が集中している傾向が強いため、意欲ある若者が自由に動けない空気も感じられる。コミュニティ機能の維持や地域活性化に対する世代間の意識の断絶が大きい。

地域の伝統芸能に関しては、存続を希望する声がヒアリングでも多く聞かれたが、移住者の目には、自分たちの暮らしに誇りを持っている町民が少ないように映っている。

伝統的な集落のコミュニティ機能が、居住人口の減少や高齢化の進行、ライフスタイルの変化などによりこれまでと同じ形での維持が難しくなっていくことは、ある程度は致し方ないことではあるが、国土の保全や資源の維持・管理、自然環境や生態系の維持に大きな変化をもたらすことが予想される。

各地区の集落のコミュニティ機能を新たな担い手の確保や、集落内での規約等の見直しも含めて他地域との連携を図りながら継続させていくことが望まれる。

## ２　集落のコミュニティ機能の維持に向けた新たな環境づくり

### (1) 集落の実態・実情に合ったコミュニティ機能の維持方策

#### ア　集落のコミュニティ機能の再定義

集落のコミュニティ機能とは、従来人が集落に住み続けることによって自然と培われた人と人の繋がりによって生み出された連帯意識に基づくものであり、過疎化や高齢化、あるいは生産・生活様式が多様化することにより徐々に意識も変化しつつある。経済成長に伴い農林業所得から給与所得へといった生計の流れなど、様々な要因により、徐々に集落コミュニティが弱体化していったのではないかと考えられる。

小国町の第一次産業の就業人口の推移を見ると昭和35年4,778人から年々減少し平成27年314人となっている（19頁「図表１－１５産業別就業者数の推移」参照）。農林業に関わりのない住民（特に若年層）にとっては、自身の生業と結び付かない共同作業はただの奉仕活動であり、集落を維持するために必要なコミュニティ機能として認識しづらい。その一方で、高齢化が進む地域においては、若年層の労力としての重要度は増すため、集落活動に対する負担感が増大するという悪循環に陥りつつある。

新規就農支援などを通じて第一次産業の維持・発展を図ることは、町の特性を活かした活性化という側面でも集落の維持存続を図る方策としても引き続き重要であるが、それと併せて、集落のコミュニティ機能の中でも特に生産補完の意味合いで行われてきた共同作業については、“なりわい”をベースにした地域資源の維持管理という発想からの転換が求められる。

すなわち、集落内の人々の職業やライフスタイルが多様化する中、従来の資源管理機能や生産補完機能について、「豊かな自然資源とともに形成されてきた小国町独自の集落環境の維持を図る」という文脈に置き換えて再定義し、個々の集落で維持するのではなく、農林業に関わりのない住民や子どもたちを含め、より幅広い住民の参加協力を得ながら維持が図られるよう働き掛けていく必要があると考えられる。

#### イ　安全・安心な暮らしに必要な集落のコミュニティ機能の再認識

家周りの雪処理における助け合いなどこれまでは集落内で維持されていた生活扶助機能は、住民の減少や高齢化とともに住民同士の相互扶助活動として維持していくことが困難になりつつある。しかしながら、助け合いの範囲を広げて集落間連携で維持するという方向ではなく、ヒアリング調査（座談会）では、行政に対応を求めるような行政依存の意見が各地区で見られた。

地域に住まう人がいる限り、最低限の生活を維持・保障することは行政の役割として大切であり、特に小国町のような特別豪雪地帯にあっては、冬季の雪対策は安全・安心な暮らしを維持する上で大きなウエイトを占める。

したがって、各集落で今までの生活扶助機能を棚卸しして、個人でできること、集落でで

きること、祭りなど町中で別居している子供世帯等のサポートにより維持できること、近隣集落のサポートにより維持できること、行政との連携が望まれることなどを取捨選択し、担い手の多層化・多重化の可能性を探ることが必要である。

### ウ　若年層や移住者が主役として輝ける集落運営の見直し

地域においても、集落活性化に向けて「若い世代が積極的に活躍できる集落の規約や役回りの見直し」が必要との声は第2位と上位に挙げられており、これからを担う世代にバトンを渡していく必要があるという認識は広がりつつある。

加えて、集落への移住者の受入れに対しても賛成が約６割と高く、東部地区では集落活性化に向けて「田舎暮らしや新規就農者等の積極的な受入れ」が第1位となるなど、内外問わず意欲ある人が積極的に活躍できるようなコミュニティの形成が望まれている。

ヒアリング調査においても把握されたように、若い世代が集落のコミュニティ機能の担い手として下支えするだけに留まるのではなく、若い世代の価値観や視点でこれからの集落のコミュニティ機能のあり方そのものを捉え直し、若い世代が中心となって地域活動を担えるよう、根本的な仕組みを変えていくことが望まれる。

こうした点を踏まえると、従来からある集落内の意思決定プロセスや様々な決まり事の見直しや若い世代を中心とした役回りの見直し等を図り、若い世代が活躍できる仕組みを創っていくことが必要と考えられる。

また、今後の集落活性化のために移住者を受け入れることに対しては、世帯主が20～40代と若い世帯において前向きな感情を抱く人が5割を超えており、移住促進のために必要な施策を聞いたところ、「移住者を受け入れる空き家のリフォームへの補助」が半数以上と最も多くなっている[注]。また、様々な集落活動が依然として集落単位で維持されている地域では特に、移住希望者と地域住民のマッチングを丁寧に行うことが求められている。

注：アンケート調査結果72～76頁「⑥集落への移住者受入に対する考えと必要な施策」参照

集落によっては、移住者に対して部落有財産への関与を制限しているところもあるが、こうした対応が移住者の集落へのとけ込みを阻害する壁となっている可能性も否定できない。

このため、集落コミュニティを維持していく上で、新たな地域活動の担い手として期待される移住者がより主体的に地域活動に関われるようにするためには、受け入れる集落側においても、移住者をいつまでも「移住者」として特別扱いせず、一集落住民として等しく受け入れるよう、様々な規約や取り決めを見直していく姿勢が求められる。

また、そうした移住者の集落へのとけ込みをサポートするため、行政においても、移住者にとって必要経費となる住環境の整備に係る補助事業の創設や、移住者と地域をつなぐ役割を担う移住コーディネーターの配置といった支援が必要と考えられる。

### (2) コミュニティ機能の新たな仕組みの在り方

#### ア　住民の理解、自ら取り組む意識の醸成

人口減少・高齢化等による生活機能の低下や、組織運営のためのリーダー・担い手不足など、様々な課題に直面している中において、地域の暮らしを守るため、地域で暮らす人々が中心となった取組体制の確立が求められている。

地域運営を支える新たな受け皿づくりにおいては、地域住民の理解と自ら取り組む意識付けと動機付けが不可欠であることから、まず住民間で十分に機運が醸成される取組を進めていく必要がある。

**◇事例紹介◇　地域運営組織の活動事例　（島根県飯南町　谷自治振興会）**

谷地区は、島根県飯南町の山間部にある、人口約 230 人、90 世帯ほどの集落である。かつての石見銀山の天領にあたるこの地区では、古くから石見神楽の夜祭りなども開催されており、それを通じた住民活動の一体感が生活のなかにも息づいている。

「山あり、谷あり、笑いあり」をスローガンとして、人口減少のなかにあっても、住民同士が楽しく暮らせることに重点を置いている。住民同士の輸送支援や、廃校改修による拠点「谷笑楽校」の整備活用のほか、除雪支援としてのスノーレンジャー制度などの取り組みが行われているが、どれも行政主導の活動ではなく、住民を起点とした活動である。実際に住んでいる住民それぞれがが、身近な困り事を解決したり、楽しく暮らしていくため視点が多様に実践されている。

この地区の特徴は、特に移住者や外部人材の力を借りることなく、自分たちで楽しみ、解決していく思考が醸成されていることにある。伝統の夜祭りなど、各行事や世代間交流から育まれた地元への愛着は、地区の未来を主体的に考える意識にもつながっている。

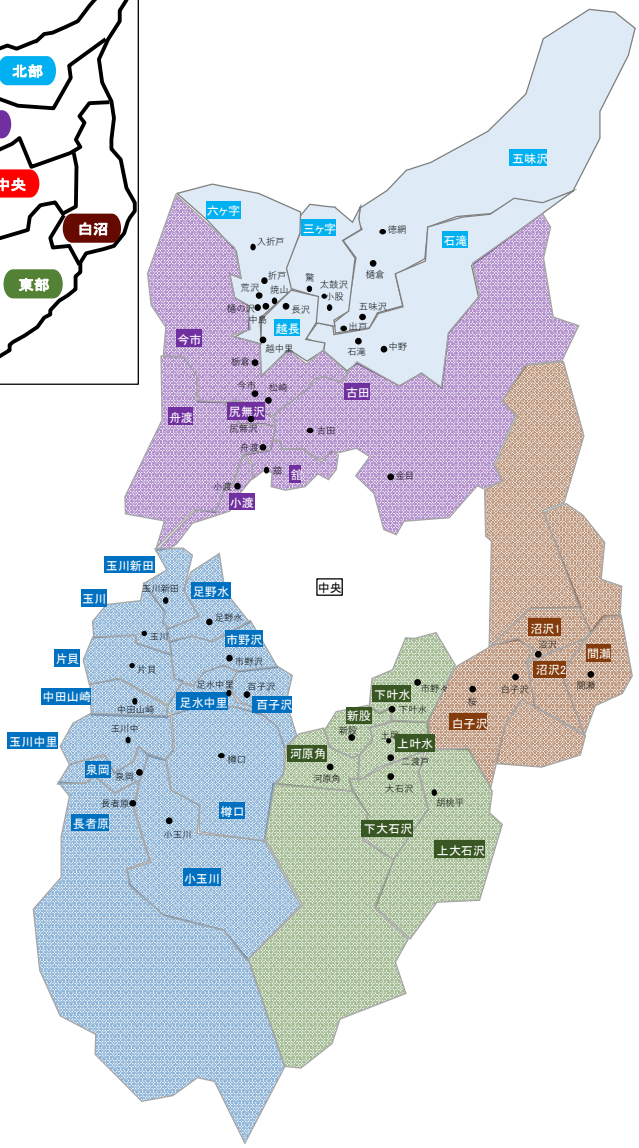
さらに、どの年齢層もほぼ均等な人口構成を示している事もこの地区の特徴である。世代間ギャップにとらわれず、自分たちが楽しいと思う事を、柔軟な視点で進めていく事が持続可能な地域づくりのポイントでもある。

#### イ　各地区の特色を見極めた新たな地域運営の仕組みづくり

小国町では、行政区、駐在区、公民館区を始め、体育協会や防犯協会、消防団、農業振興組合など各種団体の担当区域が複層的に構成されており、各分野での行政との連絡調整という点では機能的であった。

しかし一方で、様々なコミュニティ機能を分野縦割りで各主体（区域）が担ってきたことから、地域づくりを担う中心主体は誰か（どの区域単位か）が明らかにされてこなかったことも、小国町において住民主体の地域づくりが一般化しなかった背景として挙げられる。

今後、新たな地域運営の仕組みづくりをどう考えるのか、また、コミュニティ機能の新たな受け皿（例えば地域運営組織）をどこに置くのかについては、今後各集落と行政とが十分に話し合いながら探っていく必要はあるが、町の成り立ちや学校区等の変遷を踏まえると、まずは本調査で研究のベースとした６地区を一つの単位として検討を進めることが妥当と考えられる。




特に中心部を除く５地区（右図参照）については、地区として大きく括った中で、それぞれ地区内での集落同士の関わりや、集落運営における財政的な基盤となってきた部落有財産の管理・活用に対する考え、あるいは賦存する自然資源や文化資源など、共同体としての連帯意識の拠り所となるものを見極めながら、新たな地域運営の仕組みを模索していく必要がある。

また、地域運営組織の設立により、地区内のすべての課題が解決されるものではないため、組織の規模や人材を考慮し、直面する課題に優先順位を付けながら、取組の取捨選択を図っていく必要がある。

### ウ　町全体をひとつの集落として捉えた地域文化の継承・発信

集落によっては、保有する地域資源を活かしたイベントや交流活動を実施しており、集落独自の文化として今後も維持していきたいという意向が強い。一方で、若年層が多く住む中心部では、交流イベントをはじめ大半の集落活動において、「集落及び駐在区との連携」より「町全体での連携」を望んでいるという結果になっている[注]。

注：アンケート調査結果66～69頁「④将来的（10年後）な集落活動の連携の必要性」参照

集落で維持・継承されてきた伝統行事は、集落における住民相互の連帯感や地域への帰属意識を育む上でも重要な役割を果たしてきたことを踏まえると、各集落において存続の危機にある伝統的な祭りやイベント等を従来の集落や地区の枠組みから旧小学校区や町全体のイベントの一環として発展させていくことは、人口が急速に減少する中で弱まりつつある住民の「ふるさと」意識や郷土愛を醸成し、コミュニティ機能を再興する上で、重要な要素である。

そうした地域文化を広域で支えるための連携の仕組みは、当面は行政が中心となって構築する必要があるが、個々の祭りやイベント等の準備や開催、事後処理には、各地区の組長や関係者等との協議を通じて地域おこし協力隊等にも協力を呼び掛けながら幅広い住民の参加を得ることが重要である。

このような地域文化の継承というコミュニティ機能は、基本的に自助（相互扶助）の延長であるが、集落における自助あるいは相互扶助の力が弱まりつつある今、そうした担い手が主役となって継承し続けられるような環境が必要である。そのために、行政が長期的視野に立ち、運営や担い手の確保・育成について側面から支援していきながら、住民主体の地域文化の継承を進めていくことが望ましい。

### エ　若い世代を中心とした新たな運営組織づくりの検討

前述のように、集落の維持・活性化のためには「若い世代が積極的に活躍できる集落の規約や役回りの見直し」が必要との声が多い一方で、ヒアリングを踏まえると、意欲ある若い世代の意見が十分に集落運営に反映されていない現状も見られること、また、「駐在区」「小学校区」より「町全体」という、中高年世代とは異なったコミュニティ意識が見られることから、従来の集落の枠組を維持したまま単に規約だけを見直しても、若い世代への円滑なかじ取りの移行は難しいと思われる。

こうした点を踏まえると、従来の個々の集落の枠組や既存の団体の活動区域にとらわれず、若い世代の行動力やネットワークを活かして、より広域的な概念で地域づくりを担う運営組織を新たに立ち上げたり、その活動を支援していくことも、コミュニティ機能の維持・活性化を図るために必要である。

小国町には、南部地区で雪を活用した交流イベント等を展開している「小玉川青年団イチコロ」や、小国町の自然・文化・人などの地域資源を活用したまちづくりのための活動をしている「ここ掘れ和ん話ん探検隊」など、若い世代が中心となった活動も見られる。これらの活動は、町外・県外からの来町者を呼び込み、関係人口の拡大にもつながっていることから、こうしたテーマ型の活動組織が活躍できる場の創出や連携を図り、周辺部の魅力発見と持続可能な取り組みにつながるよう、活動を支援していく必要がある。

### (3) 外部人材など多様な主体の参画による解決手法の模索

#### ア　様々な制度を活用した外部人材との連携

総務省の調査によると、都市住民の約3割が農山村地域に移住したいと考えており、過疎地域において近年都市部からの移住者が増えている区域が拡大しつつある。こうしたいわゆる「田園回帰」の流れの高まりを受け、総務省では、平成27年度に移住相談や地域とのマッチングを行う「移住・交流情報ガーデン」を東京駅近くに設置したほか、平成28年度からは大学生等を対象とした「ふるさとワーキングホリデー」や「お試しサテライトオフィス」等が開始されている。

小国町でも、こうした「田園回帰」の流れを受けとめるべく、平成22年度から「みどりのふるさと協力隊」や「地域おこし協力隊」を導入しているほか、首都圏の大学との連携を強化し、農山村地域に関心がある都市部の若者を積極的に受け入れる体制を構築している。

こうした外部人材は、一定期間小国町に滞在し、集落のコミュニティ機能の一翼を担ってきた経緯があり、小国町の利点・長所も欠点・短所も良く分かっている人達である。実際にこうした外部人材に対して行ったヒアリング調査では、「集落は人手不足のため自分たちに課される作業は重い」といった声や、「明るいうちから飲み会があるのが負担」、「今までの集落のコミュニティ機能を全て維持しようとするなら人を増やさないとやっていけない」など多くの意見が聞かれた。

今後も、小国町が田園回帰の受け皿として外部人材を積極的に受け入れ、集落を支える一主体として長期間に亘り地域と関わりを持ち続けてもらうためには、こうした外部人材が実際に集落に入って感じた負担感を、行政も集落も適切に受け止め、古くからの慣習や集落のしきたりを現代に合う形で見直すなどの、意識改革も必要である。

**◇山形県小国町の取組◇　地域おこし協力隊の活動事例**

当町では、平成 22 年度から緑のふるさと協力隊、平成 27 年度からは地域おこし協力隊も導入しながら、外部人材の起用による地域活動の維持や継承に取り組んでいる。

隊員は、主に活動する集落内にある空き家を住居として借り受け生活の拠点とし、農作業の手伝い、地域サロンの運営、集落の伝統行事や祭りなどのアーカイブ化、集落の巡回など、様々な活動を繰り広げている。

また、後継者不足が問題となっていた町無形文化財「古田歌舞伎」に演者として参加したり、地元消防団へ入団するなど、活動の枠を超えて地域と関わりを持っている。

**◇事例紹介◇　地域おこし協力隊の活動事例　（羊の毛を活用した各種体験事業を展開）**

広島県東広島市では、地域おこし協力隊が豊栄町内で古民家を借り上げた「ウール工房」で地域の中で飼われている羊の羊毛を素材としたピアスやモビール作りを行うほか、糸紡ぎ体験など多くの人に「コト」を体験できる場を提供している。これらを広く県内外に販売・PR することで羊のまちとしてのブランド化と農村田園環境の維持を目指している。将来的には隊員が代表を務める会社の一部門に組み込んで持続可能な体制づくりを目指している。

◇事例紹介◇　包み隠さない集落の姿　移住の教科書　（京都府南丹市）

京都府南丹市日吉町の「世木地域振興会」では、住民総出の草刈りや行事の手伝い、祝儀や香典の相場など、地域の慣習やしきたりを「集落の教科書」として明文化した。

世木地域は４集落で約 750 人が暮らしており、近年移住希望者が増加している。そういった移住希望者に対し、田舎暮らしの現状や、地域の良いこともそうでないことも伝えたいと考え、包み隠さず世木地域の情報を提供している。

ルールは時代や住民数などとともに変化することから、次世代へ何を残したいのかを住民が議論し、作成された。改めて明文化することで、地域を見つめ直すきっかけにもなっている。

### イ　ふるさと意識に根付いた集落を支える主体の確保

集落のコミュニティ機能の担い手不足をカバーしていくためには、町中心部に世帯分離した住民が生まれ育った集落の活動にもより積極的に関わるよう働き掛けたり、広く都市部等に転出した住民にも声を掛けて出身集落との関わりを保ち続けてもらうなどの工夫も必要である。

小国町が転出した元町民に対して行ったアンケート調査（平成27年度）の結果を見ると、回答者の約9割は小国町に愛着を感じると回答しており、また6割以上は転出後も年に１回以上の頻度で小国町を訪れている。さらに、将来的に小国町に戻るつもりはないと回答した人はわずか2.4％で、約9割は転居先に永住するつもりはないとし、また6.7％は「いずれ小国町に戻りたい」又は「条件があえば戻りたい」と回答している。

今回の個別ヒアリング調査では、「小国町の人は町から出ていった人に対して冷たい」といった声も聞かれたが、元町民のふるさとへの愛着の高さを鑑みれば、こうした転出者に対してもネットやふるさと通信等の手法により定期的に町の現状を伝え、町への来訪を促すなど、将来的なＵターンに結び付けるような働き掛けを考えていくことが必要と考えられる。

◇山形県小国町の取組◇　町出身者とのつながりの再構築

**(1) 全国出張所長の選任（小国町観光協会で実施）**

平成 18 年、町外で町のＰＲを担う「全国出張所長」を募集し、町出身者以外も含む 32 名（現在は 26 名）の方を選任。出張所長は、自宅等を出張所として、観光協会と連携しながらボランティアで町の観光情報の発信等を実施している。

**(2) 小国郷人会・山形おぐに会との交流**

首都圏や山形市及びその近郊に在住する町出身者により設立された団体。それぞれ年１回総会が開催され町からも参加している。各会員には、毎月町広報誌を送付している。また、郷人会の会員が町内を巡るふるさとツアーを開催している。

※会員数：小国郷人会 77 名、山形おぐに会 29 名

**(3) 白い森おぐにＵターンきっかけづくり事業**

現在町外に住んでいる出身者がＵターンし就業するきっかけをつくるため、30 歳となる町出身者を対象に同窓会イベントを開催。また、参加者の連絡先（メールアドレス等）を確保し、定期的な町の情報発信を行うこととしている。（令和元年度は 27 名の参加）

### ウ　コミュニティ機能の維持における協働人口の役割

人口減少から担い手不足が叫ばれているが、近年、小国町では都市部からイベント等（早稲田大学の学生や森林セラピーや石楠花まつり等の交流事業）で多くの人が訪れている。こうした人々の中には、小国町にルーツがある人や小国町に関心を示す人もいれば、ふるさと納税の寄付者、大学のゼミ等と連携し地域への関心を高める人達など様々である。

こうした単なる観光客より一歩進んで地域と関わる人々は、一般的に「関係人口」と呼ばれるが、この「関係人口」の中には、当該地域へのルーツの有無に関わらず、その地域ならではの価値や地域の魅力を発見し、地域住民と近い精神性や郷土意識をもって地域と関わることができる資質を持っている人達が多く存在する。

こうした人々を、「関係人口」よりも深く地域に関わる人として「協働人口」と位置付け、協働人口が継続的に小国町（≒ふるさと）と関わりを持つことによって、住民自身が地域の魅力を再発見し、自信や誇りを持つことも求められる。

したがって、今後は、地域住民だけでコミュニティ機能を担うことを考えるのではなく、協働人口も含め、地域内外に幅広く担い手のネットワークをつくり、交流の輪を広げることによって、薄れつつある地域内の連帯感や、支え合い・思いやりといったコミュニティの基盤を支える意識の掘り起こしを図るとともに、農山村での暮らしに根付いた様々な資源・資産の価値や意義を捉え直して、小国町らしい地域づくりを考えていく必要がある。

**◇山形県小国町の取組◇　小国町と都市部の教育機関等との関わり**

**(1) 域学連携事業・地域づくりインターンの会**

首都圏等の大学生が合宿形式で町に滞在し、町民との交流やフィールドワーク等を通して、町が抱える課題に対しての解決策や、地域資源活用型事業の考案などを行っている。域学連携事業は平成 25 年度から始まり、これまでに延べ 200 名を超える学生が来町している。また、早稲田大学を中心としたメンバーで構成されている公認サークル「いぐべおぐに」が立ち上がり、学生が自発的に来町し、地域イベントの運営に参加するなど、大きな成果をあげている。

**(2) 新潟大学「ダブルホーム」の受け入れ**

新潟大学が取り組んでいるダブルホーム（所属学部＝第１のホームとは別に、学外のフィールド＝第２のホームで学部学科を超えた活動を行う取組）のプログラムを、玉川集落及び樽口集落で受け入れている。学生たちは、観光わらび園の手伝いなどを実施し、住民と交流を深めている。

**(3) 山形大学の講義への協力**

以前小国町で芸術活動をしていた方が山形大学で講師を務めており、その講義の一環で、小国町をテーマとしたフィールドワーク等を実施している。

**(4) Ｎ高等学校職業体験の受け入れ**

学校法人角川ドワンゴ学園Ｎ高等学校が実施する地域の職業体験を受け入れ、地域住民と生徒との交流を図っている。平成 28 年度から受入れを開始し、これまで延べ 30 名の生徒を受け入れている。

### (4) 行政としての支援体制や集落への目配りの在り方

#### ア　集落への目配りや支援を総括する新たな行政組織の検討

住民が暮らしやすいまちづくりのために行政に今後期待することを見ると、全体では「冬期の道路除排雪の充実や強化」が最も多かったが、地区別では上位項目に違いが見られた。

小国町はもともと旧４町村が合併して誕生した広大な面積を持つ町であり、地域により集落環境も異なることから、こうした地域ごとの意識の差異が生まれてきた経緯がある。町としてもこのような地域ごとの意識・課題の違いを踏まえ、それぞれの地域に見合った対応を行ってきたが、こうした対応がかえって地域間での不公平感を生み、行政依存の傾向を助長させた側面があることも否めない。

また、人口減少や高齢化が進み、よりコンパクトかつ効率的な行政運営が求められる一方で、行政組織としても、職員のライフスタイルや価値観の多様性を柔軟に受け入れ、それを活かしながら組織力を強化する仕組みが求められる時代となっており、様々な地域課題に対しても、従来の行政分野縦割りの対応ではなく、分野横断的な取組が必要となっている。

こうしたことを踏まえると、上述したような地域住民による主体的な集落のコミュニティ機能の再定義や新たなコミュニティ機能の構築、戦略的な地域運営の仕組みづくりを全方位でサポートするとともに、様々な集落支援型サービスのワンストップ窓口としても機能する総合的な体制（例：集落支援室など）を行政機構において新たに立ち上げることが必要と考えられる。

ワンストップ窓口の設置に当たっては、行政間の所掌を超えた情報の共有や取り組みの共同化が求められることから、各行政分野が持つ情報を可能な限り集約するとともに、集落の情報や課題を行政内部で共有しながら、利便性とスピード感のある組織として整備していく必要がある。

**◇事例紹介◇　ワンストップ窓口としての「地域づくり課」の事例(1)　（福岡県岡垣町）**

人口 3.2 万人の福岡県遠賀郡岡垣町では、行政機構は企画 G（企画政策室、広報情報課）、総務 G（総務課、地域づくり課、税務課のほか会計管理者）、住民生活 G（住民環境課、福祉課、長寿あんしん課、健康づくり課、こども未来課、こども未来館）、地域整備 G（都市未来課、産業振興課）の４つにグループ化されている。総務 G に属する地域づくり課は、安全安心係とコミュニティ係に分かれており、安全安心係では防犯、防災や消防、災害救助、消費生活に関する事務を、コミュニティ係では地域コミュニティを始め行政区や地域懇談会、地域づくり団体、地縁団体に関する事務を担当しているほか、観光情報の発信なども行っている。

◇事例紹介◇　ワンストップ窓口としての「地域づくり課」の事例(2)　（長野県安曇野市）

平成 17 年に 3 町 2 村が新設合併し誕生した人口 9.8 万人の長野県安曇野市では、旧町村の穂高、三郷、堀金、明科の各支所のほか、市民生活に身近な業務に関する相談や要望、提案などに的確に対応し、市民とともに課題解決に向けた取組を進めることのできる組織として、市民生活部の中に地域づくり課を置いている。地域づくり課では市民との協働のまちづくりの総合調整や防犯、交通安全に関する事務を行っており、市民活動の窓口として「つながりひろがる地域づくり助成金」（20 万円補助、1/2 以内、３か年連続可）の窓口も担当している。

### イ　集落自身による将来像（地域ビジョン）の策定をサポートする人材の配置

小国町ではこれまで行政が主体となって大枠での地域の将来像を示し、それに沿って各地域の地域づくりを推進するという行政主導型のシステムが取られてきたことから、地域における内発的な動きとして、住民自身が集落や地区の実情を自ら調査・把握し、５年後、10年後の集落の姿を話し合い、集落の将来像を描くといった取組は見られなかった。

しかし、全国的に人口減少が進み、小国町においても今後人口が一層減少していくことが避けられない中で、それぞれの地域がどのように生き残っていくか、集落の中で住民同士が主体的に考え、将来に向けた地域ビジョンを描いていくことが不可欠であろう。

多様な意識・意見が内在する集落において住民が主体となって十分な合意形成を図るためには、協議・検討の場の設定や意見集約のテクニックを持つ集落支援員のような人材が必要であり、行政による人的支援や情報提供といった積極的なサポートが求められる。

現状のままでは集落のコミュニティ機能の維持・存続が厳しい状況にあることが本調査で明らかになったが、このまま手を添えずに消滅していく姿をただ見守るのではなく、集落による内発的な動きを支援する外部アドバイザーや職員、集落支援員などを派遣するなど、行政として一歩進んだ取組も検討していく必要があると考えられる。

◇事例紹介◇　地区単位での将来ビジョンの策定　（島根県邑南町）

島根県邑南町（人口 10,598 人、令和元年 11 月末時点）は３町が合併して誕生した町であり、基礎となる集落は 216、その上に 39 の自治会が組織されているが、住民自治のまちづくりを目指す上で、更に自治会を束ねた 12 の公民館区（＝小学校区）を単位として取組を推進している。

全ての公民館に１名ずつ町の正規職員（公民館主事）を置き、地域の特色を活かした「人づくり」を推進するとともに、公民館長１名（非常勤特別職、報酬 307,200 円/年）と任期付短時間職員１名（週 31 時間勤務、146,400 円/月程度）の計２人の人員を確保・配置し、生涯学習を中心とした活動を推進しながら、集落や自治会等が取り組む地域づくり計画（夢づくりプラン）の策定や計画に基づく取組の展開を支援している。住民側も、公民館区単位で新たな地域自治組織を立ち上げ、公民館と事務所を共有化して、自立した地域づくりに取り組んでいる。

また、町の地方創生総合戦略の策定に合わせ、12 の公民館区単位で将来人口の予測を行い、それぞれの地域に根差した特色ある人口減少対策を各公民館区で提案し、地区別戦略を策定した。町は各地区の戦略で提案された事業を具体化するため、相談体制の整備や学習機会の提供、予算の確保等を行い、公民館区と協働で地区別戦略を実現するためのアクションプランを作成し、町総合戦略と一体的に取組を進めている。

### ウ　集落と行政をつなぐシステムの見直し

小国町では、昭和の合併以降、行政が中心となり各地区の集落環境に目配りをし、冬期の除雪対策など力を入れて充実を図ってきたが、町域が広大であるがゆえに、どうしても行政分野ごとに区域を分けて各種サービスの提供や支援を行うことが多かったため、目配りの単位としても分野縦割りで様々な区域が多重・多層的に存在する状態が続いてきた。

こうした様々な区域の設定範囲は地域により異なり、また区域同士が重複している部分もあるため、結果として地域の合意形成やコミュニティ機能を総括的に取り仕切る仕組みができず、また地域内で重複する各区域の運営主体同士で共同や連携を話し合う場も形成されてこなかった。

特に、小国町ならではの駐在員制度が導入当初目指していた姿は、現在、広く全国で展開されている集落支援員制度の目的や役割と趣旨を同じくするものであり、実際長らく行政と集落を密につなぐシステムとして機能してきたが、近年では人口減少により様々な役回りと重複して担うケースが常態化しつつあり、本来期待された駐在員による集落への目配り機能は衰退し、行政連絡網としての機能しか果たせなくなっている地域も少なくない。

このため、住民自身による集落のコミュニティ機能の再構築とそれを支える新たな地域運営組織の検討を踏まえながら、駐在区を集約するとともに、駐在員制度についても最近の連絡役としての役割から抜本的な見直しを図り、外部人材の活用や地域内人材の掘り起こしと育成による地域づくりコーディネータとして機能するような新たな仕組みを構築することも検討していく必要がある。

**◇事例紹介◇　集落支援員制度の取組(1)　（新潟県上越市）**

新潟県上越市では、高齢化率 50%以上の集落を対象に８名の集落支援員を設置している。

主な活動は、①集落巡回、広報だよりの作成、集落点検カルテの作成、②雪かきを手伝ってくれる有志をリスト化し、集落内で助け合う仕組みづくり、③地域資源発掘イベントの企画、運営、など。

特に地域資源を掘り起こし新たなイベントを企画運営する際には、足手まといになるからと参加を遠慮していたお年寄りにイベントの準備などできることを分担し、準備から参加してもらうことで、高齢者の生きがい創出にもつながっている。

**◇事例紹介◇　集落支援員制度の取組(2)　（広島県神石高原町）**

広島県神石高原町では、旧町村単位で希望のあった自治振興会にそれぞれ１名集落支援員を配置するとともに、全体の総括を担当する者１名も集落支援員として設置している。

主な活動は、①振興会ごとの地域づくり計画の作成、②集落課題解決のための加工所の運営（宅配弁当、特産品開発）、③交流体験型農業学校（廃校利用）の運営など。

特に①地域計画づくりでは、地域の現状や将来の人口推移をグラフ等で示すことで危機感を共有することができた。

### エ　行政としての支援体制の明確化

人口減少・高齢化が長期間続いてきたことで、集落によっては、「自分ができることは体が続く限りやりたいが、将来のことは後継者（家の跡継ぎ）に任せる[注]」といった諦観的な見方が住民に広まりつつある状況も見受けられる。こうした状況では、住民が主体となって地域の将来像を描いてほしいと働き掛けても、なかなか地域づくりへの意欲が高まらない。

注：アンケート調査結果43頁、46頁参照

しかし、衰退が進みつつある集落の中で、集落住民の自治の力を再興し、「将来の集落はこうありたい」という目標を考えていくことは、住民自身がコミュニティの価値をもう一度見直す機会になるとともに、今後の集落のコミュニティ機能の在り方を住民が自ら考える契機ともなる。

また、それを行政も共有し、その実現に向けて伴走する姿勢を明確に示すことが重要であり、今以上に分かりやすい地域への支援体制の構築が望まれる。

その具体的な方策案として、前述のワンストップ窓口の職員を各地区に担当として派遣し、各地区での将来像の検討を技術的にサポートすることが有効と考えられる。この地区を支援する職員は、各集落の御用聞きではなく、将来の集落づくりを考える際の世話役として検討をサポートする役割を担うものであり、また各地区での検討をワンストップ窓口において集約し、町全体の将来像へと統括する役割も担うものである。

この際、人口動向を含め地域の持つ資源や文化、身近な生活環境など「集落カルテ」等を作成しながら、住民自ら取り組む意識を醸成し、互いにやる気を喚起していくことが重要となる。

**◇事例紹介◇　集落カルテを活用した意識付け、機運醸成の取組事例　（福島県二本松市）**

福島県二本松市では、集落支援員が地域への目配りと地域住民の自発的な取組のサポート役として活動し、地域の実態に合った支援活動を進めている。

中でも 84 の自治会を持つ岩代地域では、2 人の支援員が 100 年先の未来を見据えて、岩代地域の全ての自治会を回り、それぞれの自治会の様子をまとめた「集落カルテ」を作っている。これは各自治会の現状や仕組みなどをまとめた資料であるが、財産や伝統行事の棚卸しにもなっているほか、住民自らが今までと、これからの暮らしを見直すきっかけとしても役立っている。集落は、状況も違えば、将来への課題も異なるが、集落カルテを元にして、課題の一つ一つに向き合っている。

◇事例紹介◇　集落活動センターの取組　（高知県）

高知県では、中山間地域が抱える課題を解決するため、廃校や集会所などを活動の拠点として整備し、旧小学校区程度のエリアの複数集落が連携して下記のような取組を行うことにより、中山間地域で生活し続けることができるような仕組みづくりを進めるため、集落活動センター推進事業を実施している（令和元年 11 月 1 日現在、31 市町村 58 カ所で開設）。

センターの立ち上げまでは、３つのステップがある。

<ステップ１>　集落の現状や課題について地域住民がやりたいことやできることを具体的に話し合う。

<ステップ２>　課題解決に向けて、活動拠点・運営主体・具体的な活動内容や計画についてまとめ、市町村とイメージを共有し地域の思いを一つにする。

<ステップ３>　地域の思いを形にすべく、センターを核とした仕組みづくりをする。計画を基に必要に応じて県の補助金等を活用し住民主体の活動が始まる。取組支援は県と市町村が行うが、県では、補助制度、支援チーム編成、アドバイザー派遣、研修実施、支援ハンドブック作成など「人」と「施策」を総動員し支援する。

高知ふるさと応援隊が事務局となり集落内の団体や個人がセンターと連携しながら、集落活動サポート、生活支援サービス、安心安全サポート、防災活動、鳥獣被害対策、移住・交流観光活動など様々な活動を行い、地域での支え合い、助け合う仕組みづくりや地域でお金が回る仕組みづくりを推進し、地域住民が主役となってふるさと高知を次世代につないでいくため、積極的に支援している。

### オ　集落のコミュニティ機能の担い手不足を補う革新的技術の活用

少子・高齢化と町外転出者の増加に伴い、とりわけ家族経営が主体の農林業及び商業においては、後継者不足のため廃業の危機に直面している事業主が増えている状況にある。

一方で、同様の課題を有する全国の農山村地域を見ると、近年の技術革新により農林業にもICTやロボット等の革新的技術を導入する（スマート農業、スマート林業）など、地域特性を活かしたICT分野における産業の高度化も進みつつある例も出始めている。（例えば、ドローンを活用した精密農業の試験や、農場にIoT化したセンサーを設置し気温等の情報を自動収集・データ分析し、農場管理を行うシステムの開発など）

山形県においても、観光や農業分野を中心にICTの活用例が一部地域で見られることから、小国町においても、第一次産業の担い手不足に伴う集落のコミュニティ機能（特に資源管理機能・生産補完機能）の低下を補う一つの方策として、ICTの活用に対する理解の促進を図っていくことが重要と考えられる。

さらに、アンケートやヒアリングでも特に高齢世帯を中心に自宅周りの雪処理が課題として多く挙げられていたが、県内でもGPSを活用して道路除雪の際に高齢者や障がい者の家の前に雪を置かないシステムを導入するなど、冬季の雪処理に関してもICTの活用が図られつつある。こうした事例も参考にしながら、住民の相互扶助では対処しきれなくなりつつある集落のコミュニティ機能を革新的技術でサポートする方策を講じることも、今後必要な取組

と言える。

**◇事例紹介◇　GPS 搭載のスマートフォンを活用した間口除雪の取組事例　（山形県寒河江市・新庄市）**

寒河江市と新庄市では、衛星利用測位システム（GPS）搭載を活用し、高齢者や障がい者の家の前に雪を置かない道路除雪を平成 29 年冬より開始した。

除雪車に GPS 機能を搭載したスマートフォンを設置し、地図上で位置や軌跡を確認できるシステムであり、除雪車が高齢者や障がい者などの対象世帯に近付くとスマートフォンのアラームが鳴り、画面にメッセージが表示される仕組み。寒河江市は要介護３以上の独居高齢者を、新庄市は独居高齢者や身体障がい者を対象世帯として運用している。

**◇事例紹介◇　農業分野での ICT 活用事例　（山形県）**

山形県は、庄内地域でモデル圃場における IoT による水位管理の遠隔操作・自動制御の技術の実証実験を行っている。また、最上町では、アスパラガス農家と東京に本社を置く株式会社信興テクノミストとの間で IoT を活用した農業活性化プロジェクト「yumbuy（やんばい）」が進められており、センサーによりアスパラガスの収穫適期を予測するシステムの実証実験が行われている。

# 小国町の新しいまちづくりへ向けて・委員長提言

# 小国町の新しいまちづくりへ向けて・委員長提言

研究委員会委員長（法政大学 名誉教授）岡﨑 昌之

## 1. 集落が担ってきたもの

日本の国土の約７割を占める農山漁村や地方都市は、二つの大きな課題に直面している。一つは人口減少、もう一つは永くそれらの地域を構成してきた集落の消滅や弱体化である。とくに集落の消滅、弱体化は、農山漁村や地方都市だけの課題に留まらない。そのことによって、これまで維持、管理されてきた山林や農地が荒廃し、広範囲の環境破壊につながり、河川の氾濫や土砂崩壊といった、国土保全上の大きな問題を引き起こす。ここ数年の台風や豪雨がもたらした各地の災害の甚大さが、そのことを如実に物語っている。

災害だけではない。これらの集落が山間部や奥地から消え去ることにより、住民の目が届かなくなった農地や山林、水源地が、外国資本によって各地で買い占められていることは、マスコミ等でもよく報道されている。国土管理上でも重要なこれらの地域が、外国資本の手に渡り、地元自治体や国のコントロールが効かなくなることは、災害以上に由々しい事態を引き起こすことが想定される。早急な国の対応が必要とされると同時に、地元住民が農地や山林に対する愛着や活用を再考することが重要である。

当然のことながら、これらの集落はそれぞれが長い歴史をもち、その蓄積のなかで、独自の生活技術や祭りなどを維持、伝承してきた。いわば伝統的文化の宝庫でもあり、日本文化の源流ともいえる。こうした観点から見ても、これらの集落が失われることは、大げさにいえば国家的損失ともいえる。

山形県小国町の集落と集落が担ってきた生産や労働、祭りや芸能など、住民の交流を含めた集落活動としての「集落のコミュニティ機能」について考察するには、集落に対するこうした基本的視点を持つ必要がある。

## 2. 小国町の特性

ドイツ南部のシュヴァルツヴァルト、つまり針葉樹で覆われた“黒い森”地域に対して、小国町は朝日連峰、飯豊山系に挟まれた、国内でも有数の豪雪地域であり、広大なブナ林を有する町として「白い森の国」を標榜して、ユニークなまちづくりに取組んできた。そのこともあって、小国町はともすれば雪深く、山深い農山村とのイメージを内外から持たれてきた。

しかし小国町の産業別就業者割合は、第1次産業 8.4％（山形県：9.4％）、第2次産業 41.7％（同：29.1％）、第3次産業 49.9％（同：61.5％）で、山形県全体の割合と比較しても、第2次産業就業者が飛び抜けて多く、山村にはまれな就業構造となっている。それは町中心部に、半導体製造装置用の高純度石英ガラス製品製造企業やリチウム電池用材料等を生産する企業が、水力発電を利用して古くから立地し、製造業従事者が町内に多いことに起因する。それにより町中心部に人口の4分の3が集中するというやや特異な人口分布を示している。

他方、周辺の広大な山間部に点在する集落は、多くが遠隔地に位置し、冬季の降雪等、特有の課題を抱えている。また東部地区を除き、他 4 地区では全ての小中学校は、中央地区へ統合され、そこでは人口減少や高齢化が進み、コミュニティ機能の担い手が急激に減少したことも大きな課題となっている。コミュニティ機能の維持と新しい取り組みを考えるうえでは、こうした町全体の状況とともに周辺部集落や旧小学校区域ごとに注意深く検討することが必要である。

集落の詳細な状況や課題、コミュニティ機能の実態や今後の方向性等については第 2 章、3 章に詳述してある。ここでは小国町の新しいまちづくりの一助となるように、補足的に述べておきたい。

### 3. 若者や都市住民の農山漁村への関心

地元の地域資源を活かした特産品づくり、新しい農作物の生産、畜産農家を継ぐなど、小国町内にも若い世代を中心とした活動が注目されるようになってきた。また若年層や女性が中心となって地域づくりのイベントを企画・実施している集落も出始めている。こうした若い世代の活動は、町外や県外からも来町者を呼び、小国町に関心を持つ人のネットワークを拡大することに役立っている。地元の小国高校では、「地域文化学」の活動で小国町への関心を高める取り組みや大学ゼミとの交流などを実践してきた。2018（平成30）年からは全国高等学校小規模校サミットを開催し、全国から 18 校、200 名近い参加者があり、多方面の注目を集めた。いま各地に広がる高校魅力化の取組の一例ともいえる。

一方、総務省の調査では、都市住民の 31%、20 代では 38%が、農山漁村に移住したいとしており、過疎地域でも都市部からの移住者が増える傾向にある。100 人足らずで始まった地域おこし協力隊も、10 年経過した現在では 5,000 人を超え、主に農山漁村で多くの若者が活躍している。小国町でも緑のふるさと協力隊や地域おこし協力隊が導入され、地域活動の維持や継承に取組んでいる。地元や首都圏の大学のゼミ等が合宿形式で町に滞在し、町民との交流やフィールドワークも実施してきた。こうした蓄積もあって、マタギなどの伝統文化に魅かれ、また豊かな自然の中で農林業に取組みたいと、小国町に移住する人も増えている。とくに東部地区では顕著で、地元住民からも概ね好意的に受け入れられている。

### 4. 若い世代、移住者の活躍と登用

若い世代の地元への関心の高まり、都市部の住民の農山漁村への移住希望の増加は、小国町にとっては、地域づくりのまたとないチャンスといえる。若い世代が持つ広域的連携を活かし、町や県を越え、全国あるいはグローバルな人脈やネットワークを小国町に呼び込む絶好の機会でもある。こうした若い世代が次代の小国町を担っていける状況をいかに創出するかが、集落のコミュニティ機能の維持、構築のために重要なテーマといえる。

ただこうした若い世代や移住者には、集落での共同作業への負担感や、高齢化が進む中で地域で数少ない若者に様々な集落活動の担い手としての役割が集中するといった不安や不満もある。一方で集落運営は高齢者が主導し、実作業は若い世代に集中し、意欲ある若者が自由に活動できないといった状況もある。また地域活動に積極的に取り組んでいる住民、移住者、各種団体などの意見を集約したり、提言する機会がないといった指摘もある。

若い世代や移住者、地域活動に取組んでいるグループを、いかに小国町の将来に向けて活躍する中核に据えていけるか、これは早急に取り組まなければならない課題である。若い世代が活躍できる集落の規約や役回りの見直しも必要であるが、まずは彼らを受け入れる集落や旧来組織の度量の広さと深さが問われる。高齢化や課題が山積している現状を打開するためには、彼らの持っている ICT の技術、町内外の幅広いネットワークや人脈、また行動力を積極的に活用してみることである。「昔やった」、「無理だ」、「出来ない」といった反応だけでは、彼らのやる気を削ぐだけで、集落は再生に向かわない。まずは任せてやってみる、失敗したら責任は取ってやるといった、大人（たいじん）の心構えと合意形成の新しい仕組みを模索しつつ、対応することが肝要である。

また若い世代には集落での共同作業への負担感が大きいが、その背景には彼らが農林業に関わっていなかったり、現場や実態と離れている現状がある。そのため集落での共同作業は奉仕活動となり、集落を維持するために必要な機能としての意義を理解しづらい側面が生じている。しかし農林業がきちんと営まれていなければ、生産、環境、景観等の観点からも、小国町の価値は損なわれてしまう。地域資源の維持管

理という従来の発想から転換し、日頃から集落の活動や農林業に、子供や高校生の参加や環境教育といった新しい視点を含めつつ、楽しく関わる機会を用意していく必要がある。

## 5. 新しい地域組織の形成

### (1)地域組織の範囲(区域)について

小国町では、各集落のほか、行政区、駐在区、公民館区等の地縁的組織も多様で、また体育協会、消防団、農業振興組合等、各種団体の担当区域が複層的に存在してきた。このことは各分野での行政との連絡調整には機能的であったが、地域自治や地域づくりを担う中心的主体はどの区域単位かが不明確であったことから、住民主体の地域づくりが根づきにくかった側面もあったといえる。

今後、集落の課題を解決したり、コミュニティ・ビジネスに取り組んだり、地域の将来を描く地域づくりの組織や仕組みをどう形成していくか、またその際の組織の母体をどの区域範囲にしていくかは、住民や各集落と行政とが十分に連携を取り合いながら検討していく必要がある。ただ町の成り立ちや小学校区等の変遷を踏まえると、今回の調査では、ほぼ旧小学校区といえる6地区を一つの単位として検討することを提案している。

### (2)誰が担うか

区域を決め、新しい組織さえ作れば、地域の課題が解決するというものではない。まさに組織は人なりで、誰がどういう思いでその組織を担うかが重要である。実際に組織が機能するためには、先ずはその地区にどんなマンパワーがあるのかから模索しなければならない。たんなる集落の代表者というだけでは機能しないし、数年ごとの持ち回りや順番で割り当てても活動は継続しない。組織を担う人には、専門的知識、地域内外の情報や人脈、行動力、決断力、感性などが必要とされる。それは全国で先行する同様の地域組織を牽引する人たちを見れば明らかである。地区の若者、移住者をも対象として検討する必要がある。地元にいなければ外部人材に応援を頼むことも想定していいだろう。また後継者を育てることも視野に入れておかなければならない。

### (3)何に取組むか

現在の地域づくりが取り組むべき課題は、次の二つの課題といえる。いずれも早急に課題解決することが、集落や地域社会から望まれている課題群である。

① 地域社会の困りごと解決

集落や地区での暮らしには、生活に密着して多発する課題が多数存在する。寝たきりや認知症等のお年寄りを抱えた家庭では福祉、医療問題、若い世代では子育てや教育の問題、中高年にまで広がった引きこもりなど人間関係の問題、空き家や防災や安全の問題等々である。それらの多くが生活の身近に存在し、今すぐにでも解決が望まれる緊急の課題群である。

② 明るい将来づくりへの課題解決

将来に向けて魅力ある地域社会を形成するために、今何をすべきかも重要である。交流人口や協働人口の拡大、若者の受入れ、地域文化に関心をもつ質の高いインバウンドの導入、コミュニティ・ビジネスの立ち上げ等、集落や地域社会の視点から取り組むべき課題も多い。そのためには美しい集落の形成、住む人が誇りをもてるまちづくりに取組まなければならない。

このように取り組むべき問題は多く、集落や地域社会を基盤としなければ解決できない課題も多い。組織

を作れば課題が解決されるわけではない。まずはモデル的な地区で組織づくりに取り組み、先行的にスタートしてみることも考えられる。

### (4)行政の役割

集落が厳しさを増す中で、行政に対応を求める依存意識も出ている。中心部から離れた集落における雪対策など、仕方のないことであろう。小国町における行政の役割は大きい。提案した新しい地域づくり組織の形成も、住民だけの努力で立ち上げることは難しい。まずは町全体でしっかりとした計画策定と政策的対応が必要で、その上に行政職員と住民との密接な連携、住民の参加意識の醸成など、準備段階においても十分な積み上げが不可欠である。

その為には行政職員の政策立案能力、情報収集・発信能力、企画実施能力などを高めるとともに、部門横断的な組織づくりや地域づくりに対応する総合的な部署の創設も考えなければならない。とくに各地区における地域ビジョンの策定サポートや、住民同士の交流、町内他地域や町外地域との交流などのためには、行政が長期的視野に立ち側面的に支援することは不可欠である。多忙な町職員の実態は承知しながら、小国町の集落存続のためにもエールを送りたい。

# 委員・事務局名簿

# 委員・事務局名簿

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 岡﨑　昌之 | 法政大学　名誉教授 |
| 委員 | 佐藤　啓太郎 | 総務省　大臣官房審議官（地域活性化担当） |
| | 平井　太郎 | 弘前大学　大学院　地域社会研究科　准教授 |
| | 若菜　千穂 | 特定非営利活動法人　いわて地域づくり支援センター<br>常務理事 |
| | 仁科　洋一 | 小国町　町長 |
| | 廣澤　英治 | 一般財団法人　地方自治研究機構　常務理事 |
| 事務局 | 山口　政幸 | 小国町　副町長 |
| | 山口　英明 | 小国町　総合政策課長 |
| | 二馬　健 | 小国町　総合政策課　政策企画室長 |
| | 片桐　研二 | 小国町　総合政策課　政策企画担当係長 |
| | 木村　明宏 | 小国町　総合政策課　主任 |
| | 阿津澤　裕之 | 一般財団法人　地方自治研究機構　主任研究員 |
| | 池山　宜宏 | 一般財団法人　地方自治研究機構　研究員 |
| 基礎調査機関 | 水野　紀秀 | 株式会社　シンクタンクみらい　主席研究員 |
| | 福室　由利佳 | 株式会社　シンクタンクみらい　主任研究員 |

（順不同　敬称略）

集落のコミュニティ機能の維持に向けた
新たな環境づくりに関する調査研究

－令和２年３月発行－

小国町　総合政策課
〒 999-1363
山形県西置賜郡小国町大字小国小坂町２-70
電話 0238-62-2111( 代表 )

一般財団法人　地方自治研究機構
〒 104-0061
東京都中央区銀座７-14-16 太陽銀座ビル２階
電話 03-5148-0661（代表）

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。